

児玉町遺跡調査会報告書 第18集

みや うち うえ の はら い せき
宮 内 上 ノ 原 遺 跡

—B地点の調査—

2005

埼玉県児玉町遺跡調査会

卷頭図版 1



卷頭図版 2



序

宮内上ノ原遺跡が所在する児玉町は、群馬県との県境に近い関東平野の北西縁辺に位置します。豊かな自然に恵まれた当地には、太古より多くの人々が定住や移住を繰り返しながら風土に適応した生活を営んできたようです。現在までに確認されている先人たちの痕跡である遺跡（埋蔵文化財）の数は330箇所を越えています。この先人たちの痕跡は、児玉町の歴史と文化を伝える貴重な資料となるものであり、これらの保護と資料の活用を図りつつ、後世に伝えていくことは現代の私達の責務であります。

本書は、平成14年に実施した東京電力株式会社による中東京幹線一部増強工事に伴う児玉町大字宮内に所在する宮内上ノ原遺跡の埋蔵文化財保存事業の発掘調査報告書です。この発掘調査では、縄文時代前期の集落跡が発見され、縄文時代集落の様相の一端を明らかにすることができたことは、大きな成果と言えましょう。

この発掘調査報告書が刊行できましたことは、東京電力株式会社送変電建設センター中東京幹線増強事務所をはじめとする関係諸機関ならびに関係各位皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。この報告書が、児玉地域の住民皆様はもとより、教育・研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いと存じます。

平成17年 4 月15日

児玉町遺跡調査会
会長 雉岡 茂

児玉町遺跡調査会組織

平成14年度（発掘調査）

会 長	富 丘 文 雄	児玉町教育委員会教育長
理 事	田 島 三 郎	児玉町文化財保護審議会委員長
	清 水 守 雄	児玉町文化財保護審議会委員
	間 正 明 彦	児玉町文化財保護審議会委員
	荒 井 一 夫	児玉町文化財保護審議会委員
	桜 井 豊	児玉町文化財保護審議会委員
	吉 川 豊	総務課長
	杉 村 義 明	総合政策課長
	前 川 由 雄	農林商工課長
	出 牛 博	土木課長
	立 花 勲	都市計画課長
	清 水 満	社会教育課長
幹 事	永 尾 清 一	社会教育課長補佐
	鈴 木 徳 雄	社会教育課文化財係長
	恋河内 昭 彦	社会教育課文化財係主任
	徳 山 寿 樹	社会教育課文化財係主事
	大 熊 季 広	社会教育課文化財係主事
担 当	松 澤 浩 一	社会教育課文化財係主事
	尾 内 俊 彦	児玉町遺跡調査会調査員

平成17年度（整理・報告）

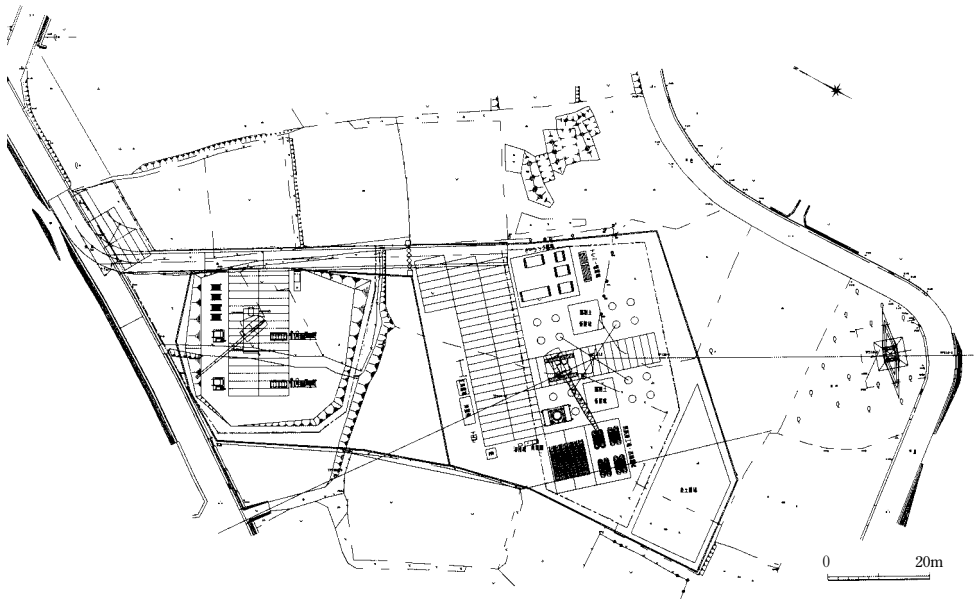
会 長	雉 岡 茂	児玉町教育委員会教育長
理 事	清 水 守 雄	児玉町文化財保護審議会委員長
	間 正 明 彦	児玉町文化財保護審議会委員
	桜 井 豊	児玉町文化財保護審議会委員
	富 丘 文 雄	児玉町文化財保護審議会委員
	福 嶋 敏 朗	児玉町文化財保護審議会委員
	立 花 勲	総務課長
	山 中 今朝男	総合政策課長
	岩 上 高 男	農林商工課長
	鈴 木 幸比古	土木課長
	福 島 秀 雄	都市計画課長
	笠 原 義 晴	社会教育課長
幹 事	倉 林 益	社会教育課長補佐
	鈴 木 徳 雄	社会教育課長補佐
	恋河内 昭 彦	社会教育課文化財係長
	徳 山 寿 樹	社会教育課文化財係主任
	大 熊 季 広	社会教育課文化財係主事
担 当	松 澤 浩 一	社会教育課文化財係主事
	尾 内 俊 彦	児玉町遺跡調査会調査員

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字宮内上ノ原1242外に所在する、宮内上ノ原遺跡B地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、東京電力株式会社中東京幹線増強工事に先立つ埋蔵文化財保存事業として、平成14年度に児玉町遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査および整理・報告書に要した経費は、東京電力株式会社の委託金である。
4. 本報告書に係る発掘調査の担当は、児玉町遺跡調査会調査員尾内俊彦および松澤浩一があたった。また、発掘調査については近江屋成陽（山武考古学研究所派遣）が調査員として従事した。
5. 本書の編集・執筆は、整理参加者や多くの方々のご協力を得て松澤浩一があたった。
6. 発掘調査及び本書作成にあたって下記の方々や機関から御助言・御協力を賜った。
(順不同、敬称略)
新井和之、井上慎也、江原 英、太田博之、大屋道則、金子彰男、金子直行
駒宮史朗、坂本和俊、関根慎二、外尾常人、大工原豊、高橋一夫、高村敏則
谷藤保彦、田村 誠、寺崎裕助、利根川章彦、鳥羽政之、永井智教、中沢良一
長滝歳康、中村倉司、平田重之、毒島正明、細田 勝、増田一裕、松本 完
丸山 修、宮崎朝雄、宮本直樹、矢内 勲、山口逸弘、領塚正浩、綿田弘実
埼玉県教育局生涯学習文化財課、東京電力株式会社、児玉郡市文化財担当者会
埼玉県埋蔵文化財調査事業団、早稲田大学考古資料館、東海大学考古学研究会
7. 遺構の写真は、尾内俊彦、近江屋成陽、松澤浩一が主に撮影した。
8. 本書作成の基礎作業は尾内俊彦が主として担当したが、作図作業・遺物観察表・遺物写真撮影等については、(有)毛野考古学研究所に委託して実施した。
(主担当、遺物：高橋清文・遺構：有山径世)
9. 本書にかかる資料は、児玉町教育委員会が管理・保管する。

凡 例

1. 発掘調査にかかる基準点および水準点測量、遺構全体図および平面図、空中写真撮影および空中写真測量については、(有)協同測地開発に委託して実施した。基準点に用いた座標系は、世界測地系(新座標系)である。
2. 遺構挿図及び遺物挿入図にはスケールを付し、以下の通りである。
 竪穴住居跡：1/60 土壌：1/40 遺物の縮尺は、土器復元個体：1/4、拓影図および石器類：1/3を基本とした。
3. 本書に用いた地形図は、国土地理院発行の1/50,000を改図・転載した。
4. 遺構挿図中に使用したドット記号は次の意味を表す。
 ●……土器出土地点 ▲……石器・石製品出土地点
5. 第18号住居跡は、発掘調査時においては竪穴住居跡と判断していたが、整理作業において詳細に検討の結果第165号土壌に変更した。



発掘調査にかかる現状変更区域

目 次

卷頭図版

序

組 織

例 言

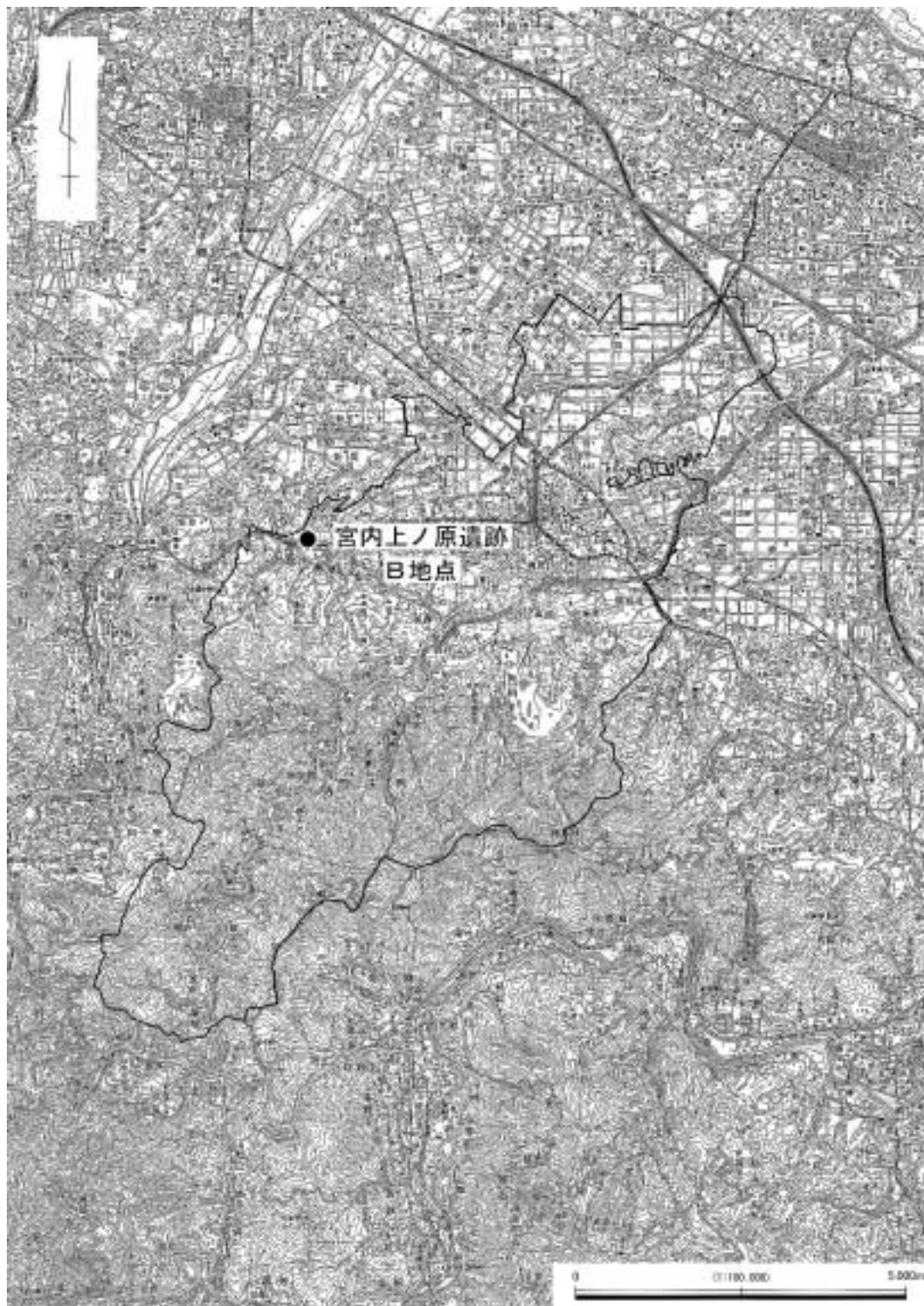
凡 例

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	4
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物	6
1. 遺跡の概要	6
2. 遺構と遺物の概要	7
a. 竪穴住居跡	7
b. 土壙	130
c. 溝跡	212
d. 埋没谷	213
e. ピット内出土遺物	221
f. 遺構外出土遺物	222
第Ⅳ章 まとめ	226
1. 出土土器	226
2. 竪穴住居跡	228

写真図版

報告書抄録



第1図 児玉町と遺跡の位置

第 I 章 発掘調査の経緯

調整の経緯

平成13年4月4日、児玉町大字宮内字上ノ原1242番地外について、中東京幹線増強工事を計画している東京電力株式会社送変電建設部送変電建設センター中東京幹線増強事務所長より、「送電線『中東京幹線』一部増強工事に伴う開発予定地内における埋蔵文化財に関する現地確認のお願いについて」が、児玉町教育委員会に提出された。

児玉町教育委員会では、照会のあった開発予定地を「遺跡分布地図」と照合したところ、当該地域は、宮内上ノ原遺跡（54-105）に該当しているため、度々協議をおこなってきた。

平成13年8月31日、児玉町大字宮内字上ノ原1242番地外について、中東京幹線増強工事を計画している東京電力株式会社送変電建設部送変電建設センター中東京幹線増強事務所長より、開発予定地内における埋蔵文化財の所在について、照会文書および試掘調査依頼書が児玉町教育委員会に提出された。

平成13年9月27日および28日に試掘調査を実施した結果、建設予定地域内のほぼ全域で縄文時代前期～中期、および古代の集落等などの埋蔵文化財が存在していること、また鉄塔新設区域および送電線送出場等にかかる区域は、埋蔵文化財の包蔵が稠密であり、表土層が極めて浅いこと、送電線牽引装置設置地区と仮設道路設置区域については、包蔵がやや稀薄であることが確認できた。

発掘の経緯

児玉町教育委員会では、この試掘調査の状況を踏まえて、平成13年10月1日に試掘の結果を回答するとともに、建設予定地点の計画変更を指導した。これに基づいて鉄塔および送電線牽引装置等の施設の設置位置を、建設計画にかかる敷地内での現状変更を指導したが、工事による埋蔵文化財への影響が避けられないことから、やむを得ず現状変更される区域については発掘調査を実施する必要が生じた。

以上の協議・調整を踏まえ、児玉町教育委員会の指導に基づき、児玉町遺跡調査会会長と東京電力株式会社送変電建設部送変電建設センター中東京幹線増強事務所長との間で埋蔵文化財保存事業委託契約を締結することで発掘調査を実施することとなった。

発掘の届出

なお、発掘調査にかかわる届出は、平成14年8月15日に、児玉町遺跡調査会会長より「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が、提出されたので、児玉町教育委員会は、埼玉県教育委員会教育長あてに進達した。平成14年7月26日に、東京電力株式会社送変電建設部送変電建設センター中東京幹線増強事務所長より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育委員会に提出された。この届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から、平成14年8月16日付け教文第2-54号で児玉町遺跡調査会会長に「埋蔵文化財発掘調査について」の通知があった。なお、現地の発掘調査は、児玉町遺跡調査会によって平成14年8月21日に開始され、同年11月29日に終了した。

(児玉町教育委員会社会教育課文化財係)

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境（第1・2図）

本遺跡の所在する児玉町は、行政区界上児玉郡に所属している。児玉郡は、埼玉県北部の関東平野北西縁辺に位置している。この地域の南西には、関東山地がせまり、平野部と山地部との境界域に相当し、変化に富んだ地形を呈している。

児玉町の地形

児玉町は、東西が9.5km、南北が12kmにおよび、南西から北東へ展開している。町の地形は、ほぼ中央部を北西から南東へと伸びる「八王子－高崎構造線」によって、北東側の平野部と南西側の山地部とに大別される。

山地部は、上述の関東山地の北部にあたり、一般に秩父山地と呼ばれている。児玉町の南東にある山地部は、秩父山地北側に相当し、三波川系結晶片岩帯に相当する上武山地と呼称されている。この上武山地は、埼玉・群馬両県にまたがって、おおむね北西から南東方向へと展開している。

平野部は、丘陵、台地、低地と三地形に区分される。児玉町における丘陵は児玉丘陵と呼称される。児玉丘陵は、山地裾部より北東方向に半島状に延びて、その先端部が侵食・分離された生野山・浅見山とよばれる独立した残丘状を呈する標高100m～180mの小支丘群で構成されている。

No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考
1	宮内上ノ原遺跡B地点	本報告	15	河内下ノ平遺跡	2003調査
2	天田遺跡	恋河内、2000	16	塩谷平氏ノ宮遺跡	2002調査
3	神明前遺跡	1995調査	17	観音山遺跡	1985・87調査
4	真鏡寺後遺跡	恋河内、1991他	18	(仮称) 上生野遺跡	2000調査
5	塩谷下大塚遺跡	恋河内、1990他	19	将監塚遺跡	石塚、1986
6	倉林東遺跡	1984・86調査	20	古井戸遺跡	宮井、1989
7	宇留井山遺跡	1981調査他	21	新宮遺跡	恋河内、1996
8	高柳南遺跡	1988調査	22	中下田遺跡	鈴木、1991
9	賀家ノ上遺跡	1977調査	23	平塚遺跡	鈴木、1997
10	秋山中山遺跡	1989調査	24	将監塚遺跡	鈴木、1997
11	秋山北飯盛遺跡	1990調査	25	藤塚遺跡	鈴木、1997
12	秋山南飯盛遺跡	1990調査	26	堀向遺跡	鈴木、1997
13	秋山竹ノ平遺跡	1989調査	27	女池遺跡	恋河内、2000他
14	塔ノ入遺跡	1987調査	28	児玉清水遺跡	1995・96調査

周辺の主要縄文時代遺跡

本遺跡の周辺地形は、上武山地から「八王子―高崎構造線」によって区分された、児玉丘陵に属する。この丘陵地帯の北側には、群馬県と埼玉県を境とする神流川により形成された一段低い平坦面である扇状地地形の本庄台地が広がる。この台地の東側に沿って、上武山地内を水源として流れる女堀川や旧赤根川の小河川の開析により形成された、帯状の沖積低地が広がっている。この沖積低地には、台地面が開析されずに遺存する微高地と、沖積作用によって形成された自然堤防が、女堀川に沿うように、列点状に並んでいる。

これと同様な地形が、小山川（身馴川）の東側にも展開しているが、児玉丘陵と区別されて松久丘陵と呼ばれている。これらの小支丘の間には、山地からの湧水によって開析された細長い谷が発達している。

本遺跡は、児玉丘陵を構成する小支丘の一つに位置し、山地との境に近い構造線に立地している。現状において周囲との比高差はほとんどなく緩く傾斜しているが、縄文期においても周囲との際立った比高差を想定することは難しい。

2. 歴史的環境

縄文草創期～早期 児玉地域の縄文時代の遺跡は、時期によって様々な占地傾向や遺跡の規模などが異なっていると考えられる。縄文時代の草創期・早期では、長沖梅原遺跡、秋山宿田保遺跡などの丘陵先端部では爪形文土器や押圧縄文土器が検出されている。また、丘陵に接する台地面に占地する城の内遺跡（鈴木他、1979）をはじめ、葦池遺跡、長沖梅原遺跡などの丘陵部や、塔ノ入遺跡など山地内を中心に小規模な集落遺跡が点在しており、押型文土器、沈線文土器が微量ないし少量検出されている。また早期後半では、長沖古墳群内やあるいは秋山南飯盛遺跡、秋山中山遺跡などで貝殻沈線文系土器が検出されている。

このように、草創期や早期では丘陵部や丘陵縁辺部の台地上に偏り、丘陵に接する台地の平坦部にも占地域が拡大する様子が窺えるが、広い平坦部を有する本庄台地などの台地上や低地には少ない傾向がある。

縄文前期 縄文時代の前期になると、遺跡数は増加し多くの遺跡が確認されている。主に児玉丘陵から上武山地周辺に分布がみられる。丘陵部における有尾・黒浜式期から諸磯式期では、本遺跡、天田遺跡（2）、宇留井山遺跡（7）、塩谷下大塚遺跡（5）、脊戸谷遺跡などが確認されている。また山地部では、秋山中山遺跡（10）（註1）、塔ノ入遺跡（14）などが確認されている。

これまでの調査で、確認されている前期の集落は、数軒単位の住居跡で構成される小規模な集落や十数軒単位で構成されるような中規模な集落遺跡が多くみられる。これらの遺跡は、丘陵部を中心に丘陵付近の台地や山地部、また山地部においても丘陵に接する中心尾根筋の主に平坦面に、遺跡間の相互の距離は短く比較的周密に分布している。これに対して、本庄台地周辺では、多くの地点について比較的広範囲の調査が実施されているにもかかわらず、縄文前期の遺物がわずかに検出されているにすぎなく、丘陵部における集落の分布状態と比較的してもかなり稀薄である。

縄文中期

縄文時代中期では、丘陵部において、勝坂式期には塩谷平氏ノ宮遺跡(16)、(仮称)上生野遺跡(18)、倉林東遺跡(6)など、加曾利E式期では観音山遺跡(17)、長沖古墳群内賀家ノ上遺跡(9)など多い傾向がある。本庄台地周辺では、中期中葉期以降になると遺跡の分布が顕著に見られる。将監塚遺跡(19)、古井戸遺跡(20)、新宮遺跡(21)などが確認されている。これらの遺跡は、勝坂式終末期から加曾利EⅢ式にかけて形成される大規模な「環状集落」で、台地上に占地している。これに対して、加曾利EⅢ～Ⅳ式の中下田遺跡(22)や平塚遺跡(23)などの小規模な集落は、「環状集落」周辺に占地する傾向にある。縄文中期の「環状集落」は、本庄台地周辺に分布しているが、台地およびその周辺、そのほかに丘陵部には中・小規模な集落が比較的高密度に分布している。さらに、山地部では河内下ノ平遺跡(15)、橋の入遺跡が確認されていることから、今後さらに増加することも考えられる。このように、本庄台地周辺にひとつの中心が認められるとはいえ、丘陵部や上武山地内にも拡大していることが窺える。

縄文後期

縄文時代後期においては、前期や中期の遺跡数や分布密度に対して極めて希薄である。それまでの前期や中期の遺跡は、丘陵部や台地上できわめて小規模な遺跡が点在しているのに対して、後期では旧河道や湧水点に接する低位の台地や低地内の微高地等に住居を伴う集落が占地している。河川に注ぐ湧水付近の支谷に接する地点に占地する吉田林女池遺跡(27)では、称名寺式から堀之内2式期の土器群が検出され、また低位の台地に占地する児玉清水遺跡(28)が確認されている。また本庄台地においては、藤塚遺跡(25)は低位台地から微高地上に占地して称名寺式から安行3c式期におよぶ土器群が検出されている。後期の遺跡は、継続時期は比較的に長期に及ぶが、それぞれが大規模な集落遺跡であると考えるのは困難であり、比較的小規模な集落が継続的に営まれていたのではないかと考えられる。

縄文晩期以降

縄文時代晩期では、後期遺跡の占地傾向を引き継ぎつつ遺跡はさらに減少する傾向がある。さらに、縄文時代終末期以降から弥生時代初期の遺跡は極めて少なく、この地域に明瞭な集落が形成されるのは弥生時代中期後半以降である。台地部では児玉清水遺跡、丘陵部では秋山塚原遺跡、山地部では塔ノ入遺跡などで破片が少量検出されている。この地域では、弥生時代の後期に入ると遺跡数は増加する傾向にあるが、塩谷下大塚遺跡や塩谷平氏ノ宮遺跡など丘陵部を中心に小規模な遺跡が点在する状況で、大規模な集落の形成は認められない。この地域においては、集落遺跡の増加が見られるのは、古墳時代に入ってからのことである。

註

(1) 秋山南飯盛遺跡、秋山中山遺跡等は、児玉町遺跡調査会により1989年から1990年に調査を実施した。特に秋山中山遺跡では、縄文時代前期初頭の花積下層式から終末の十三菩提式におよぶ住居跡、土壙などが検出されている。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

1. 遺跡の概要（第3～6図）

遺跡の立地

宮内上ノ原遺跡は、児玉町の西端にある大字宮内に所在し、南側の上武山地から北東方向に半島状に延びる児玉丘陵の標高140m付近の丘陵上の比較的平坦な面から北側斜面に立地している。

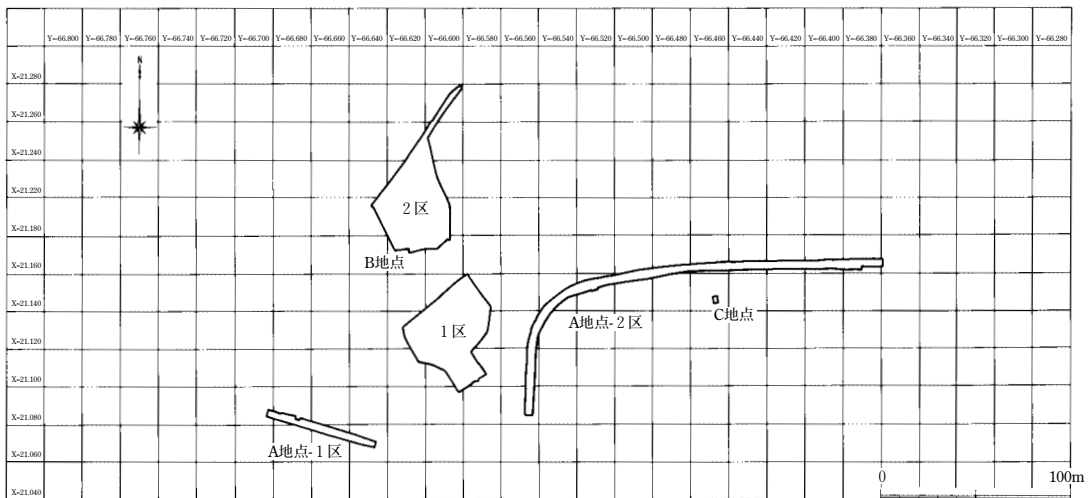
宮内上ノ原遺跡の発掘調査は、農道改良工事に伴うA地点（1988年調査）に続いて、鉄塔建設などに伴う今回の発掘調査地点をB地点（2002年調査）、民間の発掘調査をC地点との3箇所で行われている（第3図）。本遺跡の規模や内容などその具体的な様相については、未だ十分に把握できない状況であるが、これまでの発掘調査から、竪穴式住居跡40軒、土壇166基、溝跡1条、埋没谷2基などの縄文時代早期から中期および弥生時代、平安時代までの遺構や遺物が検出されている。

今回報告するB地点は、A地点に隣接し、丘陵の東端で平坦面に位置し、谷を挟んで神川町と近接している。標高142m前後で、調査区の比高差が約5mの（第6図）緩い斜面である。検出された遺構は、耕作による強い削平を受けたものが多く見られた。調査区を鉄塔新設部分をB1区、送電線牽引装置設置部分および道路拡幅部分をB2区と呼称する。

検出された遺構

B地点で検出された主な遺構は、縄文時代前期から中期、弥生時代から古墳時代、平安時代のものである。

縄文時代前期の遺構は、竪穴住居跡が28軒、土壇95基、埋没谷が2基である。A地点2区やC地点で見られたように、中期の遺構や遺物はあまり顕著ではなく、時期は前期中葉の黒浜・有尾式期が主体で、B1区の全般にわたり検出さ



第3図 宮内上ノ原遺跡A・B・C地点位置関係図

れている。

住居跡は、調査区の中央部から北側に集中して分布している。形態は、方形を基調としながらも、コーナー部の丸み強い長台形ないし台形タイプが主体である。いずれも遺存状態は良好とは言えないが、第13号住居跡は、非常に良好な状態で検出された。また、第14号住居跡からは珧状耳飾りの破片が出土している。重複が見られることからある程度の時間幅のある継続的な集落である。

土壌は、B1区で検出された住居跡の周囲に集中している。平面形態は、大半が楕円形のものであるが、隅丸方形を呈している第60・61・69号土壌は、壁は袋状を呈している。B2区で検出された第1号埋没谷からは、多量の縄文時代前期から中期の土器片などが出土している。また、道路拡幅部分に検出された第2号埋没谷から遺物は検出されなかったが、集落とほぼ同時期に営まれていたと考えられる。中期の遺構は、土壌が2基検出された。A2区では住居跡が検出されて、重複が見られ、丘陵平坦部からやや斜面に移行する場所であることから、丘陵の平坦部を囲むように小規模な集落を構成している可能性も考えられる。

弥生時代から古墳時代は、住居跡1軒（第22号住居跡）、土壌2基（第77・87号土壌）が検出された。住居跡はB1区の南東端に、土壌は西端中央部に位置している。住居跡の時期は、遺物量が少ないが、いずれも弥生終末から古墳時代初頭と考えられる。他の地点では遺構が検出されていないが、本遺跡と谷を挟んで北西側に前組羽根倉遺跡と近接している。南東側には、塩谷平氏ノ宮遺跡や塩谷下大塚遺跡と対峙していることから、丘陵の先端部の平坦面に小規模な集落が構成されていることが考えられる。

平安時代は、溝跡が1条、土壌1基（第159号土壌）が検出された。時期は、概ね10世紀と考えられる。

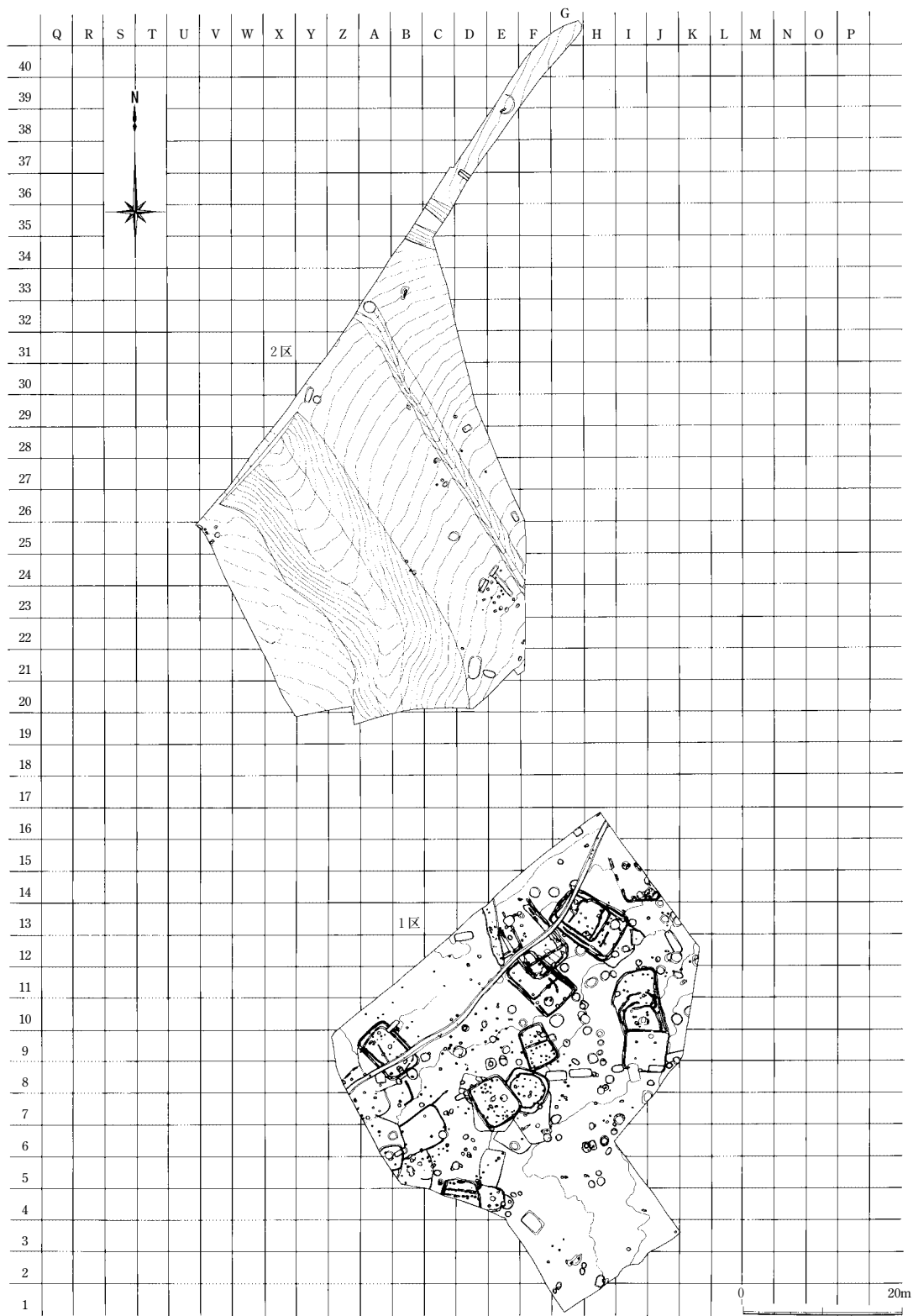
2. 遺構と遺物の概要

a. 竪穴住居跡

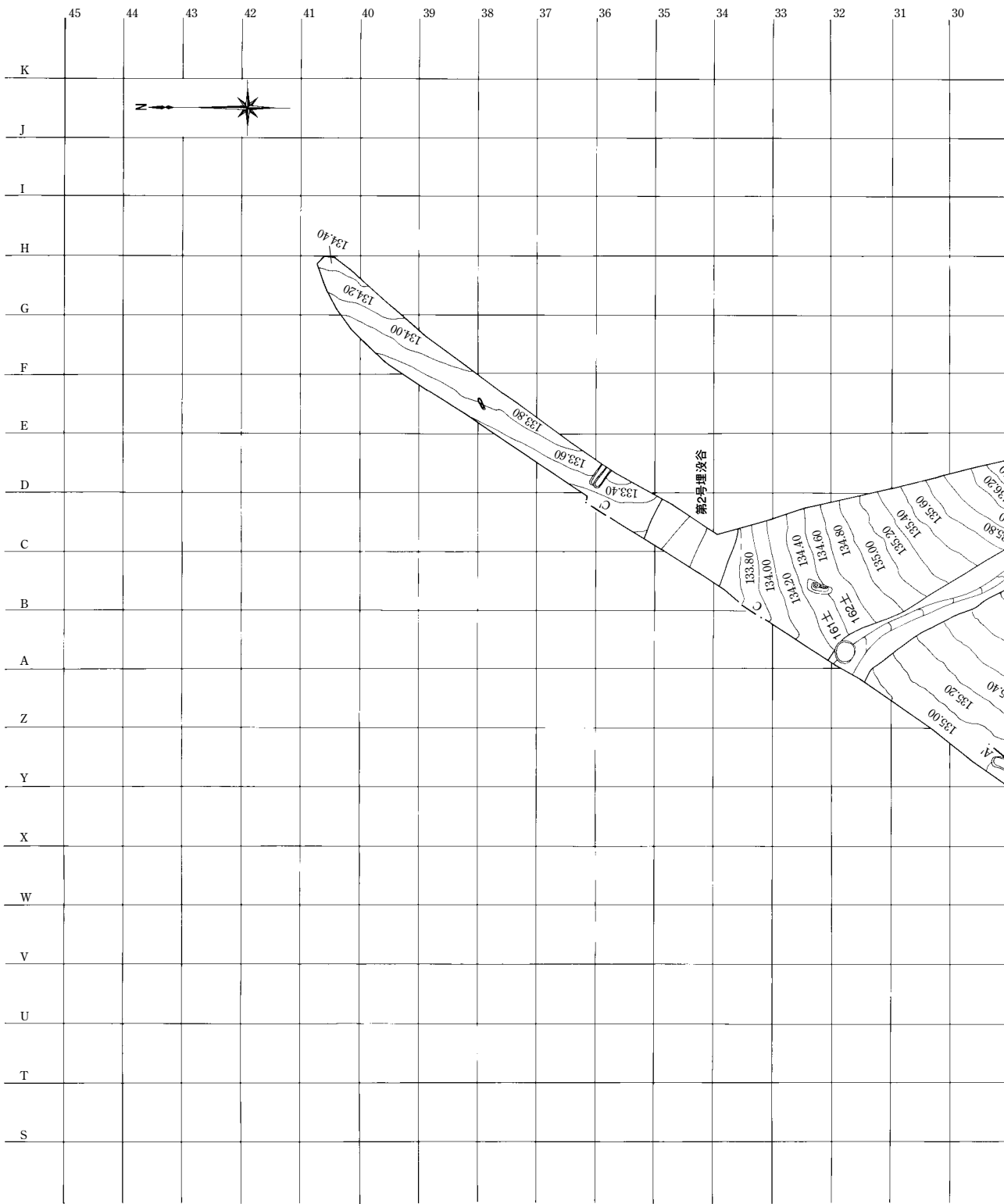
第9号住居跡（第7～12図・図版5～7・77～79-1）

B1区の西側に位置している。北側には第16・17号住居跡がある。重複する第87・88号土壌に切られて、第20・24・26号住居跡を切っている。また、一部攪乱を受けているが、遺構の遺存状態は比較的良好で、住居跡の西側が調査区外のため、本住居跡の全容は不明である。

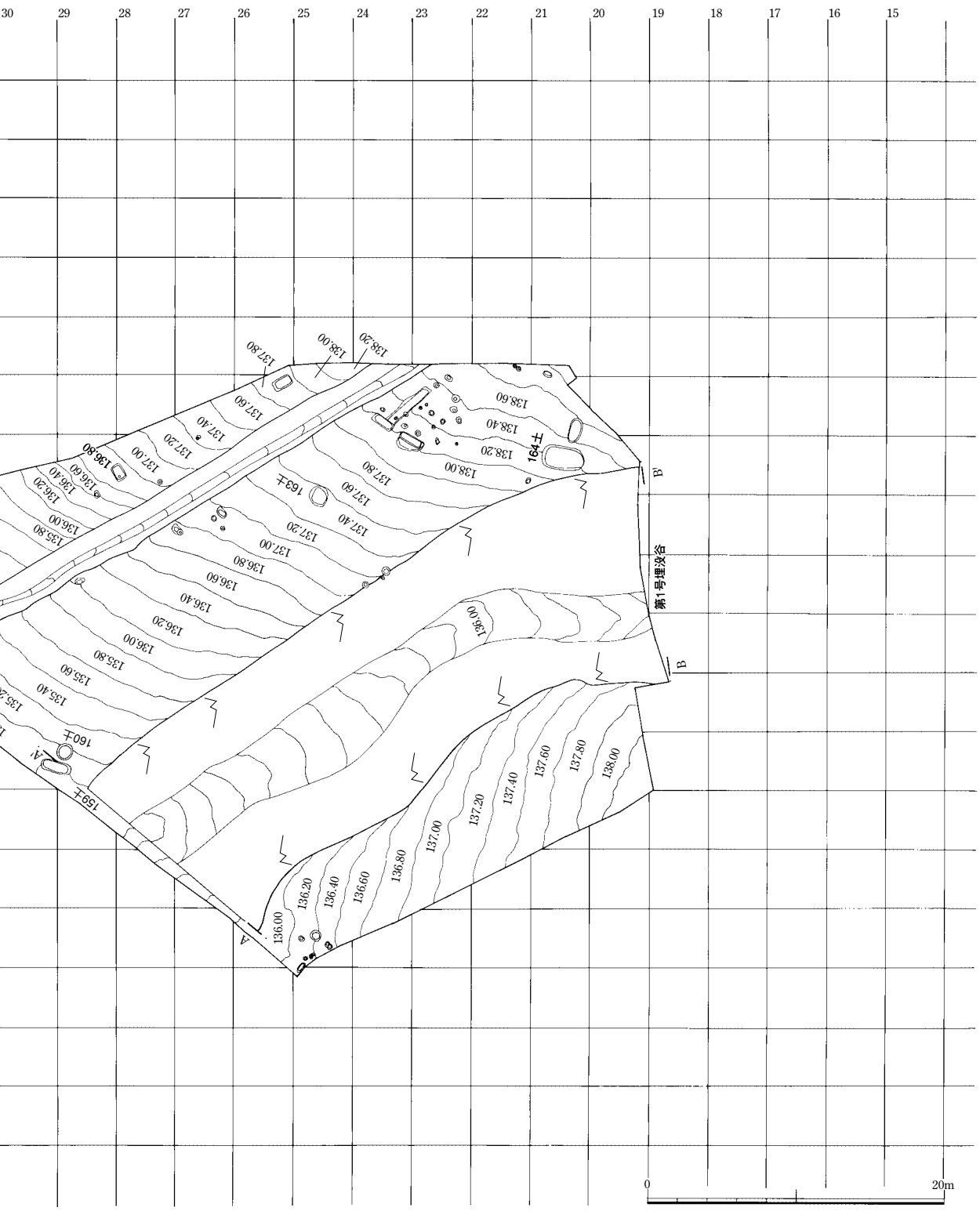
平面形は、方形を基調とするコーナー部の丸み強い隅丸台形を呈している。遺構の規模は、南北方向が3.3m、東西方向が2.9mである。壁は、直線的に開いて傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは27cmである。床面は、ローム土を主体とした貼り床でほぼ平坦であるが、若干の起伏をもち北壁手前が窪んでいる。住居の中央部は比較的堅く締まっているが、壁に近い周辺部はやや軟質である。住居内には幅25cm、深さ8cm程で小ピットを伴う壁溝が巡っている。



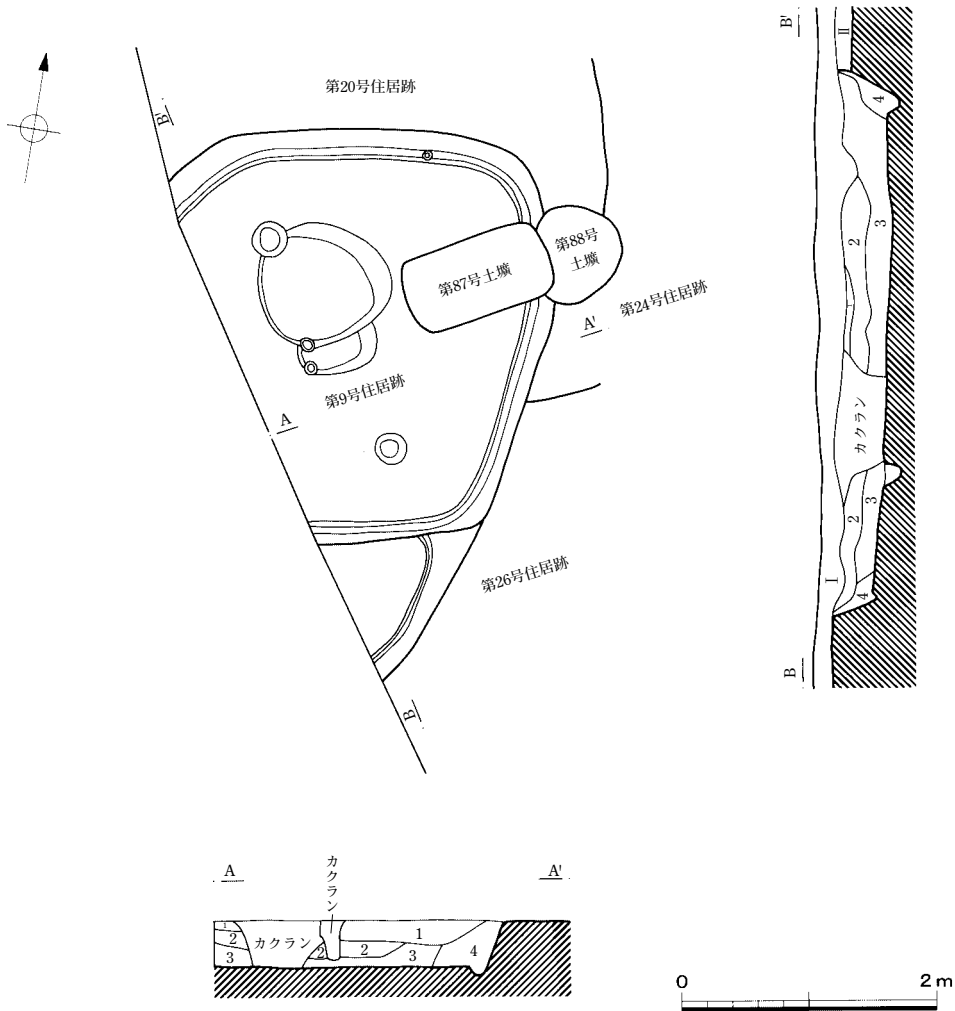
第4図 宮内上ノ原遺跡B地点全体図



第6图 宫内上ノ原



遺跡B地点2区全体図



第7図 第9号住居跡

第9号住居跡土層説明

- | | | |
|------|--------|--|
| 第I層 | 暗灰褐色土層 | 浅間山系A軽石を多量に、褐色土粒子、マンガン粒子を少量含む。しまり、粘性はともに弱い。
<現耕作土> |
| 第II層 | 暗茶褐色土層 | 浅間山系A軽石を少量、灰褐色土粒子、マンガン粒子を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。 |
| 第1層 | 暗茶褐色土層 | YP粒子を少量含む。ローム粒・橙色粒子・褐色小ブロック（ ϕ 3mm）を微量に含む。しまり、粘性ともにやや弱い。 |
| 第2層 | 茶褐色土層 | YP粒（ ϕ 2mm）を均一、YP細粒・褐色小ブロック（ ϕ 3mm）・褐色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第3層 | 茶褐色土層 | YP粒（ ϕ 2mm）を均一、YP細粒・ローム粒・褐色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第4層 | 褐色土層 | YP粒子を多量、YP粒（ ϕ 2mm）を少量、ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。 |

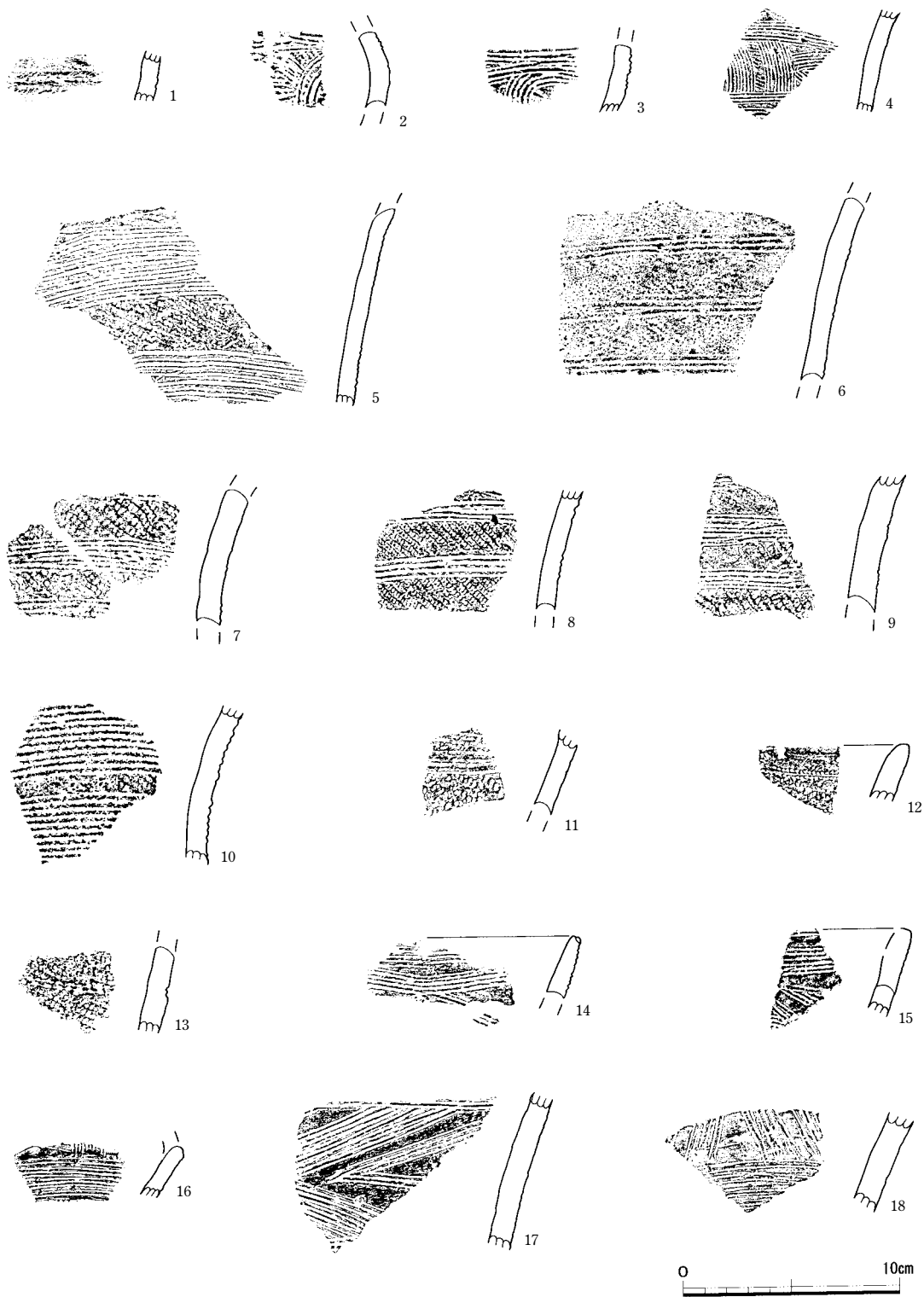
炉跡は検出されなかったが、北壁よりに土塊状の掘り込みが検出された。形態は、95cm×110cmの楕円形を呈していて、ピットを切っている。深さは10cm程である。壁は、西壁は直線的に立ち上がっているが、東壁は傾斜をしながら立ち上がっている。底面は、平坦である。

出土遺物は、図示したものは一部であるが、覆土中から縄文時代前期中葉の黒浜式や有尾式の土器片が少量、前期後半の諸磯b式と諸磯c式の土器片と自然石が多量に出土している。土器片以外では、黒曜石の剝片、打製石斧1点、敲石1点、スクレイパー1点、石核2点などが出土しているが、石核のうち1点（第12図58）は、北壁近くの床面直上から出土している。また、覆土中から出土した自然石の中には被熱し赤色化したものも見られる。

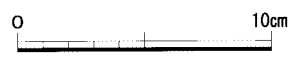
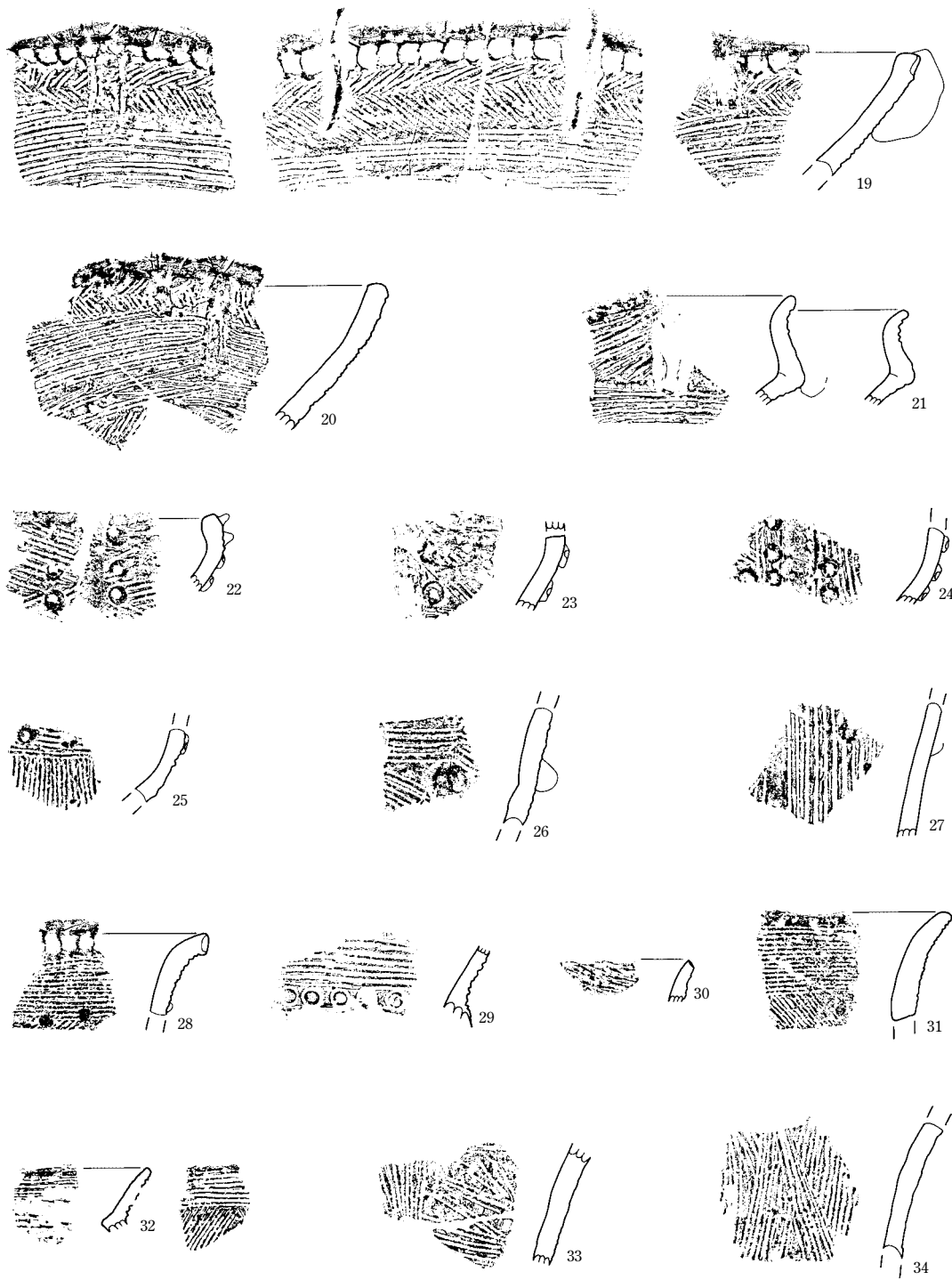
本住居跡の帰属時期は、出土遺物や覆土の状態から縄文時代前期後半の諸磯b式～c式期と考えられる。



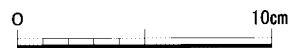
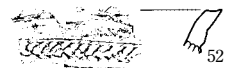
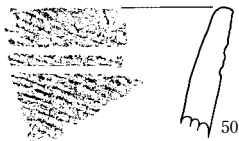
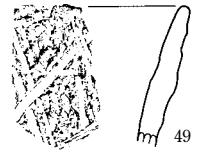
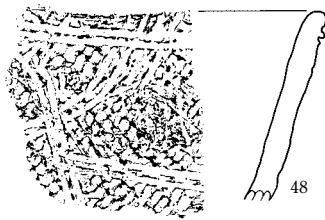
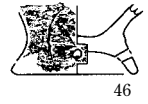
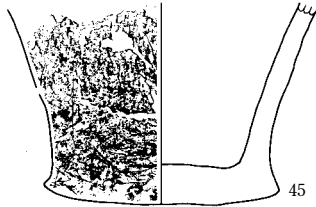
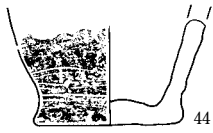
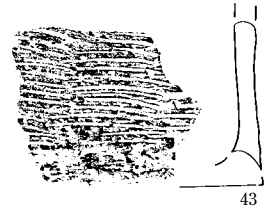
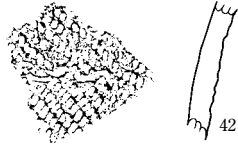
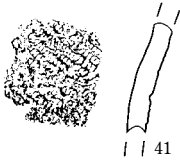
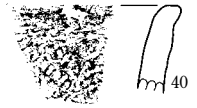
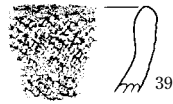
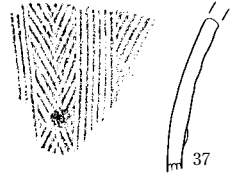
第8図 第9号住居跡



第9图 第9号住居跡出土遺物(1)



第10图 第9号住居跡出土遺物(2)



第11图 第9号住居跡出土遺物(3)



第12图 第9号住居跡出土遺物(4)

第9号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	浮線文→半截竹管状工具による押引→キザミ	褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部	縄文→半截竹管状工具による集合沈線	暗褐色	覆土	
4	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	褐色	No.26	
5	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	No.60・62	
6	縄文土器	胴部	縄文→半截竹管状工具による集合沈線	明黄褐色	No.37	
7	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
8	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	灰黄褐色	覆土	
9	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
10	縄文土器	胴部	縄文→半截竹管状工具による集合沈線	明黄褐色	No.33	
11	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
12	縄文土器	口縁部	LR単節縄文→沈線・刺突	赤褐色	覆土	
13	縄文土器	胴部	LR単節縄文→半截竹管状工具による押引	赤褐色	覆土	
14	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
15	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙色	覆土	
16	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
17	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	明黄褐色	No.56	
18	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙色	No.50	
19	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線、耳状貼付文	黄橙色	No.13・41・42	a~c同一個体
20	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線、耳状貼付文	褐色	No.33・48	
21	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線、耳状貼付文	黒褐色	No.44	
22	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線、棒状・ボタン状貼付文	黄褐色	覆土	
23	縄文土器	口縁部?	半截竹管状工具による集合沈線、棒状・ボタン状貼付文	黄橙色	覆土	
24	縄文土器	口縁部?	半截竹管状工具による集合沈線、ボタン状貼付文	暗灰黄色	覆土	
25	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線、ボタン状貼付文	灰黄色	覆土	
26	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線、貼付文	黄橙色	覆土	

27	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線、貼付文	灰黄褐色	覆土	
28	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線、貼付文、口唇部：キザミ	黄褐色	覆土	
29	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線、竹管による刺突	黄褐色	覆土	
30	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	橙色	覆土	
31	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙色	No.65	
32	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙色	覆土	
33	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
34	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
35	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
36	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
37	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙色	覆土	
38	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
39	縄文土器	口縁部	LR単節縄文	橙色	覆土	
40	縄文土器	口縁部	L無節縄文	褐色	覆土	
41	縄文土器	胴部	RL単節縄文	黒褐色	覆土	
42	縄文土器	胴部	RL単節縄文（結節）	褐色	覆土	
43	縄文土器	底部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙色	No.47	
44	縄文土器	底部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙色	No.39	
45	縄文土器	底部	ナデ	褐色	No.73	
46	縄文土器	底部	ナデ	赤褐色	No.19	
47	縄文土器	口縁部	櫛状工具による沈線	黄褐色	覆土	
48	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	黄褐色	No. 5	
49	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	覆土	
50	縄文土器	口縁部	R無節縄文→半截竹管状工具による沈線	赤褐色	No.12	
51	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
52	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	明赤褐色	覆土	
53	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	覆土	
54	縄文土器	口縁部	ナデ	褐色	覆土	
55	縄文土器	胴部	RL単節縄文	橙色	覆土	海綿骨針
56	石器	—	—	—	No. 6	スクレイパー
57	石器	—	—	—	覆土	打斧

58	石器	—	—	—	No.29	石核
59	石器	—	—	—	覆土	石核
60	石器	—	—	—	No. 7	磨石・敲石
61	石器	—	—	—	覆土	磨石・敲石
62	石器	—	—	—	覆土	敲石

第10号住居跡（第13～16図・図版8・79-2・80-1）

B 1 区のほぼ中央に位置している。北側は第14・30・32号住居跡、西側は第13号住居跡がある。本住居跡は、床面付近まで強い削平を受けていたため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。重複する第11号住居跡、第98・122号土壇を切っているが、第12号住居跡に切られている。

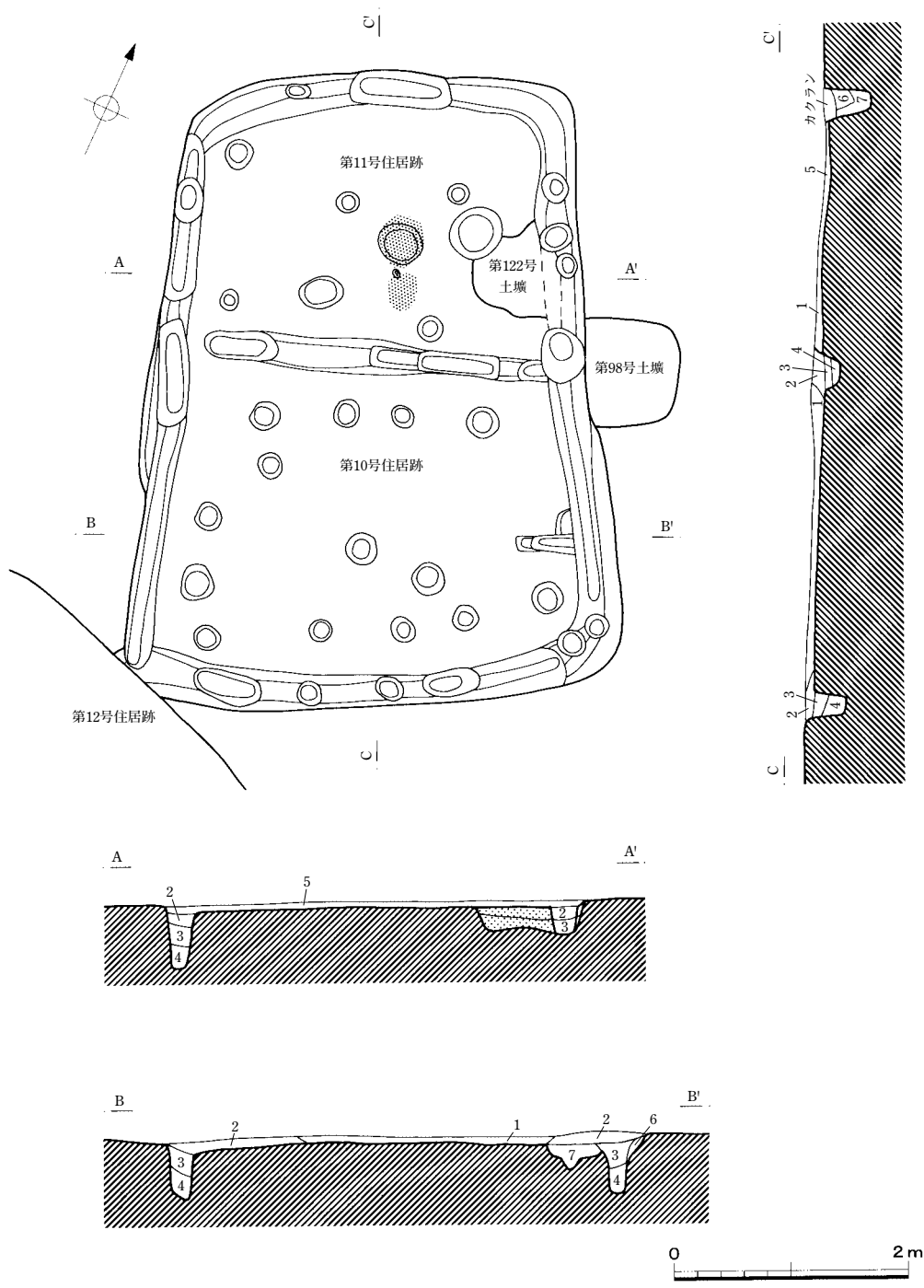
平面形は、方形を基調とする台形を呈している。遺構の規模は、南東方向が4.3m、北西方向が3.3mである。壁は、わずかに残っていて直線的に立ち上がり、確認面からの深さは2cm程である。床面は、ほぼ平坦でローム土を主体とした貼り床で、比較的堅く締まっているが、中央から南壁以外の壁溝付近が若干窪んでいる。住居内には、壁に沿って小ピットを伴う、幅25cm、深さは20cm程の壁溝が巡っている。炉跡は、検出されていない。

出土遺物は、覆土から縄文時代前期中葉の有尾式を主体とする土器片が少量と自然石が少量出土している。土器以外には、スクレイパー1点、磨石・敲石1点、石皿の破片などが出土している。

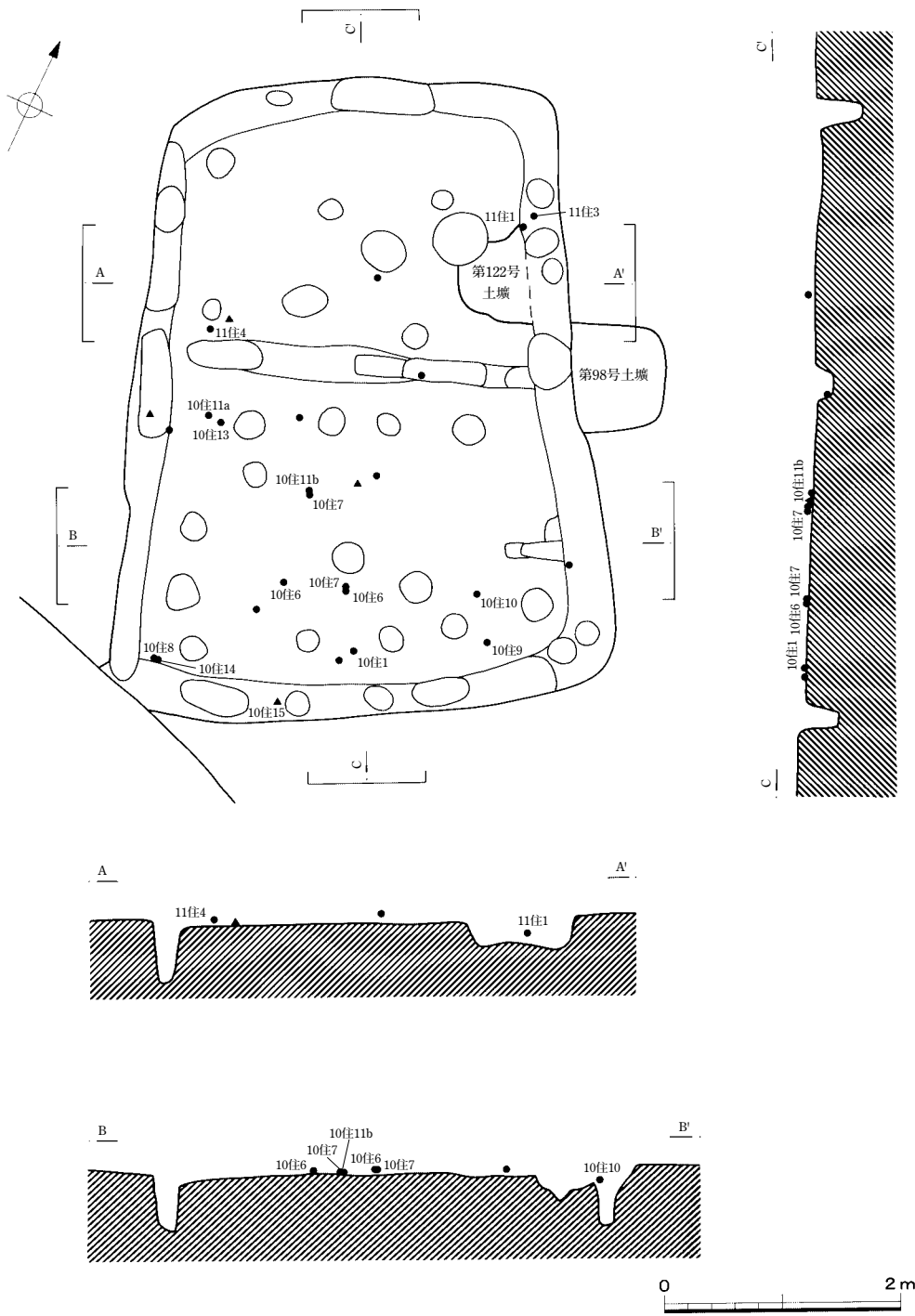
本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第10・11号住居跡土層説明

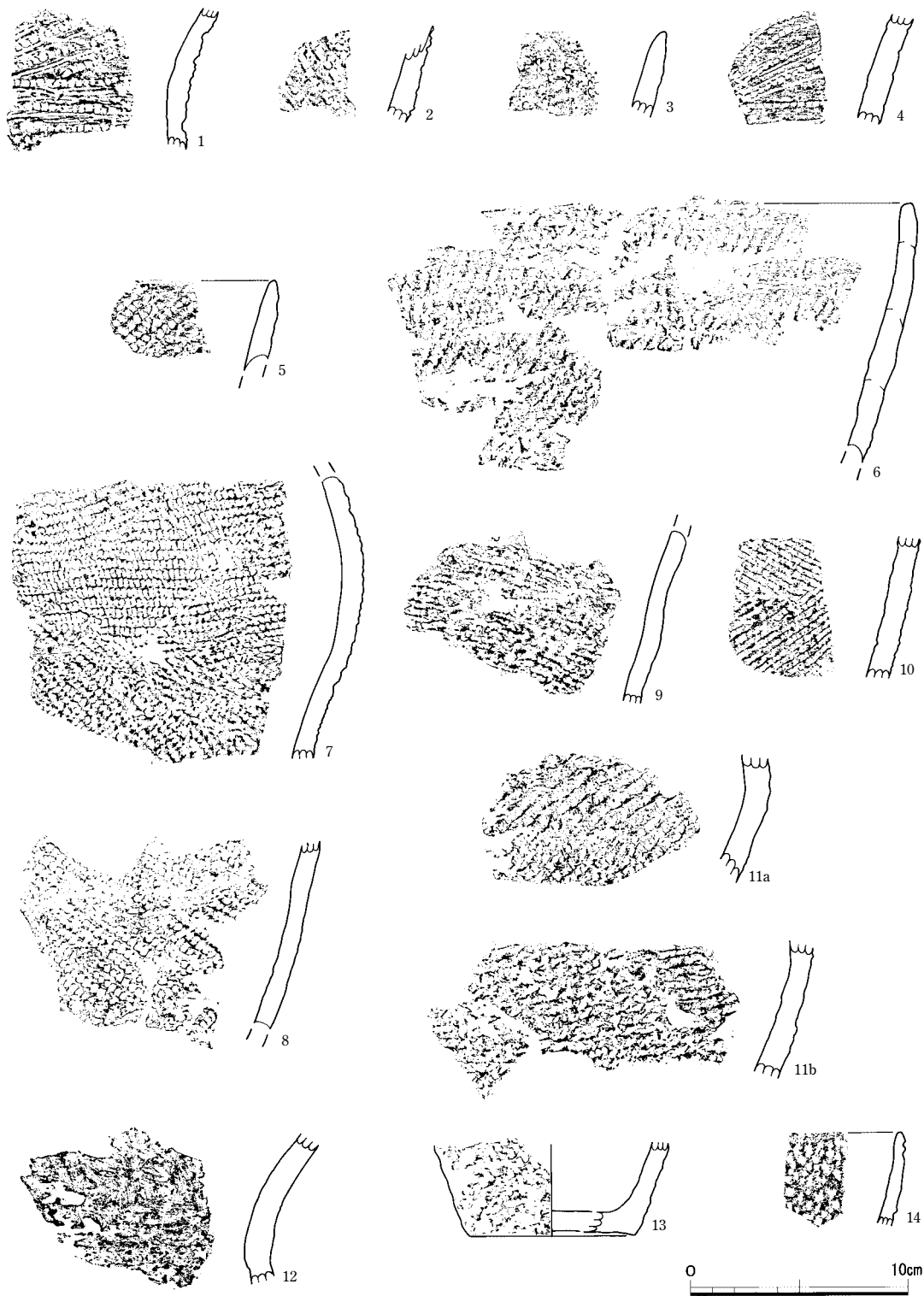
- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒（ ϕ 2mm）を均一に含む。ローム粒・橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子をかなり多量に含む。ローム粒・ローム小ブロック（ ϕ 3mm）・片岩粒と見られる細粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に含む。ロームブロック（ ϕ 5mm）を少量、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第5層 暗褐色土層 ローム粒をかなり多量に含む。褐色粒子を均一に、ローム小ブロック（ ϕ 3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第6層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第7層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、ローム粒・褐色粒子・砂粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



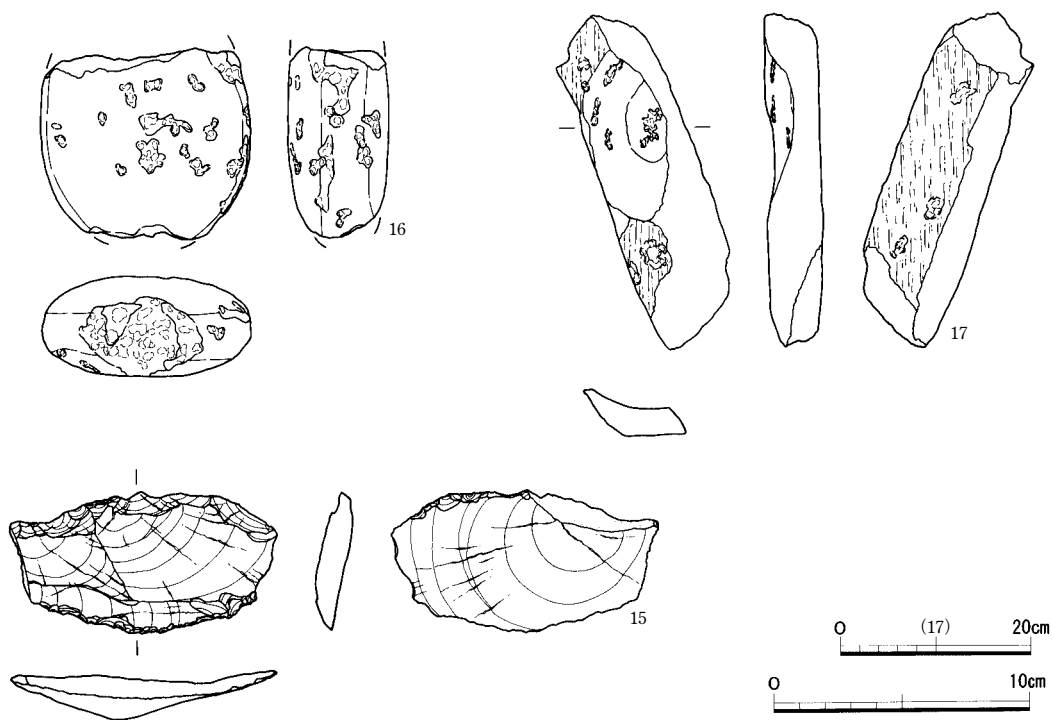
第13図 第10・11号住居跡



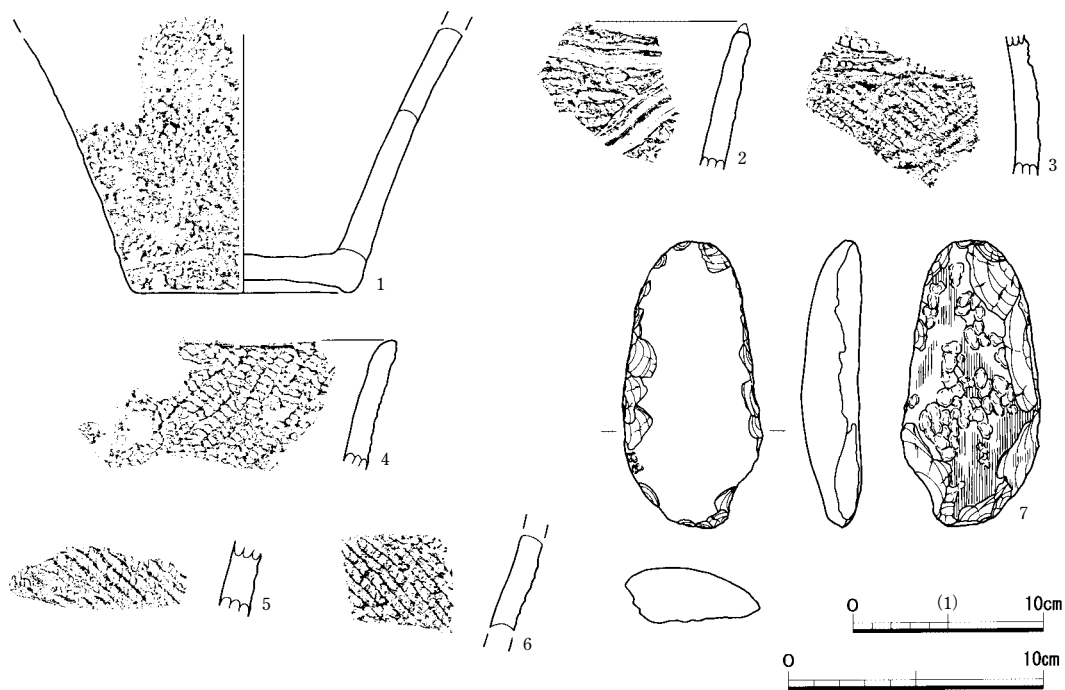
第14图 第10·11号住居跡



第15图 第10号住居跡出土遺物 (1)



第16图 第10号住居跡出土遺物 (2)



第17图 第11号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→列点状刺突文	褐色	No.15	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→列点状刺突文	黄褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	列点状刺突文	黄橙色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	列点状刺突文	黄橙色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	LR単節縄文	褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部	L無節縄文	灰褐色	No.13・14	
7	縄文土器	胴部	RL単節縄文	褐色	No.7・13	
8	縄文土器	胴部	RL単節縄文	黄褐色	No.19	
9	縄文土器	胴部	RL単節縄文	明黄褐色	No.12	
10	縄文土器	胴部	R・L無節縄文(羽状)	褐色	No.11	
11	縄文土器	胴部	L無節縄文	暗褐色	No.3・7	a・b同一個体
12	縄文土器	胴部	ナデ	暗褐色	No.2	
13	縄文土器	底部	LR単節縄文	明褐色	No.19	
14	縄文土器	口縁部	刺突文	灰褐色	覆土	
15	石器	—	—	—	No.18	スクレイパー
16	石器	—	—	—	覆土	磨石・敲石
17	石器	—	—	—	A	石皿

第11号住居跡 (第13・14・17図・図版8・80-2)

B1区のほぼ中央に位置している。本住居跡は、床面付近まで強い削平を受けていたため、あまり遺存状態は良好とは言えない。重複する第10号住居跡、第122号土壇に切られている。

平面形は、方形を基調とする台形を呈している。遺構の規模は、南東方向が3.5m、北西方向が4mである。確認面からの深さは5cm程である。床面は、ほぼ平坦でローム土を主体とした貼り床である。全体的に堅く締まっているが、北側の壁溝付近が若干窪んでいる。住居内には小ピットを伴う幅15cm、深さ10cm程の壁溝が巡っている。

炉跡は、住居跡の中央よりやや北側に位置する。2箇所とも平面形は、25cm×25cmのほぼ円形を呈する。深さは10cm程である。炉壁は、垂直に立ちあがり、あまり焼けていなかった。

出土遺物は、床面から覆土にかけて縄文時代前期中葉の有尾式と黒浜式の土器片と、自然石が少量出土している。土器以外には、磨製石斧が1点出土している。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	底部	RL単節縄文	明褐色	No. 5	
2	縄文土器	口縁部	突起、L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	黒褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部～ 胴部	半截竹管状工具による平行状線→列点状刺突文、 RL・LR単節縄文（羽状）	灰黄褐色	No. 4	
4	縄文土器	口縁部	LR単節縄文	褐色	No. 1	
5	縄文土器	胴部	R無節縄文	褐灰色	炉	
6	縄文土器	胴部	R無節縄文	灰黄褐色	覆土	

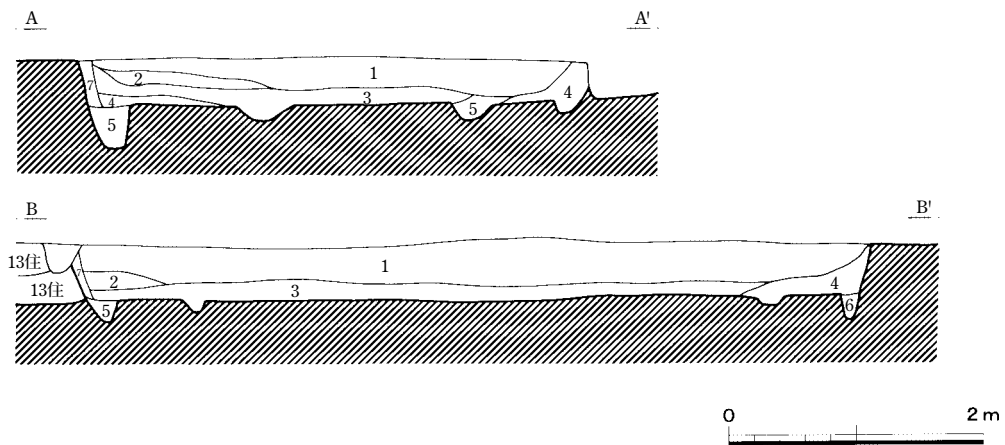
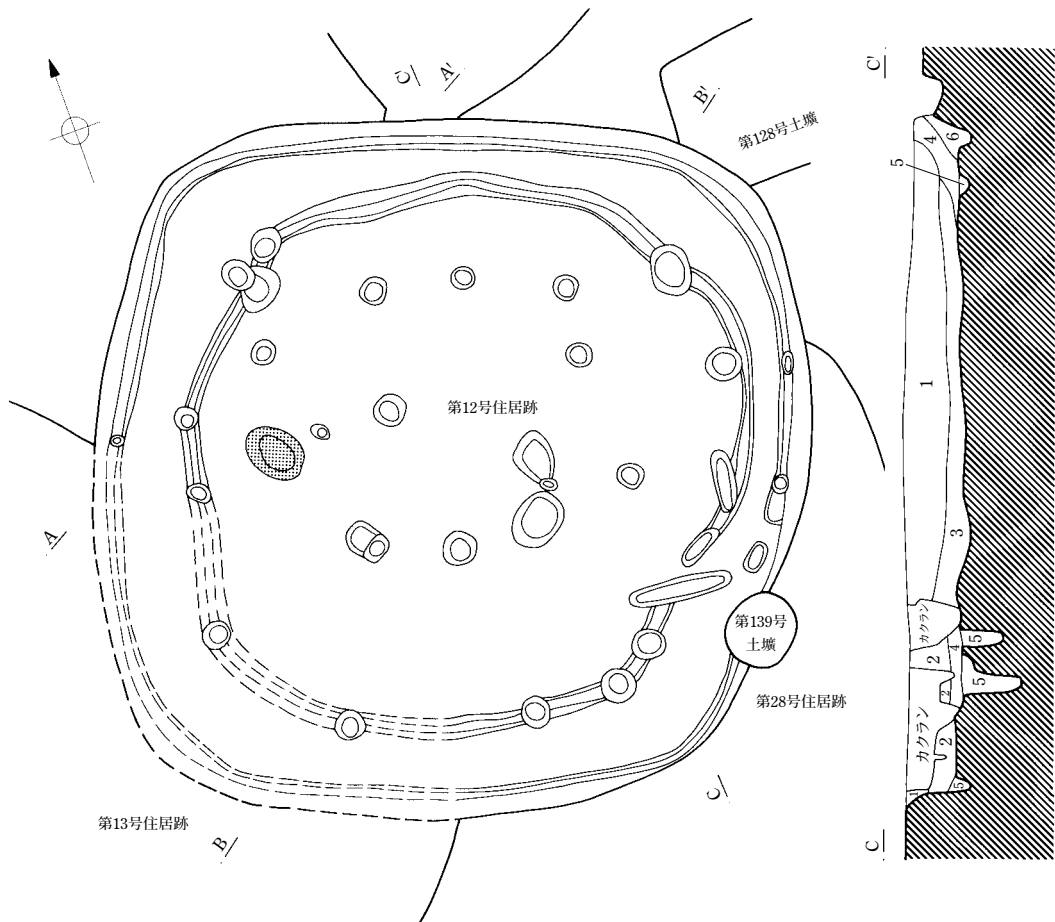
第12号住居跡(第18～22図・図版9・10・81～83-1)

B1区ほぼ中央の第10・11号住居跡の東側に位置している。重複する第10・11号住居跡、第13・28号住居跡、第139号土壌を切っている。また、第128号土壌に切られている。

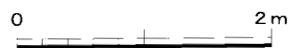
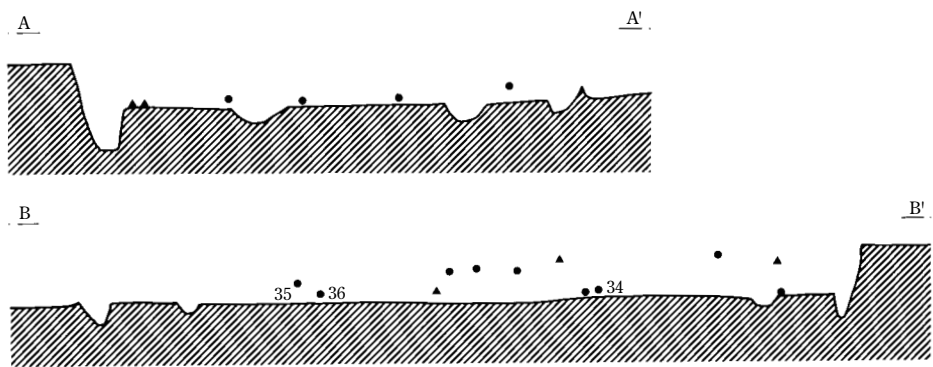
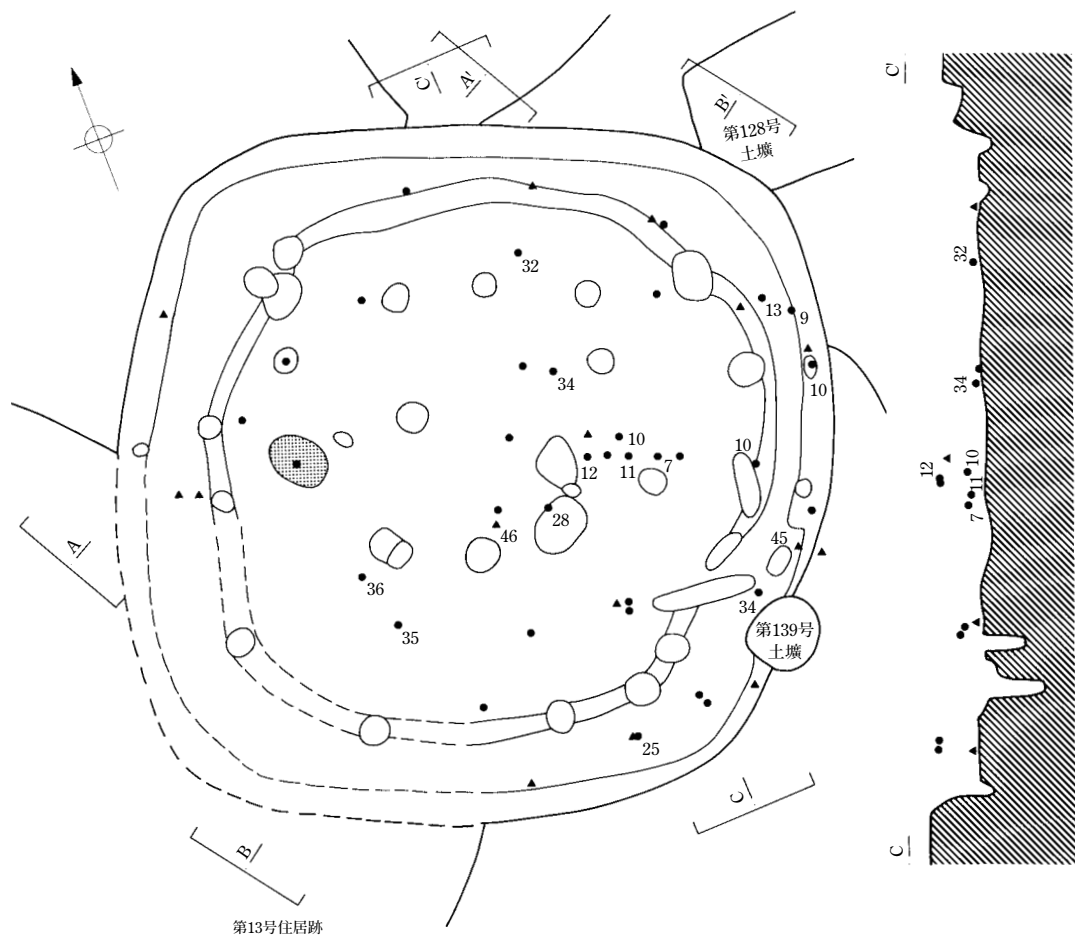
平面形は、隅丸方形を呈しているが、東壁がいくらか膨らんでいるところが見られる。この部分が入り口と考えられる。遺構の規模は、東西方向が5.5m、南北方向が5.3mである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは0.27mである。床面は、ほぼ平坦のローム土を主体とした貼り床で、内側に巡っている壁溝から北壁辺りには起伏が見られる。貼り床の中央部は比較的堅く締まっているが、壁に近い周辺部に近づくにつれて、やや軟質であった。住居跡内には、あまり小ピットを伴わずに、壁に沿って幅20cm、深さ10cm程の壁溝が巡っている。また、内側には、小ピットを伴う幅25～30cm、深さ30cm程の壁溝が巡っている。

第12号住居跡土層説明

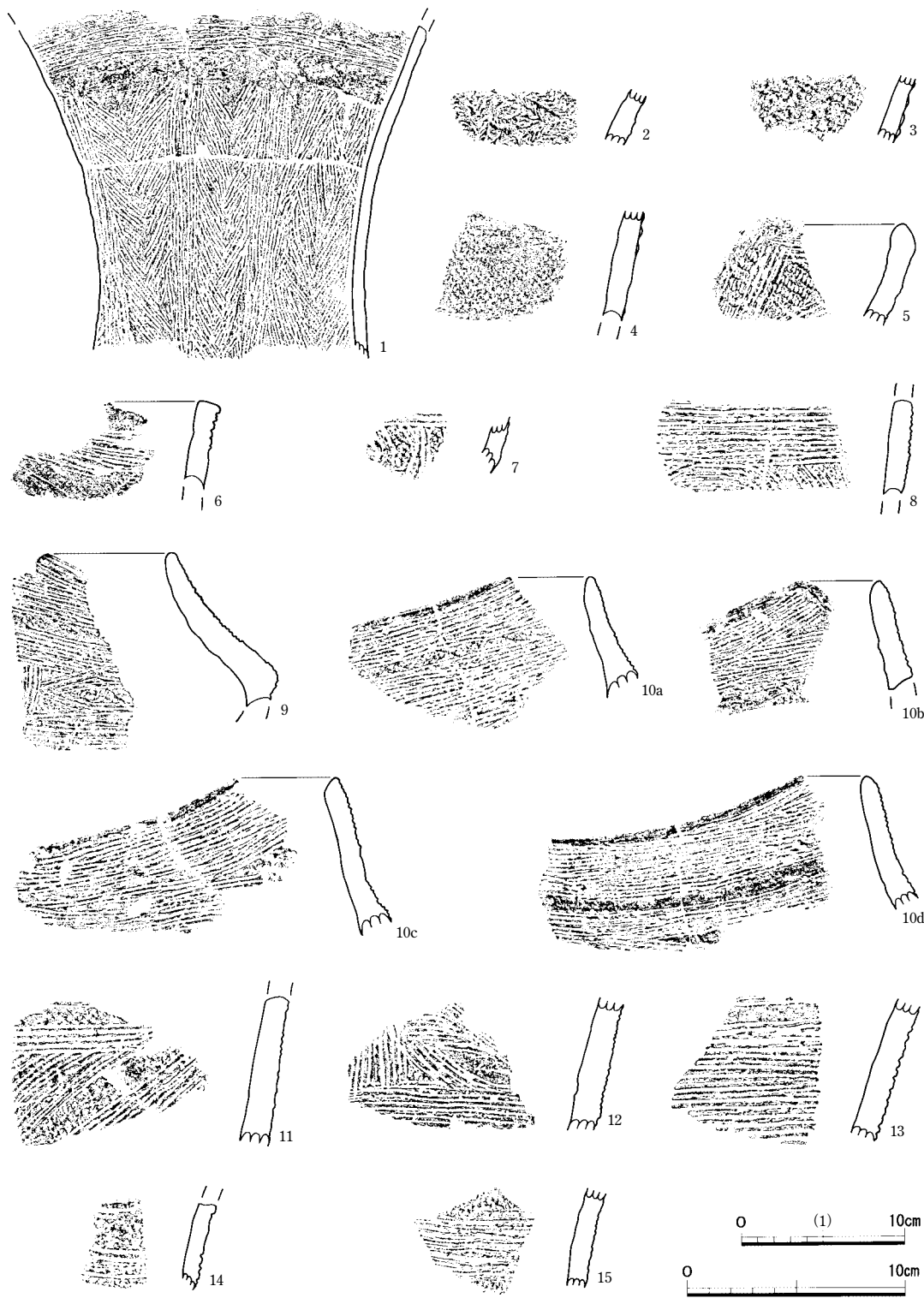
- 第1層 褐色土層 YP粒(φ3mm)・ローム粒を均一に含む。YP粒子を少量、ローム小ブロック(φ3mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 褐色土層 YP粒(φ2mm)を均一に、橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。YP粒(φ2mm)・ローム小ブロック(φ3mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 灰茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。ロームブロック(φ5mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第5層 灰茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。YP粒(φ2mm)・ローム小ブロック(φ3mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第6層 暗黄褐色土層 ローム粒を多量に、ロームブロック(φ1cm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第7層 暗褐色土層 ローム粒を少量、YP粒子・橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。



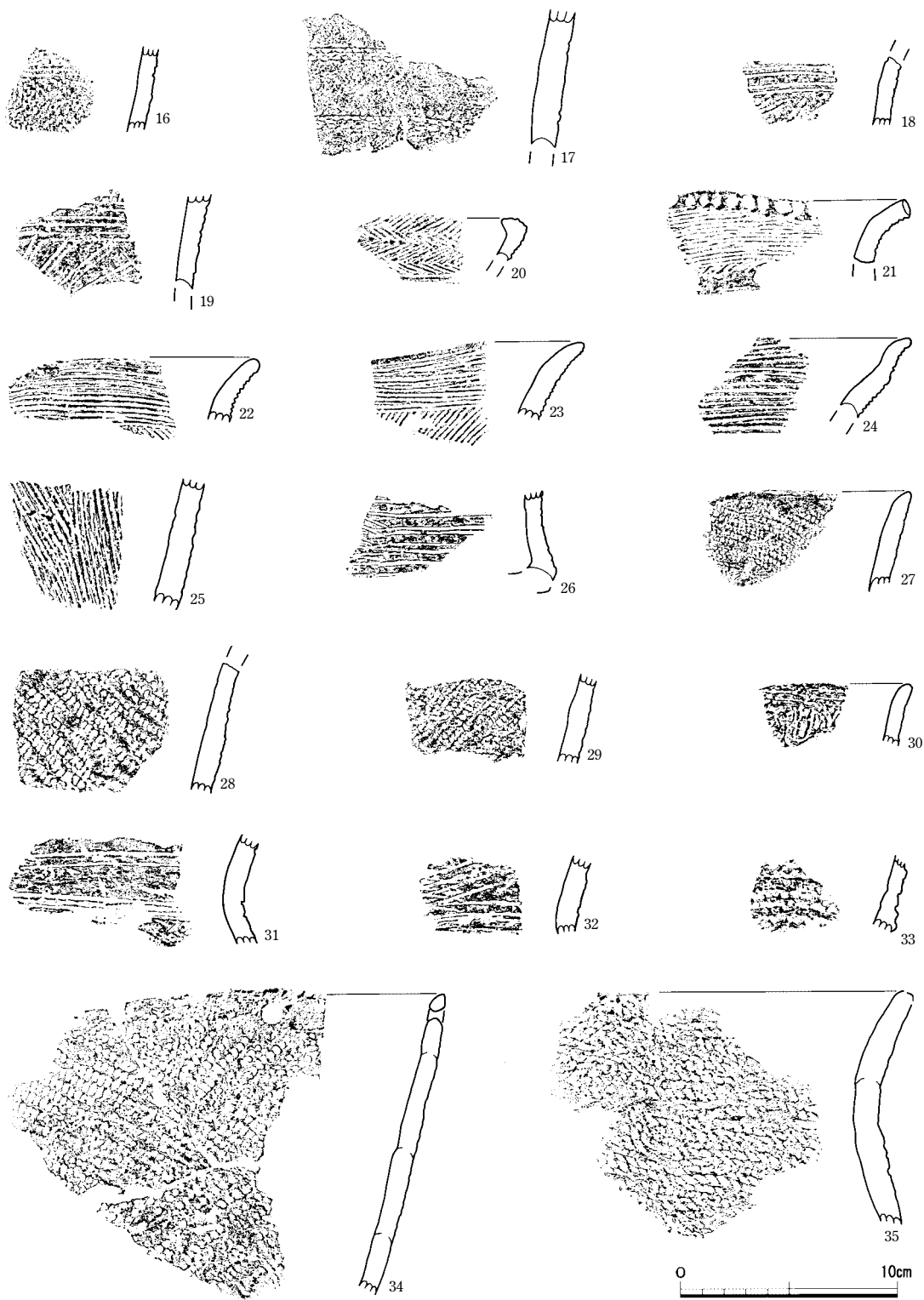
第18図 第12号住居跡



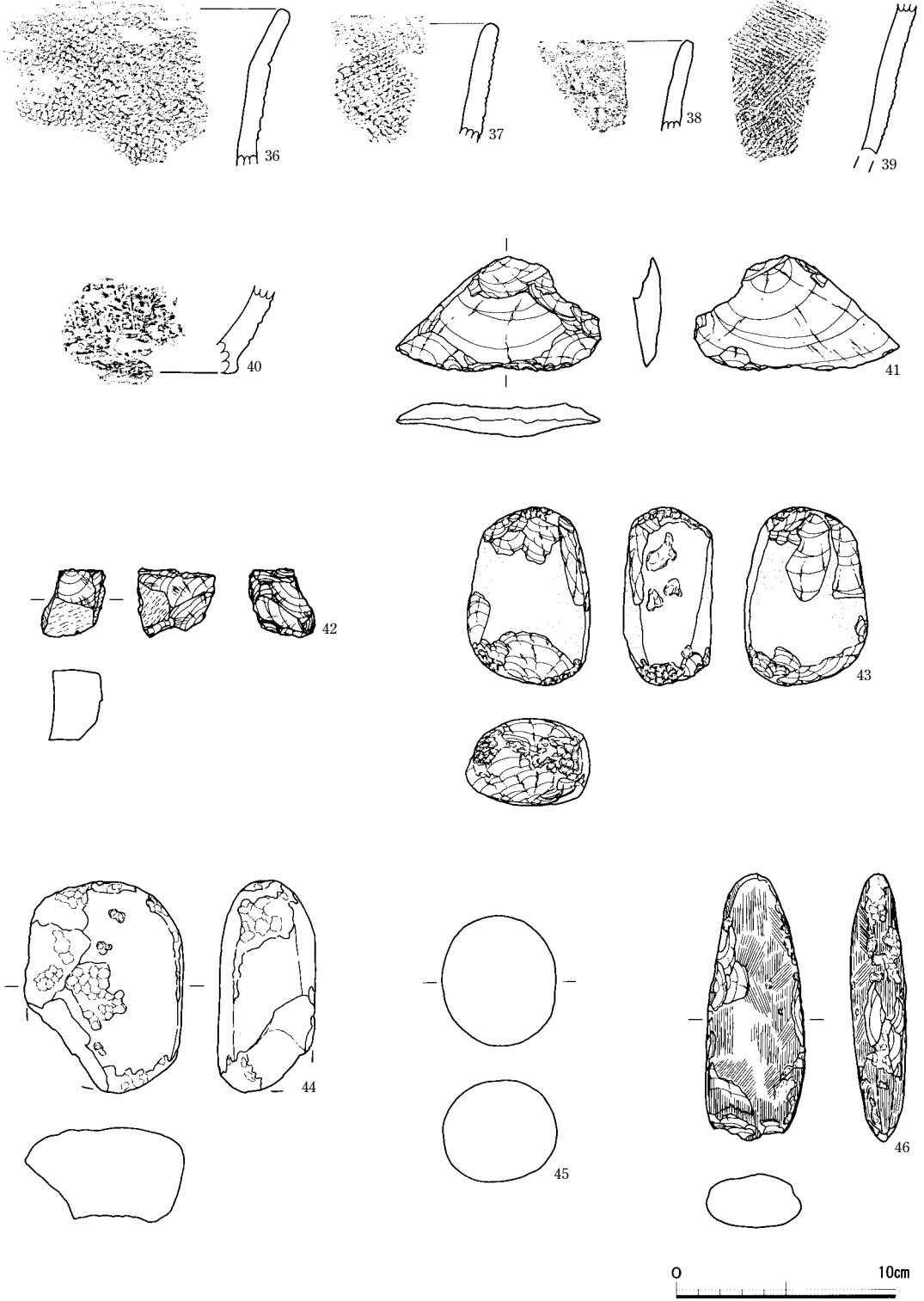
第19图 第12号住居跡



第20图 第12号住居跡出土遺物 (1)



第21图 第12号住居跡出土遺物（2）



第22图 第12号住居跡出土遺物 (3)

炉跡は、住居の中央より西よりに位置している。炉体土器を伴う。平面形は、35cm×25cmの楕円形を呈している。炉壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、ほとんど焼けてなかった。底面は、丸みを持つ。炉跡は、掘り込みは明確ではなく、貼り床構築時に埋甕炉として設置されたものと、考えられる。

出土遺物は、住居跡の中央床面付近から東壁の覆土中にかけて、多量の縄文土器片と自然石が出土している。炉体土器（第20図1）として、口縁部と胴部の下半を欠損した深鉢が、住居跡内の中央部からやや西壁によった位置で検出された。覆土中より出土した土器片は、縄文時代前期後半の諸磯b式の新段階から諸磯c式古段階の土器片が主体である。また、縄文時代前期前葉の関山式、前期中葉の黒浜式や有尾式、釈迦堂Z3式（第21図29）などの土器片も少量だが出土している。土器以外では、スクレイパー1点、石核1点、磨石・敲石2点、磨石1点や剝片などが出土している。また、覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも多数見られる。

本住居跡の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期後半の諸磯b式～c式期と考えられる。

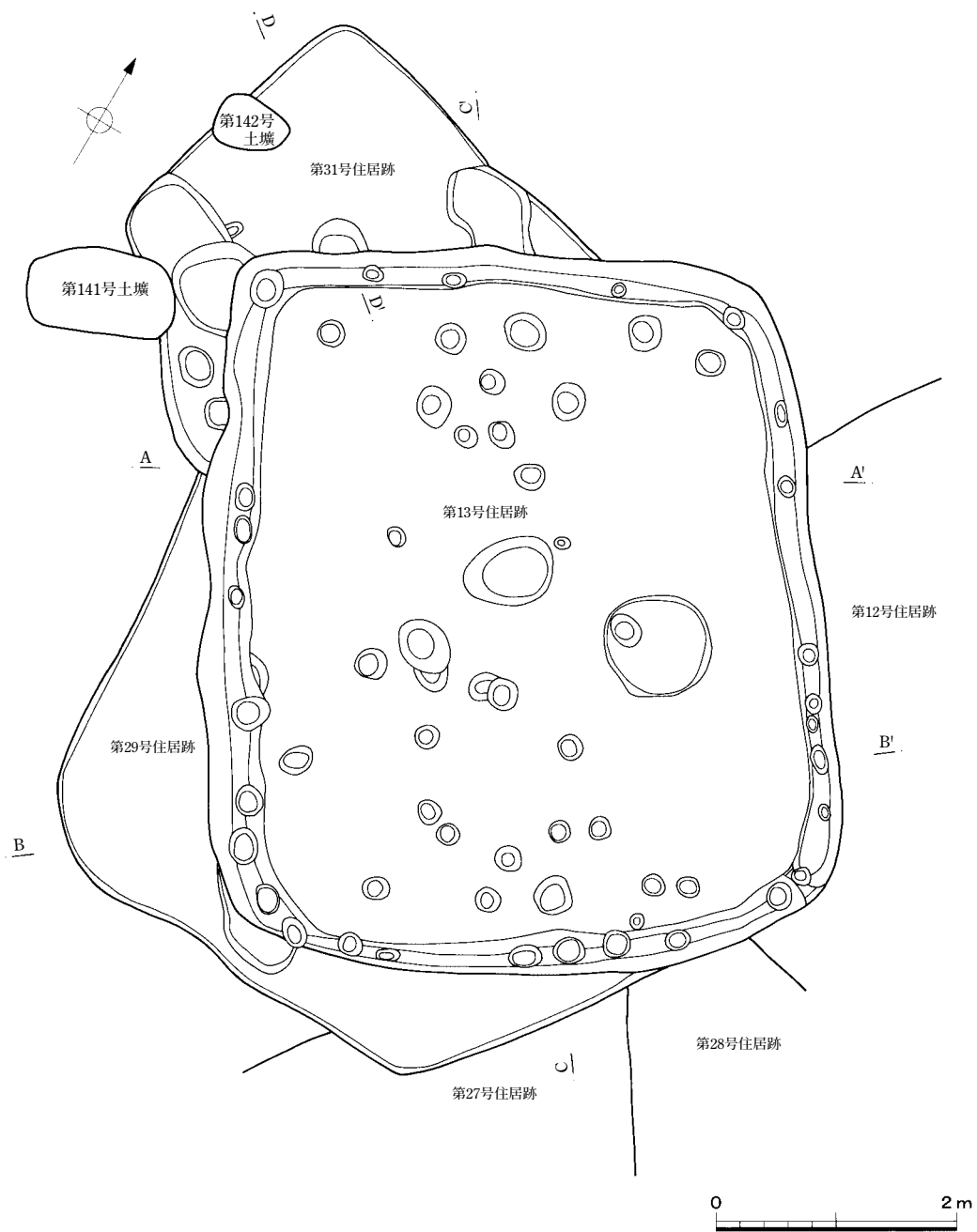
第12号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙色	炉跡	
2	縄文土器	胴部	縄文→浮線文→キザミ	黄褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部	浮線文→RL単節縄文	黄褐色	覆土	
4	縄文土器	胴部	浮線文→RL単節縄文	明黄褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部	単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄橙褐色	覆土	
7	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	灰黄褐色	覆土	
8	縄文土器	胴部	縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄橙褐色	覆土	
9	縄文土器	口縁部	LR単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	褐色	No.19	
10	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による集合沈線	褐色	No.21・25・34	a～d同一個体
11	縄文土器	胴部	縄文→半截竹管状工具による集合沈線	褐色	No.26	
12	縄文土器	胴部	縄文→半截竹管状工具による集合沈線	褐色	No.23	
13	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	赤褐色	No.18	
14	縄文土器	胴部	縄文→半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
15	縄文土器	胴部	RL単節縄文→集合沈線	黄褐色	覆土	
16	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線→キザミ	黒褐色	覆土	

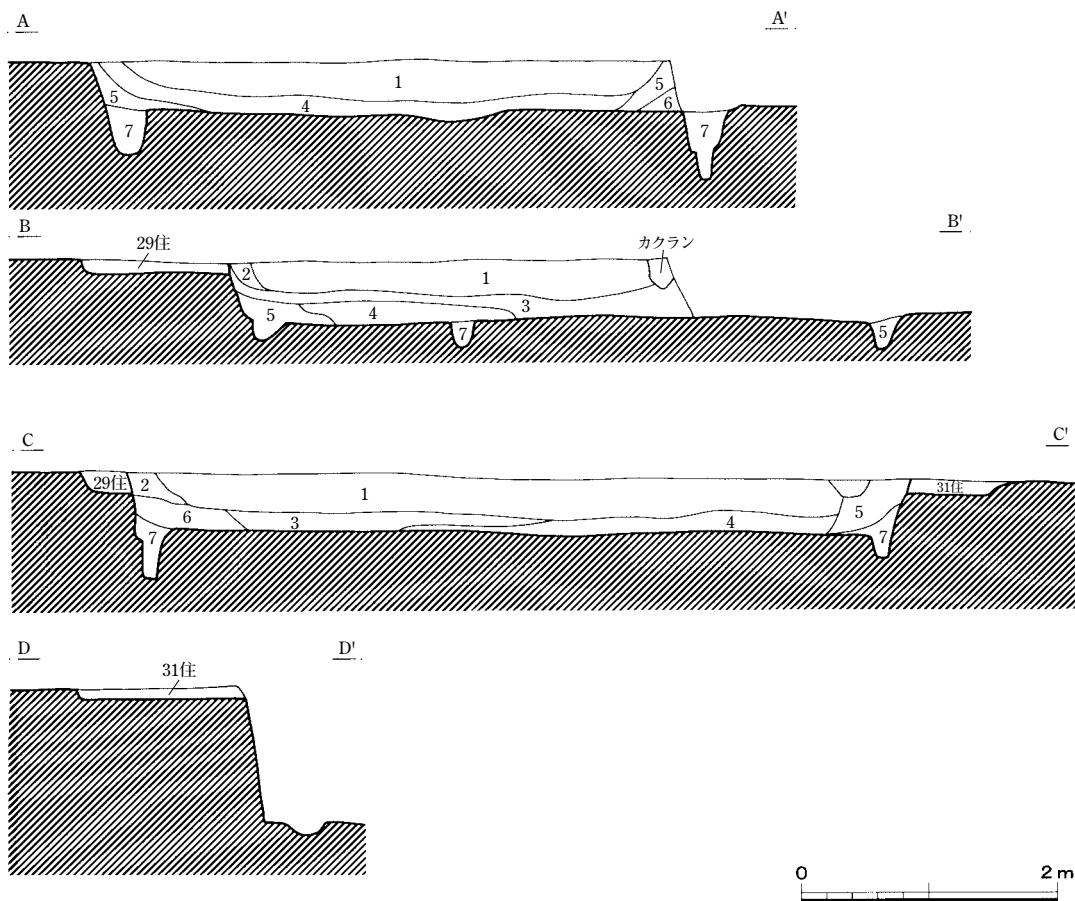
17	縄文土器	胴部	LR単節縄文→半截竹管状工具による押引	赤褐色	覆土・9住 No.70	9住と接合
18	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙褐色	覆土	
19	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	褐色	覆土	
20	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	橙褐色	覆土	
21	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線、口唇部：キザミ	灰黄褐色	覆土	
22	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	灰黄褐色	覆土	
23	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	灰黄褐色	覆土	
24	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	褐色	覆土	
25	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	褐色灰色	No.45	
26	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	赤褐色	覆土	
27	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	灰褐色	覆土	
28	縄文土器	胴部	RL単節縄文	黄橙褐色	No.31	
29	縄文土器	胴部	LR単節縄文（結節）	黒褐色	覆土	無繊維・雲母 を多く含む
30	縄文土器	口縁部	コンパス文	灰褐色	覆土	
31	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	赤褐色	覆土	
32	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	褐色	No. 7	
33	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	橙褐色	覆土	
34	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	No.16・41	
35	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	黄褐色	No.28	
36	縄文土器	口縁部	LR単節縄文	褐色	No.27	
37	縄文土器	口縁部	合撚	黒褐色	覆土	
38	縄文土器	口縁部	ナデ	赤褐色	覆土	
39	縄文土器	胴部	R・L無節縄文（羽状）	黒褐色	覆土	
40	縄文土器	底部	沈線	褐色	覆土	
41	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー
42	石器	—	—	—	覆土	石核
43	石器	—	—	—	覆土	磨石・敲石
44	石器	—	—	—	No.42	磨石・敲石
45	石器	—	—	—	覆土	磨石
46	石器	—	—	—	No.30	磨斧

第13号住居跡 (第23～38図・図版11～13・83-2～90-1)

B 1 区の中央付近に位置する。北西側に第16・17号住居跡、西側に第24号住居跡と近接する。また、重複する第12号住居跡に切られ、第27～29・31号住居跡を切っている。



第23図 第13・29・31号住居跡

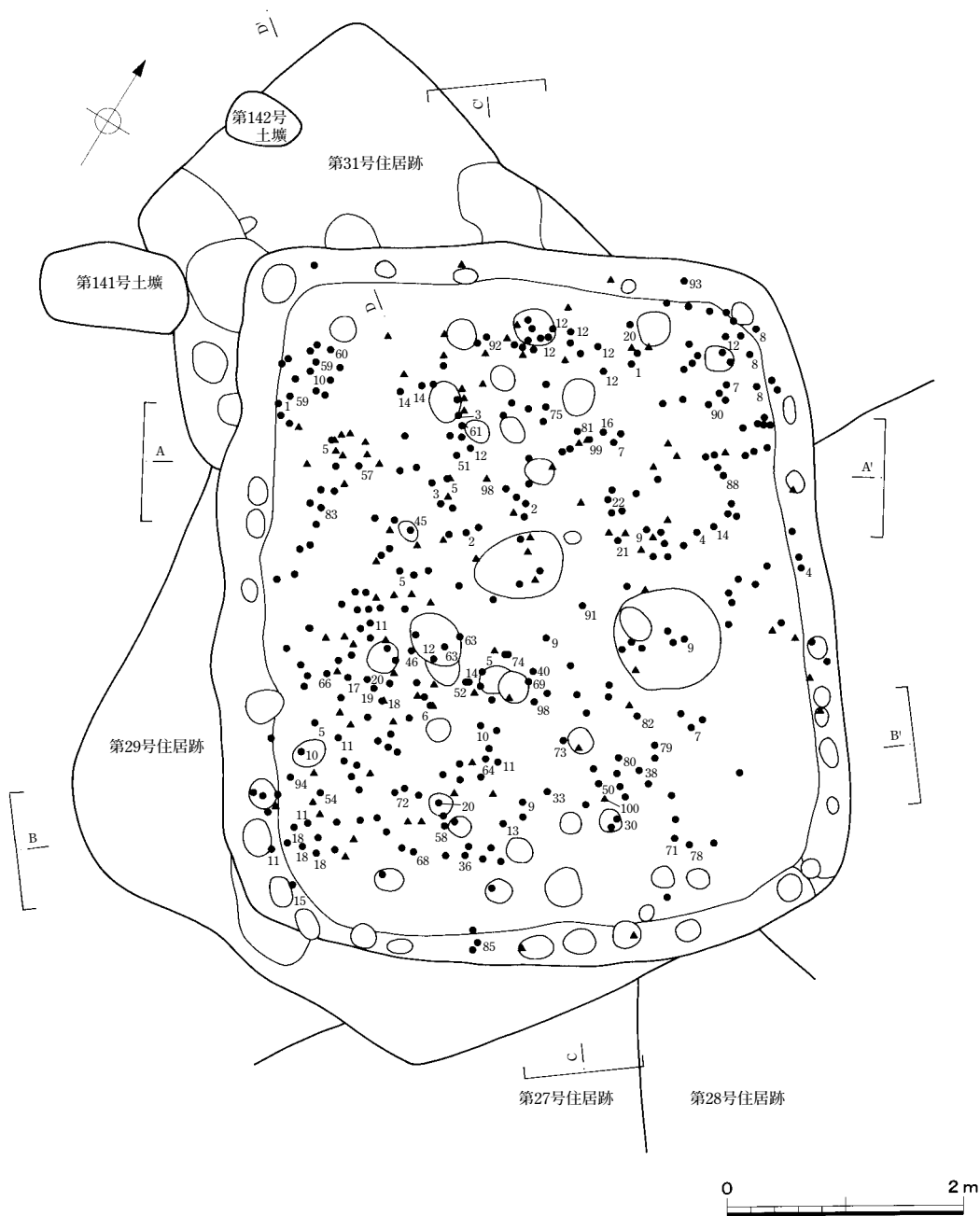


第24図 第13・29・31号住居跡

第13・29・31号住居跡土層説明

- 第1層 灰褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗灰褐色土層 ローム粒・YP粒子を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 灰茶褐色土層 YP粒子・ローム粒を均一に含む。ローム小ブロック（ ϕ 3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 灰茶褐色土層 ローム粒・YP粒子を多量に含む。ローム小ブロック（ ϕ 3mm）を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第5層 灰茶褐色土層 ローム粒をかなり多量に、YP粒子を均一に、橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第6層 灰茶褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒子を疎らに含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第7層 暗茶褐色土層 YP粒子をかなり多量に、ローム粒をやや多量に含む。YP粒（ ϕ 2mm）を均一、ロームブロックを（ ϕ 1.5cm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第8層 暗褐色土層 YP粒子をかなり多量に、ローム粒をやや多量に含む。YP粒（ ϕ 2mm）を均一、ローム小ブロック（ ϕ 3ミリ）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

平面形は、南東側と北東側のコーナー部に丸みが強い隅丸長方形を呈する。遺構の規模は、南東方向が6.05m、北西方向が5.25mである。壁は、傾斜をしつつ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは0.3m程である。床面は、ローム土を主体とした貼り床でほぼ平坦だが、中央から西壁に向かい若干窪んでいる。



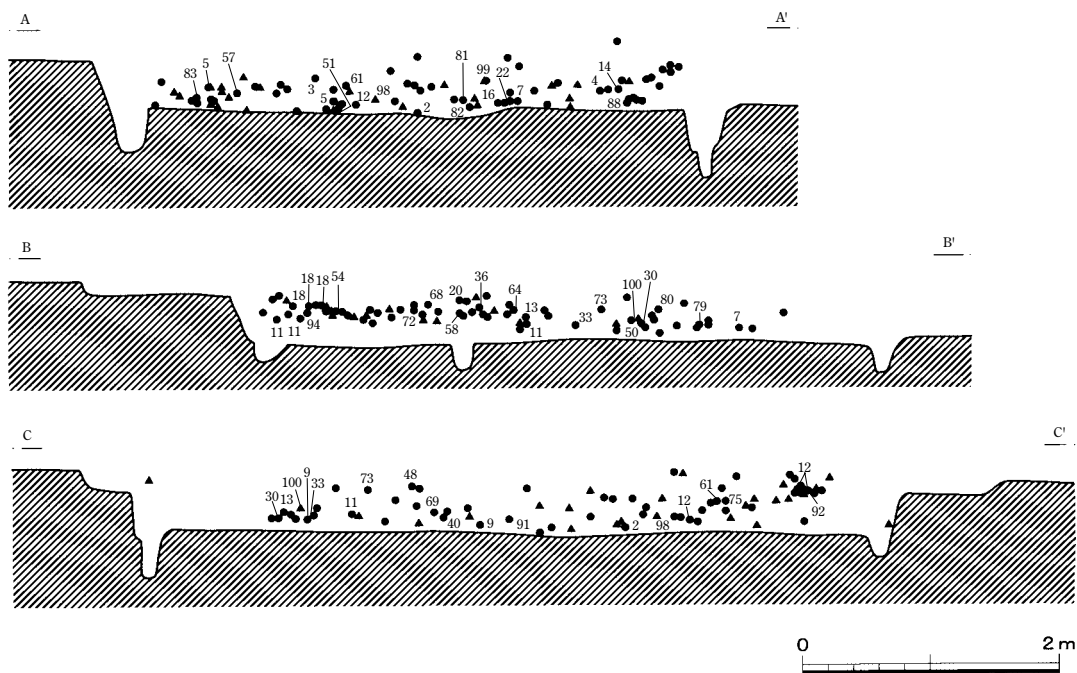
第25図 第13・29・31号住居跡

中央は比較的強く締まっているが、壁に近づくにつれて軟質である。住居内には、壁に沿って小ピットを伴う幅30cm、深さ20cm程の壁溝が巡っている。

炉跡は、検出されなかったが、土塊状の掘り込みが、住居内のほぼ中央と東壁よりの2ヵ所に検出された。ほぼ中央に検出された掘り込みの平面形は、60cm×70cmで、深さ25cmの楕円形である。壁は、傾斜して立ち上がる。底面は、平坦である。また、東壁よりの掘り込みの平面形は、95cm×90cmで、深さが30cmの楕円形である。壁は、傾斜して立ち上がる。底面は、平坦である。

出土遺物は、この集落内の住居跡のなかで最も多く、住居の床面付近から覆土にかけて、多量の縄文土器片と自然石が出土した。土器片は、縄文時代前期中葉の黒浜式でも古い様相のものが主体である。また、第28図3・4のように、前期前葉の関山式においても半截竹管による幾何学状の沈線が施されたものや、縄文時代前期中葉の有尾式も出土している。黒浜式では、縄文施文のみのもの、縄文施文後に半截竹管による沈線または押し引きが施されたものなどが見られる。また、第33図39～41・第38図97は東海系と思われる土器片も出土している。土器以外には、スクレイパー1点、石核1点、磨石・敲石2点、打製石斧1点や多量の剝片などが出土している。また、覆土中から出土した多量の自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

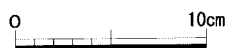
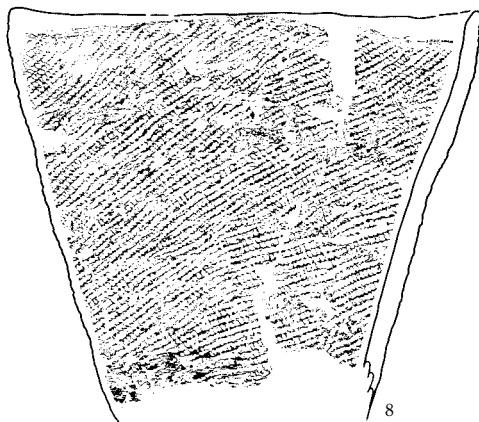
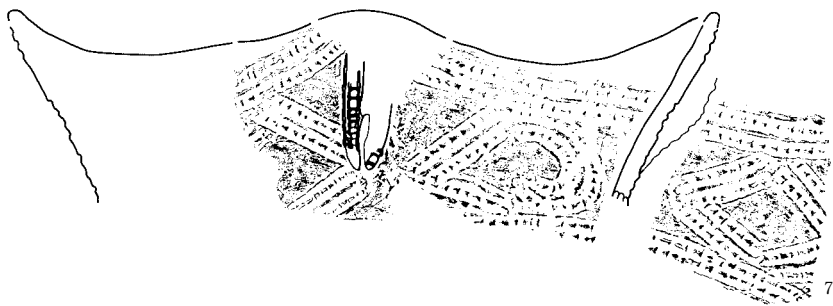
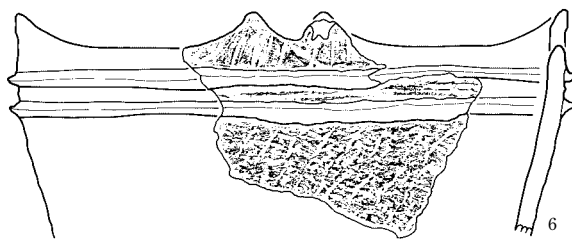
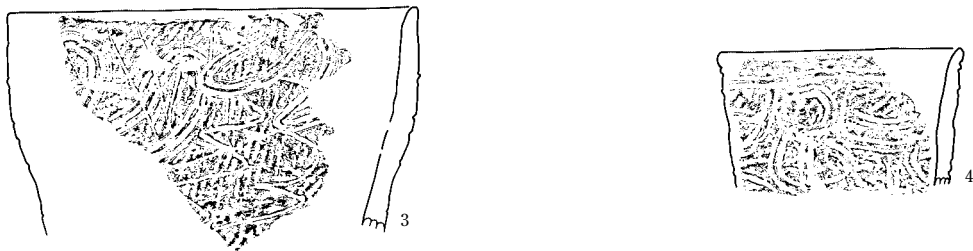
本住居跡の帰属時期は、覆土の状態や出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



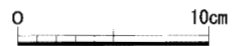
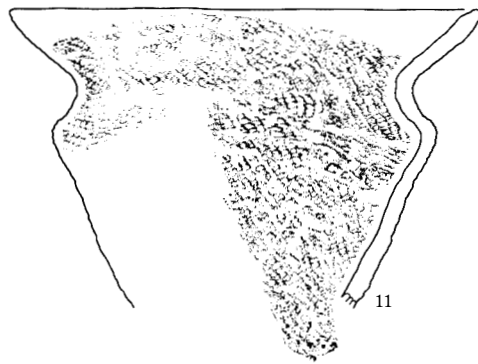
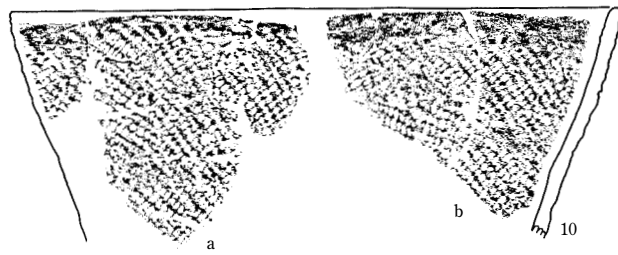
第26図 第13・29・31号住居跡



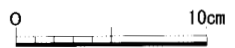
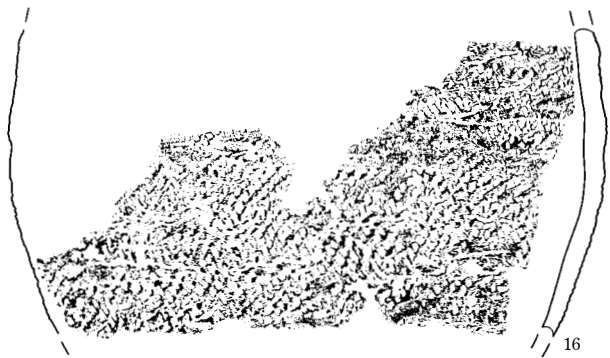
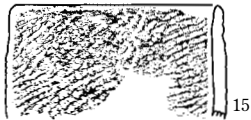
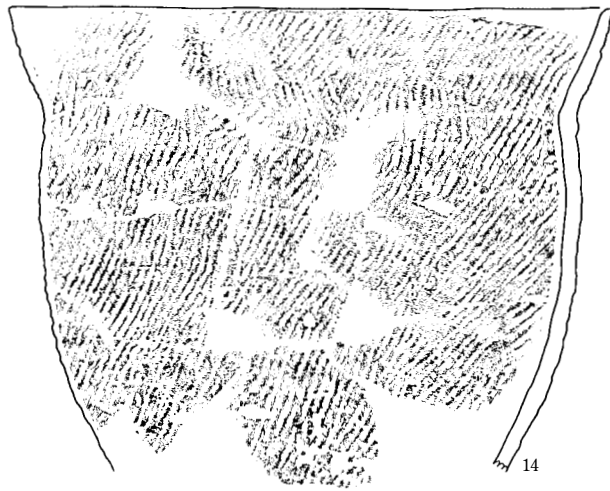
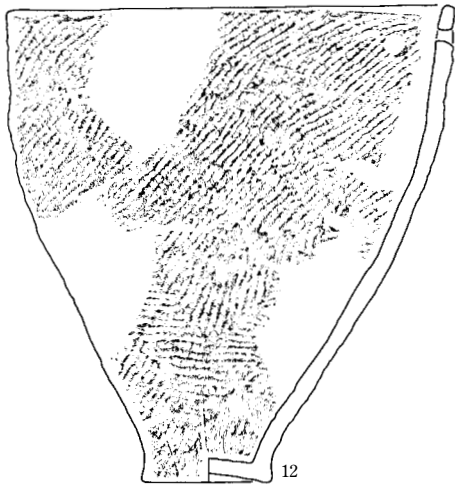
第27图 第13号住居跡出土遺物（1）



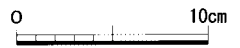
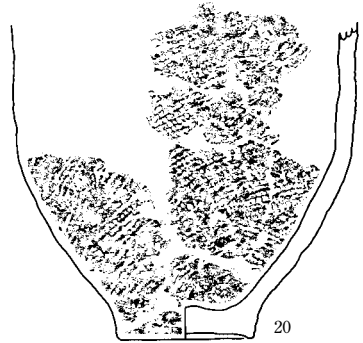
第28图 第13号住居跡出土遺物 (2)



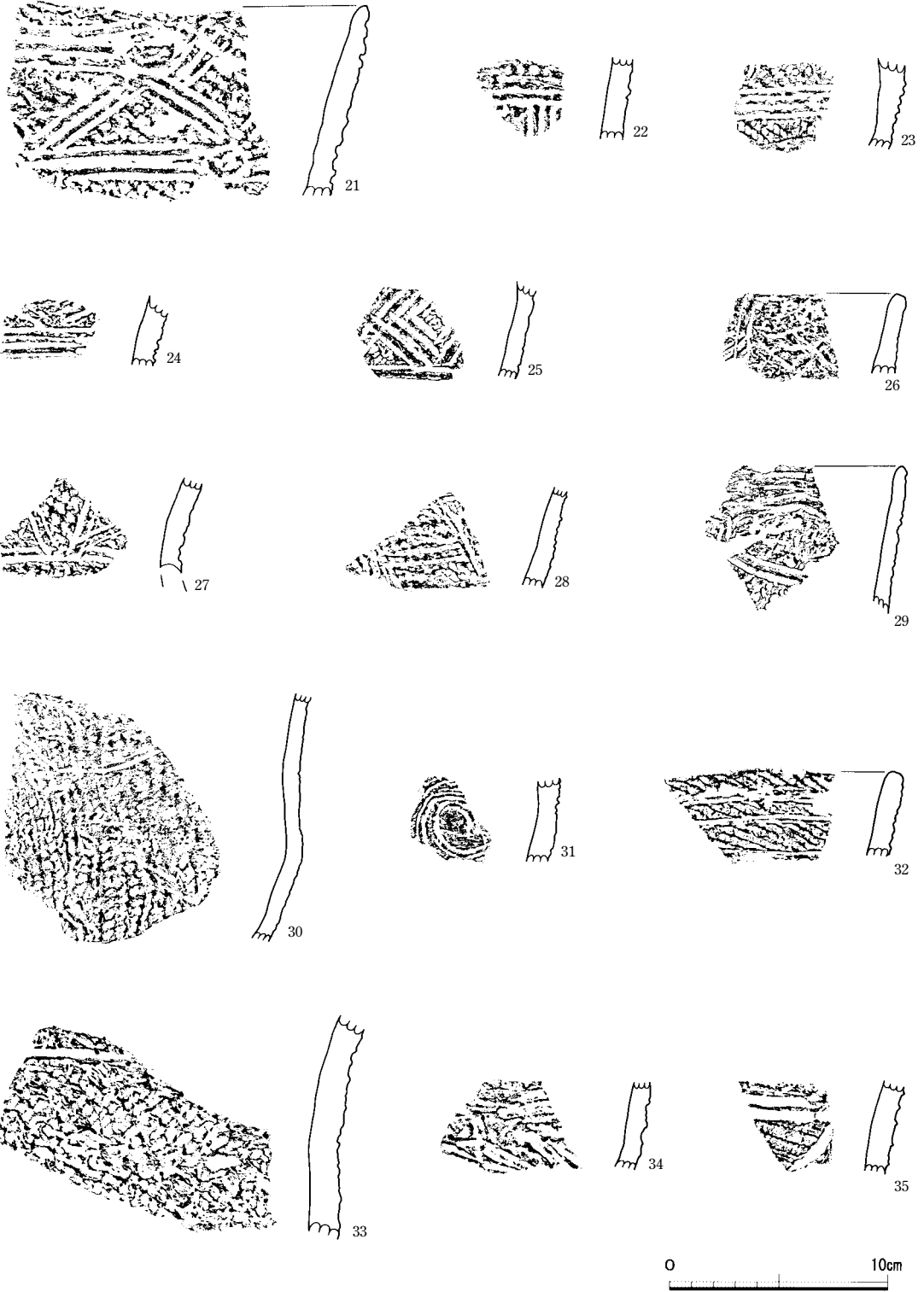
第29图 第13号住居跡出土遺物 (3)



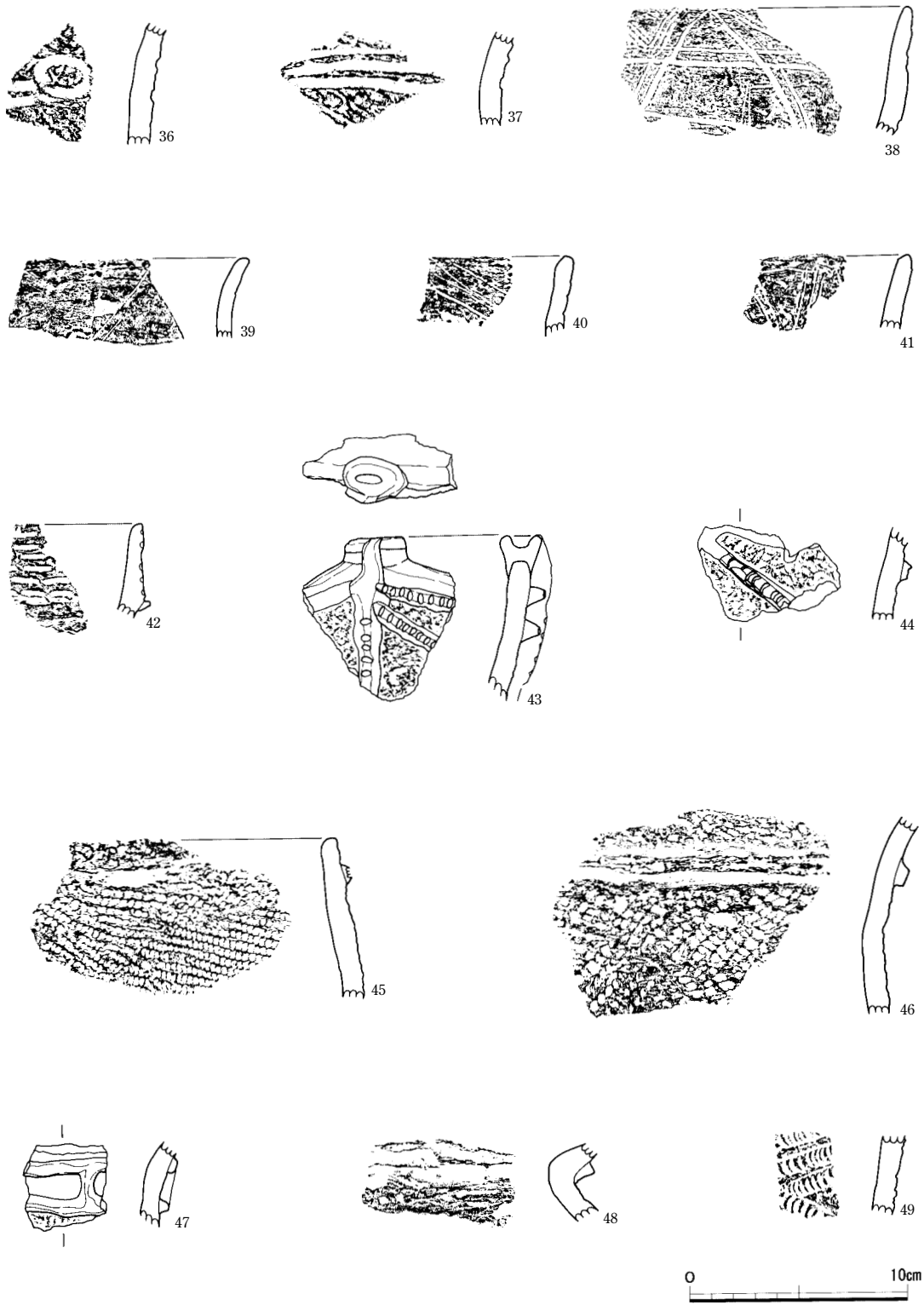
第30图 第13号住居跡出土遺物(4)



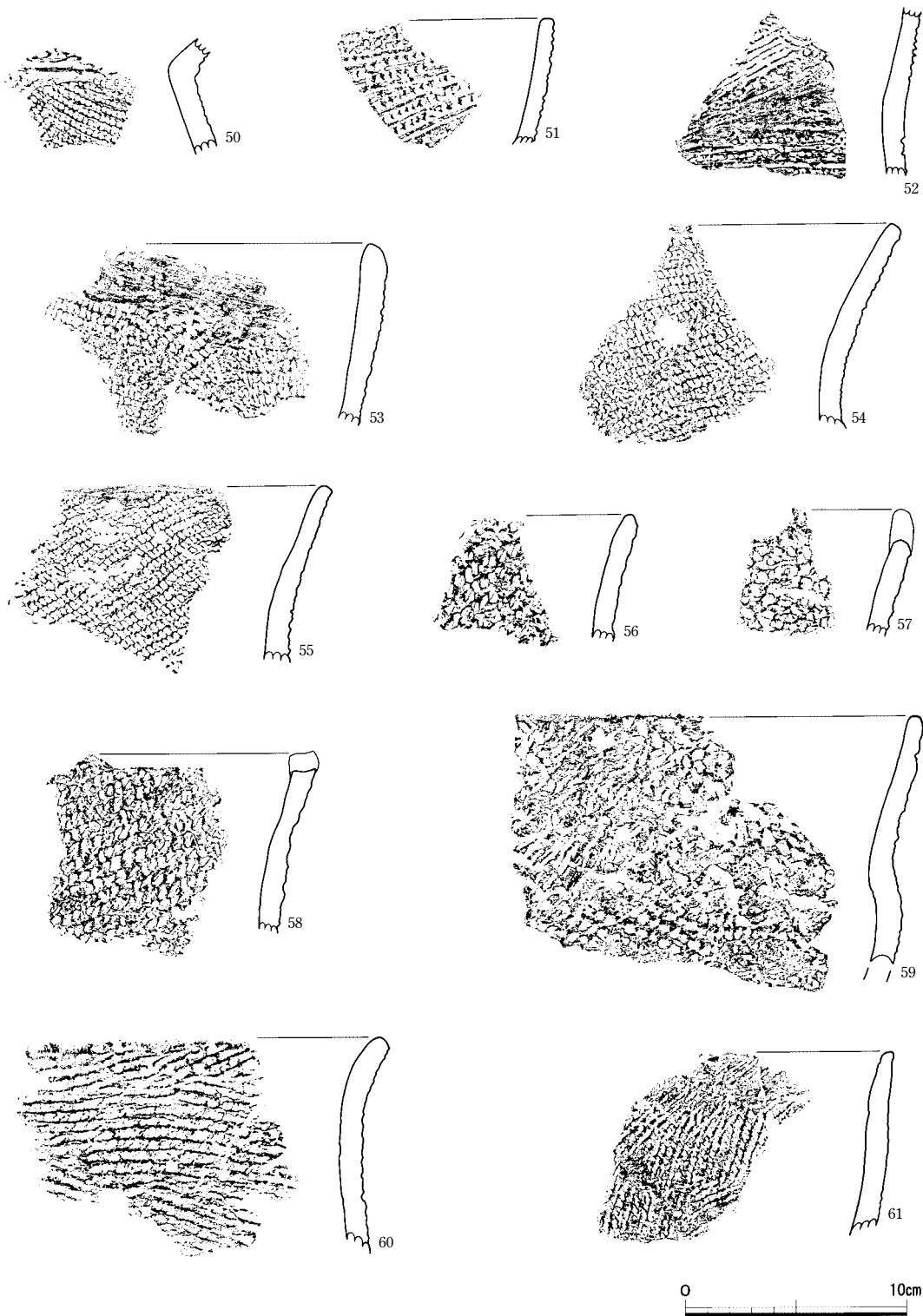
第31图 第13号住居跡出土遺物 (5)



第32图 第13号住居跡出土遺物 (6)



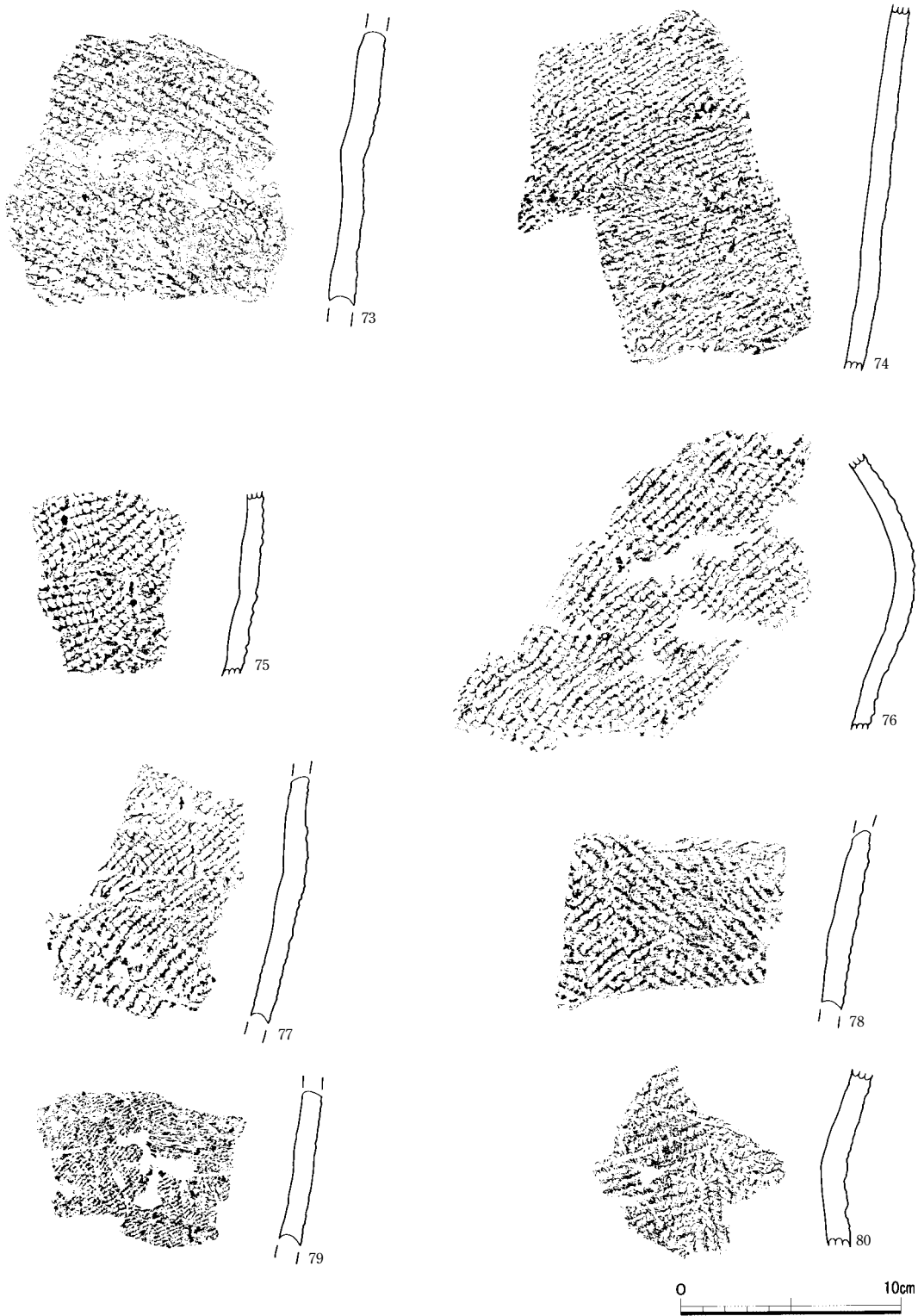
第33图 第13号住居跡出土遺物（7）



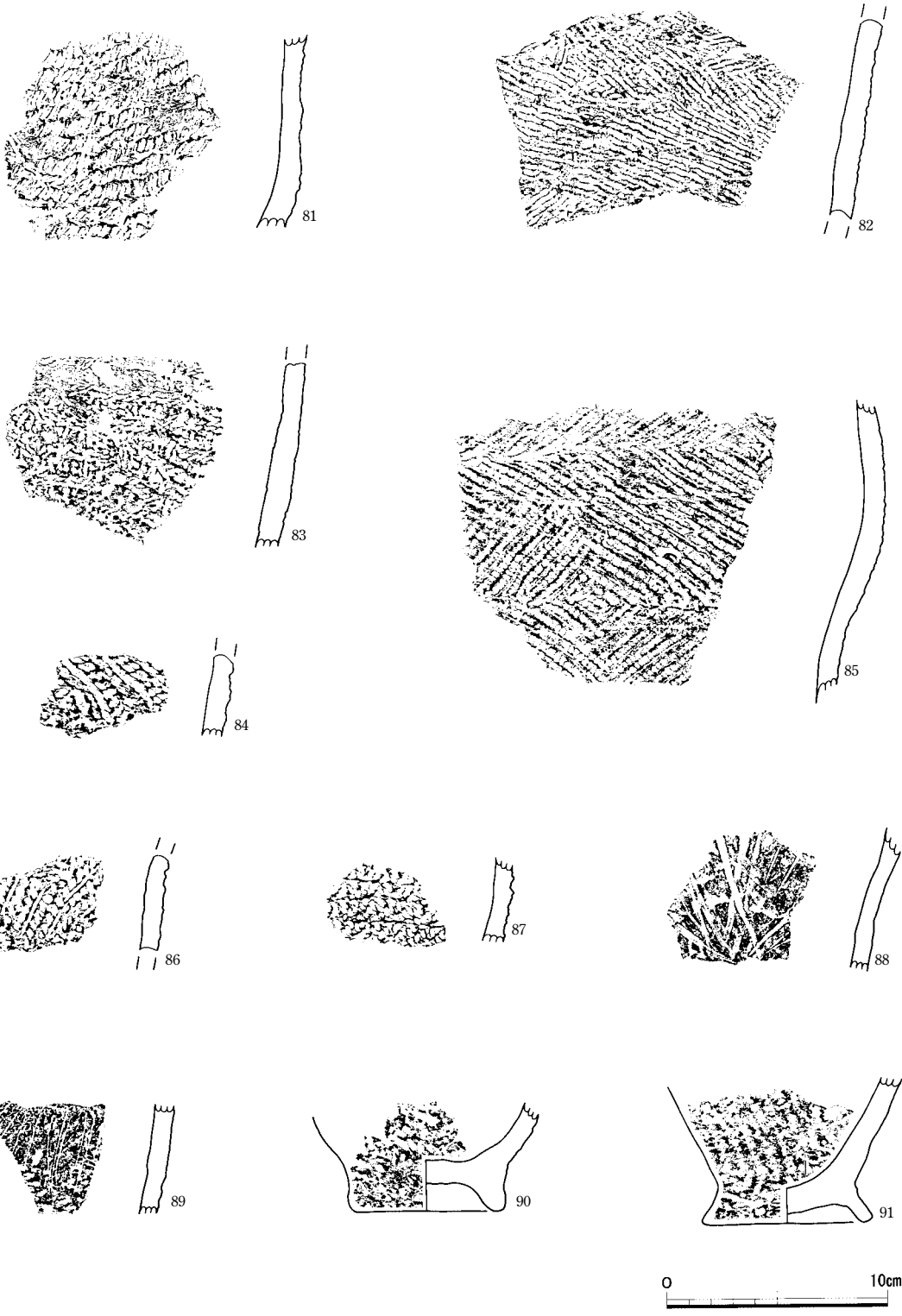
第34图 第13号住居跡出土遺物（8）



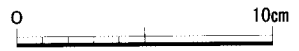
第35图 第13号住居跡出土遺物（9）



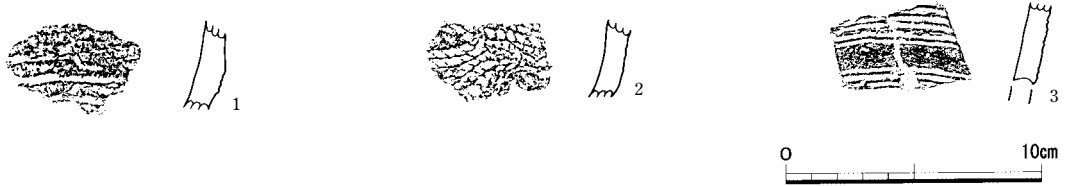
第36图 第13号住居跡出土遺物 (10)



第37图 第13号住居跡出土遺物 (11)



第38图 第13号住居跡出土遺物 (12)



第39图 第31号住居跡出土遺物

第29号住居跡（第23図）

B 1 区中央付近に位置する。重複する第13号住居跡に切られている。また、第31号住居跡との新旧関係は不明である。本住居跡は、床面付近まで強い削平を受けていたため、遺構の遺存状況はあまり良好とは言えない。

平面形は、方形を基調とする台形を呈する。遺構の規模は、東西方向が5m、南北方向が3.5mである。壁は、やや開くように立ち上がり、確認面からの深さは5cmである。床面がすぐ検出された。床面は、ローム土を主体とした貼り床で平坦である。全体的に良く堅く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には、壁溝と炉跡は、検出されなかった。

本住居跡の帰属時期は、覆土から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第31号住居跡（第23～26・39図・図版90-2）

B 1 区中央付近に位置する。重複する第13号住居跡に切られている。また、第29号住居跡との新旧関係は不明である。また、第141・142号土壌によって切られている。本住居跡は、床面付近まで強い削平を受けていたため、遺構の遺存状況はあまり良好とは言えない。

平面形は、方形を基調とする台形を呈する。遺構の規模は、東西方向が2.8m、南北方向が2.7mである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは3cmである。床面は、ローム土を主体とした貼り床で平坦である。中央部は比較的良く締まっているが、壁に近いあたりはやや軟質である。住居跡内には、壁溝と炉跡は、検出されなかった。

出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が2片と、諸磯c式の土器片1点が、覆土中から出土しただけである。

本住居跡の帰属時期は出土遺物から、縄文時代前期中葉期と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部 ～胴部	LR単節縄文→半截竹管状工具による沈線+半截竹管状工具による押引	橙褐色	No.38・198	a・b同一個体
2	縄文土器	口縁部 ～胴部	LR単節縄文（ループ文・0段多条）→半截竹管状工具による沈線	赤褐色	No.152・160	a・b・c同一個体
3	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	暗灰黄褐色	No.175・176	
4	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	黒褐色	No.106・111	
5	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文→単沈線	褐色	No.167・ 201・228・ 260・356	a～d同一個体

6	縄文土器	口縁部 ～胴部	付加条縄文→隆帯→半截竹管状工具による沈線	黄褐色	No.343	
7	縄文土器	口縁部	隆帯→半截竹管状工具による押引	黄橙褐色	No.25・83・ 280	
8	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文	黄褐色	No.12・15・ 16	
9	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL・LR単節縄文	暗褐色	No.125・ 142・261・ 304	
10	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文	黒褐色	No.189・ 316・373	a・b同一個体
11	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文	灰褐色	No.237・ 313・355・ 390・394	
12	縄文土器	口縁部 ～底部	L無節縄文	褐色	No.4・11・ 40・41・60・ 75・169・253	
13	縄文土器	口縁部 ～胴部	L無節縄文	暗褐色	No.306	
14	縄文土器	口縁部 ～胴部	L無節縄文	黄褐色	No.110・ 183・184・ 258	
15	縄文土器	口縁部 ～胴部	L無節縄文	黒褐色	No.407	
16	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄褐色	No.84	
17	縄文土器	胴部	合撚	黄褐色	No.371	
18	縄文土器	口縁部 ～胴部	付加条縄文?	黄褐色	No.352・ 391・393・ 408	
19	縄文土器	口縁部 ～胴部	縄文(ループ文・結節)	黒褐色	No.348	
20	縄文土器	底部	LR単節縄文	赤褐色	No.39・333・ 350	

21	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引・刺突	黄褐色	No.143	
22	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	褐色	No.87	
23	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	黄褐色	覆土	
24	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	黄橙褐色	覆土	
25	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	灰褐色	覆土	
26	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	黒褐色	覆土	
27	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	黒色	覆土	
28	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	赤褐色	覆土	
29	縄文土器	口縁部	LR単節縄文→半截竹管状工具による沈線	黒褐色	覆土	
30	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	黒褐色	No.300	
31	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
32	縄文土器	口縁部	R無節縄文→半截竹管状工具による沈線	暗褐色	覆土	
33	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文→単沈線	黄褐色	No.303	
34	縄文土器	口縁部 ～胴部	単沈線	黒褐色	覆土	
35	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文→単沈線	黒褐色	覆土	
36	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文?→単沈線	灰黄褐色	No.326	
37	縄文土器	口縁部 ～胴部	縄文→単沈線	黒褐色	覆土	
38	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	黒褐色	No.290	
39	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	黒褐色	覆土	東海系?
40	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	黄褐色	No.262	東海系?
41	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	黒褐色	覆土	東海系?
42	縄文土器	口縁部	隆帯→刺突	灰黄褐色	覆土	
43	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→隆帯→キザミ	黄褐色	覆土	
44	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→隆帯→キザミ	黒褐色	覆土	
45	縄文土器	口縁部 ～胴部	隆帯→RL単節縄文	灰黄褐色	No.223	

46	縄文土器	口縁部 ～胴部	隆帯→RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	No.247	
47	縄文土器	口縁部 ～胴部	隆帯→RL単節縄文	褐色	覆土	
48	縄文土器	口縁部 ～胴部	隆帯	黒褐色	No.265	
49	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	灰黄褐色	覆土	
50	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL・LR単節縄文（羽状）→半截竹管状工具による押引	黒色	No.296	
51	縄文土器	口縁部	列点状刺突文→半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	黒褐色	No.168	
52	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線→列点状刺突文	灰褐色	No.258	
53	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文	明褐色	覆土	
54	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文	黄褐色	No.386	
55	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL単節縄文	明褐色	覆土	
56	縄文土器	口縁部 ～胴部	LR単節縄文、口唇部に及ぶ	黄褐色	覆土	
57	縄文土器	口縁部	突起、RL単節縄文	明赤褐色	No.206	
58	縄文土器	口縁部 ～胴部	突起、LR単節縄文	褐色	No.328	
59	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL・LR単節縄文、LL単節？縄文（羽状）	黄褐色	No.190・196	
60	縄文土器	口縁部 ～胴部	L無節縄文	黄橙褐色	No.185	
61	縄文土器	口縁部 ～胴部	L無節縄文	黒色	No.172	
62	縄文土器	口縁部	L無節縄文、口唇部に及ぶ	黄褐色	覆土	
63	縄文土器	口縁部	L無節縄文	黄褐色	No.251・252	
64	縄文土器	口縁部	L無節縄文	灰黄褐色	No.312	
65	縄文土器	口縁部	L無節縄文	黄褐色	覆土	

66	縄文土器	口縁部 ～胴部	合燃	灰黄褐色	No.370	補修孔有り
67	縄文土器	口縁部	ループ文	黄褐色	覆土	
68	縄文土器	口縁部	ナデ	暗灰黄褐色	No.404	
69	縄文土器	注口	LR単節縄文	黄橙褐色	No.263	
70	縄文土器	注口	RL単節縄文	橙褐色	覆土	注口は貫通してない
71	縄文土器	胴部	RL単節縄文(羽状)	黄褐色	No.284	
72	縄文土器	胴部	RL単節縄文	褐色	No.335	
73	縄文土器	胴部	RL単節縄文	灰黄褐色	No.274	
74	縄文土器	胴部	RL単節縄文	黄褐色	No.260	
75	縄文土器	胴部	LR単節縄文	黄褐色	No.70	
76	縄文土器	胴部	LR単節縄文	黒褐色	覆土	
77	縄文土器	胴部	LR単節縄文・L無節縄文	黄褐色	覆土	
78	縄文土器	胴部	R・L無節縄文(羽状)	黒褐色	No.283	
79	縄文土器	胴部	L無節縄文(羽状)	黄褐色	No.287	
80	縄文土器	胴部	R無節縄文	黄褐色	No.291	
81	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄褐色	No.82	
82	縄文土器	胴部	L無節縄文	黒褐色	No.277	
83	縄文土器	胴部	合燃	明黄褐色	No.214	
84	縄文土器	胴部	付加条縄文	黄褐色	覆土	
85	縄文土器	胴部	付加条縄文	黒褐色	No.319	
86	縄文土器	胴部	付加条縄文	褐色	覆土	
87	縄文土器	胴部	縄文(結節)	黄褐色	覆土	
88	縄文土器	胴部?	縄文→単沈線	黄褐色	No.100	
89	縄文土器	口縁部	縄文→単沈線	黒褐色	覆土	
90	縄文土器	底部	RL単節縄文	橙褐色	No.28	
91	縄文土器	底部	RL単節縄文	赤褐色	No.131	
92	縄文土器	底部	RL単節縄文(0段多条)	赤褐色	No.54	
93	縄文土器	底部	LR単節縄文	褐色	No.5	
94	縄文土器	底部	L無節縄文	黄褐色	No.379	
95	縄文土器	底部	無節縄文	灰黄褐色	覆土	
96	縄文土器	底部	付加条縄文?	褐色	覆土	

97	縄文土器	胴部	条線→刺突	褐色	覆土	東海系？
98	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー
99	石器	—	—	—	No.173	打製石斧
100	石器	—	—	—	No.81	石核
101	石器	—	—	—	No.295	磨石・敲石

第31号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	RL単節縄文・結節	黄褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙褐色	覆土	

第14号住居跡（第40～45図・図版14・15-1・91～93）

B1区の東側に位置している。南東側には第25・33号住居跡が、南西側には第34～37号住居跡が、東側には第38号住居跡が位置する。本住居跡は、床面付近まで強い削平を受けていて、第1号溝跡により切られているため、遺存状況はあまり良好とは言えない。また、重複する第30・32号住居跡、第144号土壌を切っている。

平面形は、残存する掘りこみの形態から長台形を呈すると思われる。遺構の規模は、北西方向が5.2m、南東方向が5mである。壁は、若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは5cm程である。覆土が薄く床面がすぐ検出された。床面は、ローム土を主体とした貼り床でほぼ平坦であるが、中央付近は若干窪んでいる。比較的良く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には、南壁で一部途切れるが、壁に沿って小ピットを伴う幅20cm、深さ10cm程の壁溝が巡っている。また、南側部分のみ内側に幅15cm、深さが10cm程の壁溝が巡っている。炉跡は、検出されなかったが、西壁際に土壇状の掘り込みが検出された。形状は、45cm×29cm、深さが20cmの不整形でピットを伴っている。

出土遺物は、住居内南側の床面付近からの覆土にかけて、土器片と自然石が多く出土した。土器片は、縄文時代前期中葉の有尾式が主体である。また、縄文時代前期前葉の関山式や前期中葉の黒浜式・釈迦堂Z3式（第44図62・63・第45図64a・64b）なども少量だが出土している。土器以外には、北東の壁際から、珧状耳飾の破片が出土している。スクレイパー1点、凹石1点、打製石斧1点や剝片などが出土している。また、覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

遺構の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第30号住居跡 (第40・41・46・47図・図版14-2・15-2・16-1・94)

B1区の東側に位置している。本住居跡は、床面付近まで強い削平を受けている。また、第14号住居跡と第1号溝跡に切られ、第32号住居跡を切っているなど重複がはげしいため、遺存状況はあまり良好とは言えない。

平面形は、長方形というよりは長台形を呈しているようである。遺構の規模は、北西方向が6.1m、南東方向が6.7mである。壁は、垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは15cmである。床面は、ローム土を主体とした貼り床で、比較的良く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には壁に沿って小ピットを伴う、幅20～25cm、深さ30cm程の壁溝が巡っている。炉跡は、検出されなかった。

出土遺物は、住居内南壁に寄った床面付近から縄文土器片と自然石が多く出土した。土器片は、縄文時代前期中葉の有尾式を主体に出土している。また、釈迦堂Z3式(第47図17)も1片だけが出土している。土器以外には、磨石が転用された凹石1点、石皿1点が出土している。石皿は、使用され、凹んだ真ん中に穴が開いており、住居跡の中央部北壁際に寄った位置に床面に置かれた状態で出土している。

本住居跡の帰属時期は出土遺物から、縄文時代前期中葉期と考えられる。

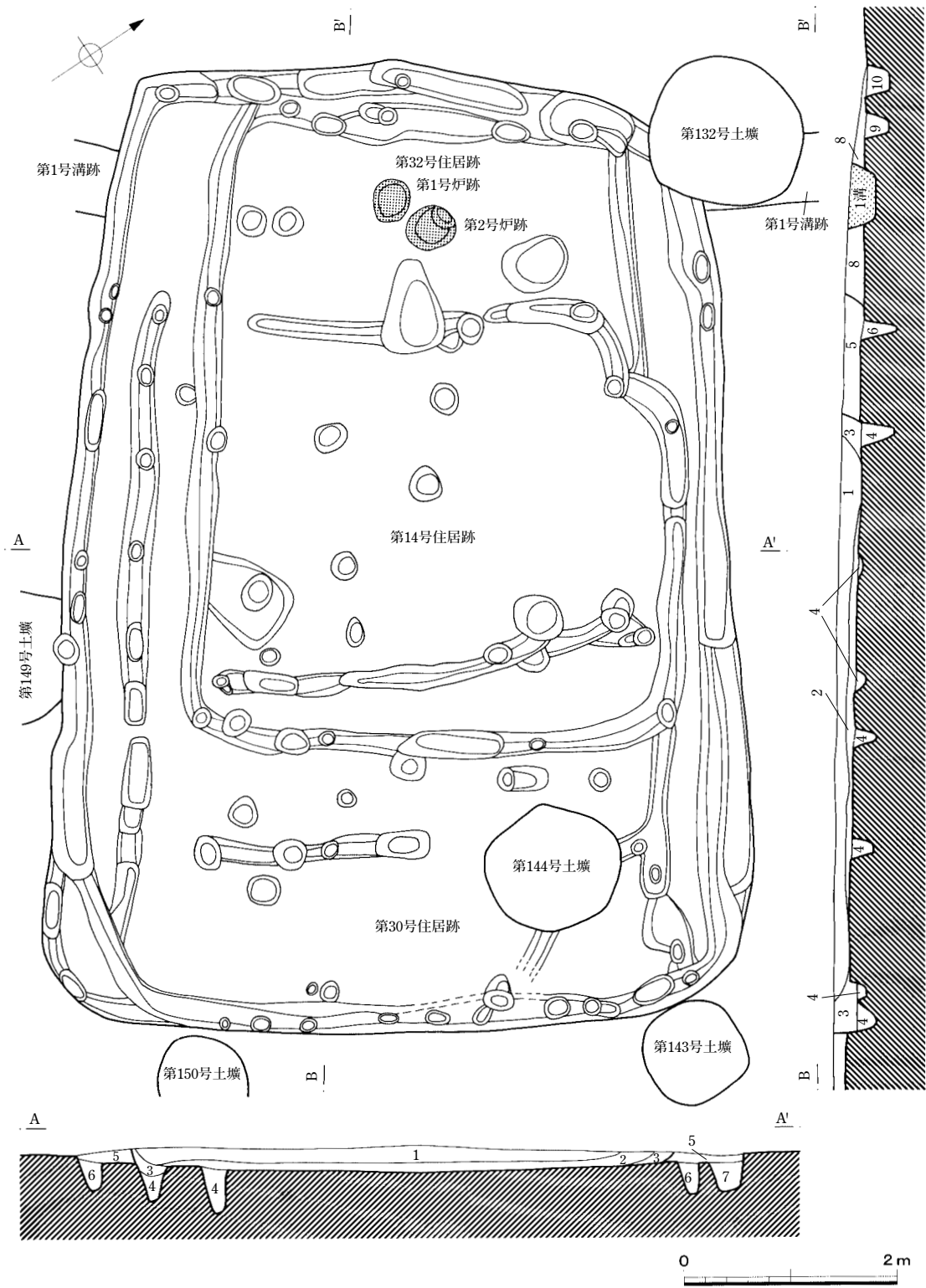
第32号住居跡 (第40・41・48・49図・図版14-2・16-2・17・95)

B1区の中央より東側に位置している。第14、30号住居跡、第1号溝跡等とかなり重複がはげしいため、住居跡の全容は不明である。

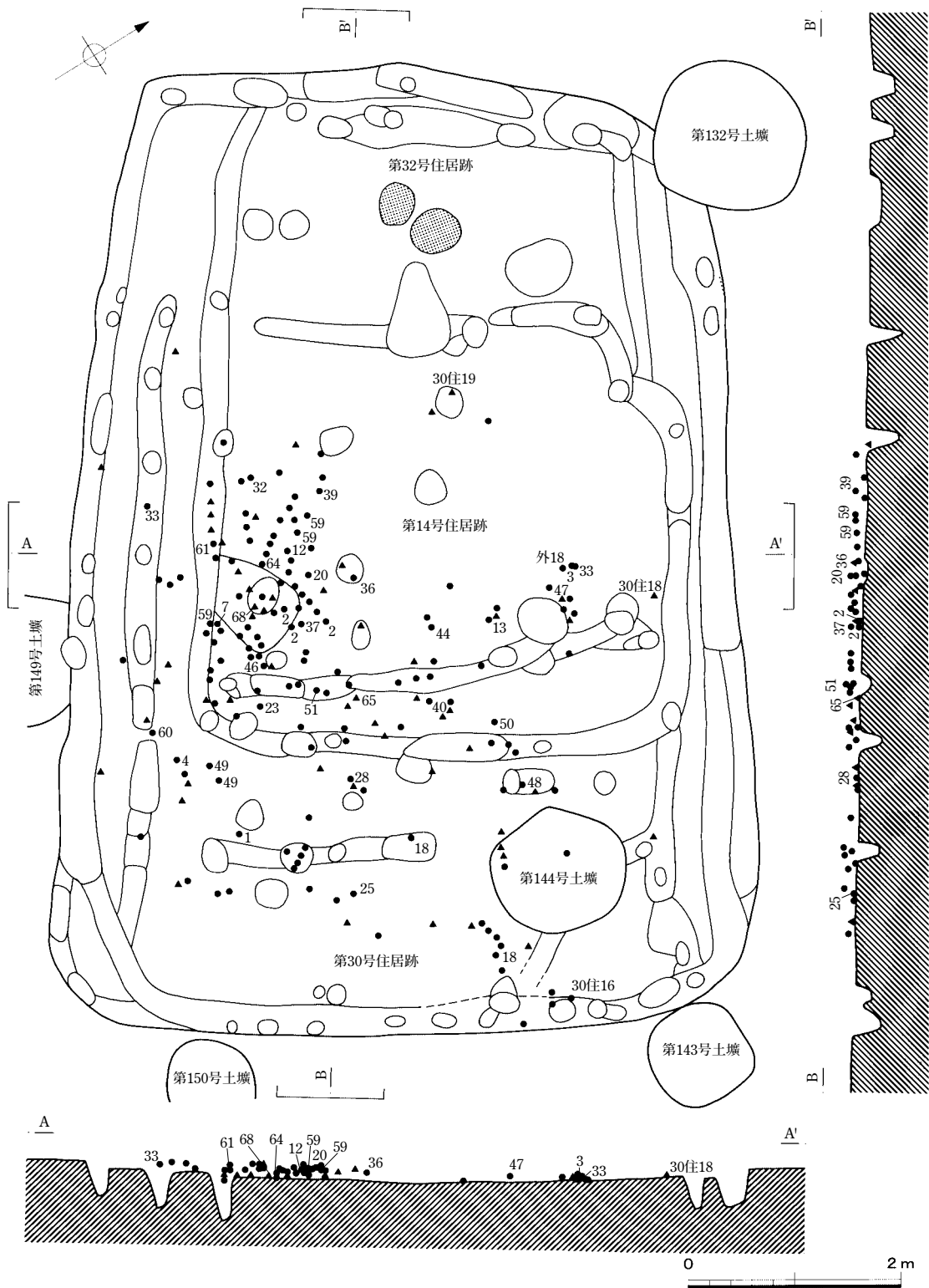
平面形は、長方形というよりは長台形を呈する。遺構の規模は、北西方向が5.4m、南東方向が6.8mである。確認面からの深さは5cmである。床面は、ローム土を主体とした貼り床で、全体的に堅く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には壁に沿って小ピットを伴う、幅25cm、深さ30cm程の壁溝が巡っている。

第14・30・32号住居跡土層説明

- | | |
|------------|--|
| 第1層 暗褐色土層 | YP粒子を均一に、YP粒(φ2mm)・ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第2層 暗灰褐色土層 | ローム粒を均一に、YP粒(φ2mm)・ローム小ブロック(φ3mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第3層 暗茶褐色土層 | ローム粒を多量に、YP粒(φ2mm)・YP粒子・ローム小ブロック(φ5mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第4層 黒褐色土層 | ローム粒を多量に、YP粒(φ2mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第5層 暗茶褐色土層 | YP粒子をかなり多量に、ローム粒をやや多量に、YP粒(φ2mm)を均一に、ロームブロック(φ1.5cm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第6層 暗茶褐色土層 | YP粒子をかなり多量に、ローム粒をやや多量に、YP粒(φ2mm)を均一に、ロームブロック(φ1.5cm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。 |



第40图 第14·30·32号住居迹



第41图 第14·30·32号住居跡

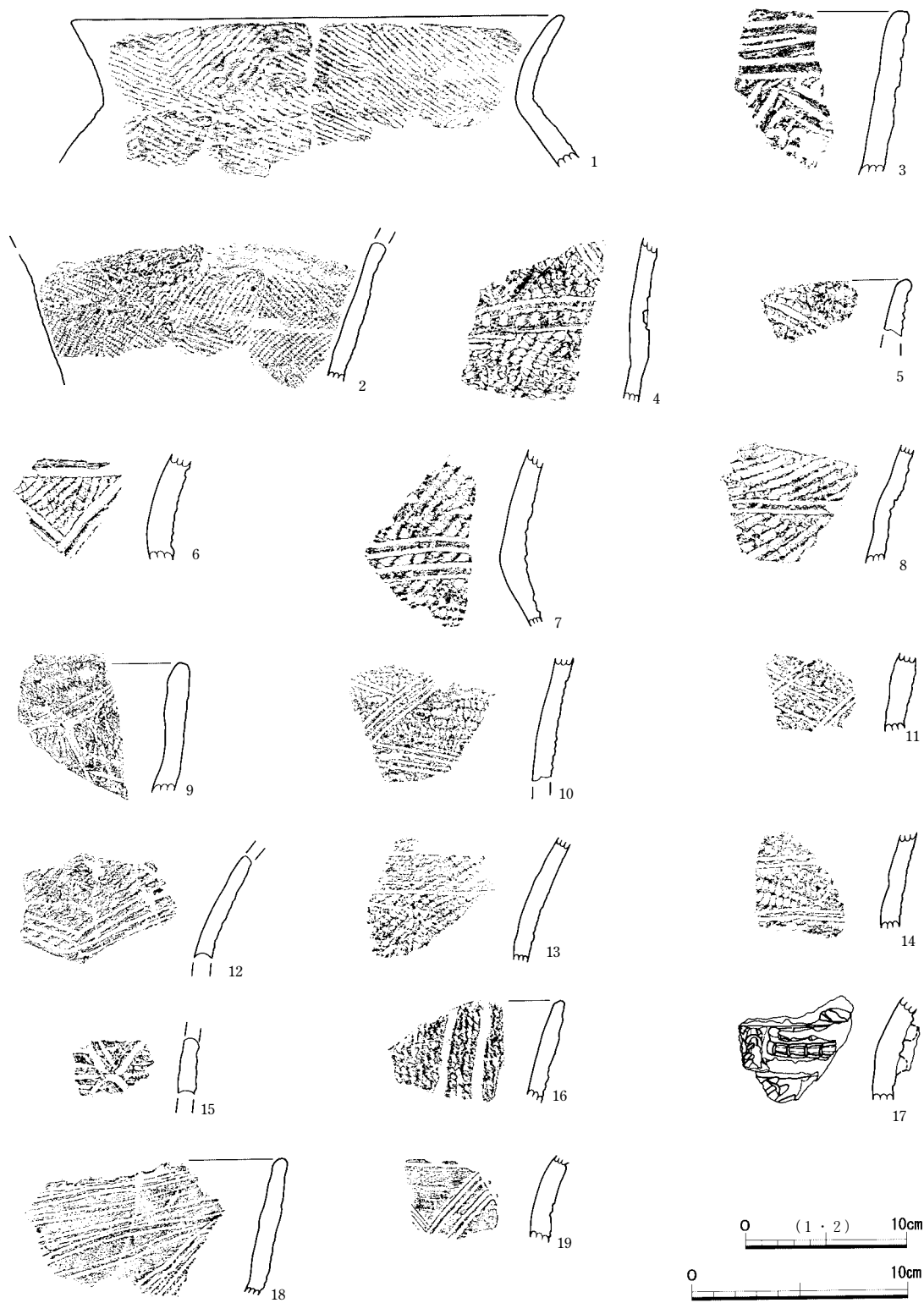
炉跡は、住居中央の北壁よりに、2ヵ所検出された。いずれも、第1号溝跡に切られているため遺存状態は良くない。炉体土器を伴う。第1号炉跡は、平面形は、30cm×20cmの楕円形である。深さは、15cm程度である。底面は、丸みを持つ。炉壁は、傾斜しながら直線的に立ち上がり、ほとんど焼けてなかった。第2号炉跡は、平面形は、30cm×20cmの楕円形である。深さは、10cm程度である。炉壁は、傾斜しながら直線的に立ち上がる。壁面は、ほとんど焼けてなかった。底面は、丸みを持つ。第1号炉跡と第2号炉跡は、いずれも掘り込みは明確ではなく、炉壁はほとんど焼けてなかったことから、貼り床構築時に埋甕炉として設置されたものと考えられる。

出土遺物は、覆土中から縄文時代前期前葉の関山式の土器片が1点と縄文時代前期中葉の黒浜式の土器片が2点と有尾式の土器片が出土している。第1号炉跡の炉体土器は、口縁部と胴部下半身が欠損した深鉢が出土している。縄文施文後に、半截竹官による沈線を施している。第2号炉跡の炉体土器は、口縁部と胴部大半が欠損した深鉢が出土している。縄文のみ施している。土器以外には、凹石が1点、軽石製品1点や石皿が1点出土している。使用され真ん中に穴が開いた石皿が、住居内の東壁際に寄った位置に床面に置かれた状態で、出土していることから、本住居跡で使用されたと考えられる。

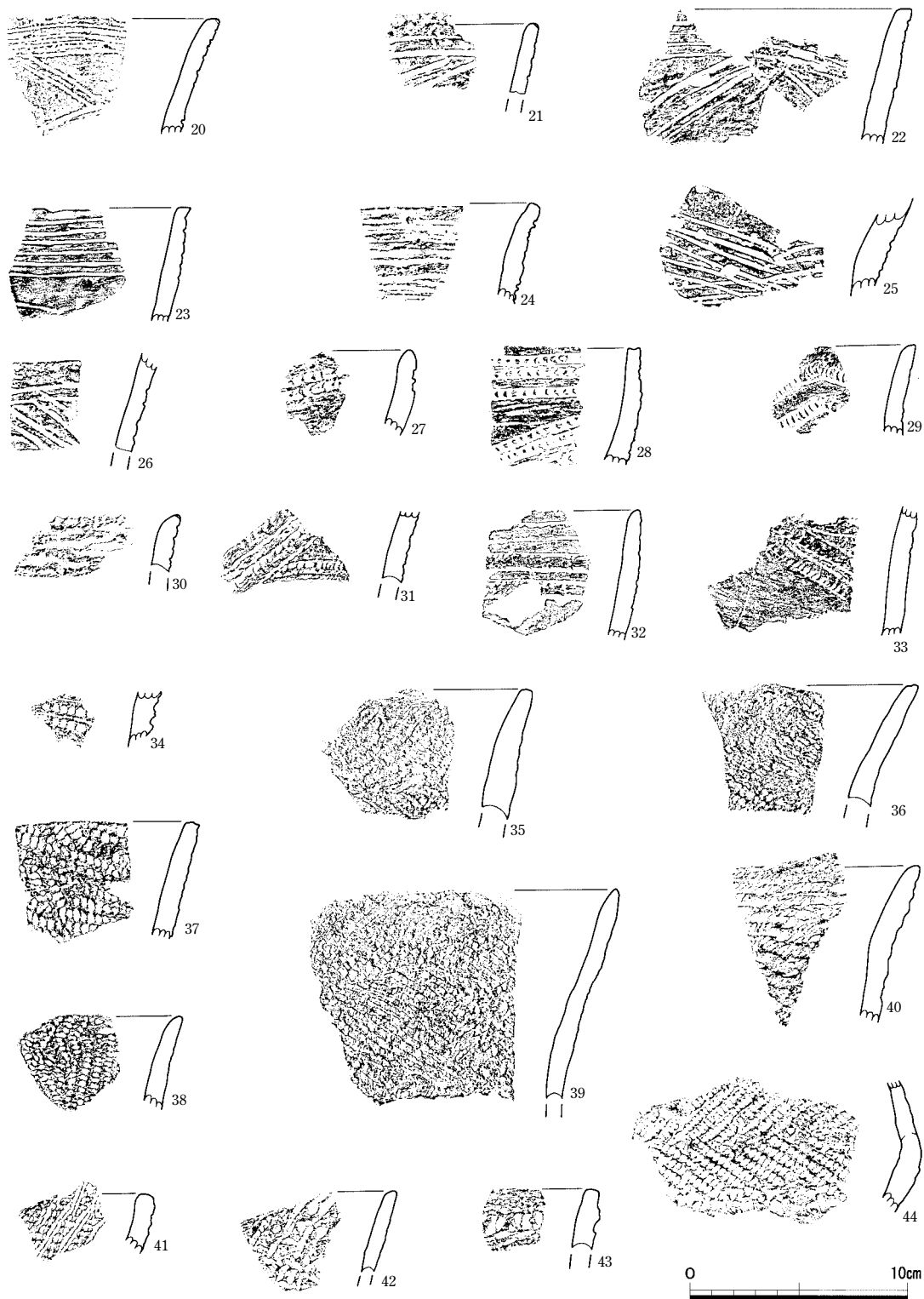
本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



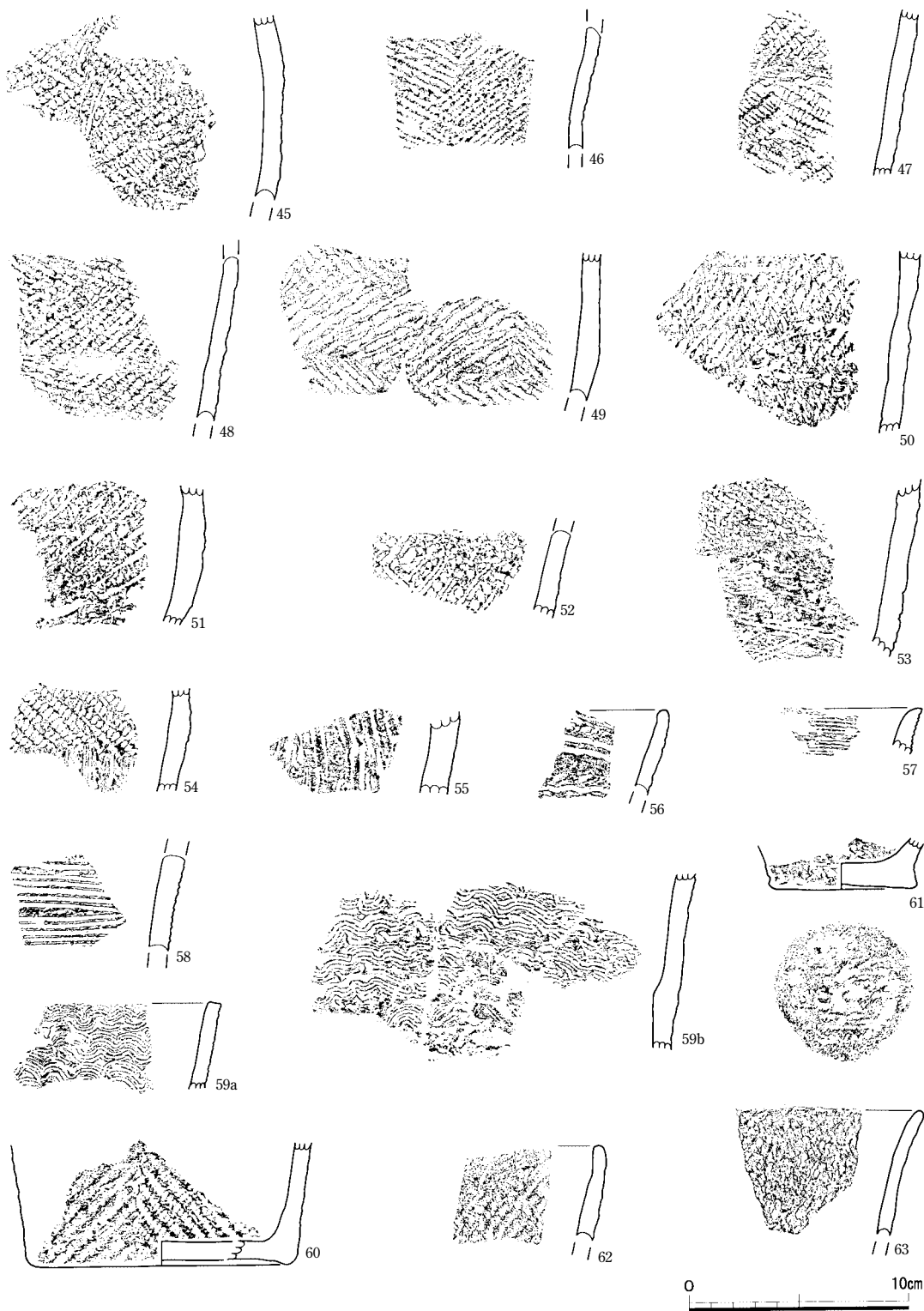
第14号住居跡確認状況



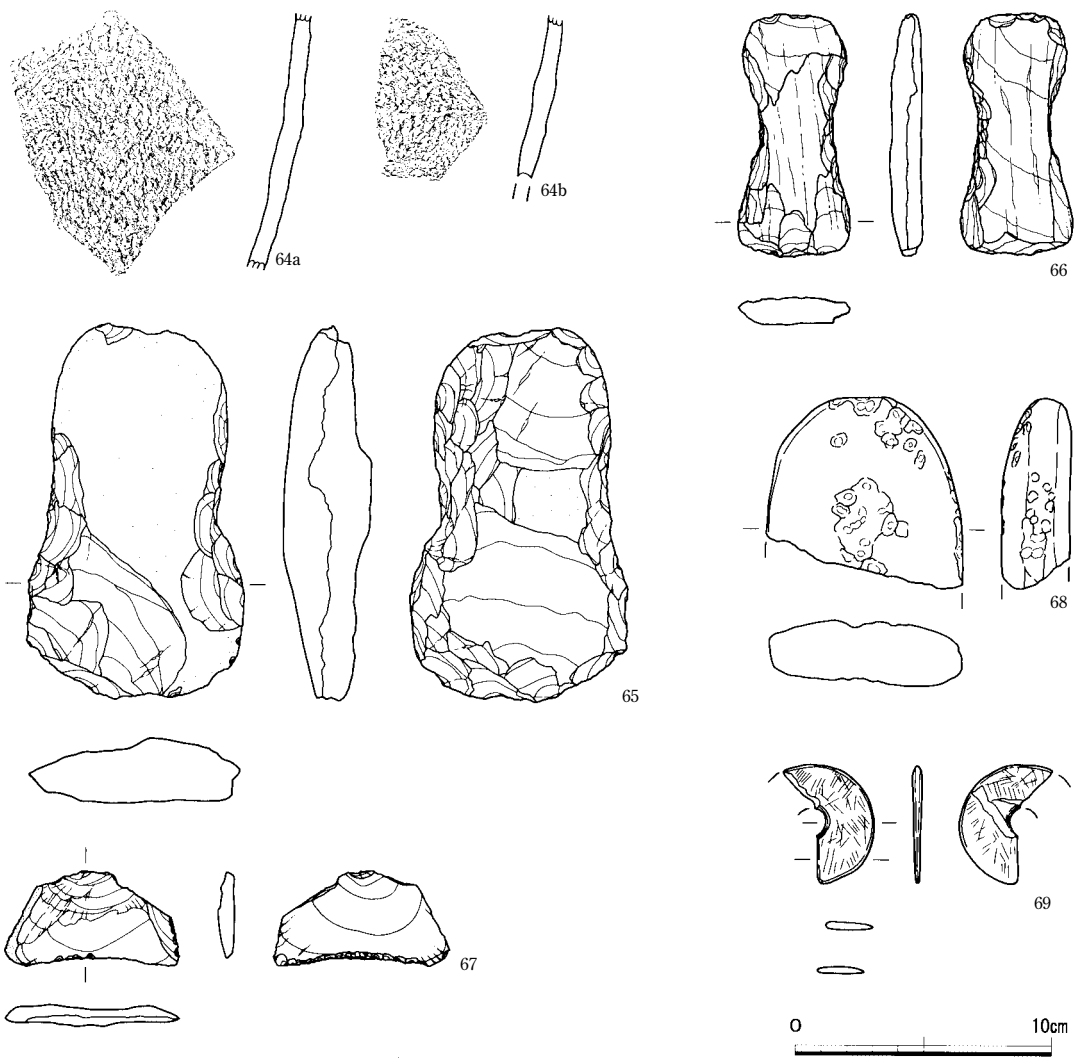
第42图 第14号住居跡出土遺物 (1)



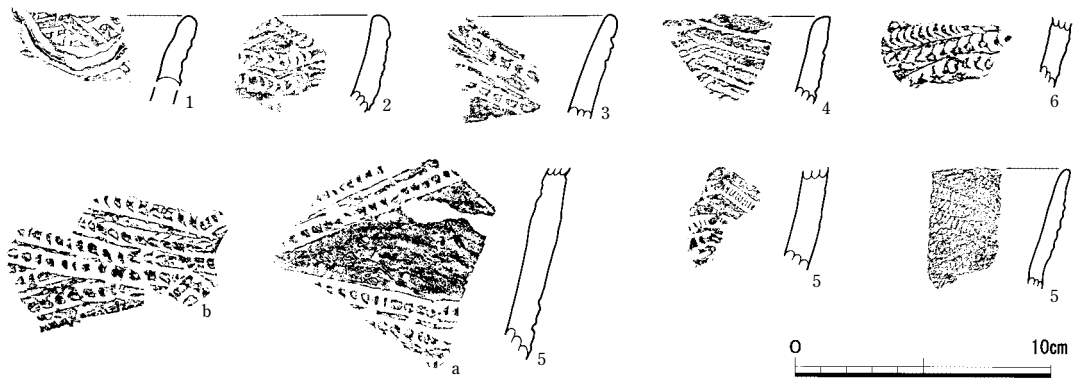
第43图 第14号住居跡出土遺物 (2)



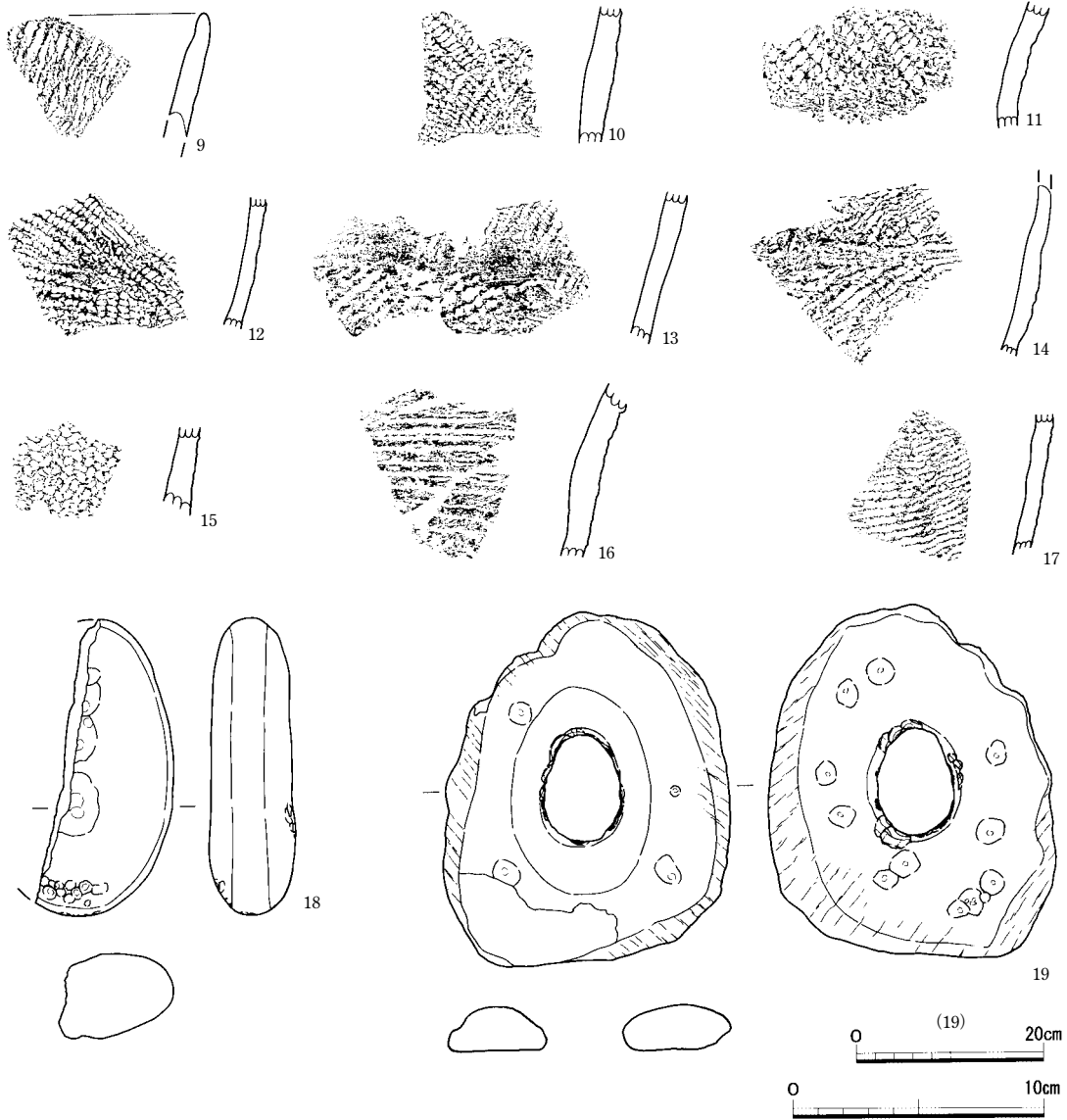
第44图 第14号住居跡出土遺物 (3)



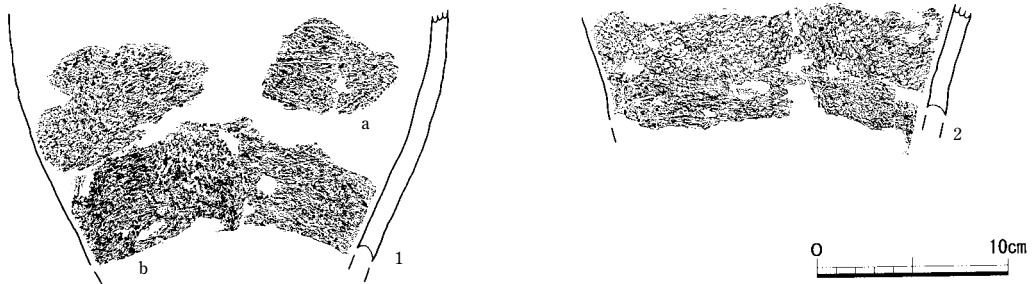
第45图 第14号住居跡出土遺物(4)



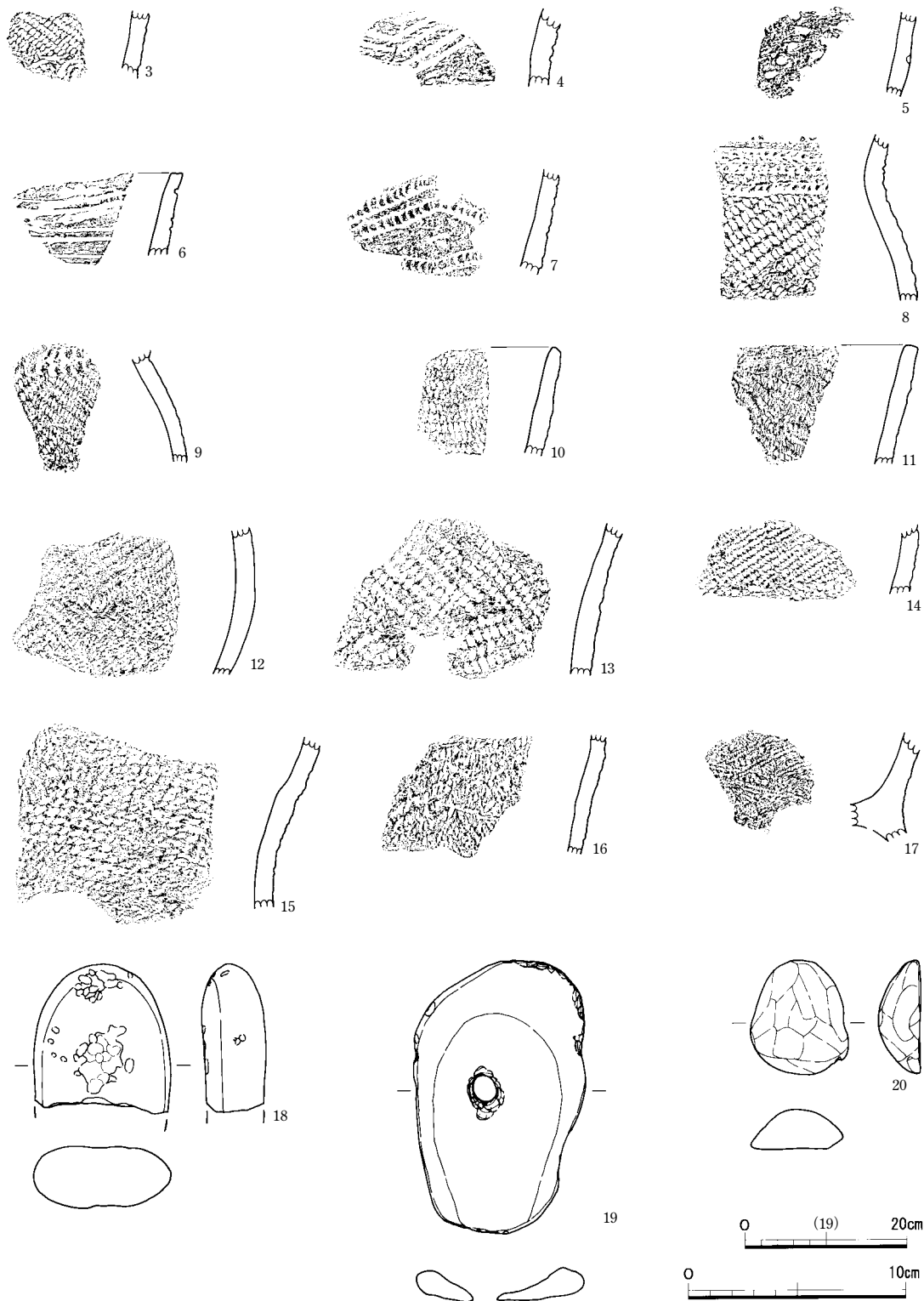
第46图 第30号住居跡出土遺物(1)



第47图 第30号住居跡出土遺物（2）



第48图 第32号住居跡出土遺物（1）



第49图 第32号住居跡出土遺物 (2)

第14号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	R・L無節縄文（羽状）	明褐色	No.122	
2	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	No.38・43・45	
3	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	黄橙褐色	No.68	
4	縄文土器	口縁部	LR単節縄文→半截竹管状工具による沈線→刺突	黄橙褐色	No.101	
5	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
7	縄文土器	口縁部	LR単節縄文（0段多条）→半截竹管状工具による沈線	橙褐色	No.59	
8	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	覆土	
9	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
10	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
11	縄文土器	口縁部	単節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
12	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	黄褐色	No.29	
13	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	No.75	
14	縄文土器	口縁部	LR単節縄文→半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	覆土	
15	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	橙褐色	覆土	
16	縄文土器	口縁部	L無節縄文→沈線	橙褐色	覆土	
17	縄文土器	口縁部～胴部	隆帯→半截竹管状工具による押引	暗灰黄褐色	覆土	
18	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線、口唇部：キザミ	橙褐色	No.114・137	
19	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	黒褐色	覆土	
20	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線、口唇部：キザミ	明赤褐色	No.33	
21	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線、口唇部：キザミ	橙褐色	覆土	
22	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
23	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	橙褐色	No.96	
24	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	暗褐色	覆土	
25	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	明赤褐色	No.131	
26	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
27	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	灰黄褐色	覆土	

28	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	No.122	
29	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	橙褐色	覆土	
30	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引、口唇部：キザミ	橙褐色	覆土	
31	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
32	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	No.16	
33	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	No.26・68	
34	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線、列点状刺突文	褐色	覆土	
35	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文（羽状・0段多条）	黄褐色	覆土	
36	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文（羽状・0段多条）	明褐色	No.27	
37	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	暗褐色	No.44	
38	縄文土器	口縁部	LR単節縄文	赤褐色	覆土	
39	縄文土器	口縁部	R・L無節縄文（羽状）	褐色	No.3	
40	縄文土器	口縁部	L無節縄文	黒褐色	No.110	
41	縄文土器	口縁部	付加条縄文	褐色	覆土	
42	縄文土器	口縁部	付加条縄文	明褐色	覆土	
43	縄文土器	口縁部	ループ文	褐色	覆土	
44	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	明褐色	No.78	
45	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	暗灰褐色	覆土	
46	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	No.56	
47	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状・0段多条）	褐色	No.70	
48	縄文土器	胴部	LR単節縄文・L無節縄文？（羽状）	赤褐色	No.127	
49	縄文土器	胴部	R・L無節縄文（羽状）	褐色	No.99・100	
50	縄文土器	胴部	L無節縄文	褐色	No.105	
51	縄文土器	胴部	合撚	褐色	No.88	
52	縄文土器	胴部	合撚	黄褐色	覆土	
53	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による沈線→RL単節縄文	褐色	覆土	
54	縄文土器	胴部	RL単節縄文→擦痕	灰黄褐色	覆土	
55	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	覆土	
56	縄文土器	口縁部	角棒状工具による波状沈線	褐色	覆土	
57	縄文土器	口縁部	条線	明赤褐色	覆土	
58	縄文土器	胴部	条線	灰黄褐色	覆土	
59	縄文土器	口縁部～ 胴部	波状条線	褐色	No.7・10・60	

60	縄文土器	底部	RL・LR単節縄文（羽状）	黄橙褐色	No.67	
61	縄文土器	底部	R・L無節縄文、底部：L無節縄文	橙褐色	No.20	
62	縄文土器	口縁部	L無節縄文	褐色	覆土	無繊維・雲母を多く含む
63	縄文土器	口縁部	L無節縄文	暗褐色	覆土	無繊維・雲母を多く含む
64	縄文土器	胴部	L無節縄文	赤褐色	No.40	無繊維・雲母を多く含む
65	石器	—	—	—	S26	打製石斧
66	石器	—	—	—	覆土	打製石斧？
67	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー
68	石器	—	—	—	S12	凹石・磨石
69	石器	—	—	—	覆土	塊状耳飾

第30号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	黄橙褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	明褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	赤褐色	壁溝	
4	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	橙褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	壁溝	a・b 同一個体
6	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	壁溝	
7	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	灰褐色	覆土	
8	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文（羽状）（0段多条）	灰黄褐色	覆土	
9	縄文土器	口縁部	L無節縄文	褐色	覆土	
10	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）（0段多条）	橙褐色	覆土	
11	縄文土器	胴部	RL単節縄文	橙褐色	覆土	
12	縄文土器	胴部	RL単節縄文	赤褐色	覆土	
13	縄文土器	胴部	L無節縄文	褐色	覆土	
14	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄褐色	覆土	
15	縄文土器	胴部	組紐	黄橙褐色	覆土	
16	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による沈線	橙褐色	No. 2	
17	縄文土器	胴部	L無節縄文	褐色	覆土	無繊維・雲母を多く含む

18	石器	—	—	—	S-1	凹石・磨石
19	石器	—	—	—	S-2	石皿

第32号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	第1号炉跡	
2	縄文土器	胴部	RL単節縄文	明赤褐色	第2号炉跡	
3	縄文土器	胴部	RL単節縄文→コンパス文	浅黄褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	橙褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	刺突	明褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	明赤褐色	覆土	
7	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
8	縄文土器	口縁部～ 胴部	RL・LR単節縄文（羽状）→半截竹管状工具による 押引	暗灰褐色	覆土	
9	縄文土器	口縁部～ 胴部	RL・LR単節縄文（0段多条・羽状）→半截竹管状 工具による押引	黄褐色	覆土	
10	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	褐色	覆土	
11	縄文土器	口縁部	R無節縄文	黄橙褐色	覆土	
12	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状・0段多条）	黄橙褐色	覆土	
13	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	明褐色	覆土	
14	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状・結束）	褐色	覆土	
15	縄文土器	胴部	LR単節縄文	褐色	覆土	
16	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄橙褐色	覆土	
17	縄文土器	胴部	合燃	橙褐色	覆土	
18	石器	—	—	—	覆土	凹石・磨石
19	石器	—	—	—	覆土	石皿
20	石器	—	—	—	覆土	軽石製品

第15号住居跡（第50～53図・図版18・19・96）

B1区の東側に位置する。西壁が一部分攪乱をうけて削られている。北西側に第16・17号住居跡、西側に第9・23・24号住居跡、北側に第13・29・31号住居跡が近接している。重複する第21号住居跡を切っている。住居跡の西側半分が調査区外であるため、全容は不明である。

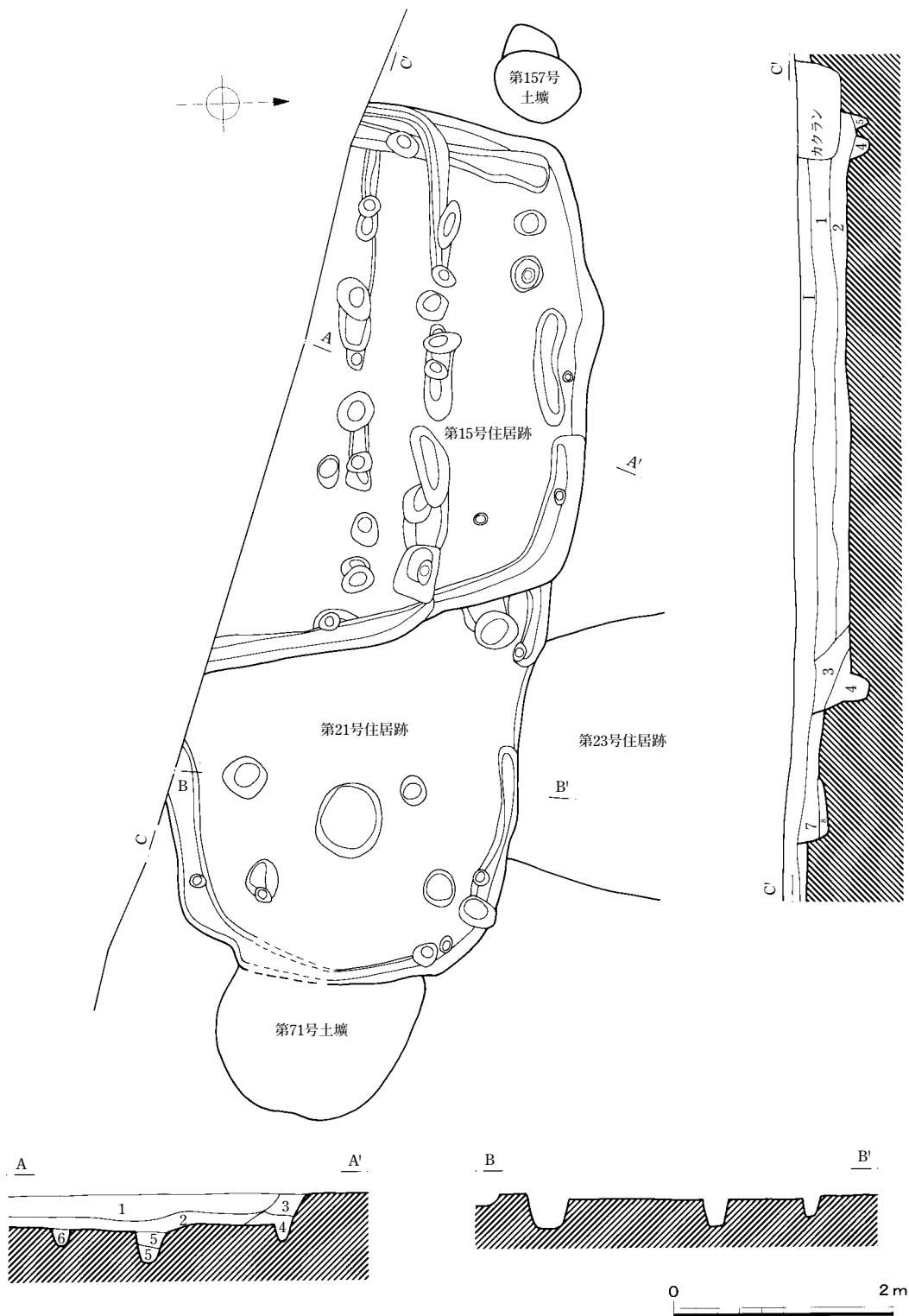
平面形は、コーナー部にやや強い丸みを持つ方形を基調とする台形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が6.2m、南北方向が4.2mである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmである。床面はローム土を主体とした貼り床で、全体的に堅く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には、壁に沿って小ピットを伴う幅20cm、深さ30cm程の壁溝が巡っている。また、内側にも幅20cm、深さ40cm程と、最内側には幅15cm、深さ15cm程の壁溝が幾重にも巡っているため、住居の拡張あるいは建て替えが行われていたと考えられる。炉跡は、検出されなかった。

出土遺物は、床面から覆土中にかけて縄文時代前期前葉の黒浜式の土器片と前期中葉に比定される土器片と、多量の自然石が出土している。土器片以外には、スクレイパー2点、打製石斧1点、磨石1点、磨石・敲石1点、凹石・磨石1点、剥片などが出土している。また、図示できなかったが石皿が、西壁よりの、最内側に巡る壁溝の内側に床面上に設置されて、二つに割れた状態で磨石とともに出土していることから、本住居跡で恒常的に使用されていたものと考えられる。敲石、凹石、磨石や覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

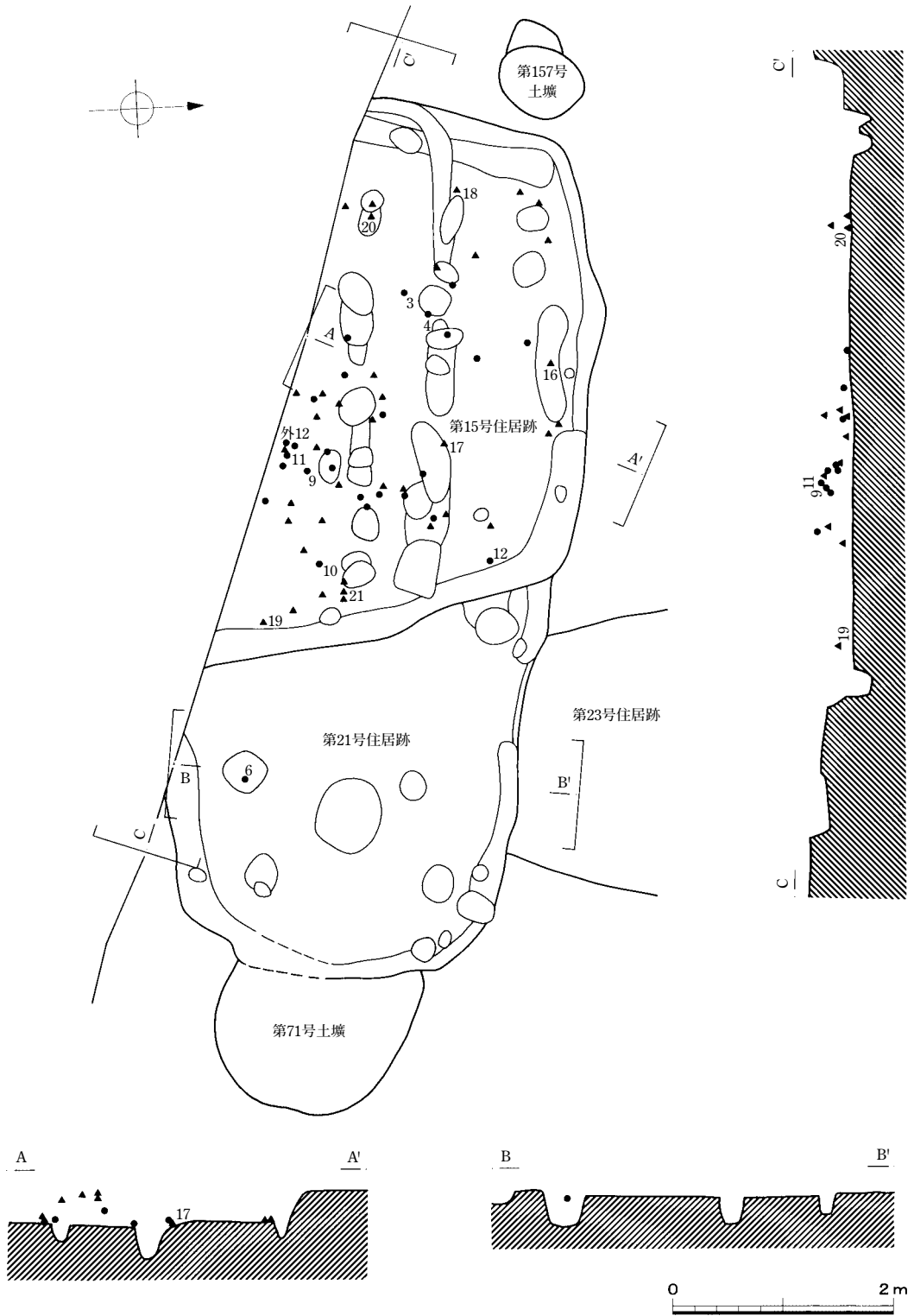
本住居跡の帰属時期は出土遺物から、縄文時代前期中葉期と考えられる。

第15・21号住居跡土層説明

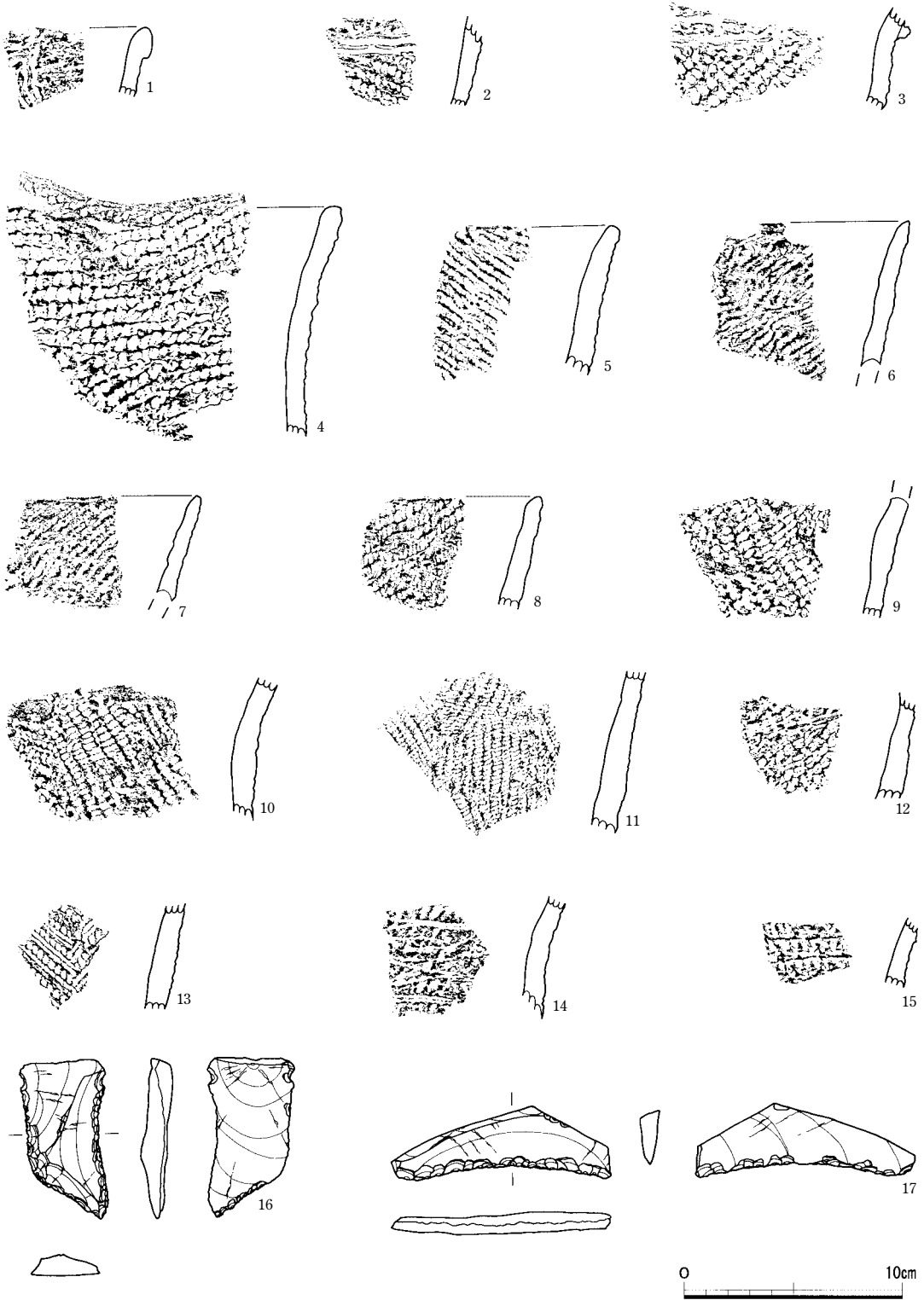
- | | | |
|------|--------|--|
| 第I層 | 暗灰褐色土層 | 浅間山系A軽石を多量に含む。褐色土粒子、マンガン粒子を少量含む。しまり、粘性はともに弱い。〈現耕作土〉 |
| 第II層 | 暗茶褐色土層 | 浅間山系A軽石を少量含む。灰褐色土粒子、マンガン粒子を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。 |
| 第1層 | 暗茶褐色土層 | ローム粒を均一に、褐色ブロック（ ϕ 1cm）・褐色小ブロック（ ϕ 3mm）を少量、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第2層 | 暗褐色土層 | YP粒子を均一に、橙色粒子を少量、ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第3層 | 明褐色土層 | 褐色粒子を均一に、橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第4層 | 明褐色土層 | ローム粒をかなり多量に、ローム小ブロック（ ϕ 3mm）を多量に含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第5層 | 暗茶褐色土層 | ローム粒・YP粒子を均一に、ローム小ブロック（ ϕ 3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第6層 | 暗茶褐色土層 | ローム小ブロック（ ϕ 5mm）を均一に、ローム粒を少量、YP粒（ ϕ 2mm）・炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第7層 | 暗褐色土層 | 黒褐色粒子を均一に、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。 |
| 第8層 | 暗茶褐色土層 | 橙色粒子を均一に、YP粒（ ϕ 2mm）を少量、ローム粒・炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。 |



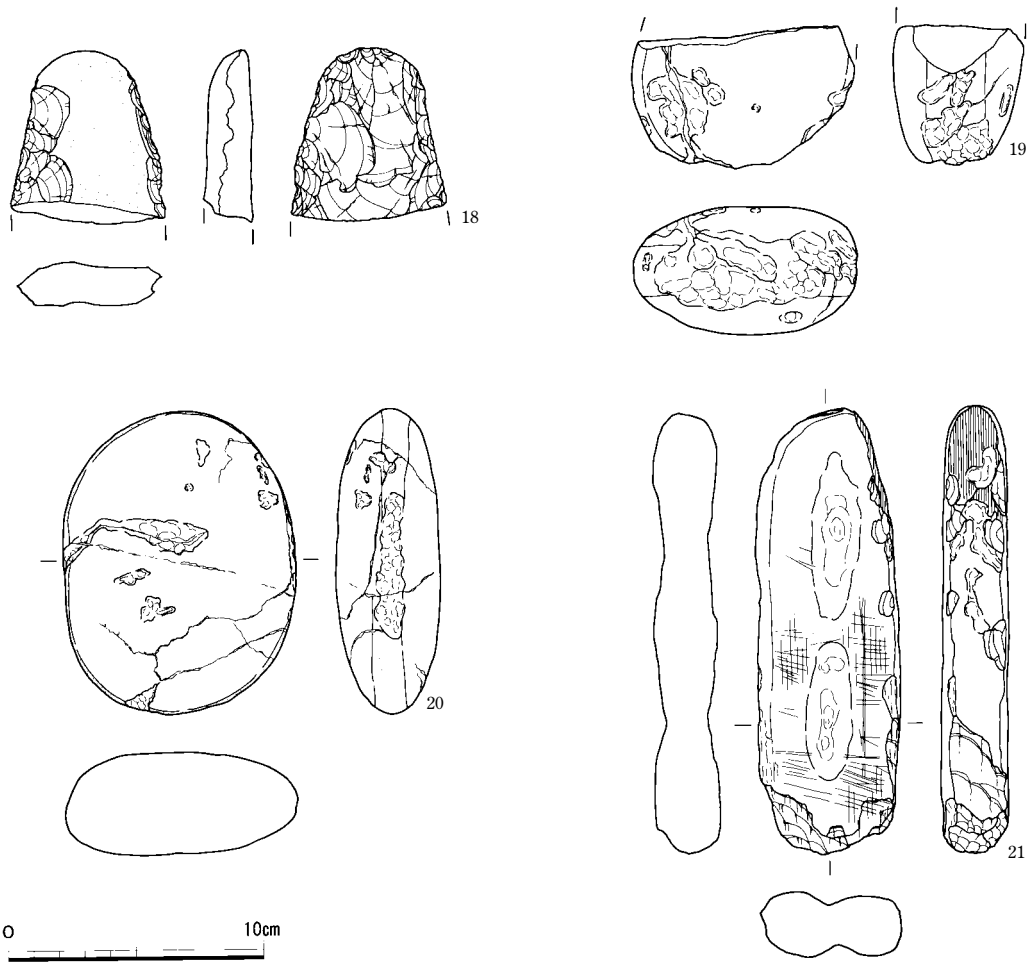
第50図 第15・第21号住居跡



第51図 第15・第21号住居跡



第52图 第15号住居跡出土遺物（1）



第53図 第15号住居跡出土遺物（2）

第15号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	灰褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁～胴部	LR単節縄文→半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁～胴部	LR単節縄文→隆帯	褐色	No.54	
4	縄文土器	口縁～胴部	LR単節縄文、口唇部に及ぶ	黄褐色	No.53	

5	縄文土器	口縁部～ 胴部	R無節縄文	褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部～ 胴部	L無節縄文	褐色	覆土	
7	縄文土器	口縁部	L無節縄文	明褐色	覆土	
8	縄文土器	口縁部	L無節縄文	褐色	覆土	
9	縄文土器	胴部	RL単節縄文	明赤褐色	No.20	
10	縄文土器	胴部	RL単節縄文	赤褐色	No. 4	
11	縄文土器	胴部	RL単節縄文 (0段多条)	褐色	No.14	
12	縄文土器	胴部	LRL複節縄文	黄褐色	No.34	
13	縄文土器	胴部	合燃	褐色	覆土	
14	縄文土器	胴部	付加条縄文	灰黄褐色	覆土	
15	縄文土器	胴部	ループ文	黄橙褐色	覆土	
16	石器	—	—	—	No.38	スクレイパー
17	石器	—	—	—	No.33	スクレイパー
18	石器	—	—	—	No.61	打製石斧
19	石器	—	—	—	No. 1	磨石・敲石
20	石器	—	—	—	No.62	磨石・敲石
21	石器	—	—	—	No. 7	凹石・磨石

第21号住居跡 (第50・51・54図・図版26-1・97-1)

B1区東側に位置している。本住居跡は、床面付近まで削平を受けて、さらに重複する第15号住居跡、第71号土壌に切られているため、遺存状態は良好とは言えない。住居跡の西側半分が調査区外であるため、全容は不明である。

平面形態は、残存する掘りこみの形態から、方形基調とした台形を呈すると思われる。遺構の規模は、南東方向が3.15m、北西方向が3.05mである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは約20cm程である。床面は、ほぼ平坦でローム土を主体とした貼り床である。中央は堅く締まって硬質であるが、壁に近づくにつれて軟質である。一部途切れるが、住居内には壁に沿って小ピットを伴う、幅15cm、深さが15cm程の壁溝が巡っている。炉跡は、検出されなかった。

出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片と、自然石が出土している。覆土から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



第54図 第21号住居跡出土遺物

第21号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	明褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による押引	明褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文(羽状)	暗褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	LR単節縄文	黄褐色	覆土	
6	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状)	暗褐色	No. 1	
7	縄文土器	胴部	RL単節縄文	暗褐色	覆土	

第16号住居跡 (第55～64図・図版20～23-1・97-2～102)

B 1 区の北西側に位置している。南側には、第 9・19・20・24号住居跡がある。東側の調査区中央あたりには、第10～第13号住居跡などがある。本住居跡は、一部攪乱や床面付近まで強い削平を受けている。重複する第17号住居跡、第103・135・154号土壌を切っている。また、第1号溝跡に切られているため、あまり遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、残存する掘りこみの形態からコーナー部の丸みがやや強い長方形を呈するように思われる。遺構の規模は、南東方向が4.3m、北西方向が7.3mである。壁は、西壁、南壁、北壁はやや傾斜して立ち上がるが、東壁は、ほぼ垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程である。床面は、ローム土を主体とした貼り床である。ほぼ平坦であるが、中央から北壁と東壁にむかっては、若干起伏をもち内側の壁溝あたりから窪んでいる。また、堅く締まって

全体的に硬質であったが、住居の中央付近から内側に巡る壁溝あたりまでは、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には、壁に沿って小ピットを伴う幅20cm、深さが20～30cm程の壁溝が東壁から北壁、西壁に途切れながら巡っている。また、最内側に幅20～30cm、深さ50cm程の壁溝が、西壁側と南壁に沿って途切れながらも幾重にも巡っている状態から、住居の拡張や建て替えなどが行われていたのではないと思われる。炉跡は、検出されなかった。

出土遺物は、住居内の中央の床面付近から西壁、北壁にかけての覆土中や壁溝内から、多量の土器片と自然石が多く出土している。多量の土器片は、原形を留めているものはほとんどない。土器は、縄文時代前期中葉の有尾式（第57図2・3）でも、半截竹官による押引や刺突、縄文施文後に列点状刺突をもつものなどが見られる。縄文時代前期中葉の黒浜式（第57図1）では、縄文施文後に半截竹管による押引をされたものも見られる。また、前期前葉から中葉に比定できる土器片が出土している。縄文時代前期前葉の関山式（第59図12～15）と思われる土器片が少量だが出土している。土器片以外には、石匙2点、スクレイパー1点、打製石斧1点、磨石・敲石1点、凹石、凹石・磨石1点、剝片などの石器が出土している。また、土器製作時に内面の研磨具として使用された紡錘状擦石（第64図93・94）が2点出土している。磨石・敲石、凹石、凹石・磨石などの石器や、覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものが多量に見られる。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期の中葉期と考えられる。

第17号住居跡（第55～64図・図版20-1・23-2・24-1・97-2～102）

B1区の北西側に位置している。本住居跡は、床面付近まで強い削平を受けている。さらに、重複する第16号住居跡と第1号溝跡、第103・135号土壙などに、住居跡の大半が切られている。また、第19号住居跡、第165号土壙を切っている。重複が多いため、全容は不明である。

平面形は、残存する掘りこみの形態から方形を基調とする台形または長方形を呈すると思われる。遺構の規模は、南東方向が2.5m、北西方向が6mである。壁は、傾斜を持って立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。床面はローム土を主体とした貼り床で、住居の中央あたりは堅く締まって硬質であったが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には、壁溝と炉跡は、検出されなかった。

出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式でも古い様相をもつ土器片が主体である。また前期前葉の関山式、前期後半の諸磯b式と諸磯c式の土器片が少量であるが出土している。土器以外には、石鏃1点と剝片などの石器や自然石が多量に出土している。覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

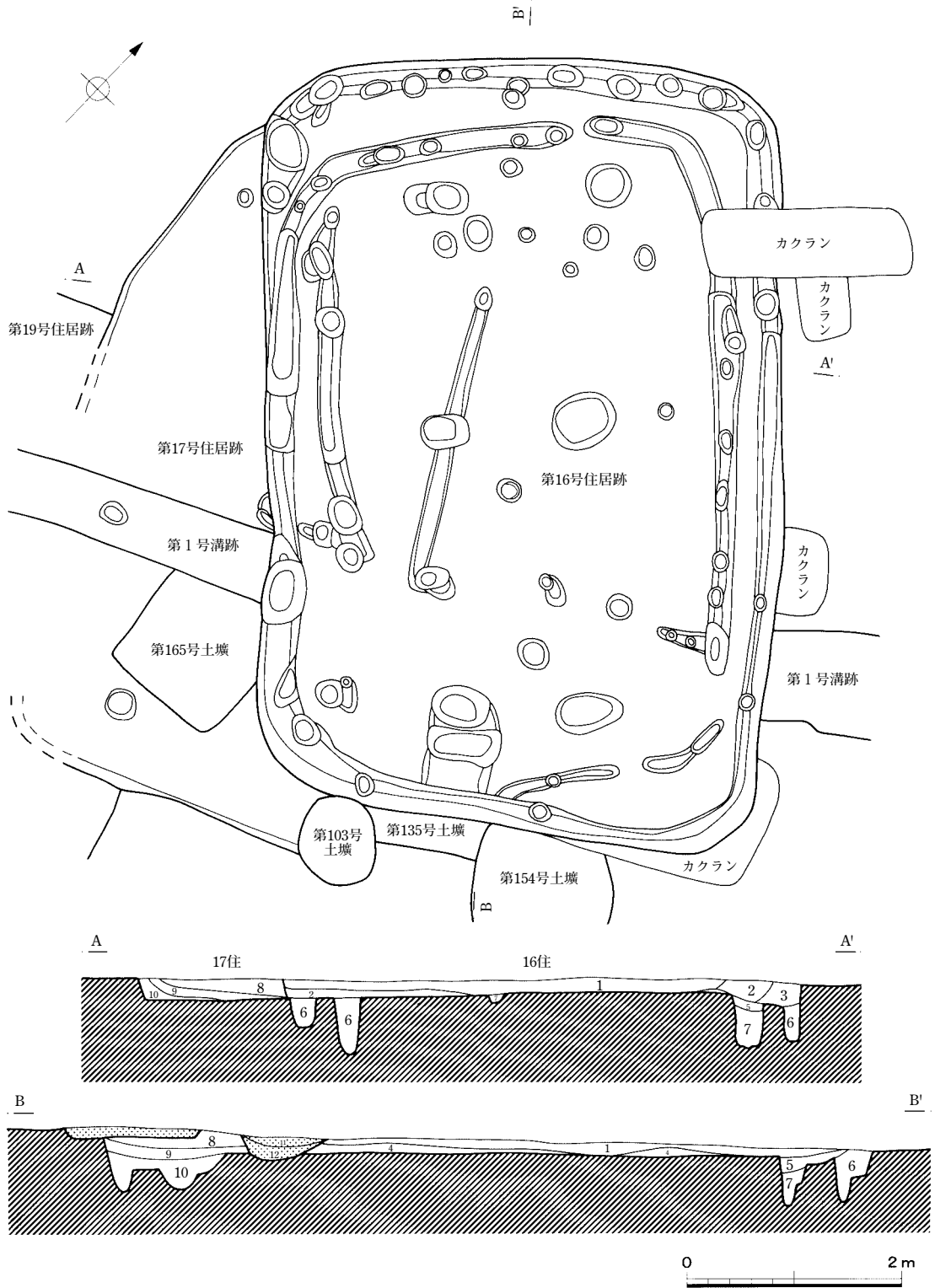
本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第16・17号住居跡土層説明

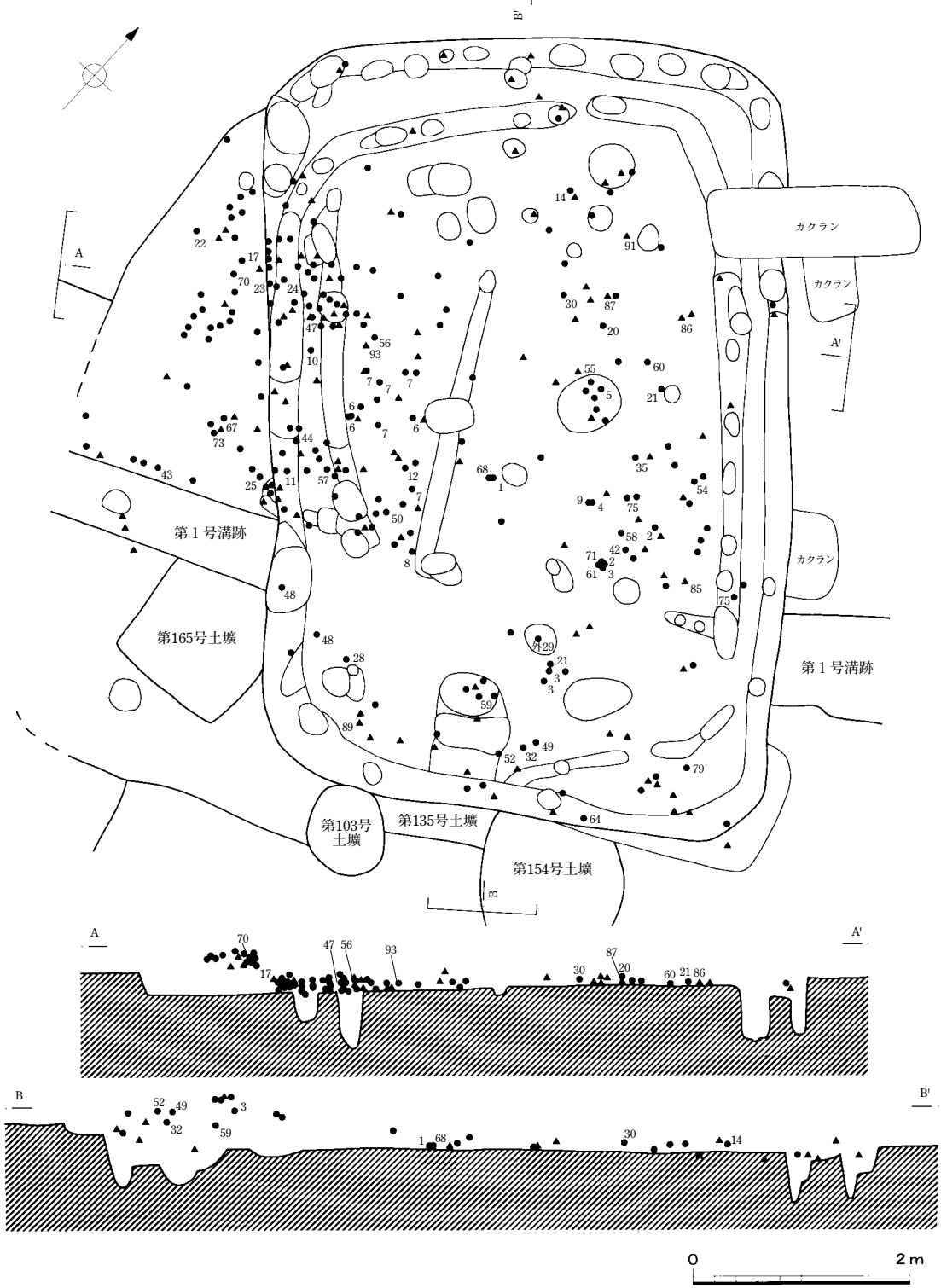
- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒(φ2mm)を多量に、ローム粒を均一に、ローム小ブロック(φ3mm)・炭化物小ブロック(φ3mm)を少量、ロームブロック(φ5mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、YP粒(φ2mm)・ローム粒を少量、炭化物粒・橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、ローム粒を少量、YP粒(φ2mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗褐色土層 ロームブロック(φ5mm)を多量に、YP細粒を均一に、黒色粒子を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第5層 暗褐色土層 ローム粒・ローム小ブロック(φ3mm)を非常に多く、YP粒(φ2mm)を均一に、ロームブロック(φ5mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第6層 灰黄褐色土層 ローム粒を多量に、ローム小ブロック(φ3mm)を均一に、灰色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第7層 灰黄褐色土層 ローム粒を多量に、ロームブロック(φ5mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第8層 暗灰茶褐色土層 YP粒(φ2mm)を均一に、灰色粒子・橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第9層 暗茶褐色土層 YP粒(φ2mm)を均一に、灰色ブロック(φ1cm)・橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第10層 暗茶褐色土層 ローム粒を非常に多量に、灰色粒子を均一に、YP粒(φ2mm)を微量含む。しまり、粘性ともに強い。



第16・17号住居跡調査状況



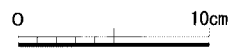
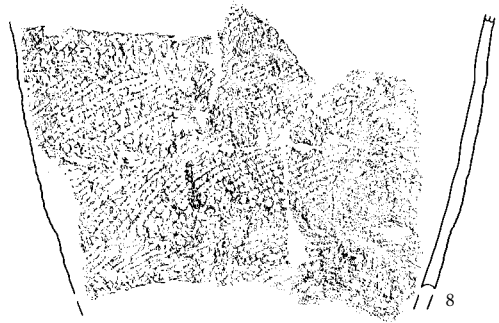
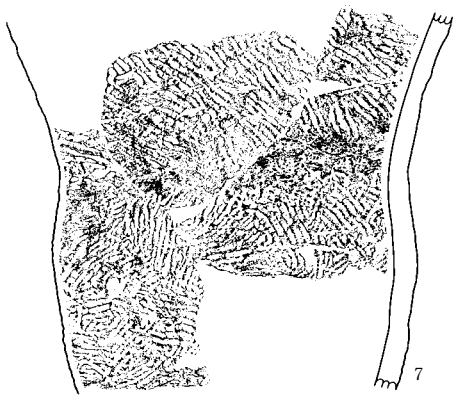
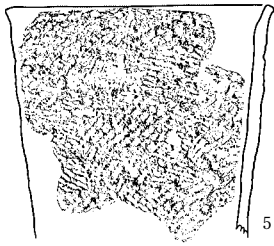
第55図 第16・17号住居跡



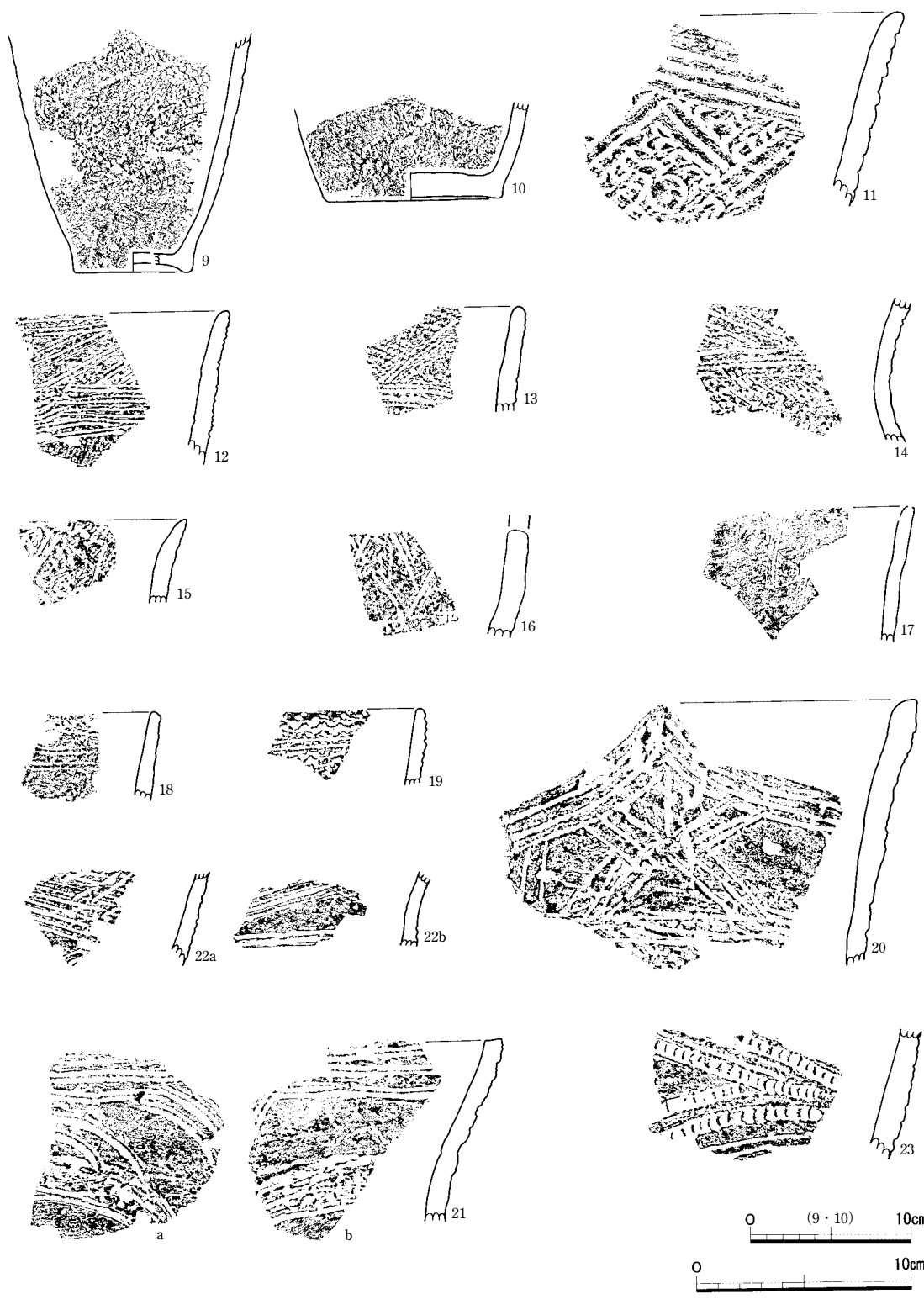
第56図 第16・17号住居跡



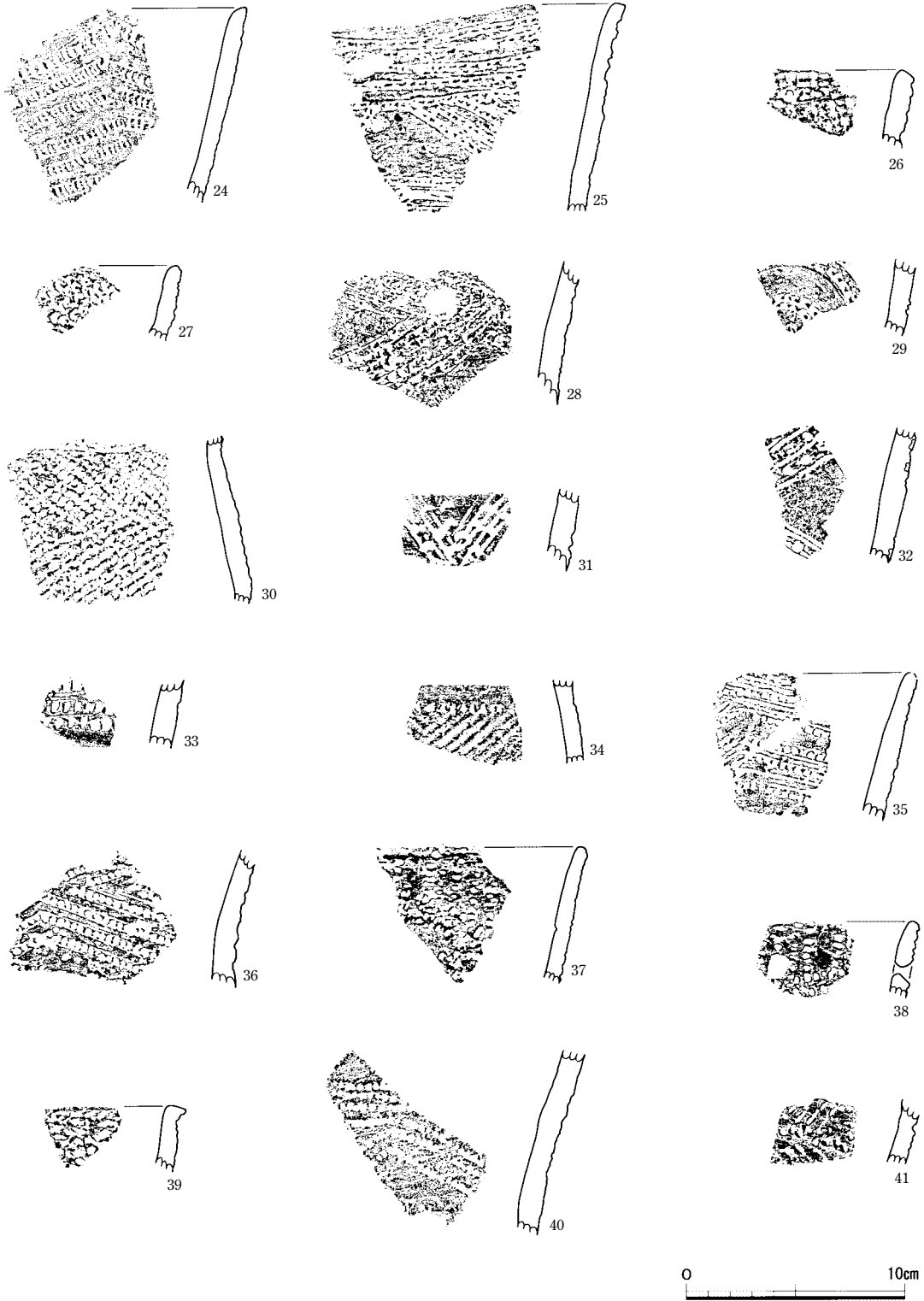
第57図 第16・17号住居跡出土遺物（1）



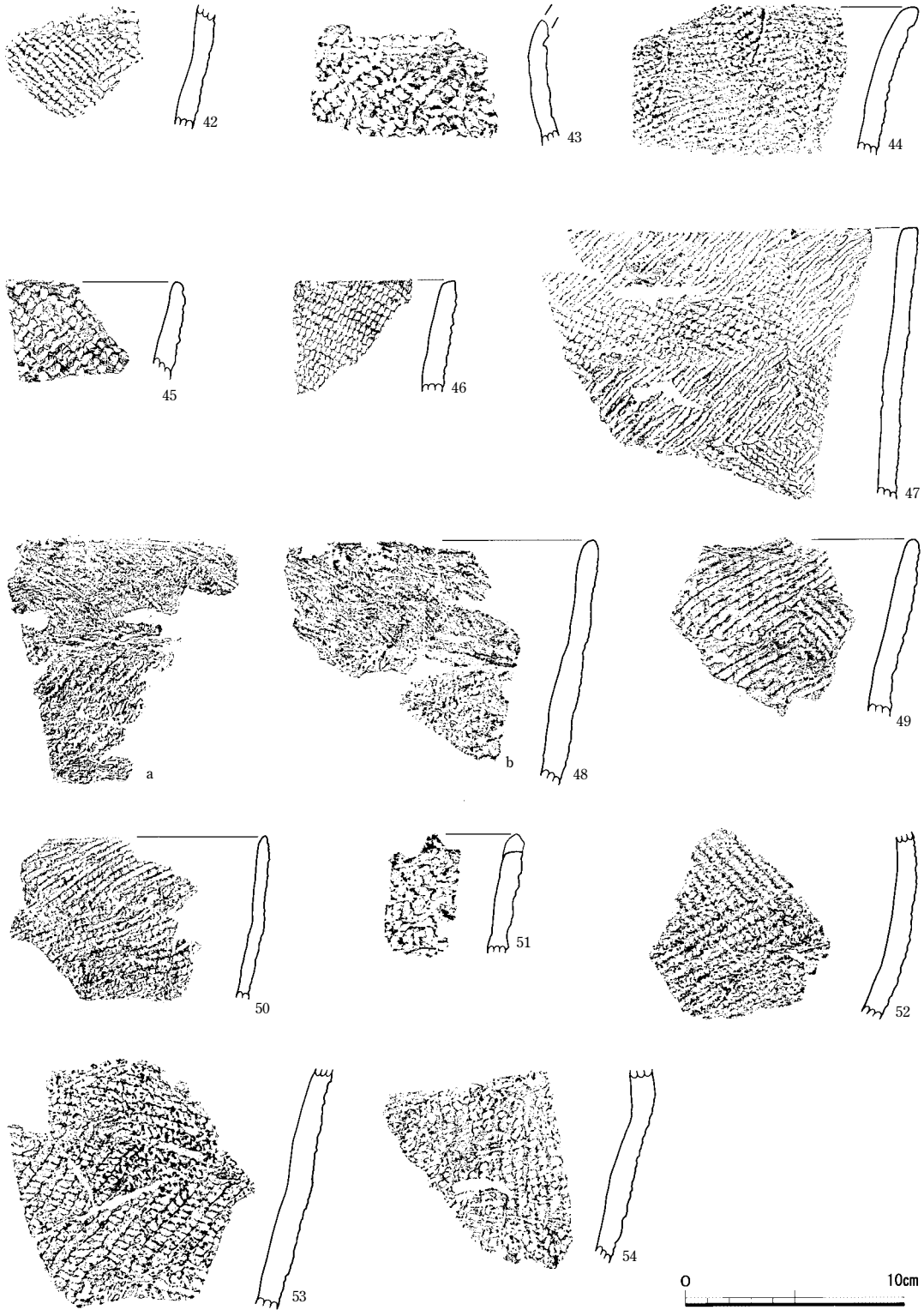
第58図 第16・17号住居跡出土遺物(2)



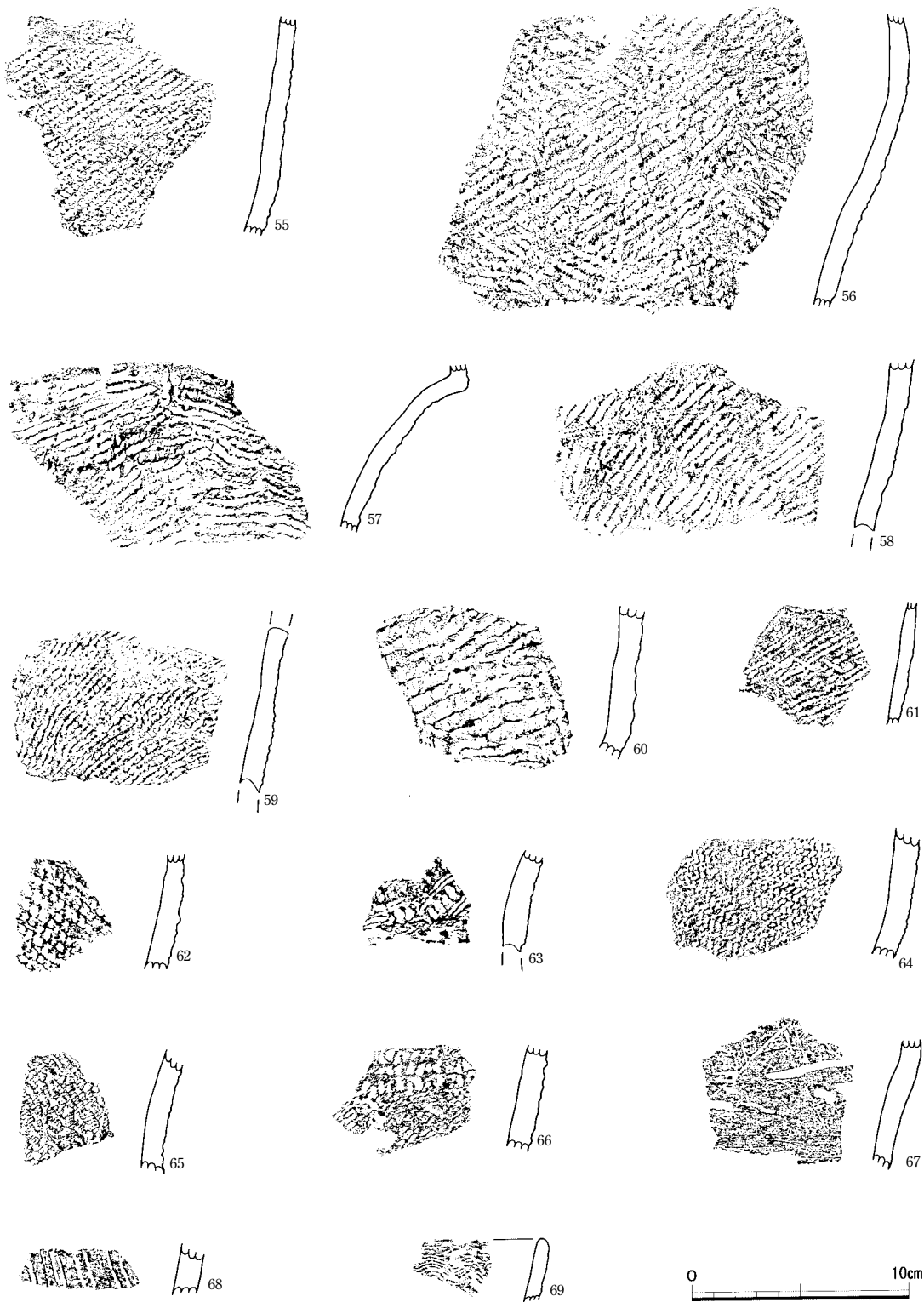
第59図 第16・17号住居跡出土遺物（3）



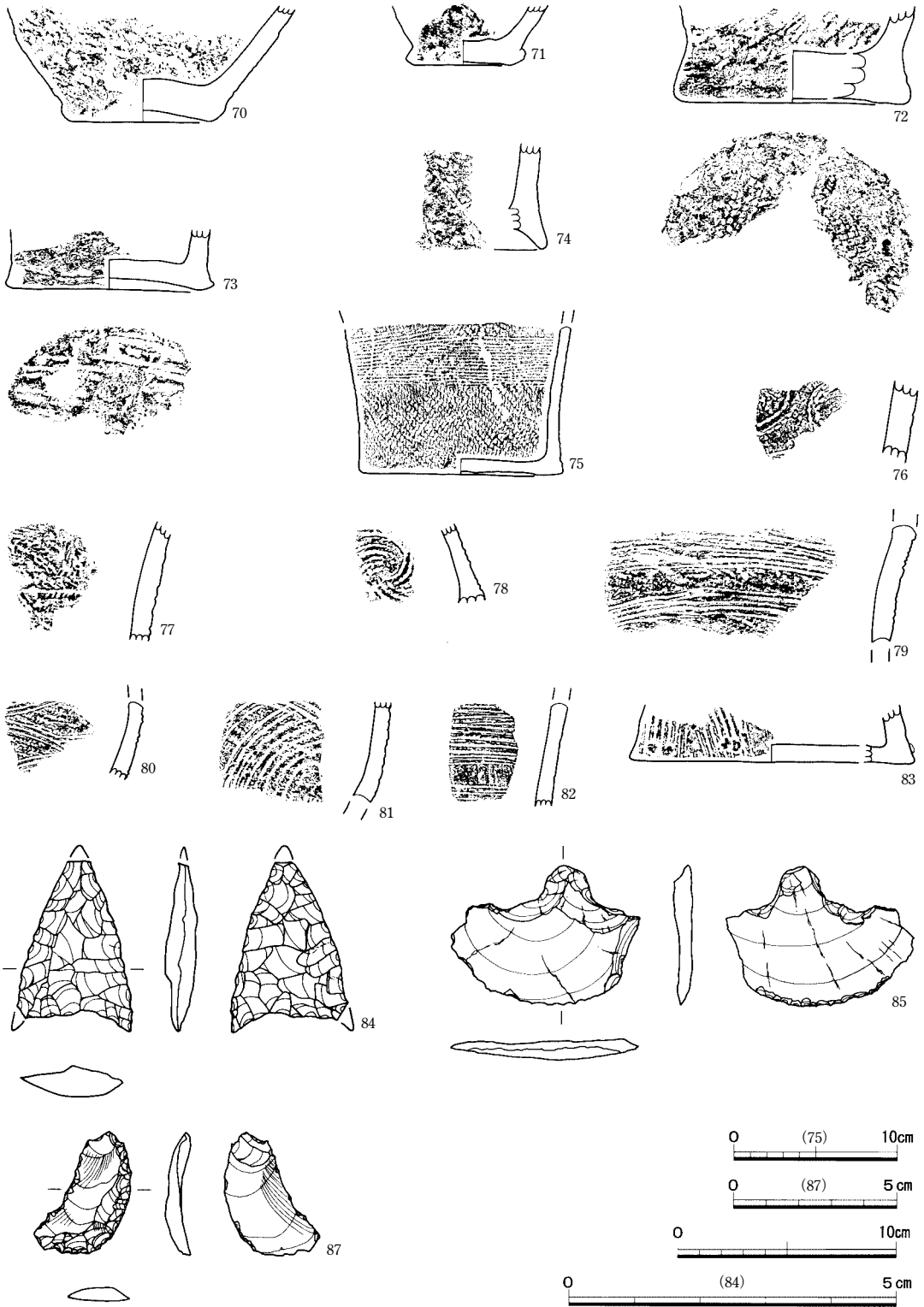
第60图 第16·17号住居跡出土遺物(4)



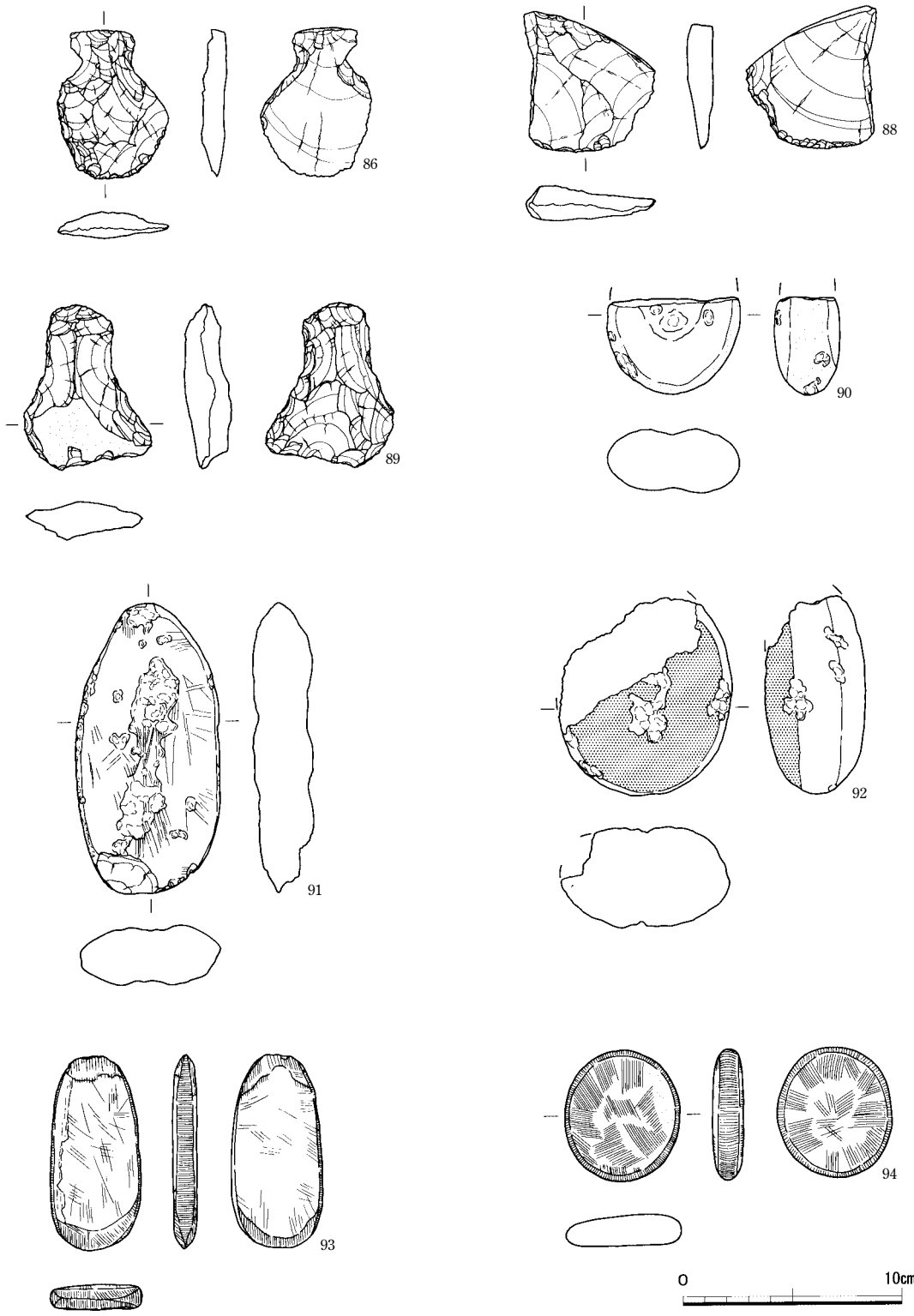
第61图 第16·17号住居跡出土遺物 (5)



第62图 第16·17号住居跡出土遺物（6）



第63图 第16·17号住居跡出土遺物 (7)



第64图 第16·17号住居跡出土遺物（8）

第16・17号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部～ 胴部	RL・LR単節縄文（ループ文・羽状）→半截竹管状 工具による押引	明黄褐色	16住 No.51	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引→半截竹管状工具によ る沈線	黄褐色	16住 No. 9・17	
3	縄文土器	口縁部～ 胴部	縄文→列点状刺突文	黄褐色	17住 No.26・ 27	a～b同一個体
4	縄文土器	口縁部～ 胴部	RL単節縄文	橙褐色	16住 No.11	
5	縄文土器	口縁部	R・L無節縄文（羽状）	黄橙褐色	16住 No.45	
6	縄文土器	胴部	R・L無節縄文（羽状）	明褐色	16住 No.101・ 196・200	
7	縄文土器	胴部	R無節縄文	褐色	16住 No.55・ 95・97・98・ 102	
8	縄文土器	胴部	L無節縄文	褐色	16住 No.59・ 18住 No.17	
9	縄文土器	胴部～ 底部	LR単節縄文	橙褐色	16住 No.11	
10	縄文土器	胴部～ 底部	L無節縄文	黄橙褐色	16住 No.164	
11	縄文土器	口縁部	縄文？→半截竹管状工具による沈線→半截竹管状 工具による押引	橙褐色	16住 No.78	
12	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	16住 No.91	
13	縄文土器	口縁部	LR単節縄文→半截竹管状工具による沈線	暗灰黄褐色	16住 No. 9	
14	縄文土器	口縁部～ 胴部	縄文→半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	16住 No.116	
15	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	16住覆土	
16	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	17住覆土	
17	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	暗褐色	17住 No.81	
18	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	16住覆土	
19	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	黄橙褐色	16住覆土	

20	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	16住 No.41	
21	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→刺突	黄褐色	16住 No.30・ 17住 No.28	a・b同一個体
22	縄文土器	口縁部～ 胴部	半截竹管状工具による沈線	褐色	17住 No.85	a・b同一個体
23	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線・半截竹管状工具による押引	褐色	16住 No.174	
24	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	明褐色	16住 No.175	
25	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	暗褐色	17住 No.54	
26	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黄褐色	16住 覆土	
27	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	灰黄褐色	16住 覆土	
28	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	暗褐色	17住 No.47	
29	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	灰黄褐色	16住 覆土	
30	縄文土器	口縁部～ 胴部	RL単節縄文・L無節縄文(羽状)→半截竹管状工具による押引	黄褐色	16住 No.110	
31	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→刺突	橙褐色	16住 覆土	
32	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→刺突	暗褐色	17住 No.19	
33	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→刺突	褐色	17住 覆土	
34	縄文土器	口縁部	縄文→刺突	橙褐色	16住 覆土	
35	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→列点状刺突文	灰黄褐色	16住 No.23	
36	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→列点状刺突文	黄褐色	16住 覆土	
37	縄文土器	口縁部	列点状刺突文	褐色	17住 覆土	
38	縄文土器	口縁部	列点状刺突文	赤褐色	16住 覆土	穿孔
39	縄文土器	口縁部	LR単節縄文→列点状刺突文	褐色	16住 覆土	
40	縄文土器	口縁部	列点状刺突文	灰黄褐色	16住 覆土	
41	縄文土器	口縁部～ 胴部	R無節縄文→列点状刺突文	黒色	16住 覆土	
42	縄文土器	口縁部～ 胴部	RL単節縄文→列点状刺突文	褐色	16住 No.13	
43	縄文土器	口縁部～ 胴部	LR単節縄文→列点状刺突文	褐色	17住 No.58	
44	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	褐色	16住 No.82	
45	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	灰黄褐色	16住 覆土	
46	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	灰黄褐色	17住 覆土	

47	縄文土器	口縁部	RL単節縄文・LL単節縄文(羽状)	褐色	16住 No.156	
48	縄文土器	口縁部	R・L無節縄文(羽状)	黒褐色	17住 No.49・92	a・b同一個体
49	縄文土器	口縁部	R・L無節縄文(羽状)	明黄褐色	17住 No.18	
50	縄文土器	口縁部	L無節縄文(羽状)	灰黄褐色	16住 No.62	
51	縄文土器	口縁部	突起、ループ文	黄褐色	17住 覆土	
52	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状)	橙褐色	17住 No.21	
53	縄文土器	胴部	RL単節縄文・R無節縄文(羽状)	褐色	17住 覆土	
54	縄文土器	胴部	RL単節縄文	黄橙褐色	16住 No.27	
55	縄文土器	胴部	RL単節縄文	褐色	16住 No.207	
56	縄文土器	胴部	R・L無節縄文(羽状)	褐色	16住 No.142	
57	縄文土器	胴部	L無節縄文	暗褐色	16住 No.83	
58	縄文土器	胴部	L無節縄文	褐色	16住 No.12	
59	縄文土器	胴部	L無節縄文	明褐色	17住 No.34	
60	縄文土器	胴部	L無節縄文	灰黄褐色	16住 No.42	
61	縄文土器	胴部	L無節縄文(結節)	黄褐色	16住 No.9	
62	縄文土器	胴部	RLR複節縄文	灰褐色	16住 覆土	
63	縄文土器	胴部	合撚	暗褐色	16住 覆土	
64	縄文土器	胴部	組紐	黄褐色	17住 No.11	
65	縄文土器	胴部	RL単節縄文(0段多条)の束	褐色	16住 覆土	
66	縄文土器	胴部	LR単節縄文(ループ文)	暗褐色	17住 覆土	
67	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による沈線	褐色	17住 No.66	
68	縄文土器	胴部	沈線	黄褐色	16住 No.51	
69	縄文土器	口縁部	波状条線	褐色	17住 覆土	
70	縄文土器	底部	R無節縄文	褐色	17住 No.80	
71	縄文土器	底部	R無節縄文	黄橙褐色	16住 No.9	
72	縄文土器	底部	L無節縄文、底部:L無節縄文	黄褐色	17住 覆土	
73	縄文土器	底部	ナデ、底部:工具痕が残る	黄橙褐色	17住 No.64	
74	縄文土器	底部	縄文→沈線	灰黄褐色	16住 覆土	
75	縄文土器	胴部～ 底部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	橙褐色	16住 No.2・19	
76	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による押引	明赤褐色	17住 覆土	
77	縄文土器	胴部	RL単節縄文→浮線文→キザミ→刺突	黄橙褐色	16住 覆土	

78	縄文土器	口縁部?	縄文?→半截竹管状工具による集合沈線→刺突	褐色	17住覆土	
79	縄文土器	胴部	LR単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	褐色	17住No.3	
80	縄文土器	胴部?	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	明赤褐色	17住覆土	
81	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄橙褐色	17住覆土	
82	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	褐色	17住覆土	
83	縄文土器	底部	半截竹管状工具による集合沈線→ボタン状貼付	褐色	17住覆土	
84	石器	—	—	—	17住覆土	石鏃
85	石器	—	—	—	16住No.3	石匙
86	石器	—	—	—	16住No.37	石匙
87	石器	—	—	—	16住No.39	スクレイパー
88	石器	—	—	—	16住覆土	スクレイパー
89	石器	—	—	—	16住No.171	打斧
90	石器	—	—	—	16住覆土	凹石・磨石
91	石器	—	—	—	16住No.118	凹石・磨石
92	石器	—	—	—	16住No.10	磨石・敲石 赤色顔料
93	石器	—	—	—	16住No.143	紡錘形擦石
94	石器	—	—	—	16住覆土	紡錘形擦石

第19号住居跡 (第65～68図・図版24-2・25-1・103・104-1)

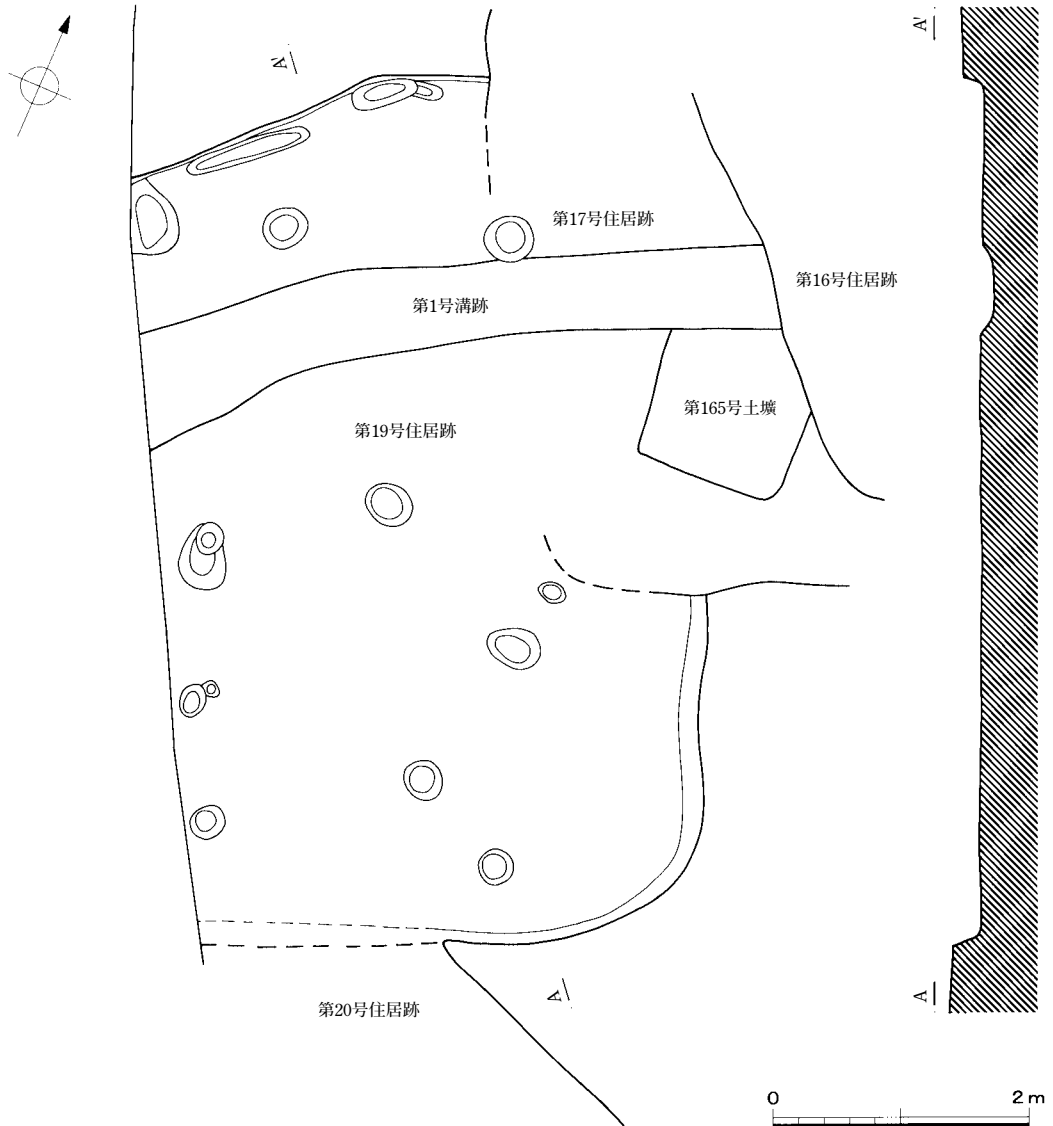
B1区の西側に位置している。南側に第9号住居跡、東側には第24号住居跡、北側には第16号住居跡がある。東側の調査区中央あたりには、第10～第13号住居跡などがある。本住居跡は、床面付近まで強い削平を受けていて、重複する第20号住居跡を切っている。また、第17号住居跡、第1号溝跡に切られているため、あまり遺存状態は良好とは言えない。住居跡の西側半分が調査区外であるため、全容は不明である。

平面形は、残存する掘りこみの形態から方形を基調とする台形を呈していると思われる。遺構の規模は、東西方向が4.2m、南北方向が6.8mである。壁は、やや傾斜しつつ、ほぼ直線的に立ち上がり、確認面からの深さは0.4mである。床面はローム土を主体とした貼り床で、中央は堅く締まって全体に硬質である。住居跡内には、北壁に沿って小ピットを伴う、幅15cm、深さが10cm程の壁溝が見られた。炉跡は、検出されなかった。

出土遺物は、覆土中から前期中葉の有尾式の土器片と前期中葉に比定できる土器片が主体に出土した。また前期中葉の黒浜式の土器片が少量出土している。土器以外には、砥石1点、磨製石斧1点が出土している。また、土器製作時に内面の研磨具として使用された紡錘状擦石(第68図24)が1点などの石器と自

然石が出土している。覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



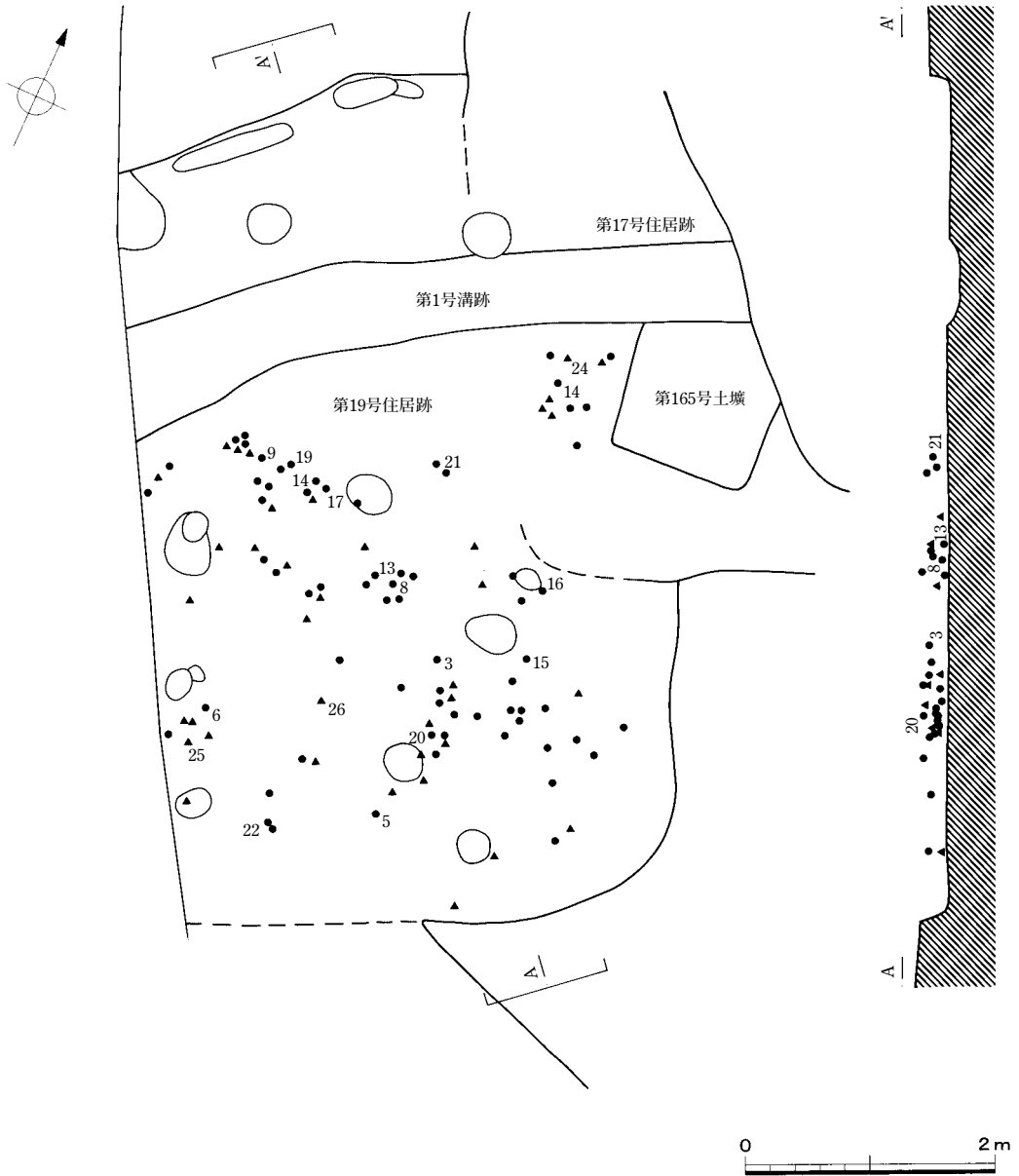
第65図 第19号住居跡

第19号住居跡土層説明

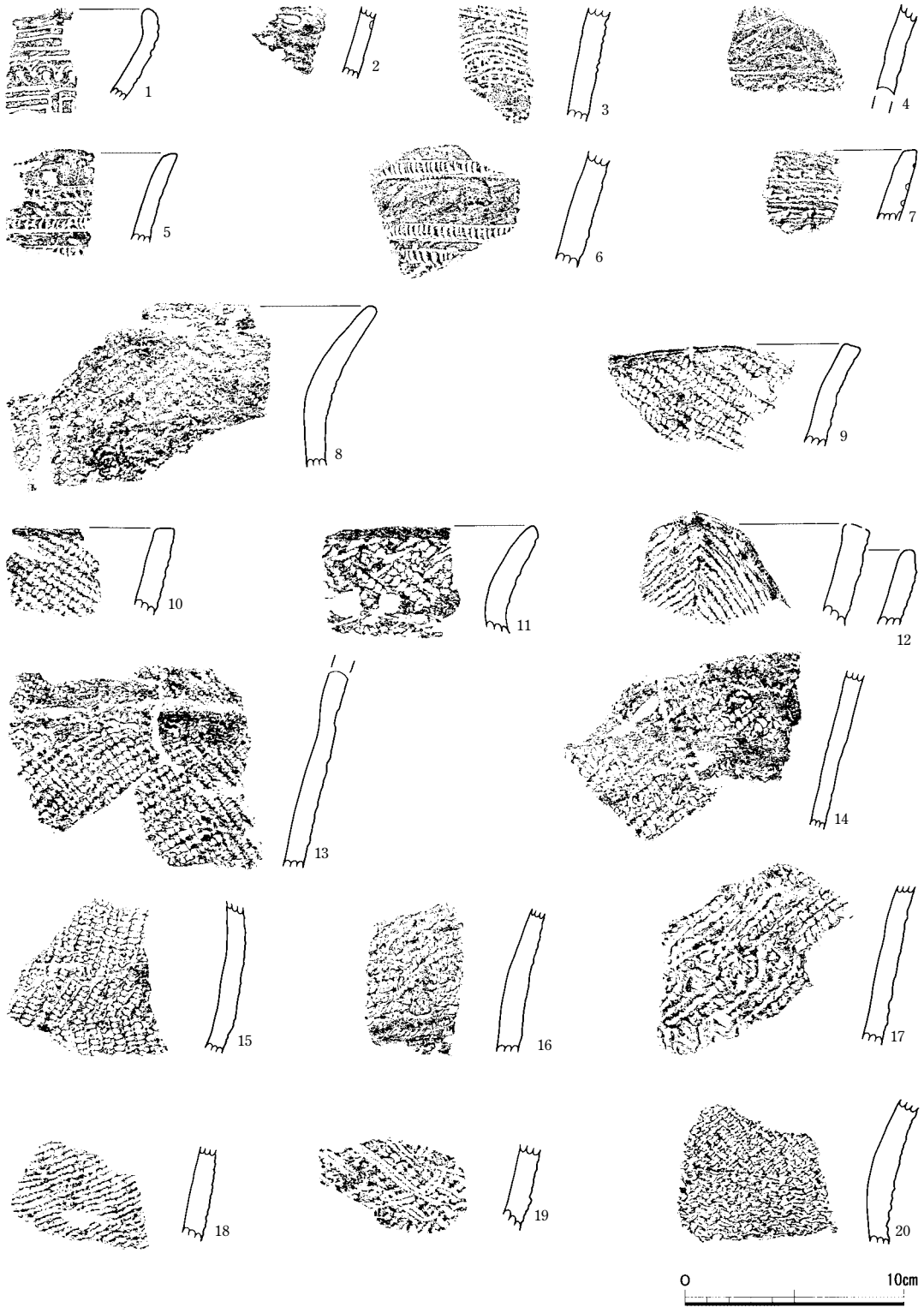
第1層 暗褐色土層 YP粒子を少量、YP粒(φ2mm)を均一に、ローム粒・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第20号住居跡 (第69～71図・図版24-2・25-2・104-2)

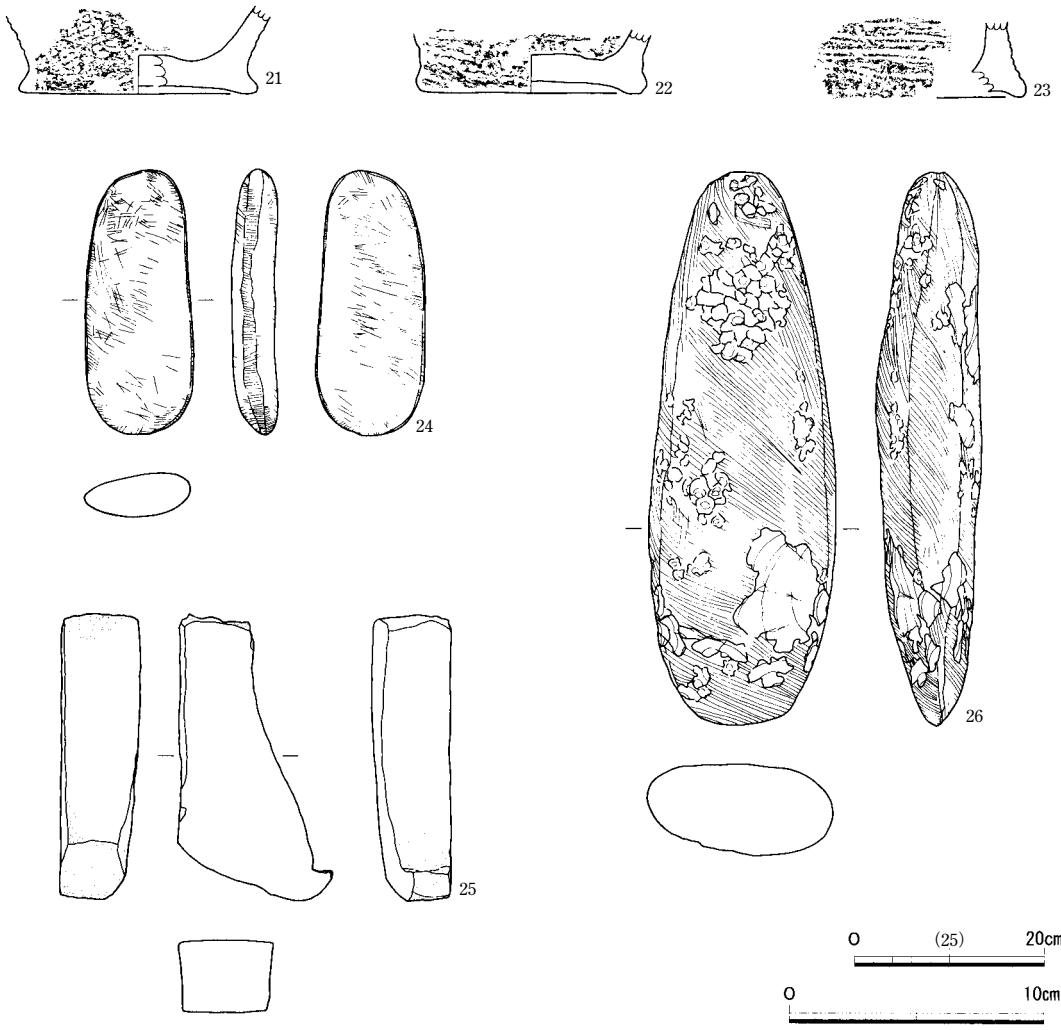
B 1 区の西側に位置する。北側には第16・17号住居跡がある。東側には、第10～13号住居跡などがある。南側には第15・21号住居跡がある。本住居跡は、床面付近まで強い削平を受けていて、重複する第9号住居跡と第19号住居跡に切られている。また、第24号住居跡と第134号土壌を切っている。さらに、住



第66図 第19号住居跡



第67图 第19号住居跡出土遺物(1)



第68図 第19号住居跡出土遺物（2）

第19号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線・コンパス文	黒褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	刺突	明灰黄	覆土	
3	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線・押引	橙褐色	No.38	
4	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	明黄褐色	No.85	
6	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	橙褐色	No.91	

7	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→刺突	黄褐色	覆土	
8	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文(羽状)	褐色	No.103	
9	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	褐色	No.20	
10	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	橙褐色	覆土	
11	縄文土器	口縁部	RL単節縄文・結節	褐色	覆土	
12	縄文土器	口縁部	R・L無節縄文(羽状)	褐色	覆土	
13	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状)	橙褐色	No.100	
14	縄文土器	胴部	LR単節縄文	褐色	No.5・23	
15	縄文土器	胴部	LR単節縄文	黄橙褐色	No.36	
16	縄文土器	胴部	LL単節縄文?	灰褐色	No.29	
17	縄文土器	胴部	L無節縄文	灰黄褐色	No.24	
18	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄橙褐色	覆土	海綿骨針
19	縄文土器	胴部	合撚	褐色	No.21	
20	縄文土器	胴部	組紐・RL単節縄文(0段多条)の束	黄橙褐色	No.66	
21	縄文土器	底部	RL単節縄文	明褐色	No.13	
22	縄文土器	底部	縄文	黄褐色	No.90	
23	縄文土器	底部	半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
24	石器	—	—	—	No.3	紡錘形擦石
25	石器	—	—	—	No.95	砥石、13住と接合
26	石器	—	—	—	No.54	磨斧

居跡の西側半分が調査区外であるため、全容は不明である。

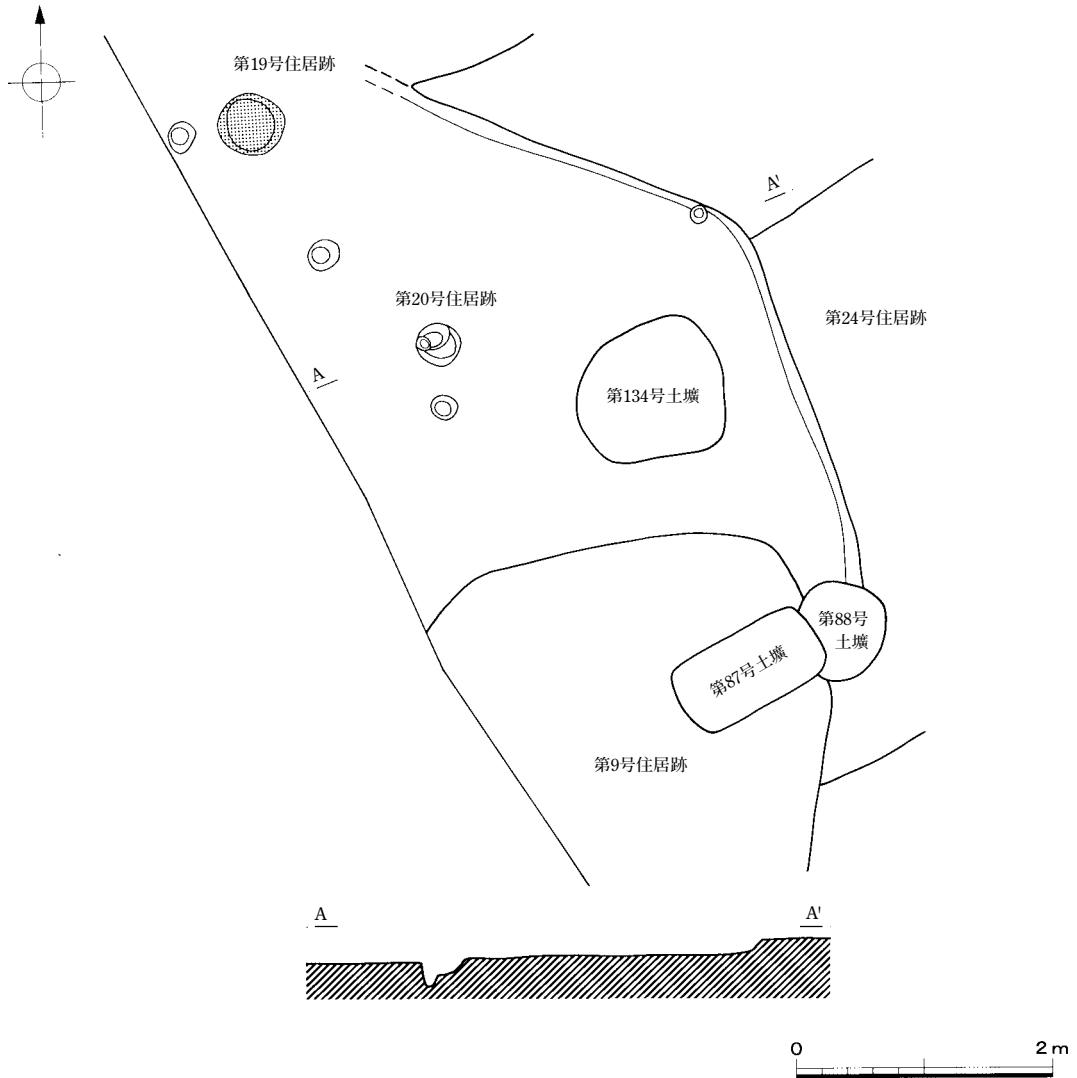
平面形は、残存する掘りこみの形態から方形を基調とする不整形を呈していると思われる。遺構の規模は、東西方向が3.6m、南北方向が4.1mである。東壁は、開いて傾斜して立ち上がるが、北壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは15cmである。床面は平坦で、ローム土を主体とした貼り床で、中央は堅く締まって全体に硬質である。住居跡内に壁溝は、検出されなかった。

炉跡は、住居跡の北壁よりに位置している。炉体土器をとまなう。平面形は、35cm×30cmの楕円形である。深さは10cm程度である。炉壁は、傾斜しながら直線的に立ち上がり、ほとんど焼けてなかった。底面は、丸みを持つ。炉跡は、掘り込みは明確ではなく、炉壁もほとんど焼けていなかったことから、貼り床構築時に埋甕炉としたと考えられる。

出土遺物は、炉体土器(第71図1)として、口縁部と底部を欠損した深鉢が出土している。縄文施文後に半截竹管による沈線を施文している。沈線間には列点状刺突文が施されている。また、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の

土器片と前期中葉に比定される土器片が少量出土している。土器以外には、剥片などの石器と自然石が出土している。覆土から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



第69図 第20号住居跡

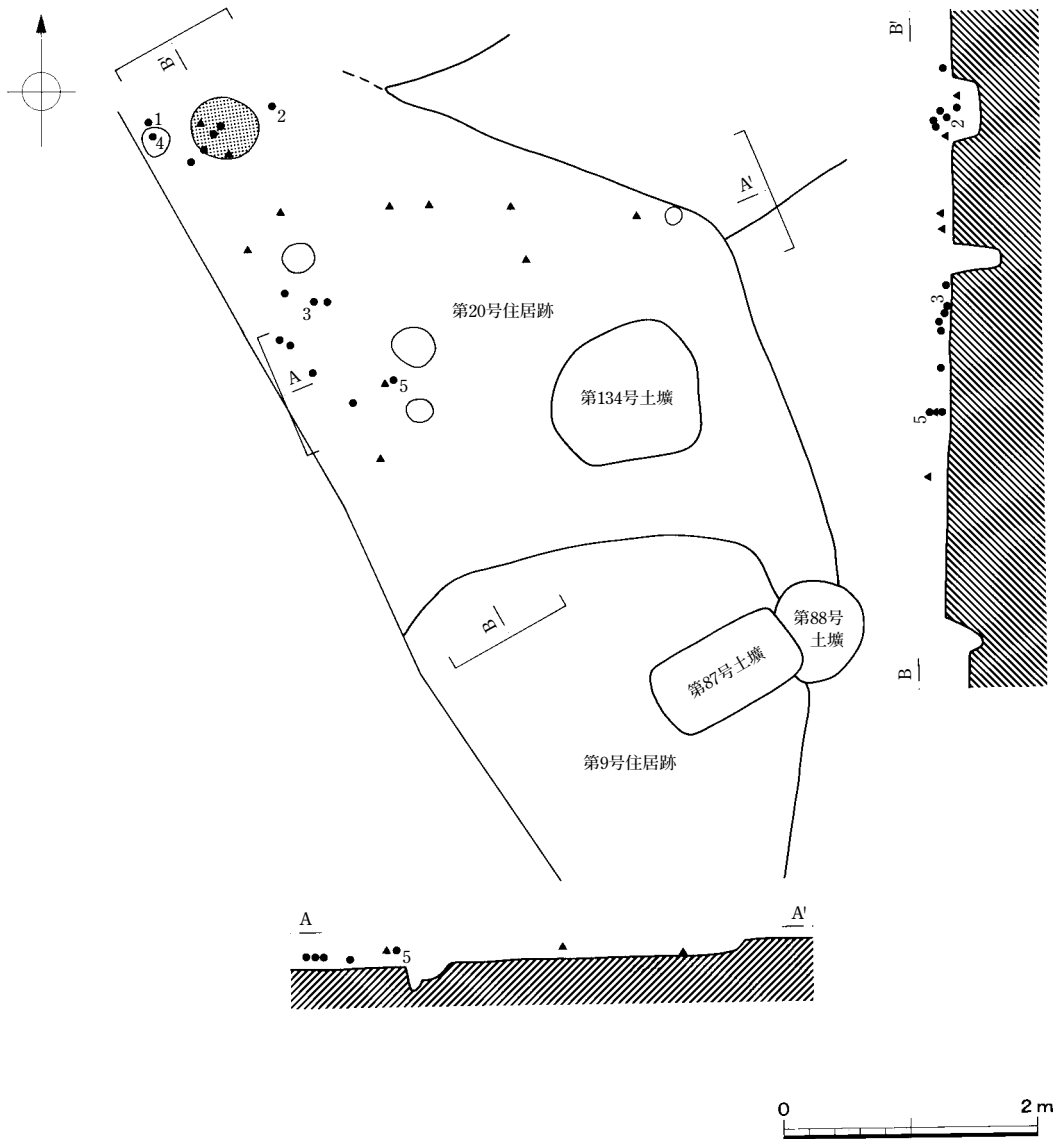
第20号住居跡土層説明

第1層 暗褐色土層 YP粒子を非常に多量に、YP粒(φ2mm)を均一に、ローム粒・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

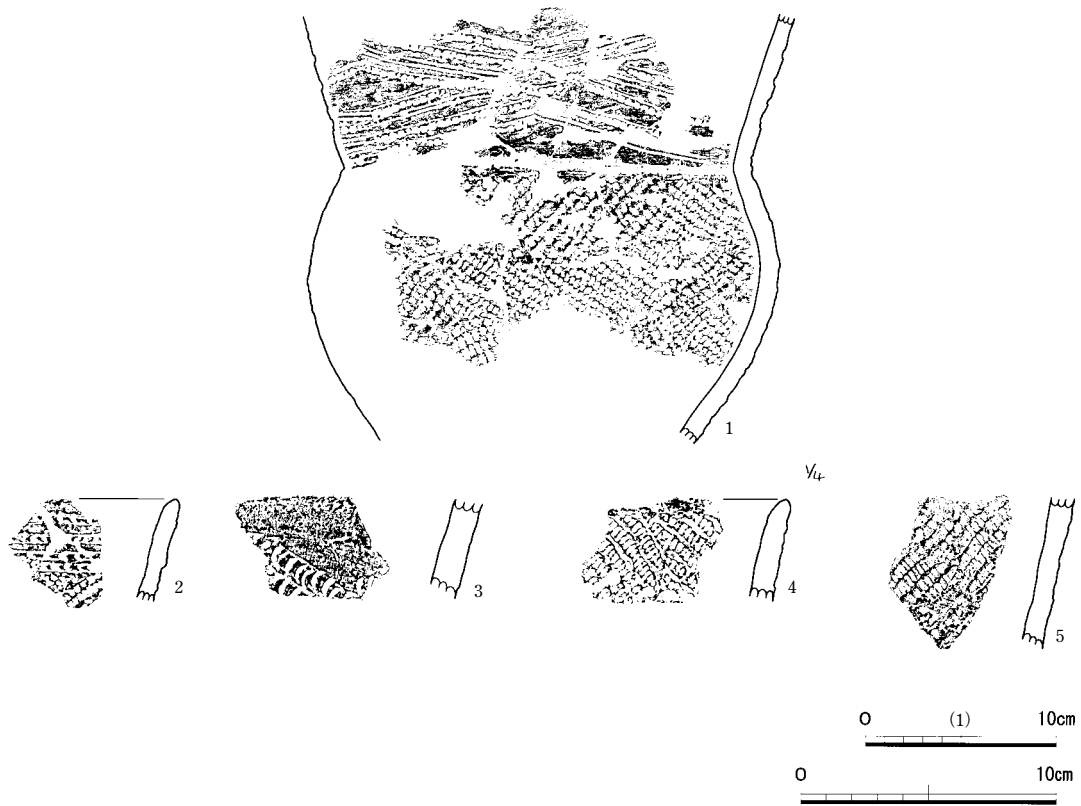
第22号住居跡 (第72~74図・図版26-2・27・105-1)

B 1 区の東側に位置している。本住居跡は、一部攪乱や床面付近まで強い削平を受けていて、遺存状況はあまり良好と言えない。北側には第14・30・32・38号住居跡、西側には第10~13号住居跡がある。重複する第25・33号住居跡、第86号土壇を切って、第85号土壇に切られている。

平面形は、方形を呈している。遺構の規模は、東西方向が5.6m、南北方向が5.3mである。西壁と南壁は、やや傾斜しつつほぼ直線的に立ち上がる。北壁と東壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは30cm程である。床面は、



第70図 第20号住居跡



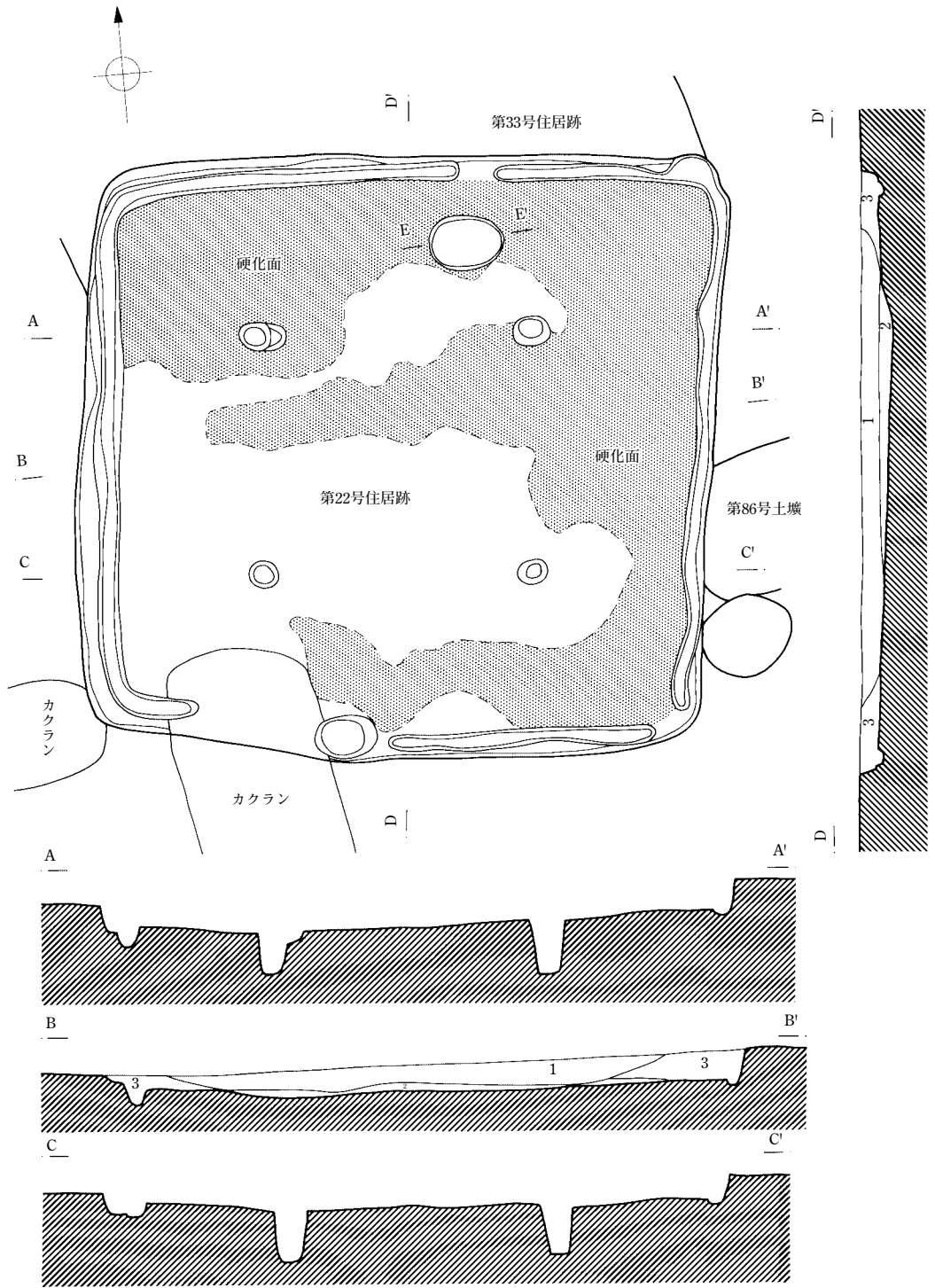
第71図 第20号住居跡出土遺物

第20号住居跡出土遺物観察表

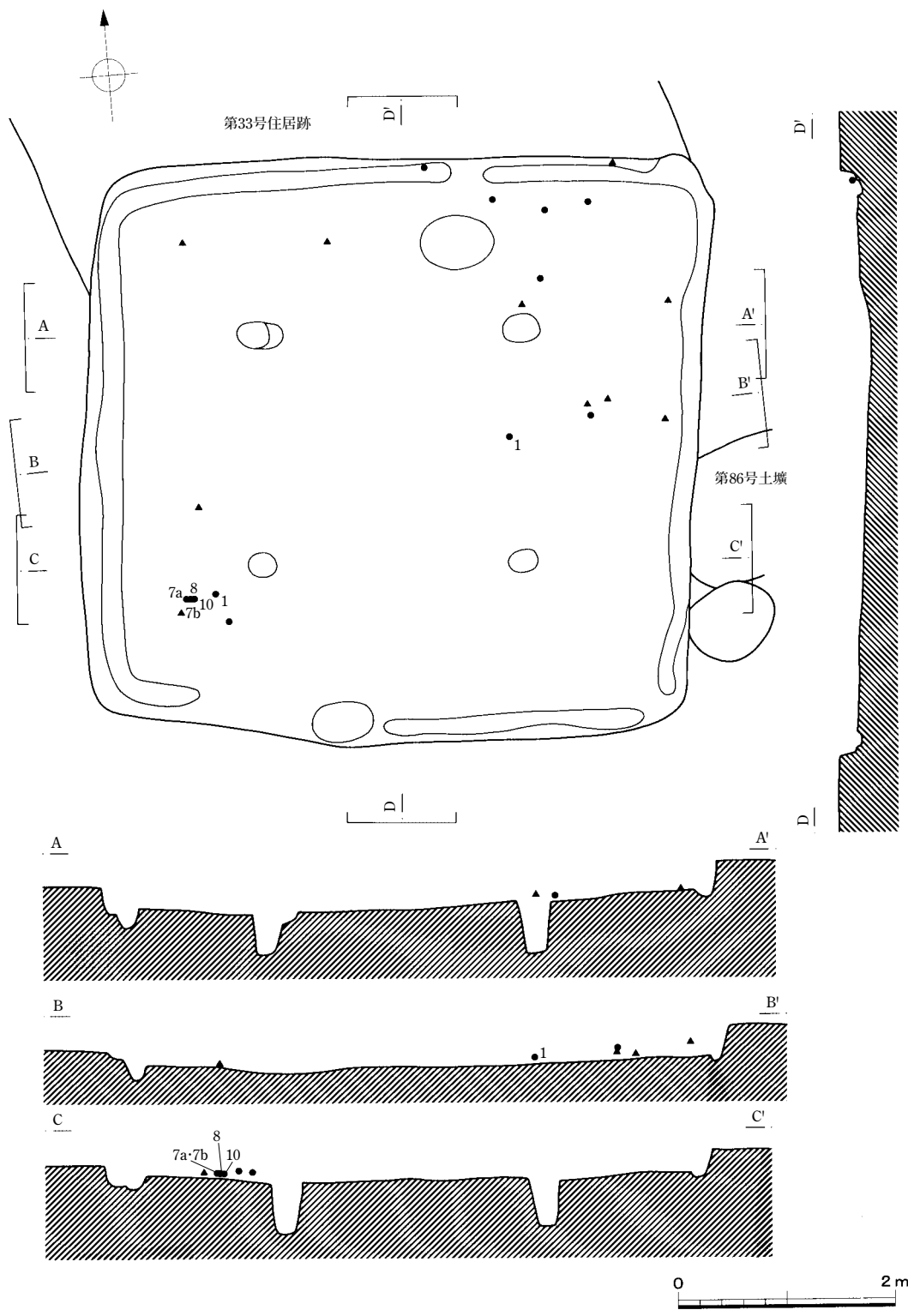
No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部 ～胴部	RL・LR単節縄文(羽状)→半截竹管状工具による沈線→列点状刺突文RL	赤褐色	No.1・炉	
2	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による押引	褐色	No.9	
3	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	明黄褐色	No.17	
4	縄文土器	口縁部	RL単節縄文(0段多条)	暗褐色	No.2	
5	縄文土器	胴部	L無節縄文	暗褐色	No.25	

第22号住居跡土層説明

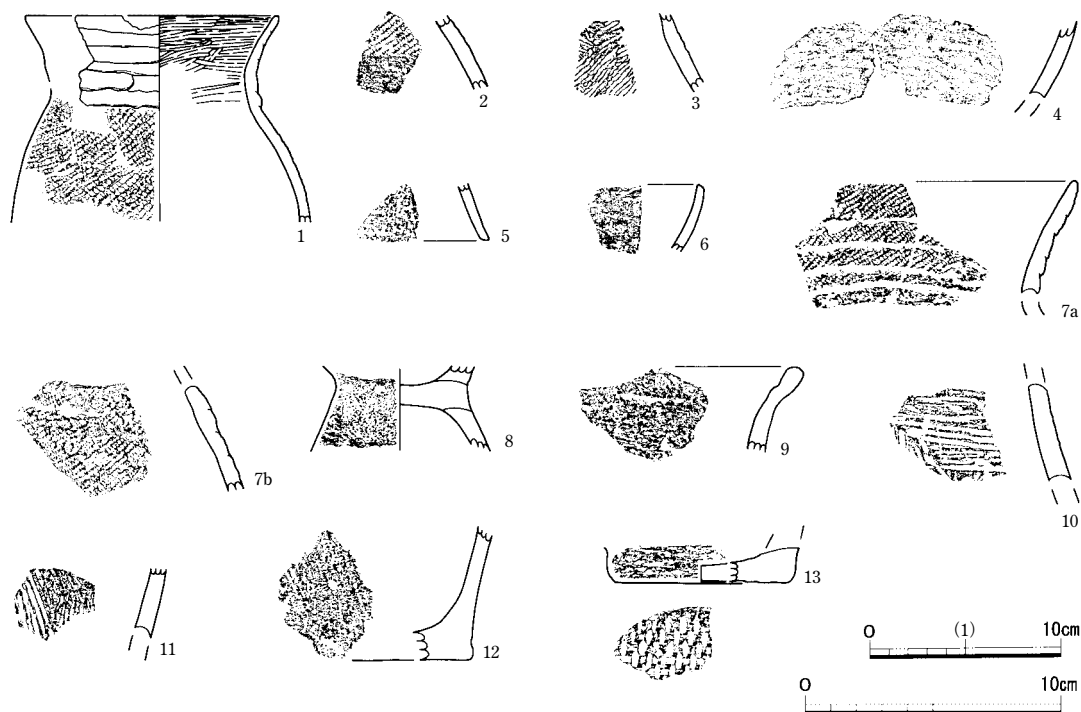
- 第1層 黒褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒(φ2mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に、ロームブロック(φ1.5cm)・ローム小ブロック(φ3mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 茶褐色土層 ローム粒を均一に、炭化物粒子(φ3mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。



第72図 第22号住居跡



第73图 第22号住居跡



第74図 第22号住居跡出土遺物

第22号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	吉ヶ谷系土器	口縁～ 胴部	輪積痕、LR単節縄文、内面：ミガキ	褐色	No. 6・8	甕
2	吉ヶ谷系土器	胴部	LR単節縄文、ミガキ、内面：ミガキ	橙褐色	覆土	壺
3	吉ヶ谷系土器	胴部	L無節縄文、内面：ミガキ	黄褐色	覆土	壺
4	吉ヶ谷系土器	胴部	ミガキ、内面：ミガキ	褐色	覆土	壺
5	吉ヶ谷系土器	脚部	ミガキ、赤彩、内面：ミガキ	明赤褐色	覆土	高坏
6	吉ヶ谷系土器	口縁部	ミガキ、内面：ミガキ	橙褐色	覆土	小形鉢
7	吉ヶ谷系土器	口縁部 ～胴部	輪積痕→LR単節縄文、内面：ミガキ	橙褐色	No. 7	壺
8	吉ヶ谷系土器	脚部	ケズリ？	橙褐色	No. 7	台付甕
9	吉ヶ谷系土器	口縁部	ナデ	黄橙褐色	覆土	壺か甕？
10	吉ヶ谷系土器	胴部	条線	黄橙褐色	No. 7	壺か甕？
11	吉ヶ谷系土器	胴部	条線	褐色	覆土	壺か甕？
12	吉ヶ谷系土器	底部	条線	黄褐色	覆土	壺か甕？
13	吉ヶ谷系土器	底部	網代痕	褐色	覆土	壺か甕？

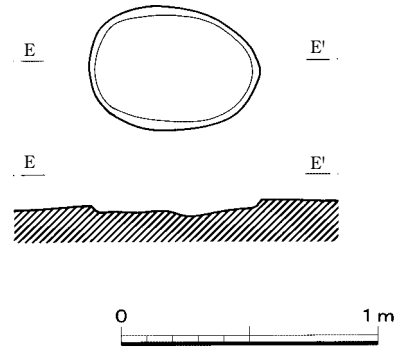
ローム土を主体とした貼り床で、若干起伏をもち中央から西壁よりと北壁よりがやや窪んでいるようである。住居中央あたりは堅く締まって全体に硬質であるが、西壁よりはやや軟質であった。住居跡内には、壁にそって南側で一部途切れているが、幅20～30cm、深さが10cm程の壁溝が巡っている。

炉跡は、住居内のほぼ中央の北壁よりに位置する。

平面形は、68cm×50cmの楕円形である。深さは8cm程の床面を掘り窪めた地床炉である。炉壁は、あまり焼けていなかった。底面は、若干窪んでいる。

出土遺物は、覆土中から少量だが土器片が出土している。

本住居跡の帰属時期は、住居跡の形態や出土遺物から、弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる。

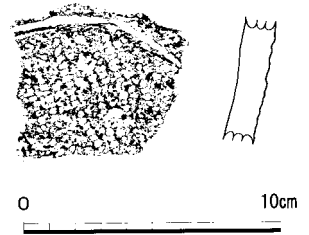


第75図 第22号住居跡炉跡

第23号住居跡 (第76～78図・図版28-1・107-2)

B 1 区の西側に位置している。北側には第12・13・27～31号住居跡が、西側に第26号住居跡、南側では第15号住居跡に隣接する。また、重複する第21号住居跡に切られている。

平面形は、長方形を呈している。遺構の規模は、東西方向が2.9m、南北方向が4.6mである。壁は確認面からの深さ12cmである。床面は、ほぼ平坦で、ローム土を主体とした貼り床である。中央は堅く締まって全体に硬質である。住居内には、壁溝、炉跡は検出されなかった。



第76図 第23号住居跡出土遺物

出土遺物は、図示したのは1点のみであるが、少量の縄文土器片が出土している。

本住居跡の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第23号住居跡出土遺物観察表

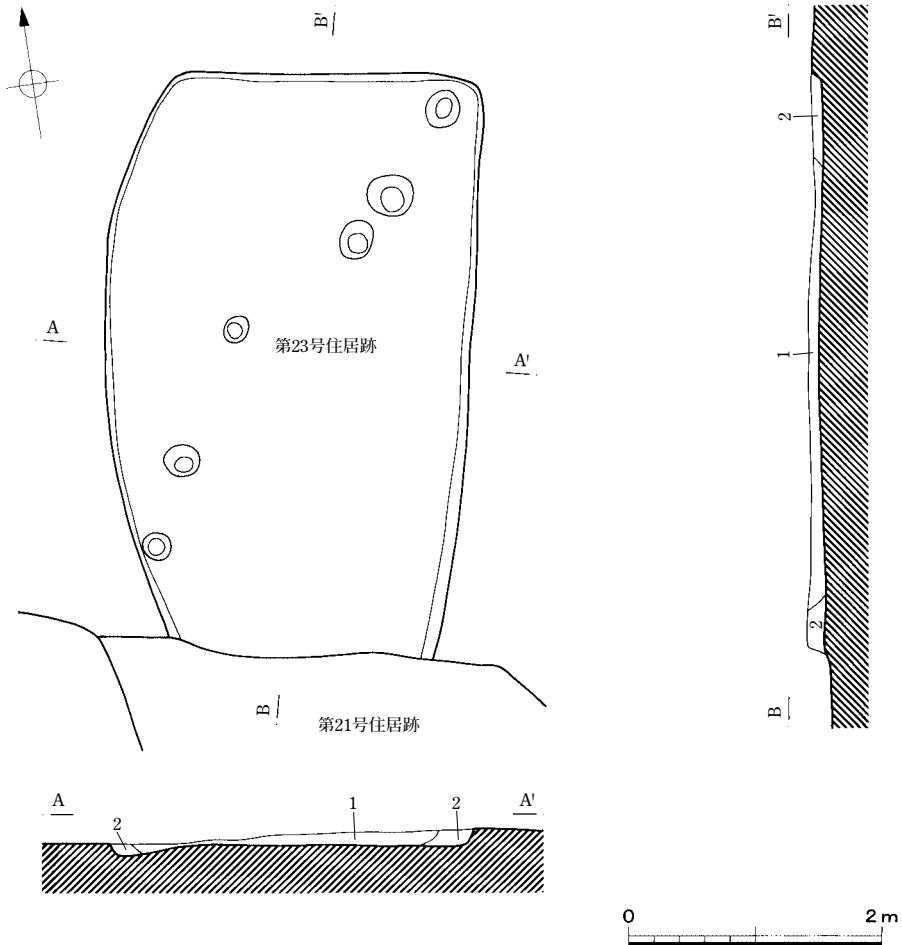
No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部?	RL単節縄文→隆帯・沈線	橙褐色	No. 5	

第24号住居跡 (第79～81図・図版28-2・107-3)

B 1 区の西側に位置している。北側には第16・17・19号住居跡、東側には第

13号住居跡が近接する。重複する第9・20号住居跡、第88・155号土壇に切られている。

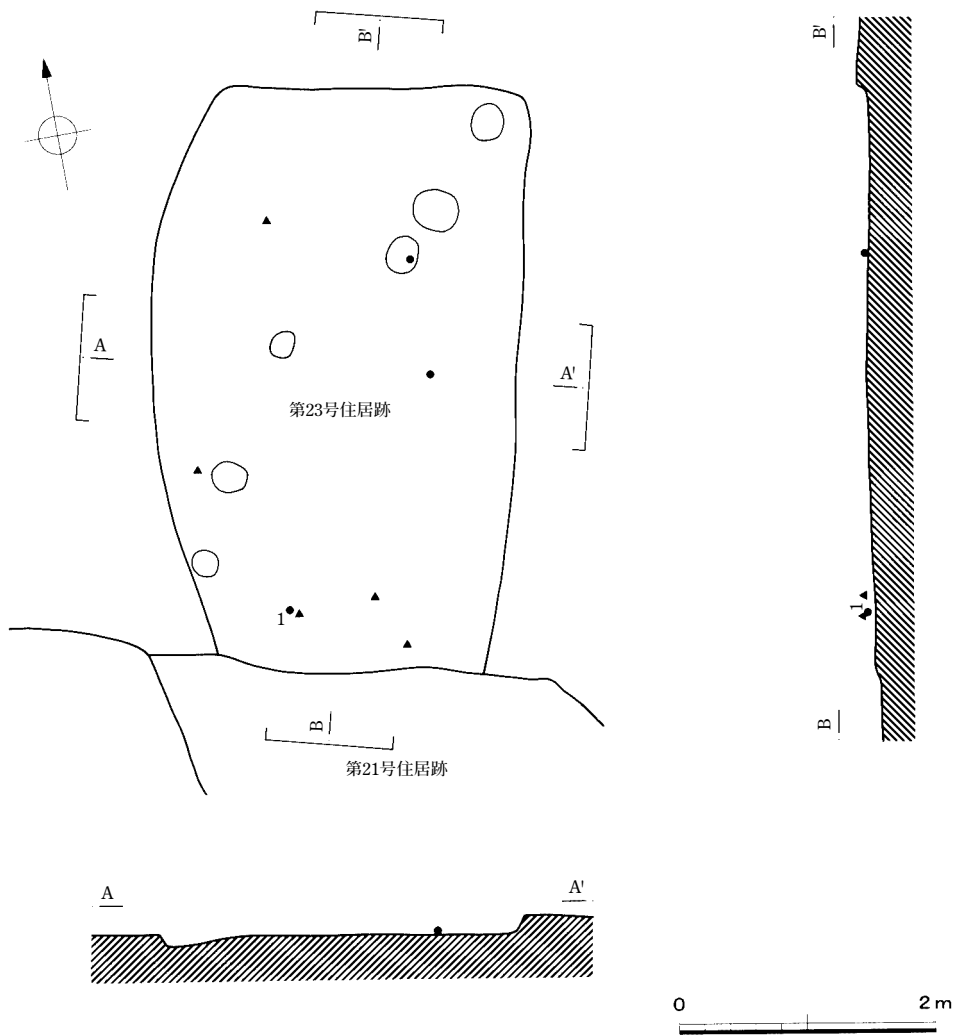
平面形は、長方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が5.5m、南北方向が2mである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程である。床面は、ほぼ平坦で、ローム土を主体とした貼り床であるが、若干起伏をもち西壁の手前が窪んでいる。住居内には、壁溝、炉跡は検出されなかった。



第77図 第23号住居跡

第23号住居跡土層説明

- 第1層 灰茶褐色土層 YP粒子をかなり多量に、ローム粒を多量、YP粒（ ϕ 2mm）を均一に含む。しまり、粘性ともに、非常に強い。
- 第2層 灰褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に、YP粒（ ϕ 2mm）・ロームブロック（ ϕ 1.5cm）・赤橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに非常に強い。

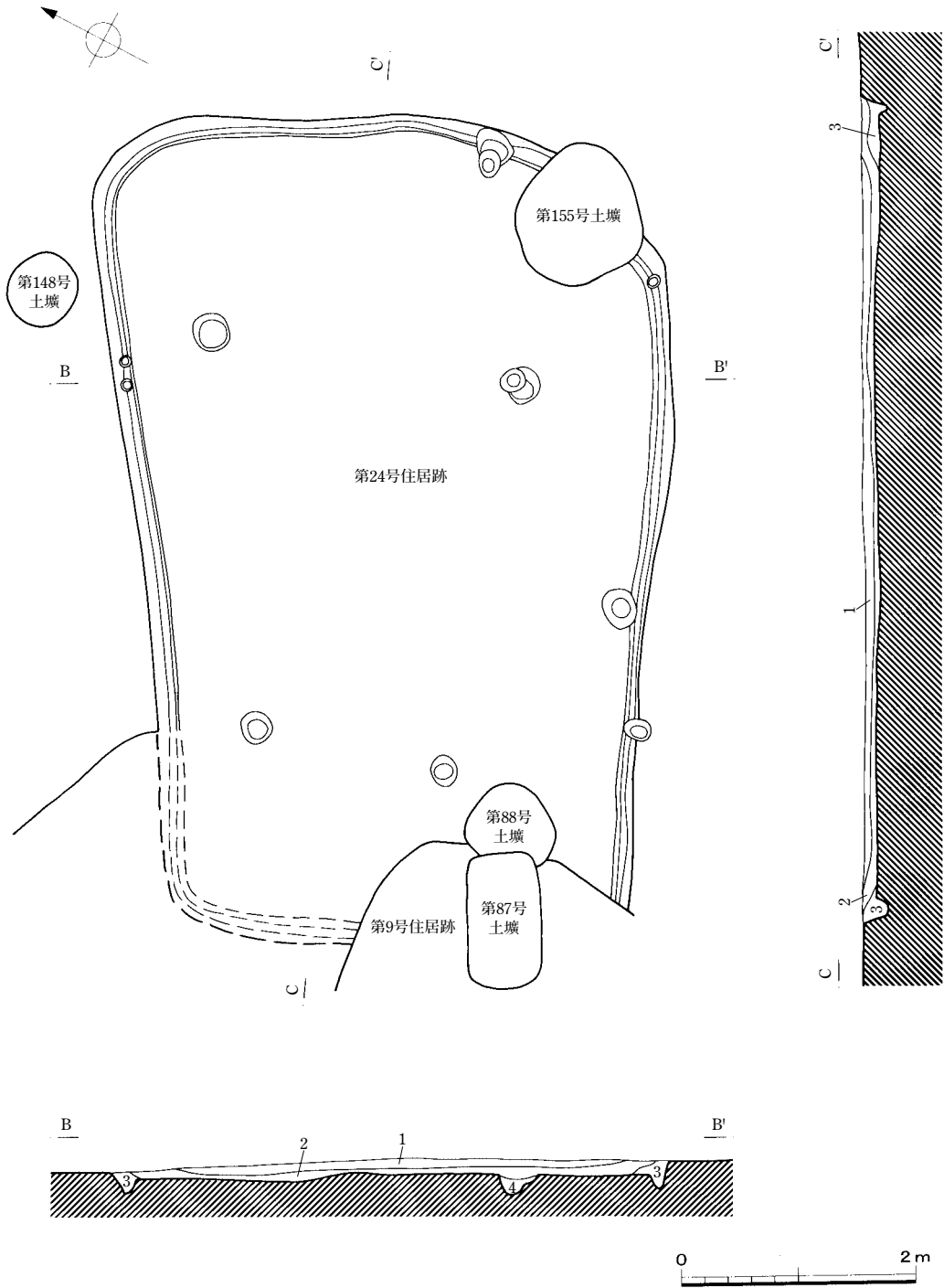


第78図 第23号住居跡

第24号住居跡土層説明

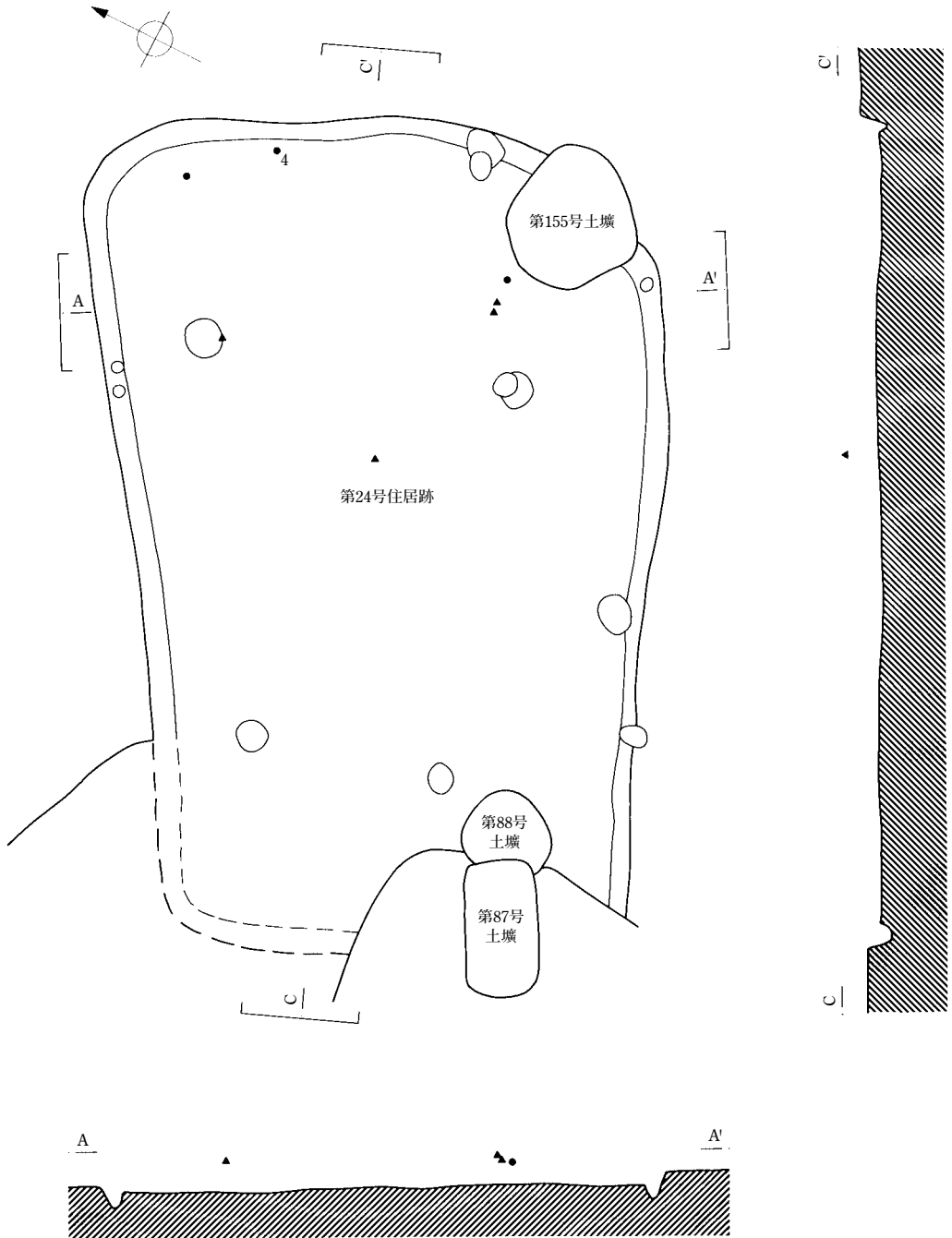
- | | | |
|-----|--------|--|
| 第1層 | 褐色土層 | YP粒子をかなり多量に、YP粒(φ2mm)を均一に、ローム粒を少量、ローム小ブロック(φ3mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに非常に強い。 |
| 第2層 | 茶褐色土層 | YP粒子を均一に、ローム粒を少量、YP粒(φ2mm)・ロームブロック(φ5mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに非常に強い。 |
| 第3層 | 灰黄褐色土層 | 褐色粒子を多量に、YP粒子を均一に、YP粒(φ2mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに非常に強い。 |
| 第4層 | 灰褐色土層 | ロームブロック(φ5mm)・ローム小ブロック(φ3mm)を少量、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。 |

出土遺物は、覆土から縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量と、諸磯c式の土器片が1点出土している。

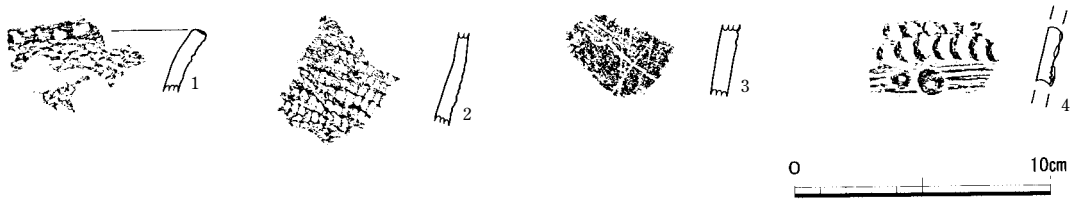


第79図 第24号住居跡

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



第80図 第24号住居跡



第81図 第24号住居跡出土遺物

第24号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	橙褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	LR単節縄文、ミガキ、内面：ミガキ	橙褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部？	半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部？	刺突列、半截竹管状工具による集合沈線→ボタン状貼付文	黄橙褐色	No. 2	

第25号住居跡（第82～87図・図版29・30-1・106）

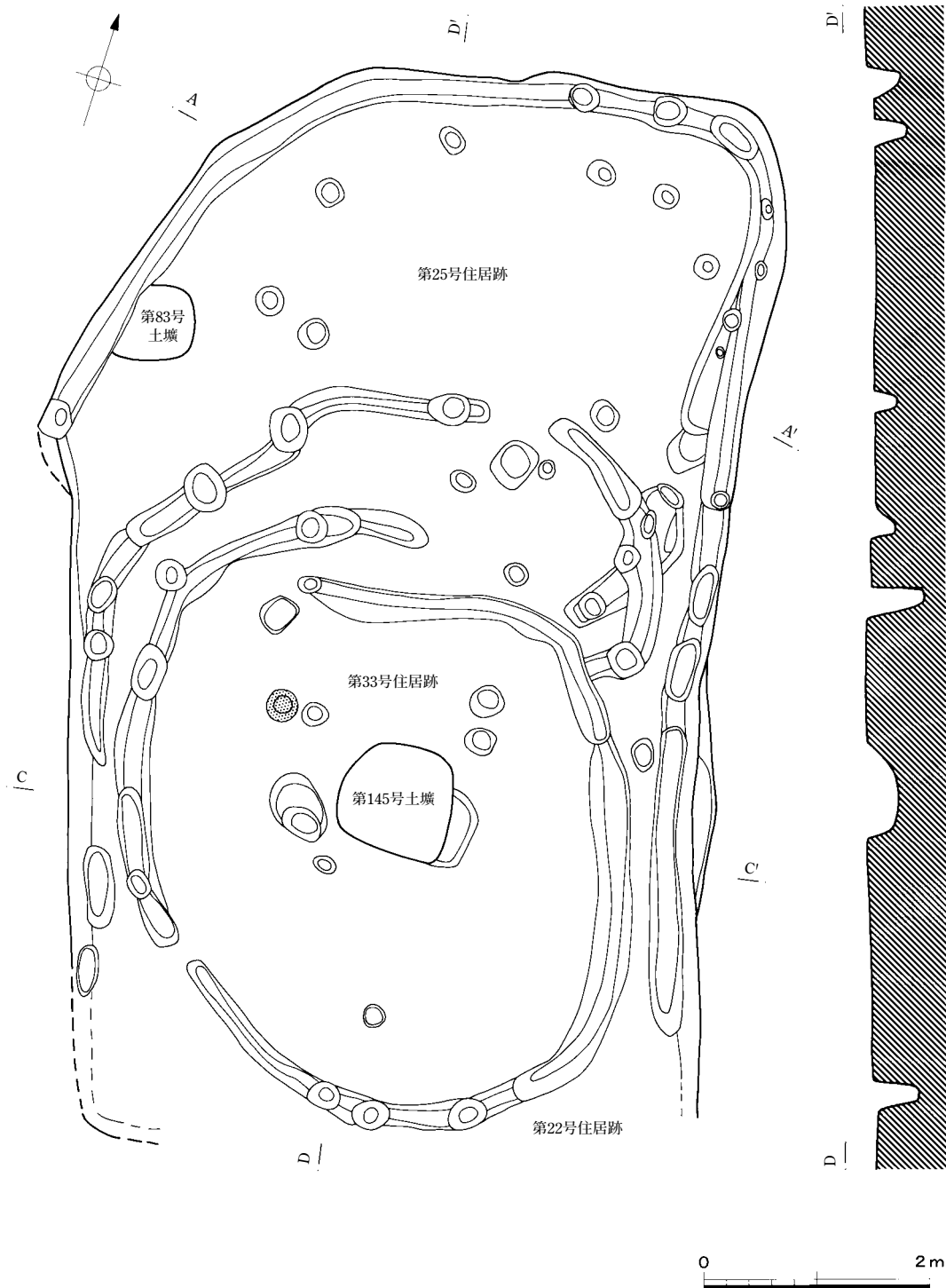
B 1 区の東側に位置している。北側には第14・30・32号住居跡が、西側には第10・11号住居跡がある。重複する第22号住居跡、第83号土壇に住居の南側を切られている。また、第33号住居跡を切っている。本住居跡は、住居中央から西壁床面付近まで削平されているため、遺存状況はあまり良好とは言えない。

平面形は、方形を基調とする台形を呈する。遺構の規模は、南北方向が5.5m、東西方向が5.8mである。北壁は、垂直気味に立ち上がるが、東壁はやや傾斜して立ち上がる。確認面からの深さは10cm程である。床面は、ローム土を主体とした貼り床で、比較的良く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居跡内には、壁に沿って小ピットを伴う幅20～30cm、深さが20cm程の壁溝が巡っている。炉跡は検出されなかった。

出土遺物は、住居跡の東壁よりの床面付近から覆土中、また壁溝内から土器片と多量の自然石が出土している。土器片は、縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が主体で、黒浜式の土器片も少量だが出土している。

土器以外には、スクレイパー1点や剝片が出土している。覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



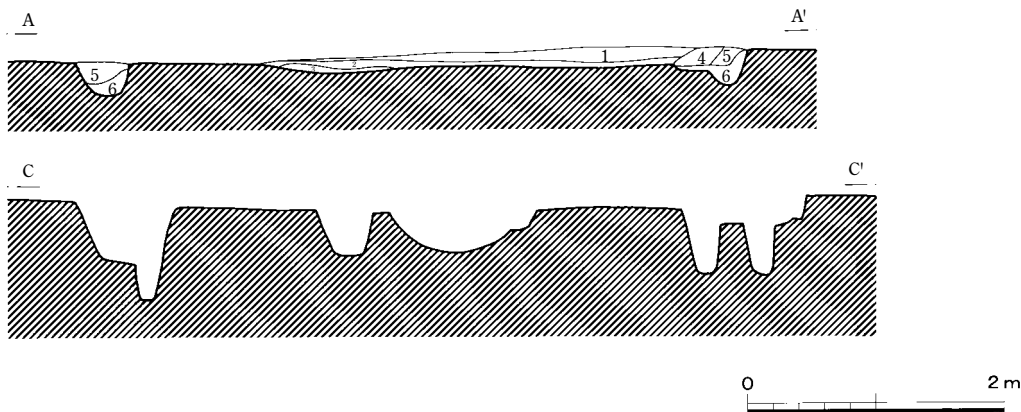
第82図 第25・33号住居跡

第33号住居跡（第82～85・88・89図・図版31・107）

B 1 区の東側に検出された。重複する第22・25号住居跡に切られている。本住居跡は、床面付近まで削平されているため、遺存状況はあまり良好とは言えない。

平面形は、残存する掘り込みの形態からすると、方形を基調とする台形を呈する。遺構の規模は、南北方向が6.5m、東西方向が4.5mである。壁は、傾斜をしながら立ち上がっており、確認面からの深さは5cm程である。床面は、平坦、ローム土を主体とした貼り床で、比較的良く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居跡内には、壁に沿って小ピットを伴う幅20～30cm、深さが40cm程の壁溝が巡っている。また、北側には、幅20～30cm、深さ20cm程の壁溝が、南側で途切れているが巡っていることから、住居の拡張や建て替えなどが行われていたのではないかとと思われる。

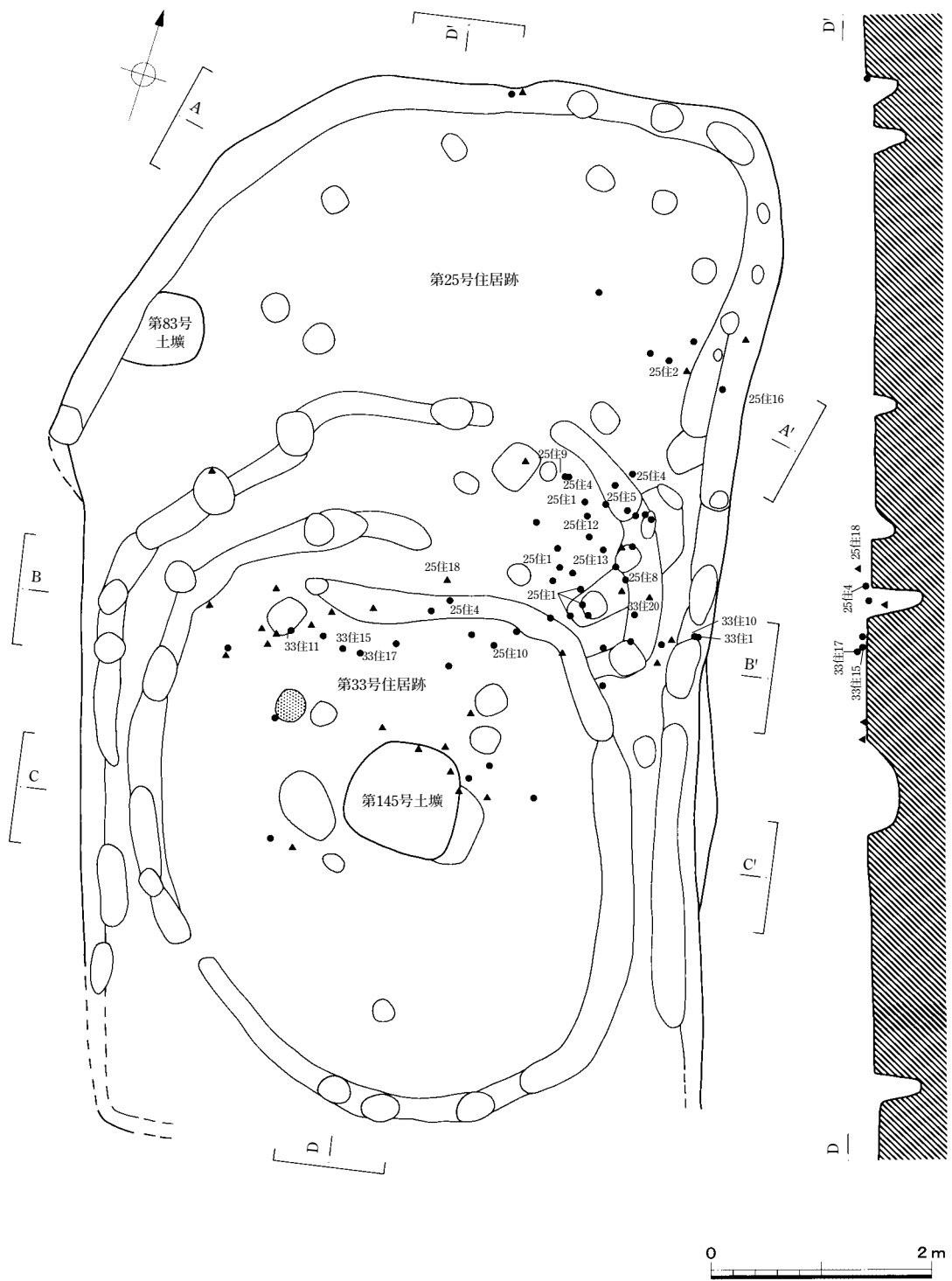
炉跡は、住居の中央より西よりの壁溝近くに検出された。炉体土器を伴う。平面形は、18cm×18cmのほぼ円形である。深さは、20cm程である。炉壁は、



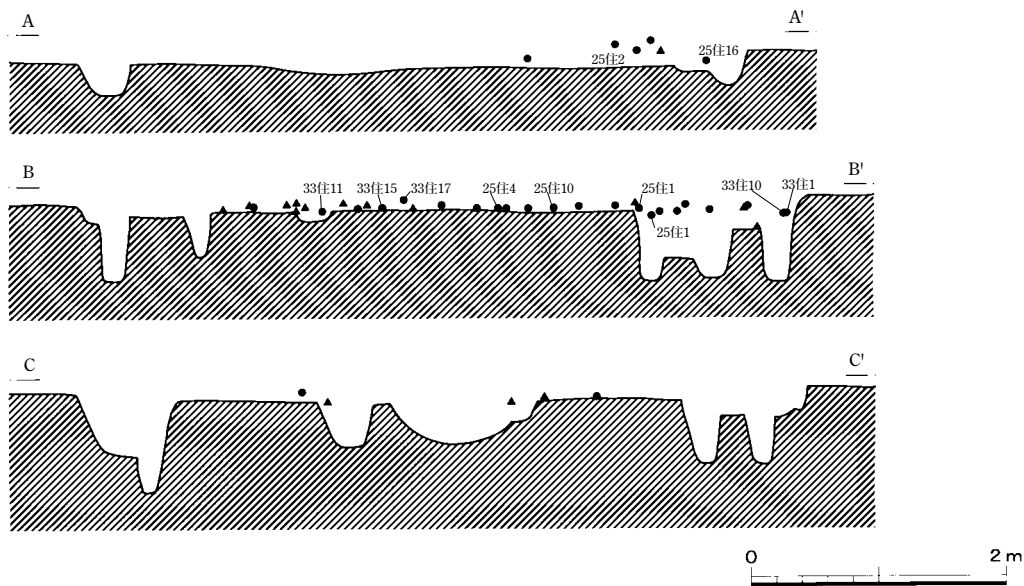
第83図 第25・33号住居跡

第25号住居跡土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子をかなり多量に含む。YP粒（ ϕ 2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ロームブロック（ ϕ 1.5cm）をやや多量に、YP粒子を均一に含む。ローム粒・焼土小ブロック（ ϕ 3mm）を少量、YP粒（ ϕ 2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 褐色土層 ローム粒をかなり多量に含む。ロームブロック（ ϕ 1.5cm）を少量、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗灰褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒子を少量、YP粒（ ϕ 2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第5層 黒褐色土層 ローム粒を均一に、橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第6層 暗灰褐色土層 ローム粒をかなり多量に、ローム小ブロック（ ϕ 5mm）・黒褐色粒子を少量、YP粒（ ϕ 2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。



第84図 第25・33号住居跡



第85図 第25・33号住居跡

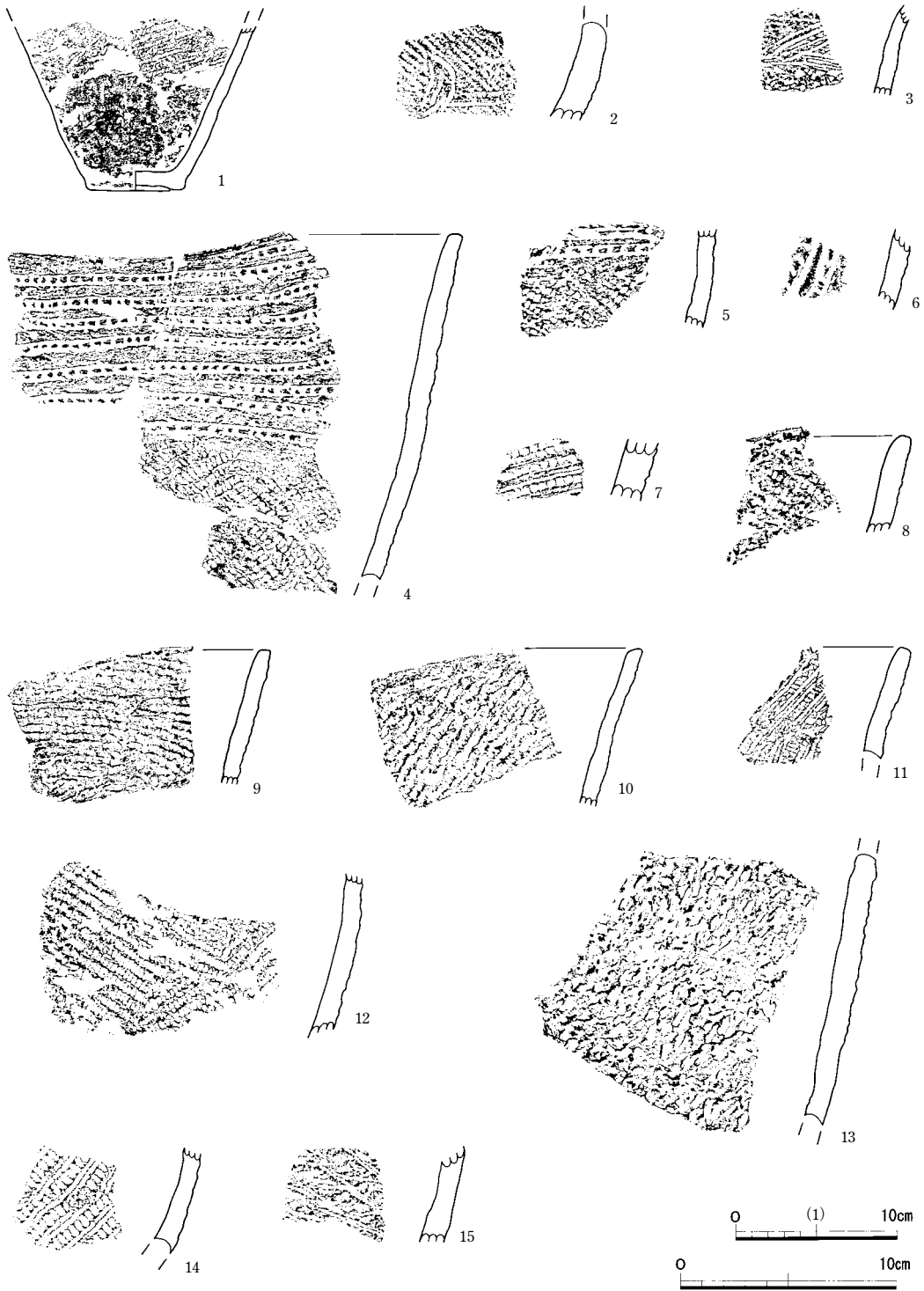
傾斜しながら直線的に立ち上がり、ほとんど焼けていなかった。底面は、丸みを持つ。炉跡は、掘りこみは明確ではなく、炉壁もほとんど焼けていないことから、貼り床構築時に埋設された埋甕炉と考えられる。

出土遺物は、炉体土器（第88図2）として口縁部と胴部下半から底部を欠損した深鉢が出土している。無節縄文が施文されている。また、住居跡の中央付近から北壁と東壁にかけての覆土中や壁溝内から、縄文時代前期中葉の有尾式の土器片と多量の自然石が出土している。土器以外には、スクレイパー1点と石皿の破片が1点と剥片が出土している。覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

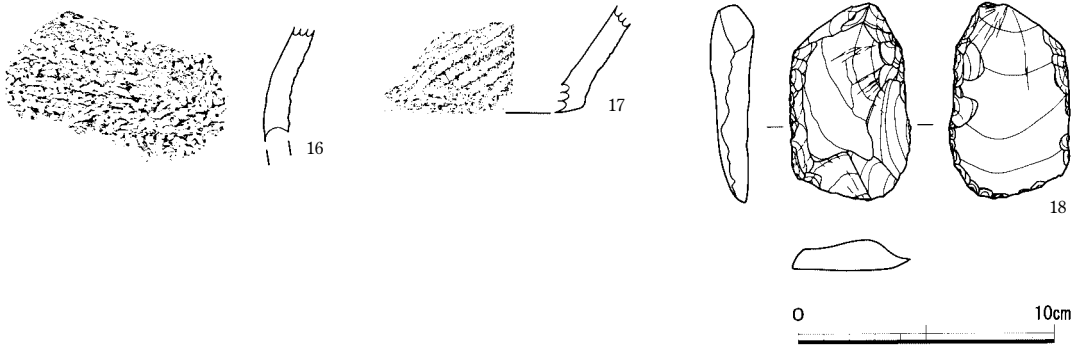
本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第25号住居跡出土遺物観察表

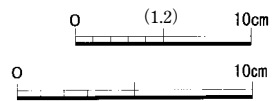
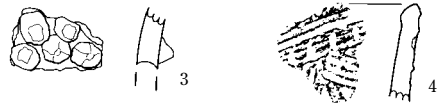
No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部～ 底部	R・L無節縄文（羽状）	赤褐色	No. 1・23・ 31・32・34	
2	縄文土器	口縁～ 胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	No. 9	
3	縄文土器	口縁部	単節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	



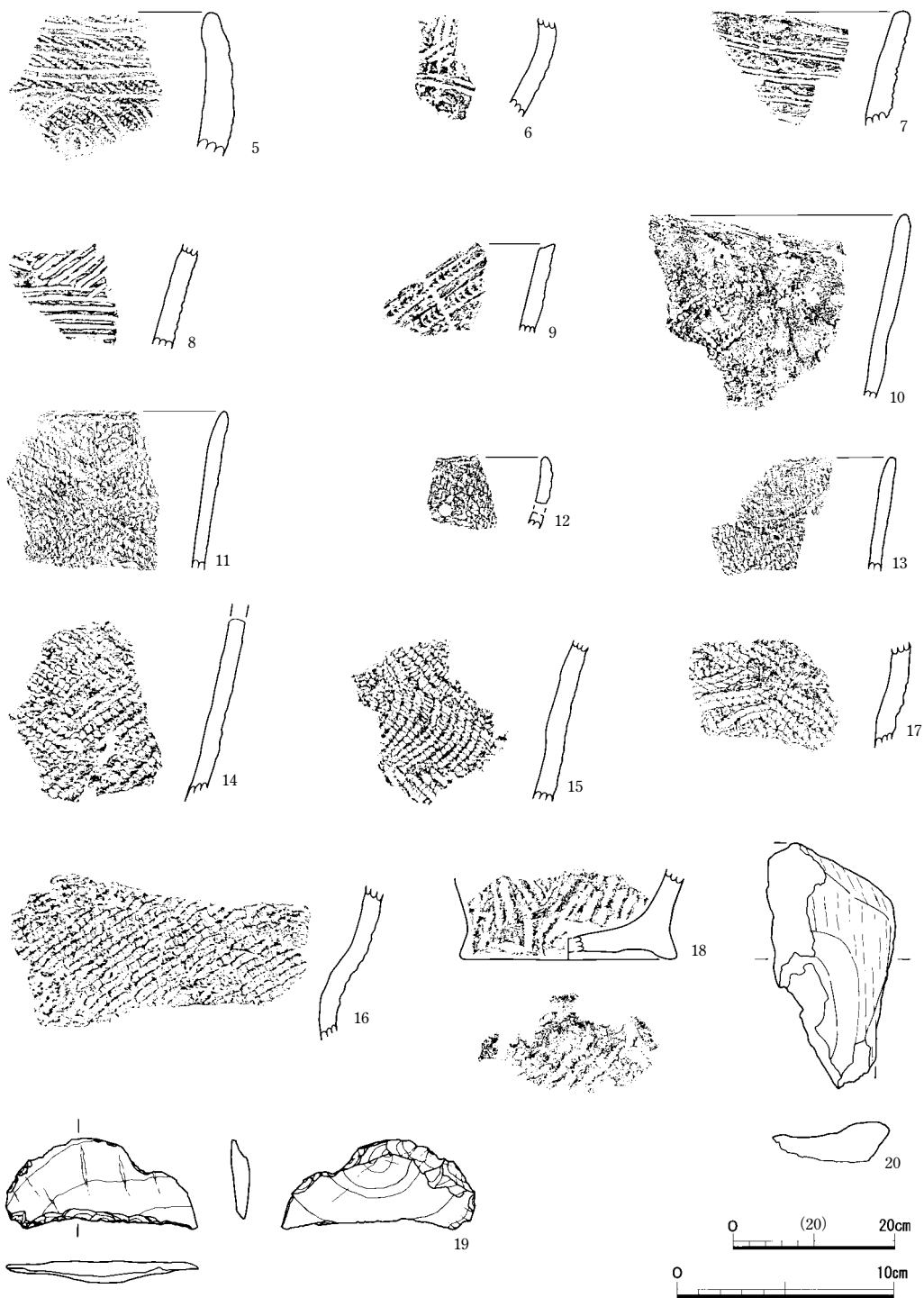
第86图 第25号住居跡出土遺物 (1)



第87图 第25号住居跡出土遺物 (2)



第88图 第33号住居跡出土遺物 (1)



第89图 第33号住居跡出土遺物(2)

4	縄文土器	口縁～ 胴部	RL・LR単節縄文（羽状）→半截竹管状工具による 押引	褐色	No.7・12・ 14	
5	縄文土器	口縁～ 胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による押引	黒色	No.24	
6	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黒褐色	覆土	
7	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→列点状刺突文	橙褐色	覆土	
8	縄文土器	口縁部	単節縄文	黄褐色	No.21	
9	縄文土器	口縁部	R無節縄文	黒褐色	No.14	
10	縄文土器	口縁部	L無節縄文	明褐色	No.6	
11	縄文土器	口縁部	付加条縄文	褐色	覆土	
12	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状・0段多条）	明赤褐色	No.19	
13	縄文土器	胴部	LR単節縄文	褐色	No.22	
14	縄文土器	胴部	合撚	褐色	No.35	
15	縄文土器	胴部	付加条縄文	褐色	覆土	
16	縄文土器	胴部	結節	明赤褐色	No.10	
17	縄文土器	底部	LR単節縄文	橙褐色	覆土	
18	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー

第33号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	灰褐色	No.17	
2	縄文土器	胴部	L・R無節縄文（羽状）	浅黄褐色	炉跡No.2	
3	縄文土器	口縁部	貼付文	黄橙褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線・刺突	褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
7	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	覆土	
8	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
9	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	橙褐色	覆土	
10	縄文土器	口縁部	LR単節縄文	暗橙褐色	No.17	
11	縄文土器	口縁部	L・R無節縄文（羽状）	暗橙褐色	No.18	
12	縄文土器	口縁部	R無節縄文	褐色	覆土	穿孔

13	縄文土器	口縁部	L無節縄文	暗褐色	覆土	
14	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状)	褐色	覆土	
15	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状・0段多条)	黄褐色	No. 8	
16	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄橙褐色	炉 No. 1	
17	縄文土器	胴部	付加条縄文?	明褐色	No. 9	
18	縄文土器	底部	R無節縄文、底部：R無節縄文	赤褐色	覆土	
19	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー
20	石器	—	—	—	覆土	石皿

第26号住居跡 (第90・91図・図版30-2・108-1)

B 1 区の西側に位置する。東側には第15・21・23号住居跡、北側には第16～20号住居跡がある。本住居跡は、床面付近まで削平されて、第9号住居跡、第24号住居跡、第40号土壇に切られている。また第156号土壇を切っているなど重複が多いため、遺存状況はあまり良好とは言えない。住居跡の一部が調査区外であるため、遺構の全容は不明である。

平面形は、残存する掘りこみの形態から方形を基調とした不整形台形を呈するようである。遺構の規模は、東西方向が4.2m、南北方向が4.5mである。壁は、傾斜して立ちあがり、確認面からの深さは10cm程である。床面は、ローム土を主体とした貼り床で、若干起伏をもって中央あたりがいくらか窪んでいる。中央は比較的良く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には、炉跡や壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式や前期後半の諸磯b式、諸磯c式の土器片が少量と、縄文時代前期中葉期に比定される土器片と多量の自然石が出土している。土器以外には、敲石1点と剝片が出土している。自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

本住居跡の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第26号住居跡土層説明

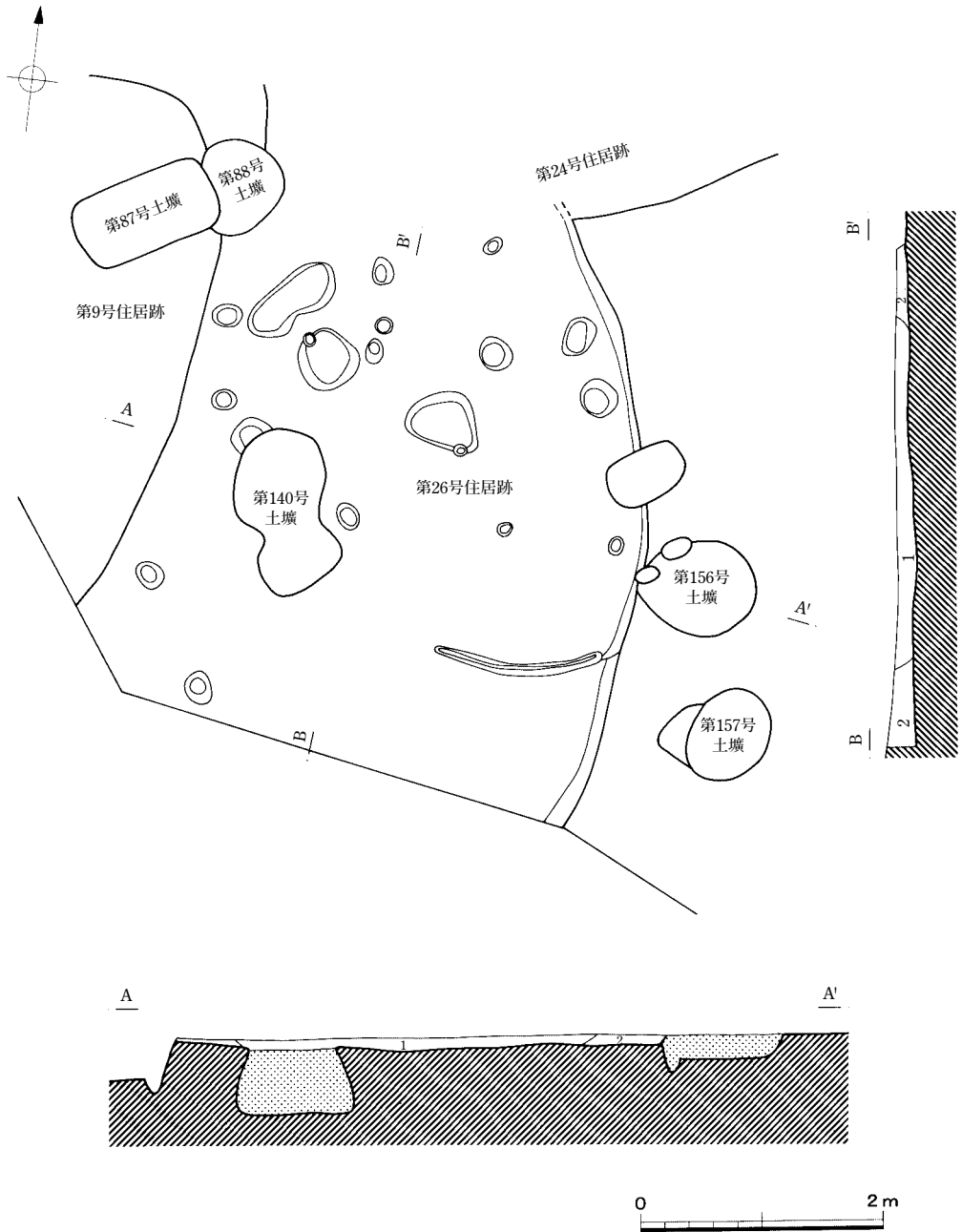
第1層 暗茶褐色土層 ローム小ブロック(φ5mm)をやや多量に、YP粒子・マンガン粒を均一に、YP粒(φ2mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第2層 暗褐色土層 YP粒子・ローム粒を均一に、ロームブロック(φ2cm)を少量、YP粒(φ2mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

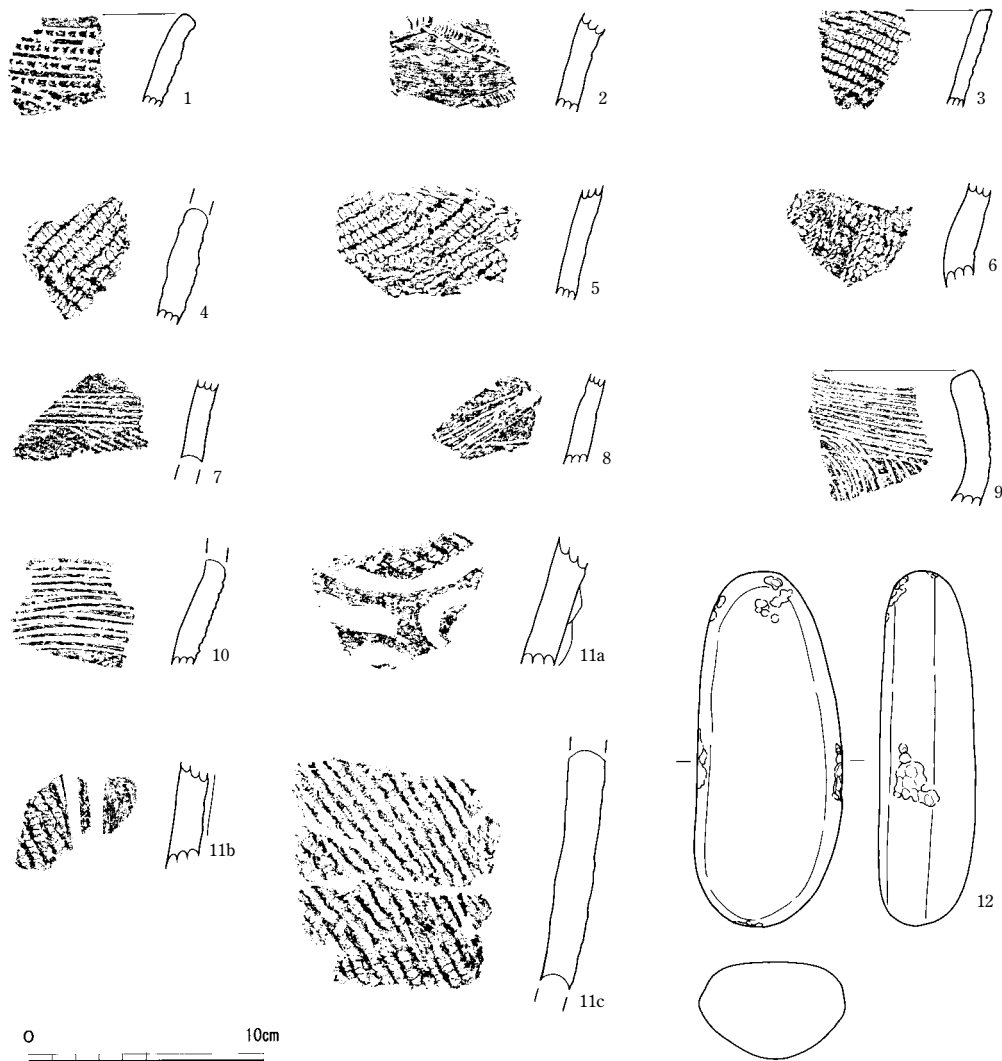
第27号住居跡 (第92図・図版108-2)

B 1 区の中央付近に位置する。北側には第12・13号住居跡が、西側には第24号住居跡、南側には第23号住居跡がある。本住居跡は、床面付近まで削平され

て、遺存状況はあまり良好とは言えない。重複する第13号住居跡、第69号土壌に切られているが、また第28・29号住居跡を切っている。



第90図 第26号住居跡



第91図 第26号住居跡出土遺物

第26号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	LR単節縄文(0段多条)	橙褐色	覆土	
4	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状・0段多条)	黄褐色	覆土	

5	縄文土器	胴部	LR単節縄文	褐色	覆土	備考
6	縄文土器	胴部	付加条縄文?	黄褐色	覆土	
7	縄文土器	胴部	縄文→半截竹管状工具による集合沈線	橙褐色	覆土	
8	縄文土器	胴部	単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	橙褐色	覆土	
9	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	黄褐色	覆土	
10	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	橙褐色	覆土	
11	縄文土器	口縁部 ～胴部	LR単節縄文→隆帯→磨消	明赤褐色	覆土	a～c同一個体
12	石器	—	—	—	覆土	磨石・敲石

平面形は、残存する掘りこみの形態から、方形を基調とした台形を呈する。

遺構の規模は、東西方向が4.5m、南北方向が3.2mである。壁は、垂直ぎみに立ちあがり、確認面からの深さは10cm程である。床面は、ローム土を主体とした貼り床で、中央は比較的良く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には、炉跡や壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、覆土中から縄文時代前期後半の諸磯式の土器片が少量と、前期前葉の花積下層式と前期中葉に比定される土器片と自然石が出土している。自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

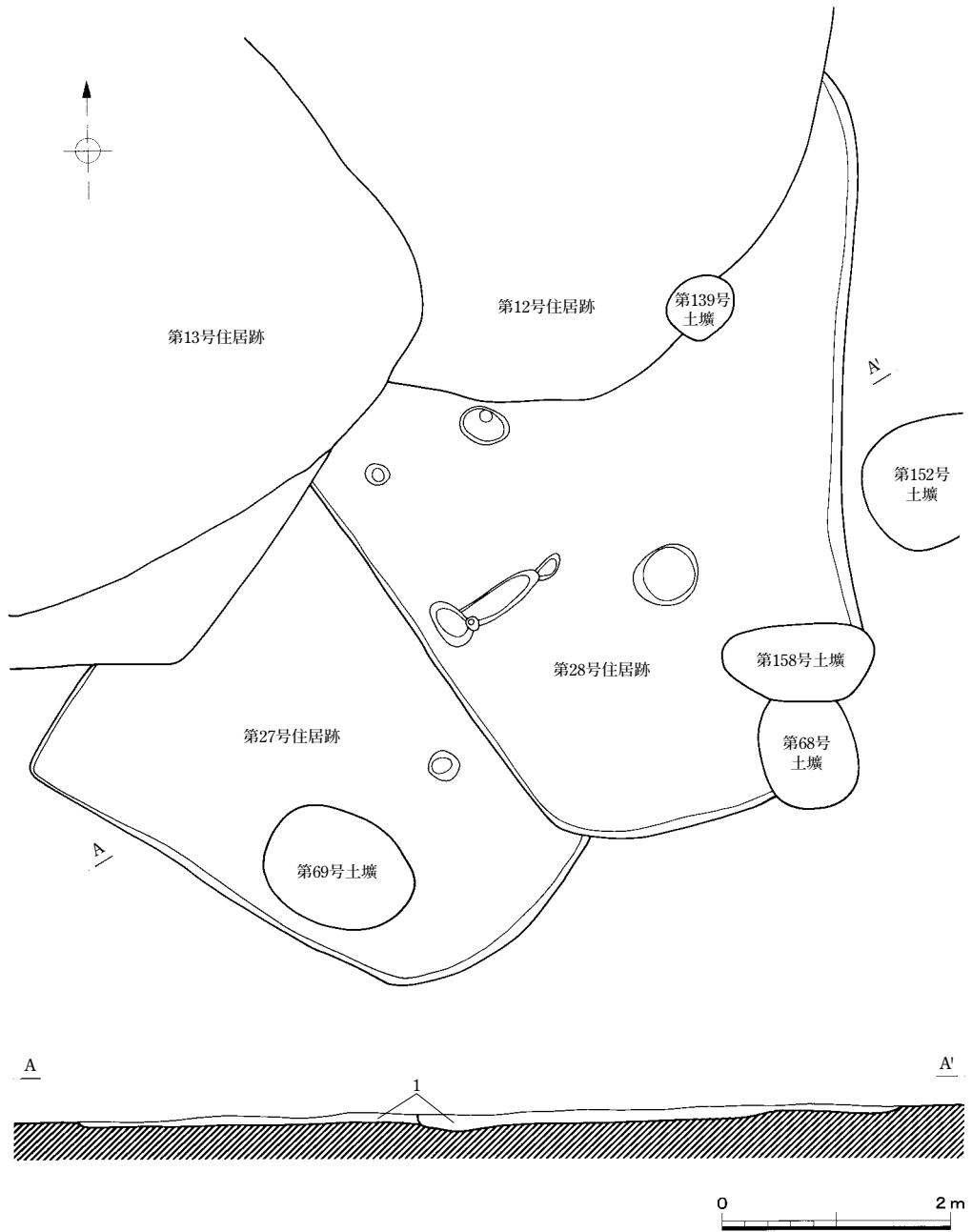
第28号住居跡（第92図）

B1区の中央付近に位置する。本住居跡は、床面付近まで削平されて、遺存状況はあまり良好とは言えない。重複する第13・27号住居跡、第68・139・158号土壇に切られている。

平面形は、残存する掘りこみの形態から台形を呈する。遺構の規模は、東西方向が4.7m、南北方向が5.5mである。壁は、垂直ぎみに立ちあがり、確認面からの深さは15cm程である。床面は、ローム土を主体とした貼り床で、若干起伏をもち中央あたりがいくらか窪んでいる。中央は比較的良く締まっているが、壁に近づくにつれてやや軟質である。住居内には、炉跡や壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、ほとんどなく剝片と自然石が出土している。自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

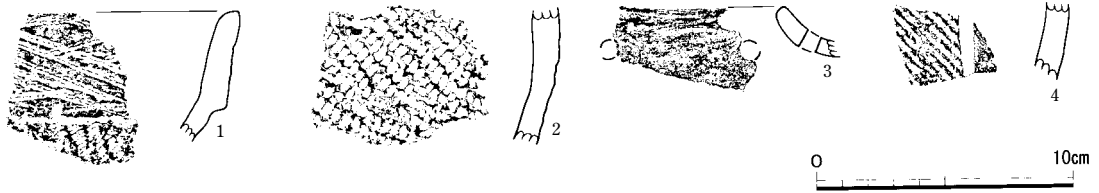
本住居跡の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。



第92図 第27・28号住居跡

第27・28号住居跡土層説明

- | | |
|------------------------------------|---|
| <p>第1層 暗褐色土層</p> <p>第2層 淡黒褐色土層</p> | <p>ロームブロック (φ 1~3cm) をまばらに、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。</p> <p>YP粒 (φ 2mm) を多量に、ロームブロック (φ 1~2cm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。</p> |
|------------------------------------|---|



第93図 第27号住居跡出土遺物

第27号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	肥厚口縁、撚糸側面圧痕、RL単節縄文（0段多条）	黄褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	RL単節縄文	灰黄褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	穿孔	赤褐色	覆土	浅鉢
4	縄文土器	胴部	L無節縄文→沈線→磨消	黄褐色	覆土	

第34号住居跡（第94図・図版108-3）

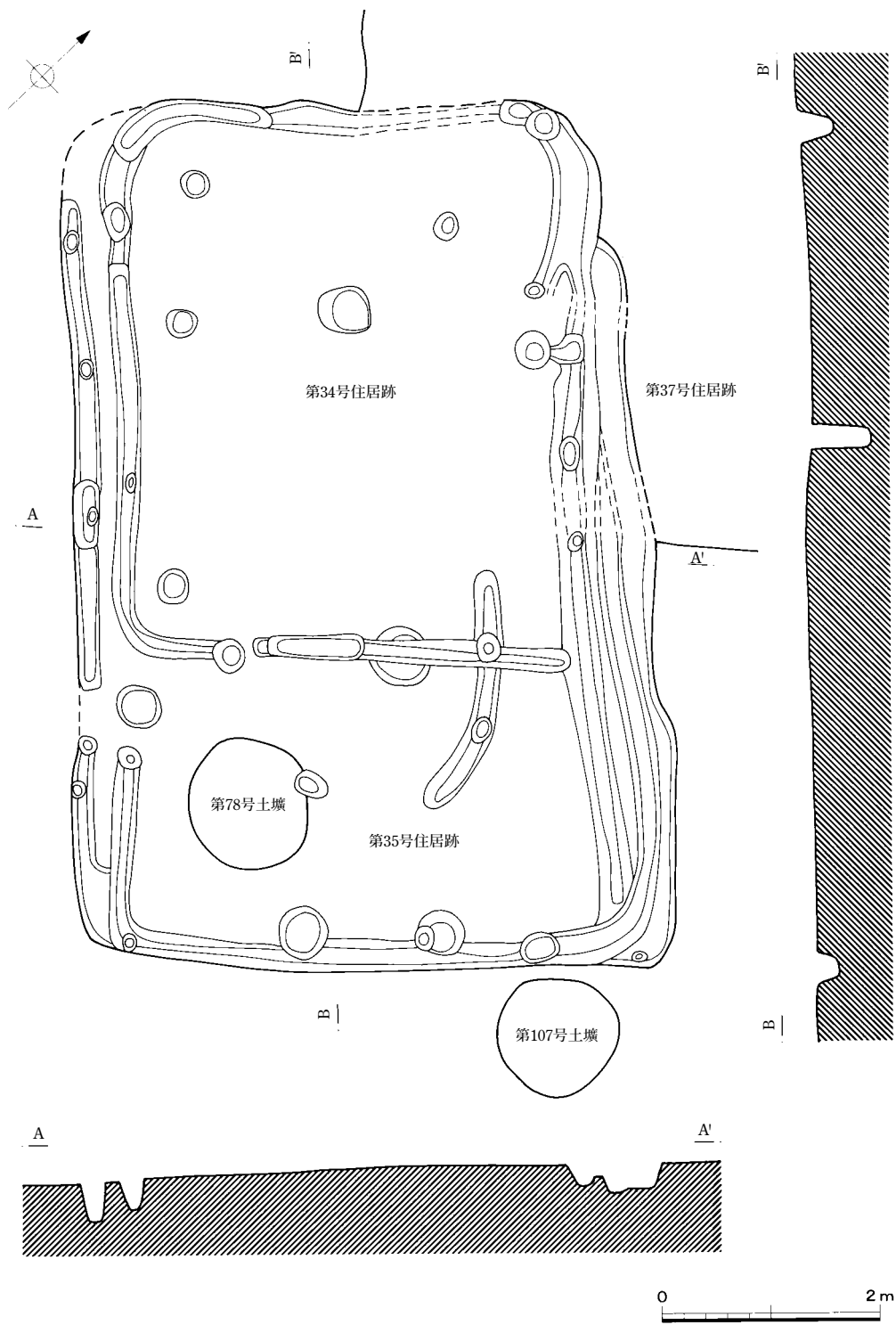
B 1 区の中央より北側に位置している。東側には、第22・25・33号住居跡、南側には第10・11号住居跡、北側には第14・30・32号住居跡がある。第35号住居跡、第78号土壇と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

本住居跡は、すでに住居跡の床面下まで削平を受けて、また第1号溝跡に切られているため、遺存状況はあまり良好とは言えない。かろうじて残存していたのは巡っていたと推測される壁溝とピットだけである。

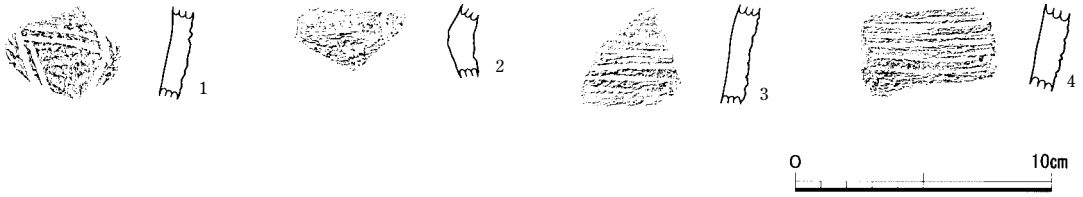
平面形は、残存する掘りこみの形態からコーナーがやや丸みが強い長方形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が約4.3m、南北方向が約7.6mである。住居内には、小ピットを伴う幅20～30cm、深さが20cm程の壁溝が、また内側にも小ピットを伴う幅20～30cm、深さが20cm程の壁溝が巡っていることから、住居の拡張や建て替えなどが行われていたのではないかと考えられる。

出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の黒浜式と有尾式の土器片が少量と、前期中葉に比定される土器片と自然石が出土している。

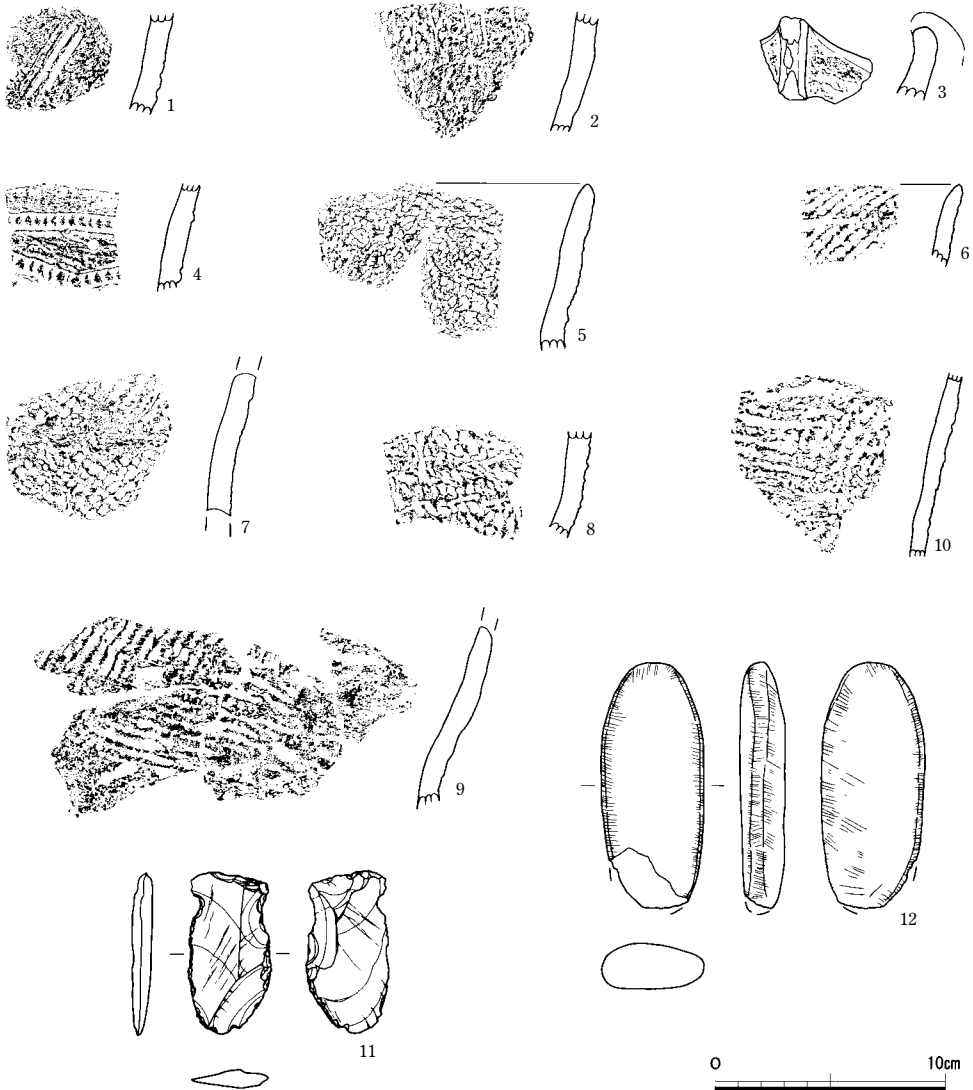
本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



第94图 第34・35号住居跡



第95图 第34号住居跡出土遺物



第96图 第35号住居跡出土遺物

第35号住居跡（第94図・図版109-1）

本住居跡は、すでに住居跡の床面下まで削平を受けて、また第1号溝跡に切られているため、遺存状況はあまり良好とは言えない。かろうじて残存していたのは巡っていたと推測される壁溝とピットだけである。

平面形は、残存する掘りこみの形態からコーナーがやや丸み強い長台形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が約5.5m、南北方向が約7.2mである。住居内には、小ピットを伴う幅20～30cm、深さ20cm程度の壁溝が巡っている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が少量と、自然石が出土している。土器以外には、石匙（第96図11）1点と剝片が出土している。また、土器製作時に内面の研磨具として使われた紡錘状擦石（第96図12）が1点出土している。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第34号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	R無節縄文→半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黄褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	

第35号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	縄文→沈線	黒褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	縄文→沈線	黄褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	R無節縄文→貼付文	褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押印	橙褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部	LR単節縄文	褐色	覆土	
7	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	橙褐色	覆土	
8	縄文土器	胴部	RL単節縄文	橙褐色	覆土	
9	縄文土器	胴部	R・L無節縄文（羽状）	灰黄褐色	覆土	
10	縄文土器	胴部	R・L無節縄文（羽状）	暗褐色	覆土	
11	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー
12	石器	—	—	—	覆土	紡錘形擦石

第36号住居跡 (第97・98図・図版109-2)

本住居跡は、すでに住居跡の床面下まで削平を受けて、また第1号溝跡に切られているため、遺存状況はあまり良好とは言えない。かろうじて残存していたのは巡っていたと推測される壁溝とピットだけである。第34・35・37号住居跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

平面形は、残存する掘りこみの形態からコーナーがやや丸みが強い長方形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が約5.9m、南北方向が約7.3mである。住居内には、小ピットを伴う幅25cm、深さ15cm程の壁溝が巡っている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式と黒浜式の土器片が少量と、縄文時代前期中葉に比定される土器片や自然石が出土している。土器以外には、スクレイパー1点と剝片が出土している。覆土中から出土した自然石の中には、被熱により赤色化したものも見られる。

本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第37号住居跡 (第97・99図・図版110-1)

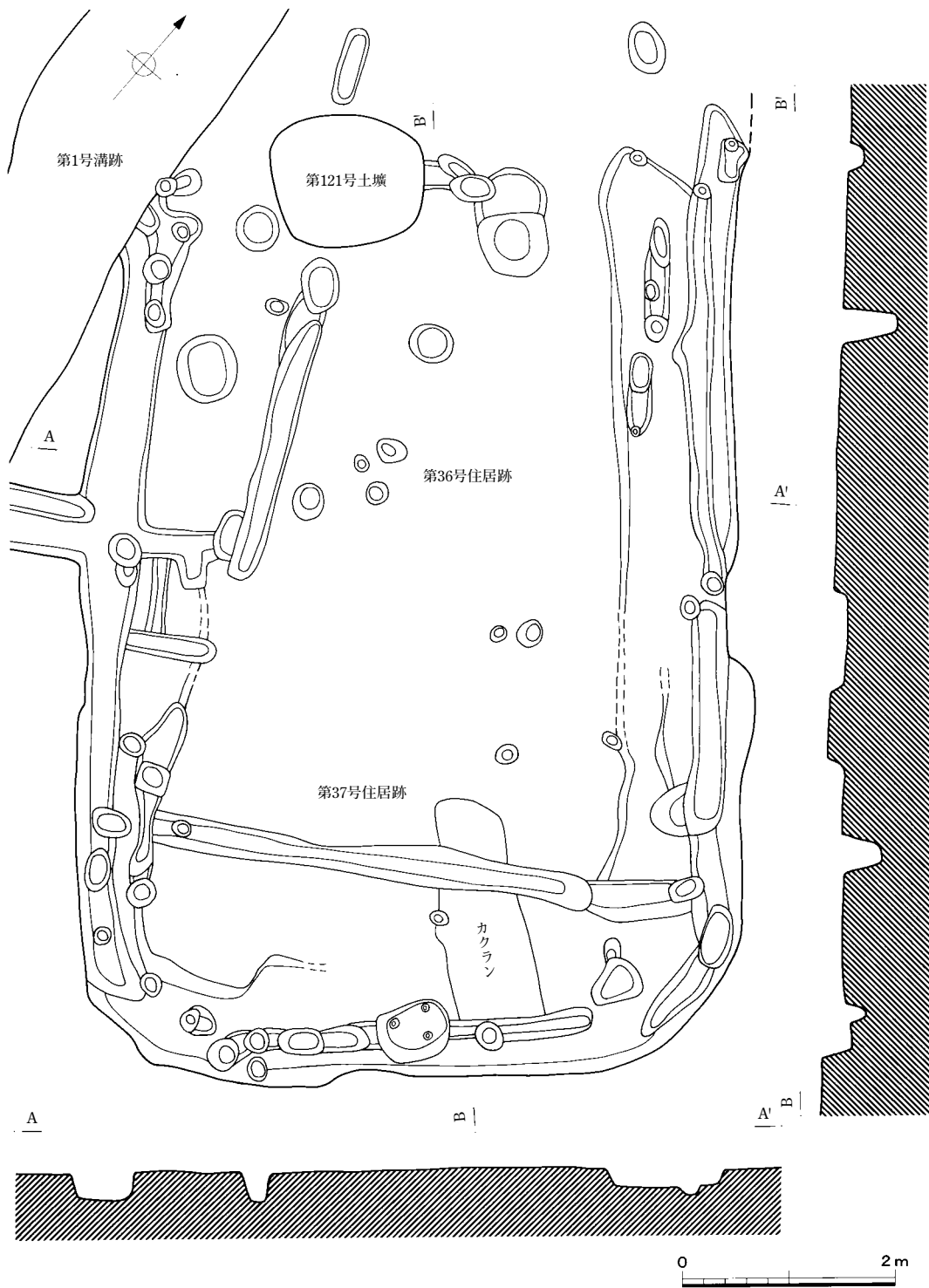
平面形は、残存する掘りこみの形態からコーナーがやや丸みが強い長方形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が約3.7m、南北方向が約6.2mである。住居内には、小ピットを伴う幅20cm、深さ15cm程の壁溝が巡っている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式と縄文時代前期後半の諸磯c式の土器片が少量と自然石が出土している。土器以外には、スクレイパー1点と剝片が出土している。

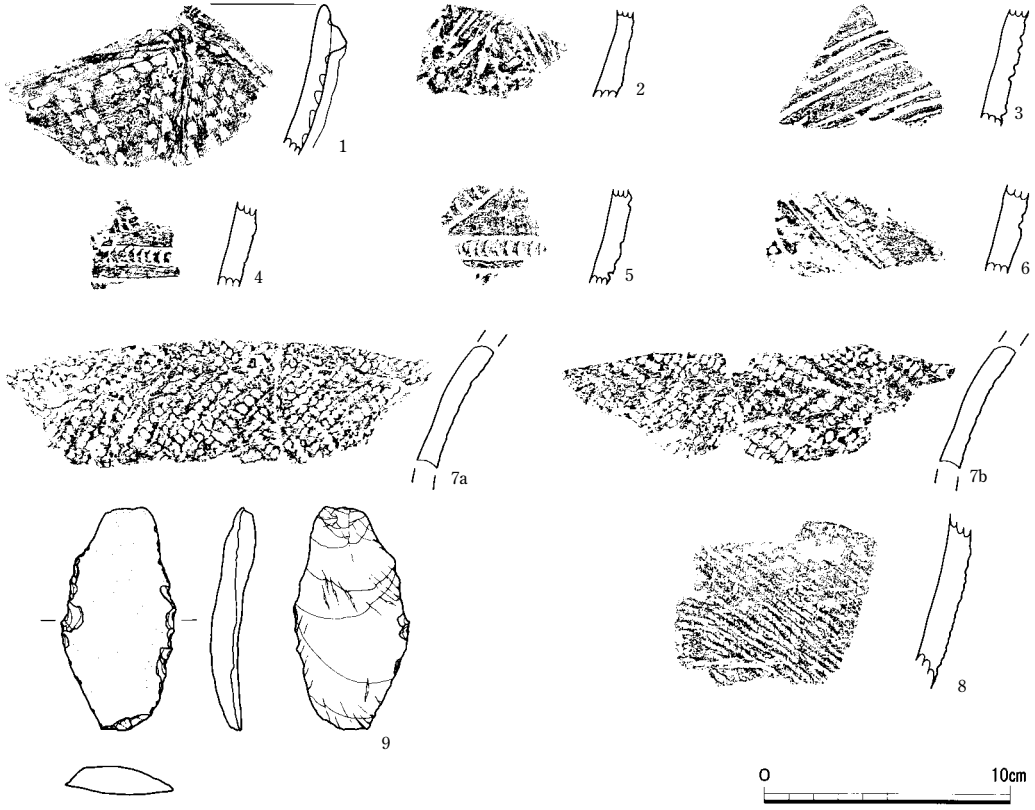
本住居跡の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第36号住居跡出土遺物観察表

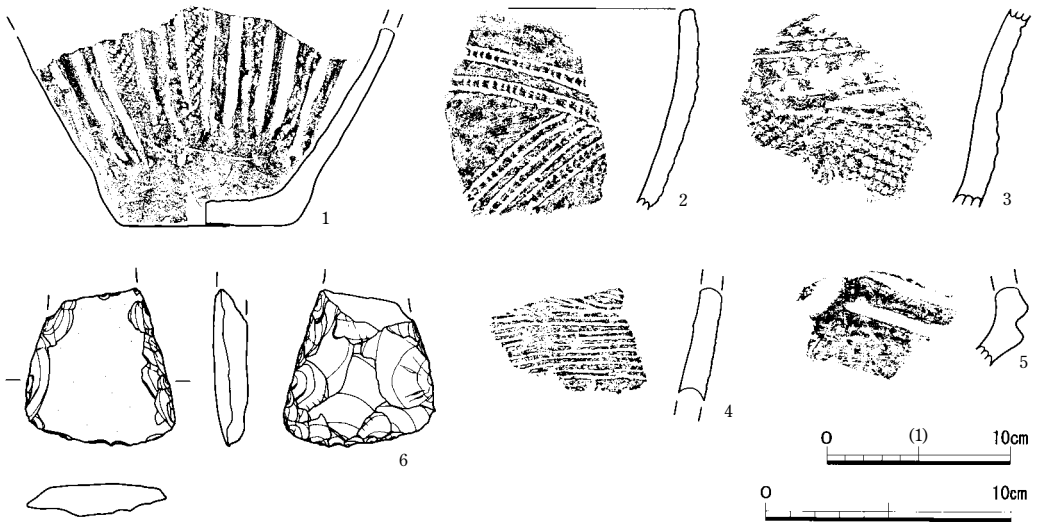
No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	隆帯→半截竹管状工具による刺突	褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	明褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	赤褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	暗褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部	沈線・列点状刺突文	褐色	覆土	
7	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状)	橙褐色	覆土	
8	縄文土器	胴部	R無節縄文	黒褐色	覆土	
9	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー



第97図 第36・37号住居跡



第98图 第36号住居跡出土遺物



第99图 第37号住居跡出土遺物

第37号住居跡出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部～ 底部	RL単節縄文→沈線→磨消	黄橙褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部～ 胴部	R・L無節縄文（羽状）→半截竹管状工具による 沈線→半截竹管状工具による押引	赤褐色	覆土	
4	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	隆帯	黄褐色	覆土	
6	石器	—	—	—	覆土	打製石斧

第38号住居跡（第100図）

B 1 区の東端に位置している。西側に第14・第30・第32号住居跡、南側には第22・25・33号住居跡がある。本住居跡は、すでに住居跡の床面下まで削平を受けているため、かろうじて残存していたのは巡っていたと推測される壁溝だけである。さらに、住居跡の東側が調査区外であるため、全容は不明である。

平面形は、残存する掘りこみの形態からコーナー部分がやや丸みの強い台形を呈すると思われる。確認できた規模は、およそ東西方向が6 m、南北方向が4 mである。幅30cm、深さ30cm程の壁溝が巡っている。出土遺物はない。

本住居跡の帰属時期は、掘りこみの形態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

b. 土壌

第54号土壌（第101・106・107図・図版32・110-2・111）

B 1 区の南側に位置する。北側には、第55・56号土壌があり、西側には第58号土壌がある。

平面形は、不整形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が165cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは31cmである。底面は、平坦である。

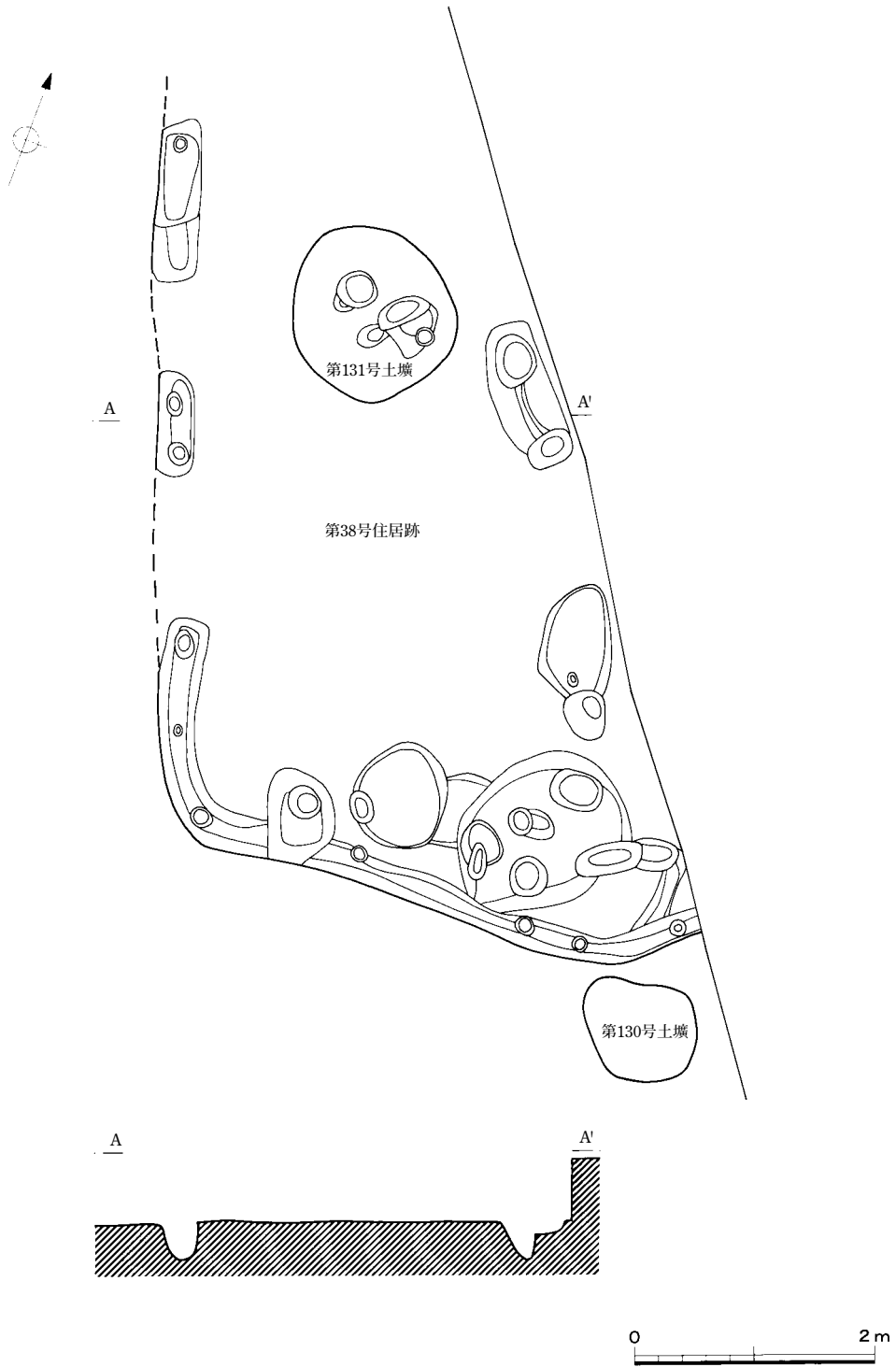
出土遺物は、覆土中に縄文時代前期中葉の有尾式の深鉢が、覆土の比較的上層にある程度原形を留めて、つぶれた状態で出土している。

本土壌の帰属時期は、出土遺物や覆土から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第55号土壌（第101・107図・図版33-1・111）

B 1 区の南側に位置する。南側に第54号土壌がある。重複する第56号土壌を切っている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が65cm、南北方向が



第100図 第38号住居跡

75cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは16cm程である。底面は、丸みをもっている。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片と自然石が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代の前期中葉期と考えられる。

第56号土壙（第101図・図版33-2）

B 1 区の南側に位置する。重複する第55号土壙に切られている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が70cm、南北方向が84cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは16cm程である。底面は、丸みをもっている。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第57号土壙（第101・107図・図版34-1・111）

B 1 区の南側に位置する。南側に第55・56号土壙、重複するピットを切っている。

平面形は、不整形を呈する。遺構の規模は、東西方向が195cm、南北方向が105cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、若干起伏をもち、東壁付近が窪んでいる。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片と前期後半の諸磯b式を主体とする土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から前期後半の諸磯b式期と考えられる。

第58号土壙（第101図・図版34-2）

B 1 区の西側に位置する。東側には、第56号土壙、西側には第59号土壙が隣接している。重複するピットに切られている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が80cm、南北方向が70cmである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは12cm程である。底面は、若干起伏をもっている。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉頃に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第59号土壙（第101図・図版35-1）

B 1 区の南側に位置する。東側には第58号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が50cm、南北方向が60cmである。壁は、垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは47cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第60号土壇（第102図・図版35-2・111）

B 1 区の中央よりやや南側に位置する。西側に第61号土壇、北側には第62号土壇がある。

平面形は、ほぼ円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が110cm、南北方向が100cmである。壁は、袋状の形態で、上半部は垂直気味に立ち上がり、下半部は丸みもちオーバーハングしている。確認面からの深さは60cm程である。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉期に比定される土器片が少量出土している。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第61号土壇（第102図・図版36-1）

B 1 区の南側に位置する。東側に第60号土壇、北側には第62号土壇がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が95cmである。壁は、袋状の形態で、上半部は緩やかに傾斜をして立ち上がり、下半部は丸みをもってオーバーハングしている。確認面からの深さは60cm程である。底面は、広く平坦である。出土遺物はない。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第62号土壇（第102図・図版36-2）

B 1 区の南側に位置する。南側には第60・61号土壇がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が70cm、南北方向が60cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、広く平坦である。出土遺物はない。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第63号土壇（第102図・図版37-1）

B 1 区の中央より南側に位置する。北側に第65号土壇がある。

平面形は、隅丸長方形を呈している。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が56cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、広く平坦である。出土遺物は土器ない。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第64号土壇（第102図・図版37-2）

B 1 区の中央より南側に位置する。西側に第65号土壇、東側に第76号土壇がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が70cm、南北方向が

80cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第65号土壌（第102・107図・図版38-1・111）

B 1 区の中央より南側に位置する。東側に第64号土壌、西側には第66号土壌、南側には第63号土壌がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が125cmである。確認面からの深さは70cm程である。壁は、袋状の形態で、下部は丸みをもってオーバーハングしている。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が少量出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第66号土壌（第102・107図・図版38-2・111）

B 1 区の中央より南側に位置する。東側に第65号土壌、西側に第67号土壌、北側には第84号土壌がある。

平面形は、隅丸長方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が85cm、南北方向が130cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉頃に比定される土器片と前期後半の諸磯 b 式の土器片が少量出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉から前期後半の諸磯式 b 式期と考えられる。

第67号土壌（第103・107図・図版39-1・111）

B 1 区の中央より南側に位置する。東側に第66号土壌がある。上部が攪乱されている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が60m、南北方向が70mである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは60cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期後半の諸磯 c 式の土器片が少量出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期後半の諸磯 c 式期と考えられる。

第68号土壌（第103図・図版39-2）

B 1 区の中央付近に位置する。東側に、第77号土壌、西側には第69号土壌がある。北側には、第152号土壌がある。重複する第28号住居跡を切っているが、また第158号土壌に切られている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が

80cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは44cm程である。底面は、若干起伏があり、東壁付近が窪んでいる。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第69号土壙（第103・107図・図版40-1・111）

B 1 区の中央付近に位置する。東側には、第68・158号土壙がある。重複する第27号住居跡を切っている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が74cm、深さは70cm程である。壁は、袋状の形態で、上半部は緩やかに傾斜をして立ち上がり、下半部は丸みをもってオーバーハングしている。底面は、広く平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第70号土壙（第103図・図版40-2）

B 1 区の中央より西側に位置する。南側に第15・21号住居跡と第71号土壙、北側には第23号住居跡がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が70cm、南北方向が60cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第71号土壙（第103・107図・図版41-1・111・112）

B 1 区の南側に位置する。北側に第70号土壙がある。重複する第21号住居跡を切っている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が180cm、南北方向が155cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは25cm程である。底面は、若干の起伏をもち、中央が窪んでいる。出土遺物は、覆土中から縄文時代中期の阿玉台式や加曽利E式の土器片が出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代中期と考えられる。

第72号土壙（第104・107図・図版41-2・112）

B 1 区の中央に位置する。一部攪乱を受けている。北側に第74号土壙、東側には第10・11号住居跡、第73号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が110cmである。壁は、垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは25cm程であ

る。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第73号土壌（第104図）

B 1 区の中央に位置する。西側には第72・74号土壌、東側には、第10・11号住居跡がある。

平面形は、ほぼ円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が80cm、南北方向が75cmである。壁は、垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さ15cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉期に比定される土器片が少量出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第74号土壌（第104・107図・図版42-1・112）

B 1 区の中央に位置する。南側に第72号土壌、東側には第73号土壌がある。

平面形は、ほぼ円形を呈する。遺構の規模は、直径100cm程である。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉頃に比定される土器片と混入したと思われる縄文時代中期後半の加曾利E式の土器片が少量出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第75号土壌（第104・107・108図・図版42-2・112）

B 1 区の中央に位置する。東側には第106号土壌、第146・147号土壌、南側に第97・98・122号土壌がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、直径140cmである。壁は、垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から弥生土器の破片とスクレイパー1点が出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から弥生時代と考えられる。

第76号土壌（第104・108図・図版43-1・112）

B 1 区の東側に位置する。西側に第84号土壌、南側に第64号土壌、北側に第89～91号土壌がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が130cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは32cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉期に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第77号土壙（第104図）

B 1 区の中央付近に位置する。東側に第84号土壙、西側に第68・158号土壙、北側に第152号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が55cm、南北方向が65cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは15cm程である。底面は、若干の起伏をもち、西壁の壁際が若干窪んでいる。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉期に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第78号土壙（第104図・図版43-2）

B 1 区の中央よりやや北側に位置する。東側に第107号土壙、西側には第82号土壙、南側には第75号土壙がある。重複する第34・35号住居跡と、相互の新旧関係は不明である。

平面形は、ほぼ円形を呈している。遺構の規模は、直径が120cm程である。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉期に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第79号土壙（第105・108図・図版44-1・112）

B 1 区の西側に位置する。西側に第156・157号土壙、北側には第155号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が95cm、南北方向が105cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは50cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第80号土壙（第105・108図・図版44-2・112）

B 1 区の中央より東側に位置する。西側に第92・136・137号土壙、北側には第94号土壙が、南側には第89～91号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が80cm、南北方向が90cmである。西壁は緩やかに立ち上がるが、東壁は垂直気味に立ち上がり、深さは35cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時

代前期中葉の有尾式に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第81号土壙（第105図・図版45-1）

B 1 区の中央付近に位置する。東側に第10・11号住居跡、西側には第138号土壙、南側には第72～74号土壙、北側には104号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が80cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第82号土壙（第105・108図・図版45-2・112）

B 1 区の中央付近に位置する。東側に第34・35号住居跡、西側に第102・104号土壙、南側には第101号土壙がある。

平面形は、ほぼ円形を呈する。遺構の規模は、直径105cmである。西壁は、緩やかに立ちあがり、東壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。確認面からの深さは11cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の黒浜式、有尾式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第83号土壙（第105・108図・図版112・113）

B 1 区の東側に位置する。西側に第106・107号土壙、北側に第108・116号土壙がある。重複する第25号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い比較的整った隅丸長方形を呈しているようである。遺構の規模は、東西方向が80cm、南北方向が60cmである。西壁は緩やかに立ち上がり、東壁は、傾斜を持って立ち上がり、確認面からの深さは28cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式と前期後半の諸磯式に比定される土器片が少量とスクレイパー1点が出土している。

本土壙の帰属時期は、出土遺物から縄文時代前期中葉から前期後半の諸磯式期と考えられる。

第84号土壙（第105図）

B 1 区の中央より東側に位置する。東側に第76号土壙、西側には第68・77・152・157号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が75cm、南北方向が95cmである。壁は、やや垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは28cm程

である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第85号土壙（第105図）

B1区の東側に位置する。東側に第86・129号土壙、南側には第100号土壙がある。重複する第22号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い比較的整った隅丸長方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が200cm、南北方向が80cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第86号土壙（第105図）

B1区の東側に位置する。重複する第22号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い比較的整った隅丸長方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が210cm、南北方向が125cmである。壁は、やや垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

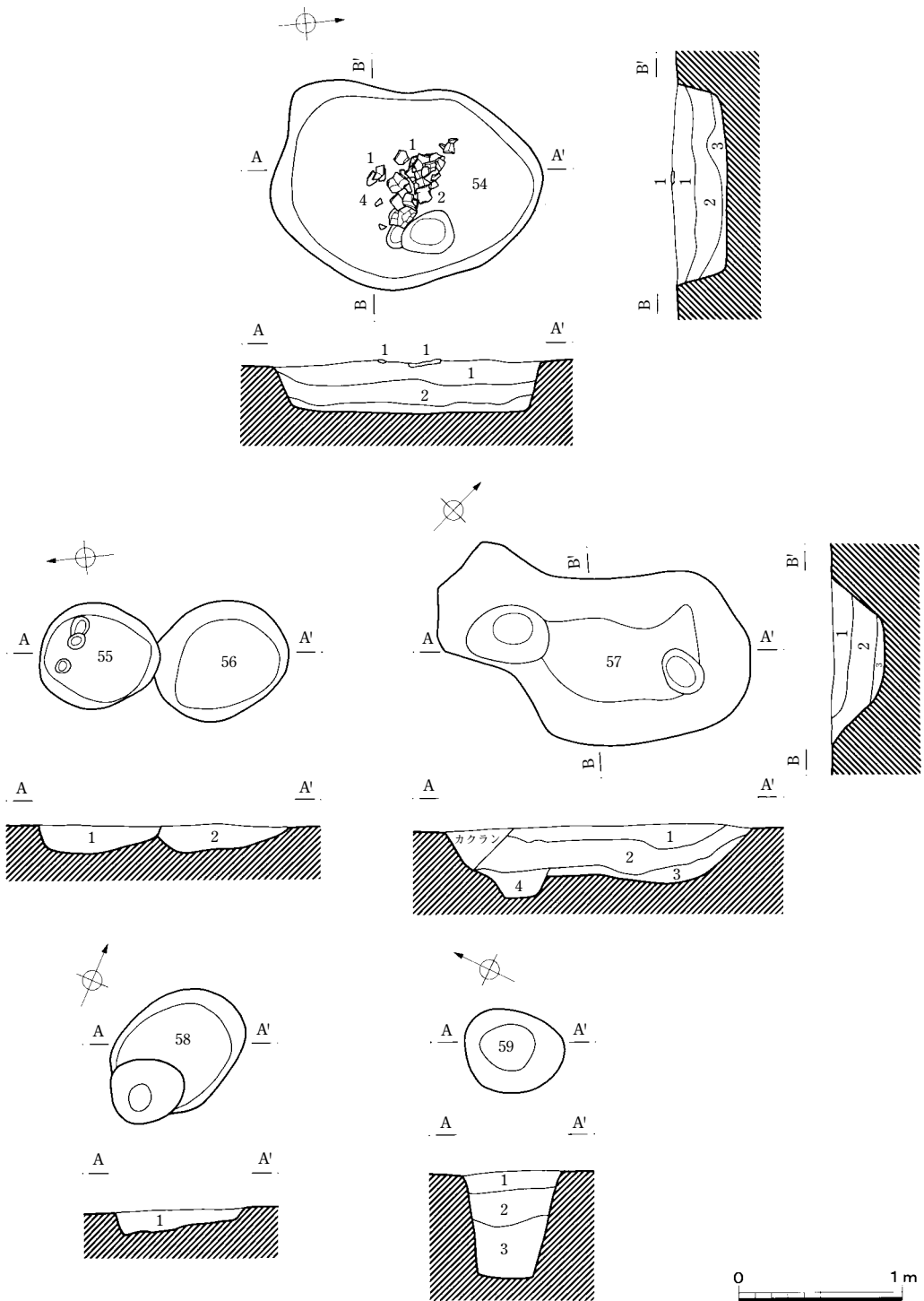
本土壙の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第87号土壙（第109・113図・図版113）

B1区の西側に位置する。東側に第155号土壙、北側には第134号土壙、南側には第140号土壙がある。重複する第9号住居跡、第88号土壙を切っている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が63cmである。西壁は、緩やかに立ち上がるが、東壁はやや垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは25cm程である。底面は、平坦である。覆土は、褐色土を主体としている。出土遺物は、覆土中から弥生土器の破片が出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から弥生時代後期から古墳時代初頭と考えられる。



第101図 土壇 (1)

第54号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子・赤色粒子・ローム粒を均一に、YP粒（φ 2mm）を少量含む。しまりは強いが、粘性は弱い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒（φ 2mm）・ロームブロックを少量含む。しまりは強いが、粘性は弱い。
- 第3層 暗黄褐色土層 YP粒（φ 2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第55・第56号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒（φ 2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒（φ 2mm）を多量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第57号土壌土層説明

- 第1層 黒褐色土層 YP粒子を均一に、YP粒（φ 2mm）・ローム粒・赤色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 黒褐色土層 ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 ロームブロック（φ 7mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗褐色土層 ローム粒・炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第58号土壌土層説明

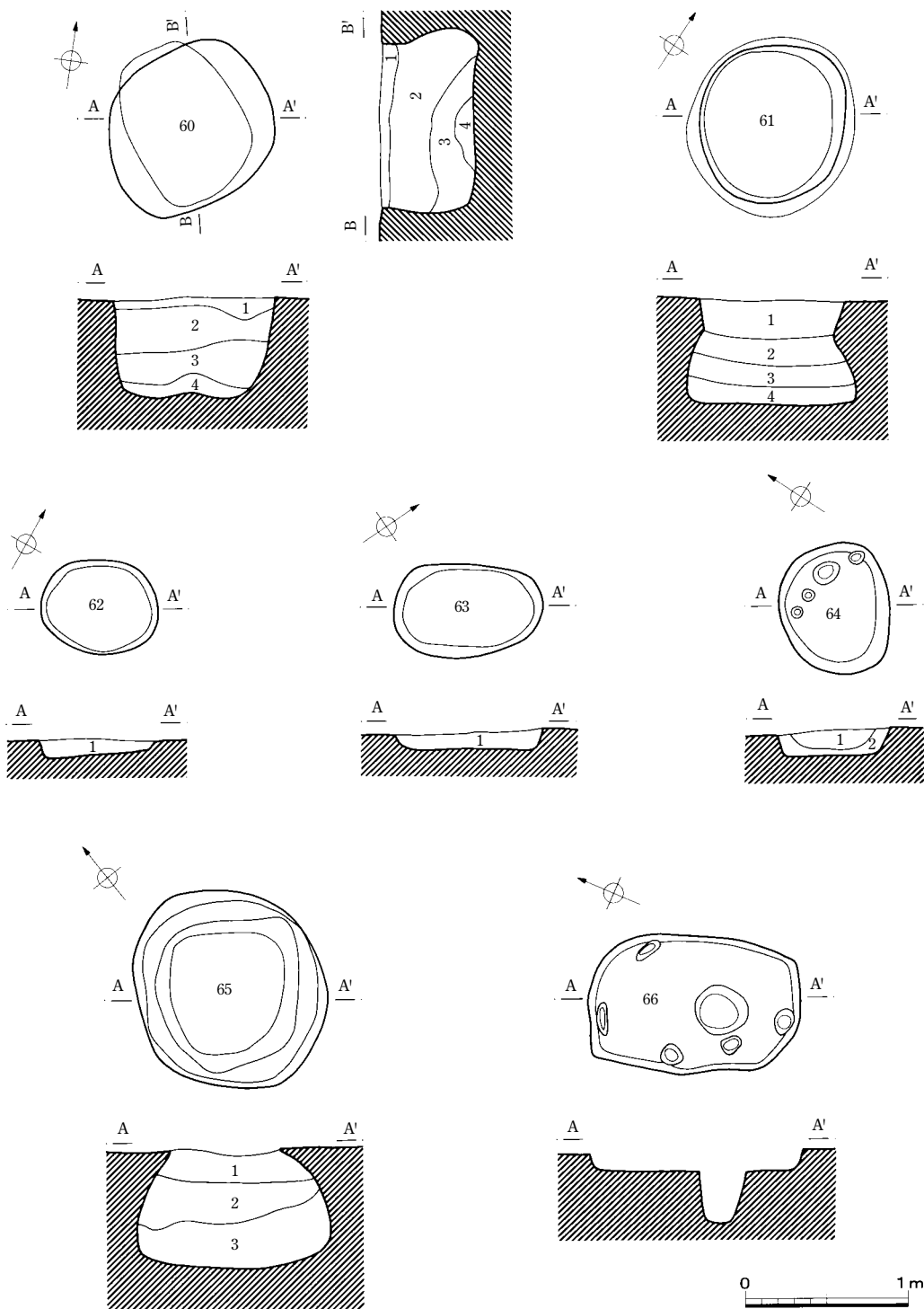
- 第1層 暗褐色土層 YP粒（φ 2mm）を多量に、赤色粒子・炭化物粒を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第59号土壌土層説明

- 第1層 黒褐色土層 ローム粒を少量含む。しまりは弱いが、粘性はやや強い。
- 第2層 褐色土層 ローム粒・炭化物粒を含む。しまりは弱いが、粘性は強い。
- 第3層 茶褐色土層 ローム粒を少量含む。しまりは弱いが、粘性は強い。

第60号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒（φ 2mm）を均一に、炭化物粒・ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒（φ 2mm）・炭化物粒・ローム粒を均一に、ロームブロック（φ 7mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、片岩粒・YP粒（φ 2mm）・炭化物粒を少量含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。
- 第4層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒（φ 2mm）・炭化物粒を微量に含む。しまりはやや弱く、粘性は強い。



第102図 土坑 (2)

第61号土壌土層説明

- 第1層 茶褐色土層 YP粒(φ2mm)を多量に、ロームブロック(φ1cm)・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒(φ2mm)・YP粒子・炭化物ブロック(φ1cm)・炭化物小ブロック(φ5mm)を少量含む。しまり、粘性ともに非常に強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒(φ2mm)・炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに非常に強い。
- 第4層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、ロームブロック(φ5mm)・ローム小ブロック(φ3mm)少量、YP粒(φ2mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに非常に強い。

第62号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 ローム粒・ロームブロック(φ1cm)・ローム小ブロック(φ7mm)を均一に含む。浅間A軽石を微量に含む。しまり、粘性ともに弱い。

第63号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒(φ2mm)を均一に、ロームブロック(φ1cm)・ローム小ブロック(φ3mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第64号土壌土層説明

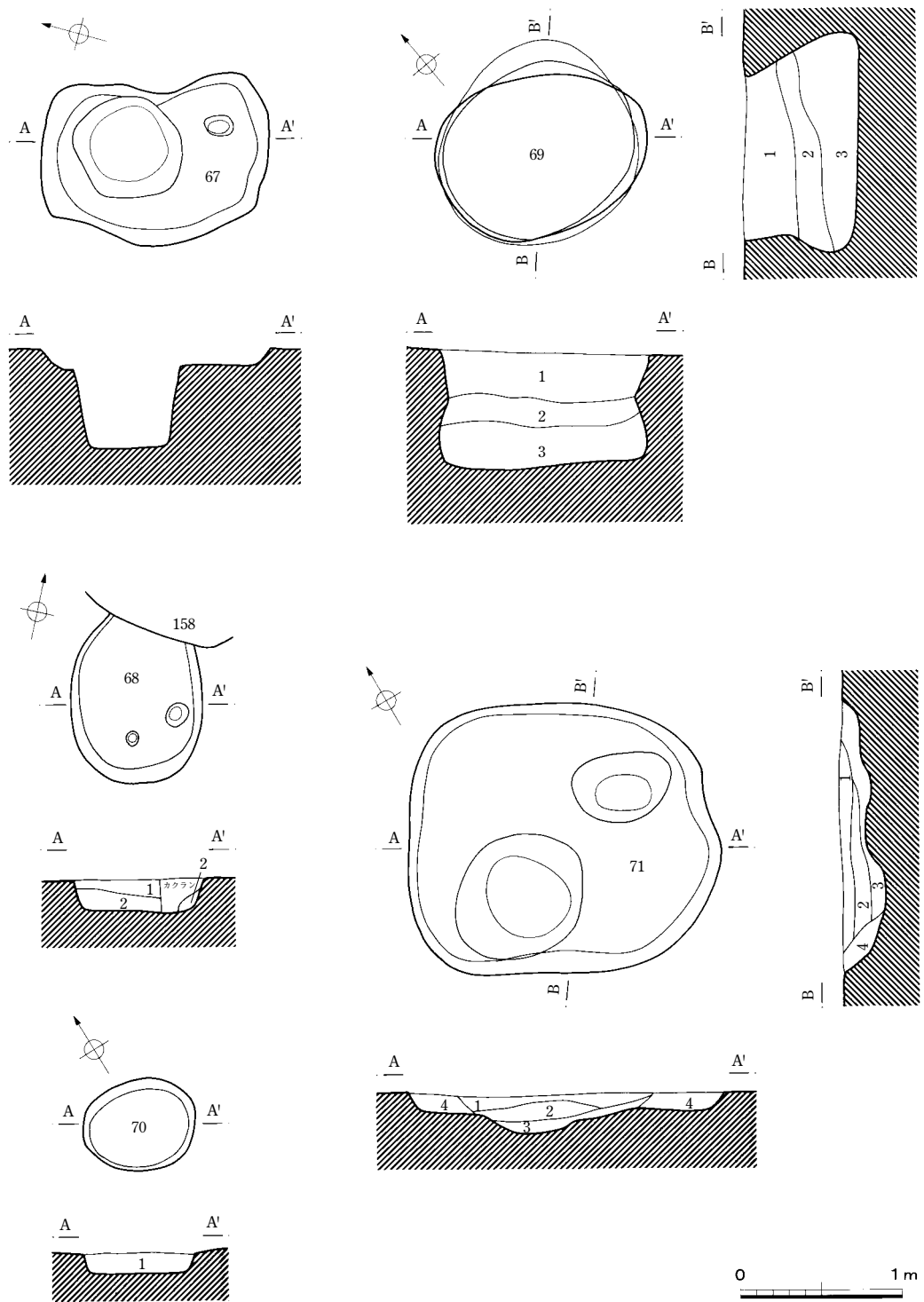
- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に含む。褐色粒子・炭化物粒を均一に、ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、焼土粒子・ローム小ブロックを少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第65号土壌土層説明

- 第1層 茶褐色土層 YP粒子を均一に含む。YP粒(φ2mm)・ローム粒・ローム小ブロック(φ5mm)・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 褐色土層 YP粒子を均一に含む。ローム粒・ローム小ブロック(φ3mm)を少量、焼土粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 褐色土層 YP粒子・ローム粒・ローム小ブロック(φ3mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第66号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 ローム粒・YP粒(φ2mm)を均一に、ローム小ブロック(φ5mm)・片岩粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第103図 土坑 (3)

第67号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子・ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第2層 暗褐色土層 YP粒子・ローム粒を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第68号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、ローム粒・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともにやや弱い。
第2層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、ローム粒・橙色粒子・炭化物粒を少量含む。色調は第1層よりやや明るい。しまり、粘性ともにやや弱い。

第69号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に、片岩粒・ローム粒・ロームブロック（ \varnothing 1 cm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第2層 暗褐色土層 YP粒子を少量、ローム粒・橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第3層 暗褐色土層 YP粒子・ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第70号土壌土層説明

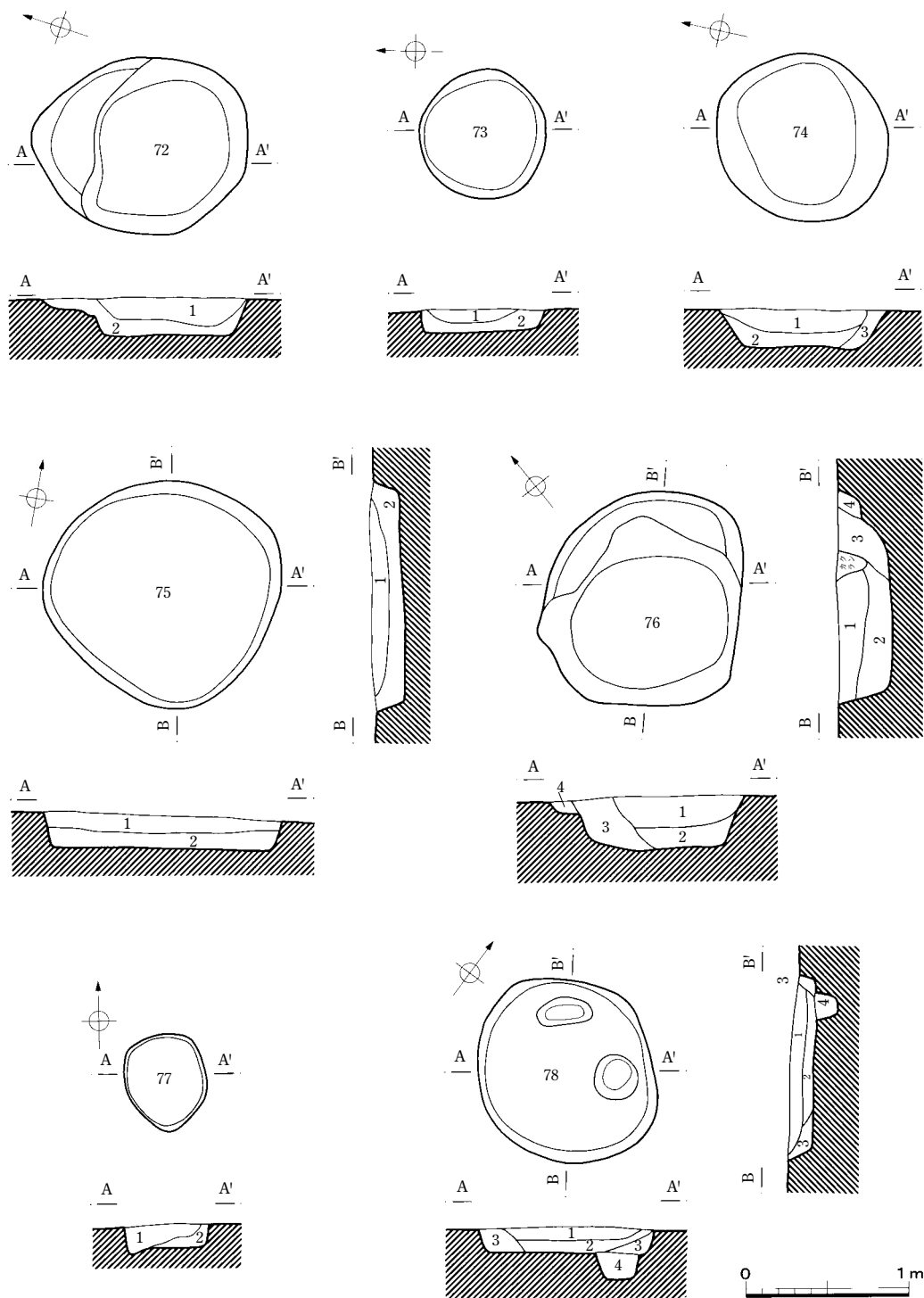
- 第1層 暗茶褐色土層 ローム粒・ローム小ブロック（ \varnothing 1～5 mm）を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第71号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒（ \varnothing 2 mm）を均一に含む。ローム粒・ローム小ブロック（ \varnothing 5 mm）・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に含む。ローム小ブロック（ \varnothing 5 mm）・YP粒子を少量含む。橙色粒子・炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第3層 暗茶褐色土層 YP粒（ \varnothing 2 mm）を均一に、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共に強い。
第4層 茶褐色土層 YP粒（ \varnothing 2 mm）を均一に、ローム粒・ロームブロック（ \varnothing 1 cm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第72号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒（ \varnothing 2 mm）を均一に、橙色粒子・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第2層 暗茶褐色土層 ロームブロック（ \varnothing 5 mm）を多量に含む。ローム粒を均一に、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第104図 土壙 (4)

第73号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒(φ2mm)・橙色粒子・褐色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 茶褐色土層 YP粒子を均一に、黒褐色ブロック・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第74号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒(φ2mm)を均一に、褐色粒子・ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 褐色粒子・赤橙色粒子を少量、YP粒(φ2mm)をまばらに含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 ロームブロックを主体とし、YP粒(φ2mm)を均一に、橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第75号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒(φ2mm)を均一に含む。ローム粒・炭化物粒を少量、炭化物ブロック(φ5mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒(φ2mm)を均一に、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第76号土壌土層説明

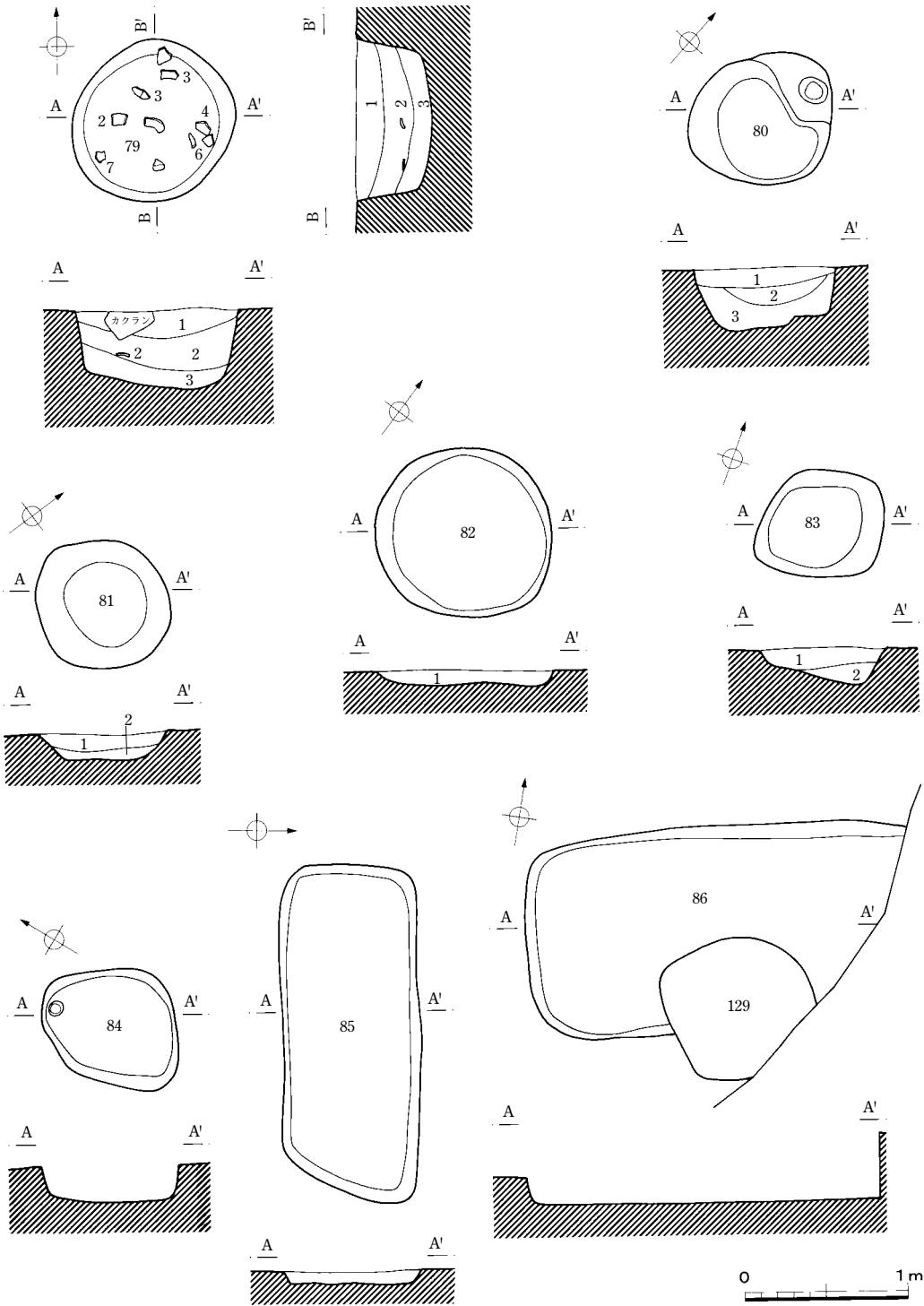
- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、炭化物粒・片岩粒・ロームブロック(φ1cm)・ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒(φ2mm)・炭化物粒・ローム粒を少量含む。色調は第1層よりやや暗い。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 ロームブロック(φ1cm)を多量に含む、炭化物粒を多量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 黄褐色土層 ロームブロック(φ1cm)を主体とする。しまり、粘性ともに強い。

第77号土壌土層説明

- 第1層 黒褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗灰褐色土層 ロームブロック(φ1cm)を主体とする層。しまり、粘性ともに強い。

第78号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒(φ2mm)を少量、灰色粒子・ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒・灰色粒子を少量、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 黒褐色土層 YP粒子を均一に、ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第105図 土坑 (5)

第79号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に、ローム粒・橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子・ローム粒・炭化物粒を少量含む、色調は第1層よりもやや暗い。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 YP粒子・ローム小ブロック（φ3mm）・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第80号土壌土層説明

- 第1層 茶褐色土層 YP粒子を均一に、YP粒（φ2mm）・ローム粒・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子・ローム粒・炭化物小ブロック（φ3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 ローム粒・ローム小ブロック（φ3mm）を少量、YP粒（φ2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第81号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒（φ2mm）を均一に含む。ロームブロック（φ5mm）・ローム小ブロック（φ3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に含む。YP粒（φ2mm）をまばらに、橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第82号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒（φ2mm）を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第83号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。赤色粒子・褐色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒・褐色粒子を少量含む。しまり、粘性共に強い。

第84号土壌土層説明

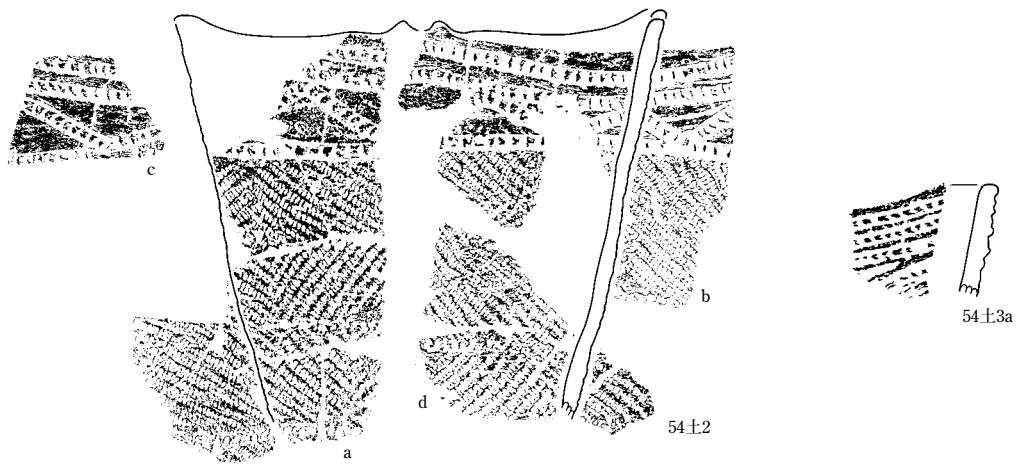
- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を少量、ローム粒子と橙色粒子を少量含む、しまり、粘性ともに強い。

第85号土壌土層説明

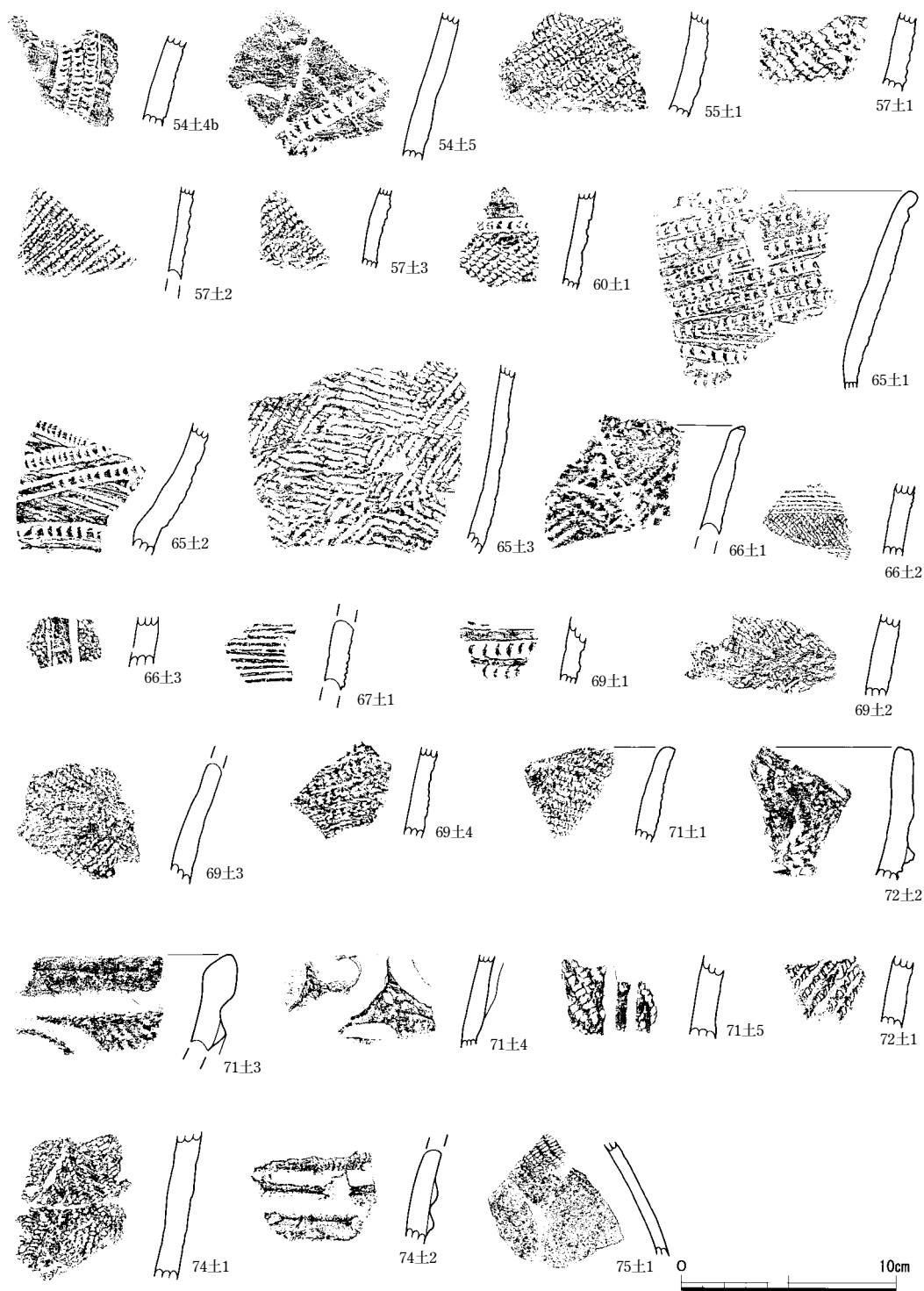
- 第1層 暗褐色土層 ローム小ブロック（φ3mm）・橙色粒子・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第86号土壌土層説明

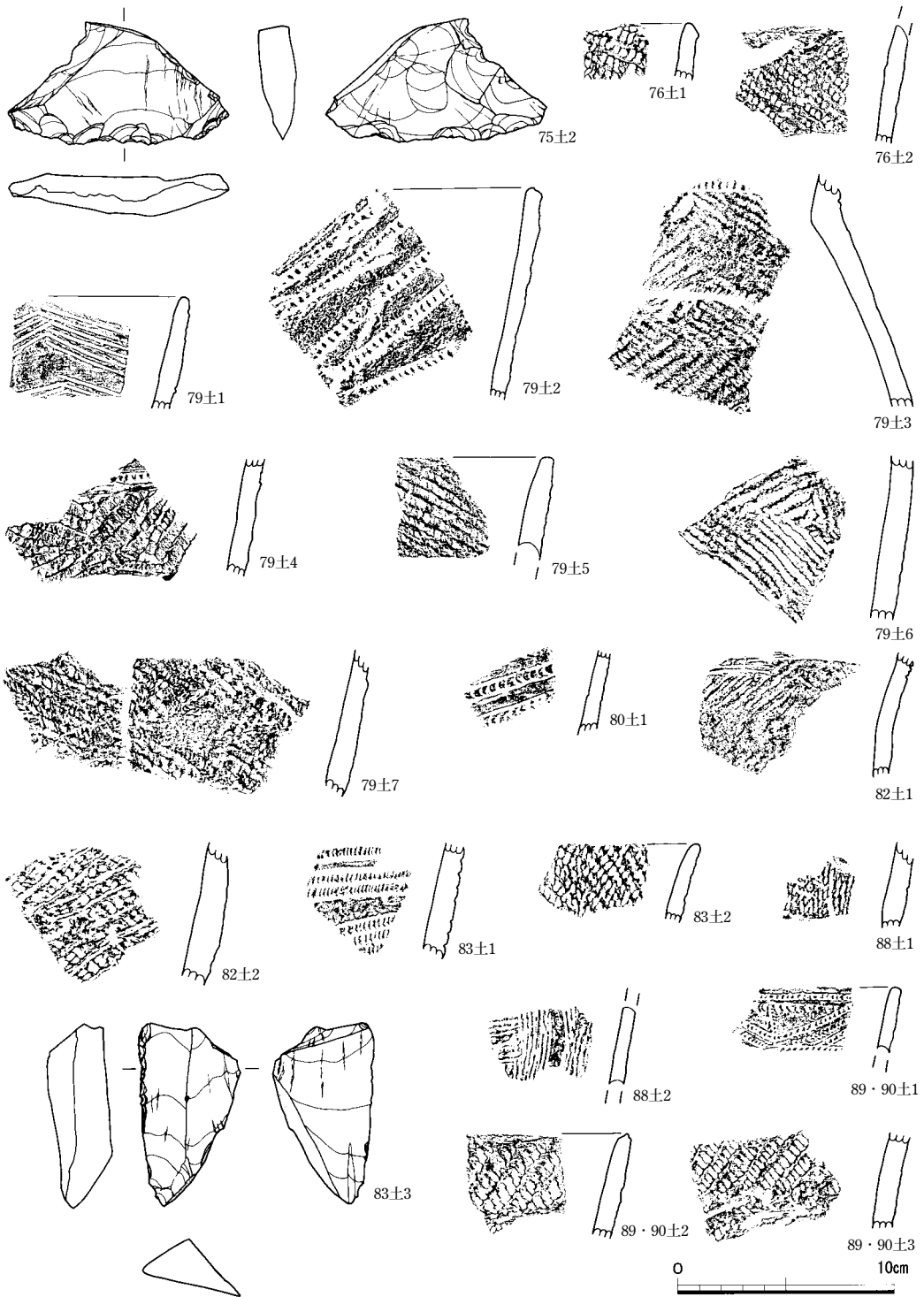
- 第1層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、炭化物粒・YP粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第106図 土壙出土遺物 (1)



第107图 土壤出土遺物 (2)



第108図 土壙出土遺物（3）

第54号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	RL・LR単節縄文（羽状、0段多条）→半截竹管状工具による押引	明黄褐色	No.1・3・6・7・ 10・11・12・ 13・21・23・24	
2	縄文土器	口縁～ 胴部	RL・LR単節縄文（羽状、0段多条）→半截竹管状工具による押引	黄褐色	No.7・8・10・ 17・24	
3	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黄橙褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黄橙褐色	No.1	
5	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黄橙褐色	覆土	

第55号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	LR単節縄文	灰黄褐色	覆土	

第57号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	LR単節縄文	黄褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	LR単節縄文	赤褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部	LR単節縄文	赤褐色	覆土	

第60号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	

第65号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
24	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
25	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
26	縄文土器	胴部	LR単節縄文・R無節縄文（羽状）	赤褐色	覆土	

第66号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
3	縄文土器	口縁部	縄文（羽状）、口唇部：キザミ	橙褐色	覆土	
4	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	褐色	覆土	
5	縄文土器	胴部	LR単節縄文→単沈線→磨消	黄橙褐色	覆土	

第67号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	褐色	覆土	

第69号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	赤褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	覆土	
4	縄文土器	胴部	合然	黄褐色	覆土	

第71号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	隆帯→一条の角押文	黄橙褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	隆帯・沈線による区画→縄文	褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	隆帯・沈線による区画	褐色	覆土	
5	縄文土器	胴部	LR単節縄文→沈線→磨消	褐色	覆土	

第72号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄橙褐色	覆土	

第74号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	RL単節縄文	褐色	覆土	

2	縄文土器	口縁部	隆帯による区画	赤褐色	覆土	
---	------	-----	---------	-----	----	--

第75号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	弥生土器	胴部	RL単節縄文	褐色	覆土	壺
2	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー

第76号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	褐色	覆土	
1	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	覆土	

第79号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	明赤褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線・押引	橙褐色	No. 4	
3	縄文土器	口縁～ 胴部	RL・LR単節縄文（羽状）→半截竹管状工具による 押引	橙褐色	No. 2・3	
4	縄文土器	口縁～ 胴部	L・R無節縄文（羽状）→半截竹管状工具による 押引	暗褐色	No. 7	
5	縄文土器	口縁部	R無節縄文	褐色	覆土	
6	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	黄橙褐色	No. 6	
7	縄文土器	胴部	L無節縄文	褐色	No.10	

第80号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黒褐色	覆土	

第82号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	半截竹管状工具による押引→L・R無節縄文 （羽状）	暗褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	付加条	褐色	覆土	

第83号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	橙褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	黄橙褐色	覆土	
3	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー

第88号土壙（第108・109図・図版46-1・113）

B 1 区の西側に位置する。重複する第9号住居跡・第87号土壙に切られているが、第24号住居跡を切っている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が75cm、南北方向が70cmである。壁は、傾斜をしつつ立ち上がり、確認面からの深さは42cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式、前期後半の諸磯b式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第89号土壙（第108・109図・図版46-2・113）

B 1 区の東側に位置する。東側に第99号土壙、西側には第139号土壙、北側には第80・92・136・137号土壙がある。重複する第90号土壙を切っている。

平面形は、ほぼ円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が80cmである。西壁は傾斜して立ち上がり、東壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは34cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第90号土壙（第108・109図・図版46-2・113）

B 1 区の東側に位置する。東に第99号土壙、西側には第139号土壙、北側には第80・92・136・137号土壙がある。重複する第89号土壙に切られている。

平面形は、ほぼ円形を呈する。遺構の規模は、直径80cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第91号土壙（第109・113図・図版47-1・113）

B 1 区の東側に位置する。東に第100号土壙、西側には第139号土壙、北側に

は第80・92・136・137号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が85cm、南北方向が100cmである。壁は、ほぼ垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは35cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第92号土壙（第109・113図・図版47-2・113）

B1区の中央付近に位置する。東側に第80・94号土壙、西側には第93・97号土壙、南側には127・136・137号土壙がある。

平面形は、ほぼ円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が135cm、南北方向が115cmである。西壁はやや傾斜しつつ立ち上がり、東壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。確認面からの深さは34cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第93号土壙（第109・113図・図版48-1・113）

B1区の中央付近に位置する。東側に第80・92・94号土壙、西側には第93・97号土壙、南側には127・136・137号土壙、北側には第95・96・115・146・147号土壙がある。

平面形は、隅丸長方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が60cm、南北方向が105cmである。北壁はやや傾斜しつつ立ち上がり、他の壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。確認面からの深さは26cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第94号土壙（第109・113図・図版48-2・113）

B1区の中央より東側に位置する。西側には第92・93号土壙、北側には第95号土壙、南側には第80・136・137号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が75cm、南北方向が65cmである。西壁はやや傾斜しつつ立ち上がり、東壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。確認面からの深さは52cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片を少量とスクレイパー1点を出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第95号土壙（第109・113図・図版49-1・113）

B 1 区の中央より東側に位置する。西側には第97・98号土壙、北側には第96・115号土壙、南側には第80・92・94号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が75cm、南北方向が70cmである。壁は、傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは32cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第96号土壙（第110図・図版49-2）

B 1 区の中央付近に位置する。東側に第115号土壙、西側には第97・98号土壙、北側には第106・146・147号土壙、南側には第80・92・94号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が110cm、南北方向が107cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さ15cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第97号土壙（第110・113図・図版50-1・114）

B 1 区の中央付近に位置する。東側に第95・96・115号土壙、西側には第98・122号土壙、南側には第93・126・127号土壙、北側には第75号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が48cm、南北方向が90cmである。壁は、傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは40cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第98号土壙（第110図・図版50-2）

B 1 区の中央に位置する。東側に第96号土壙、北側には第75号土壙、南側には第97号土壙がある。重複する第10・11号住居跡に切られている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸方形を呈するようである。遺構の規模は、東西方向が85cm、南北方向が100cmである。東壁は垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第99号土壙（第110・113図・図版51-1・114）

B 1 区の東側に位置する。西側に第89～91号土壙、北側に第100号土壙がある。遺構の一部が調査区外にかかっているため、全容は不明である。

平面形は、楕円形を呈するようである。遺構の規模は、東西方向が104cm、南北方向が165cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは

35cm程である。底面は、若干起伏をもつが、ほぼ平坦である。出土遺物は、縄文時代前期後半の諸磯b式の土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期後半の諸磯b式期と考えられる。

第100号土壙（第110図・図版51-2）

B1区の東側に位置する。西側に第89～91号土壙、北側には第85・86・129号土壙、南側には第99号土壙がある。

平面形は、不整形を呈する。遺構の規模は、東西方向が80cm、南北方向が75cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは50cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第101号土壙（第110図・図版52-1）

B1区の中央に位置する。東側に第75号土壙、北側には第82号土壙、西側には第81号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が100cm、南北方向が92cmである。壁は、傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは30cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第102号土壙（第110・114図・図版114）

B1区の中央よりやや西側に位置する。東側に第104号土壙、南側には第138号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が100cm、南北方向が90cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは20cm程で、中央の最深部は40cm程である。底面は、起伏をもち中央が窪んでいる。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第103号土壙（第111・114図・図版52-2・114）

B1区の西側に位置する。東側に第154号土壙がある。重複する第17号住居跡を切り、第135号土壙に切られている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が100cm、南北方向が90cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは50cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉の有尾式の土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考え

られる。

第104号土壙（第111図・図版53-1）

B 1 区の中央よりやや西側に位置する。東側に第82・101号土壙、西側には第102号土壙、南側には第81号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が70cm、南北方向が92cmである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cm程である。底面は、平坦である。出土土器ない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第105号土壙（第111・114図・図版53-2・114）

B 1 区の中央よりやや北側に位置する。東側に第108・116号土壙、西側には第107号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が170cmである。西壁は垂直気味に立ち上がるが、東壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは25cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第106号土壙（第111・114図・図版114）

B 1 区の中央よりやや北側に位置する。西側に第75号土壙、南側には第146・147号土壙、北側には第107号土壙がある。

平面形は、隅丸方形を呈する。遺構の規模は、直径が110mである。壁は、やや垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは12cm程で、中央から南側の最深部は100cm程である。底面は、中央から南側が一段低くなっている。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第107号土壙（第111図）

B 1 区の中央よりやや北側に位置する。西側に第78号土壙、南側には第106・146・147号土壙、北側には第120号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、直径が110cmである。壁は、傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは30cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第108号土壙（第111図・図版54-1）

B 1 区中央よりやや北側に位置する。西側に第105・116号土壙、東側には第110号土壙、北側には第150・151号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が80cm、南北方向が100cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第109号土壙（第111・114図・図版114）

B 1 区の東側に位置する。東側に第113・114号土壙、西側には第110号土壙、北側には第117号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が105cm、南北方向が120cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第110号土壙（第111図・図版54-2）

B 1 区の東側に位置する。東側に第113・114・117号土壙、西側には第105・108・116号土壙、北側には第150・151号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が70cm、南北方向が85cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは25cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第111号土壙（第111・114図・図版55-1・114）

B 1 区の東側に位置する。東側に第112号土壙、西側には第145号土壙、南側には第85・86・129号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、直径142cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは30m程である。底面は、平坦である。

出土遺物は、覆土中から縄文時代中期後半の加曽利EⅢ式の土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代中期後半の加曽利EⅢ式期と考えられる。

第112号土壙（第112・114図・図版55-2・114）

B 1 区の東側に位置する。西側に第111号土壙がある。遺構の半分が調査区外にかかり、全容は不明である。

平面形は、楕円形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が70cm、南北方向が140cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは40cm

程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式の土器片を少量出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期と考えられる。

第113号土壌（第112・114図・図版56-1・114）

B 1 区の東側に位置する。西側には第109・117・123号土壌が、北西側には、第118・119・133号土壌がある。重複する第114号土壌を切っている。遺構の半分が調査区外にかかり、全容は不明である。

平面形は、楕円形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が95cm、南北方向が60cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは46cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量と石器を出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第114号土壌（第112・114図・図版56-1・114）

B 1 区の東側位置する。重複する第113号土壌に切られている。調査区外にかかっているため、全容は不明である。

平面形は、楕円形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が50cm、南北方向が40cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは0.45mを測る。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第115号土壌（第112・114図・図版56-2・115）

B 1 区の東側に位置する。西側に第96号土壌、南側には第94・95号土壌がある。

平面形は、楕円形である。遺構の規模は、直径100cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは35cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量出土している。

本土壌の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第116号土壌（第112・114図・図版57-1・114）

B 1 区の東側に位置する。東側に第108号土壌、西側には第105号土壌、北側には第150・151号土壌がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が105cm、南北方向が

130cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは55cm程である。底面は平坦である。出土遺物は、覆土中から縄文時代前期中葉に比定される土器片を少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第117号土壙（第112・114・118図・図版115）

B 1 区の東側に位置する。東側に第113・114号土壙、西側には第109・110号土壙、北側には第118・119・133号土壙がある。重複する第123号土壙に切られている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が220cm、南北方向が140cmである。西壁は緩やかに立ち上がるが、東壁は垂直気味に立ち上がる。確認面からの西側の深さは30cm程で、東側の深さは60cmで一段低くなっている。底面は平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の黒浜式と有尾式の土器片が少量出土している。

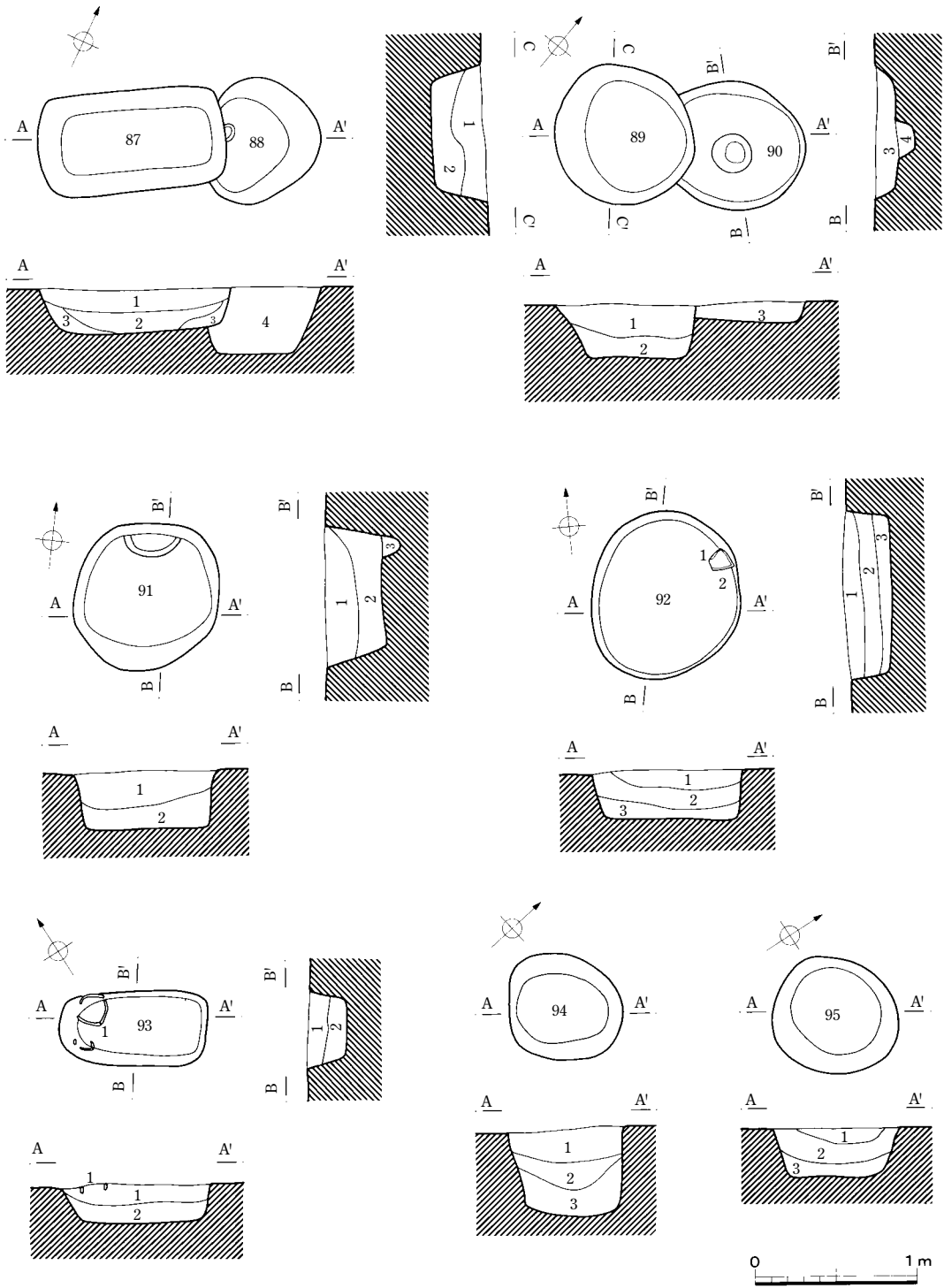
本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第118号土壙（第112・118図・図版57-2・115）

B 1 区の東側に位置する。西側には第119・143号土壙、北側には第130号土壙がある。重複する第133号土壙を切っている。遺構の半分が調査区外にかかり、全容は不明である。

平面形は、楕円形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向がcm、南北方向が140cmである。北壁は傾斜しつつ立ち上がるが、南壁は垂直気味に立ち上がる。確認面からの深さは50cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の黒浜式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



第109図 土坑 (6)

第87・第88号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒(φ2mm)を均一に含む。炭化物粒・ローム粒・ロームブロック(φ5mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒(φ2mm)・YP粒子を均一に含む。炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 ロームブロック(φ1cm)を多量に、ローム粒・橙色粒子・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗褐色土層 YP粒子・ロームブロック(φ1.5cm)を多量に含む。YP(φ2mm)を均一に、ローム粒・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第89・第90号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒(φ2mm)・ローム粒・橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒(φ2mm)・ローム粒・橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に、ローム粒・橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗茶褐色土層 YP粒子を少量、ローム粒をやや含む。しまり、粘性ともに強い。

第91号土壌土層説明

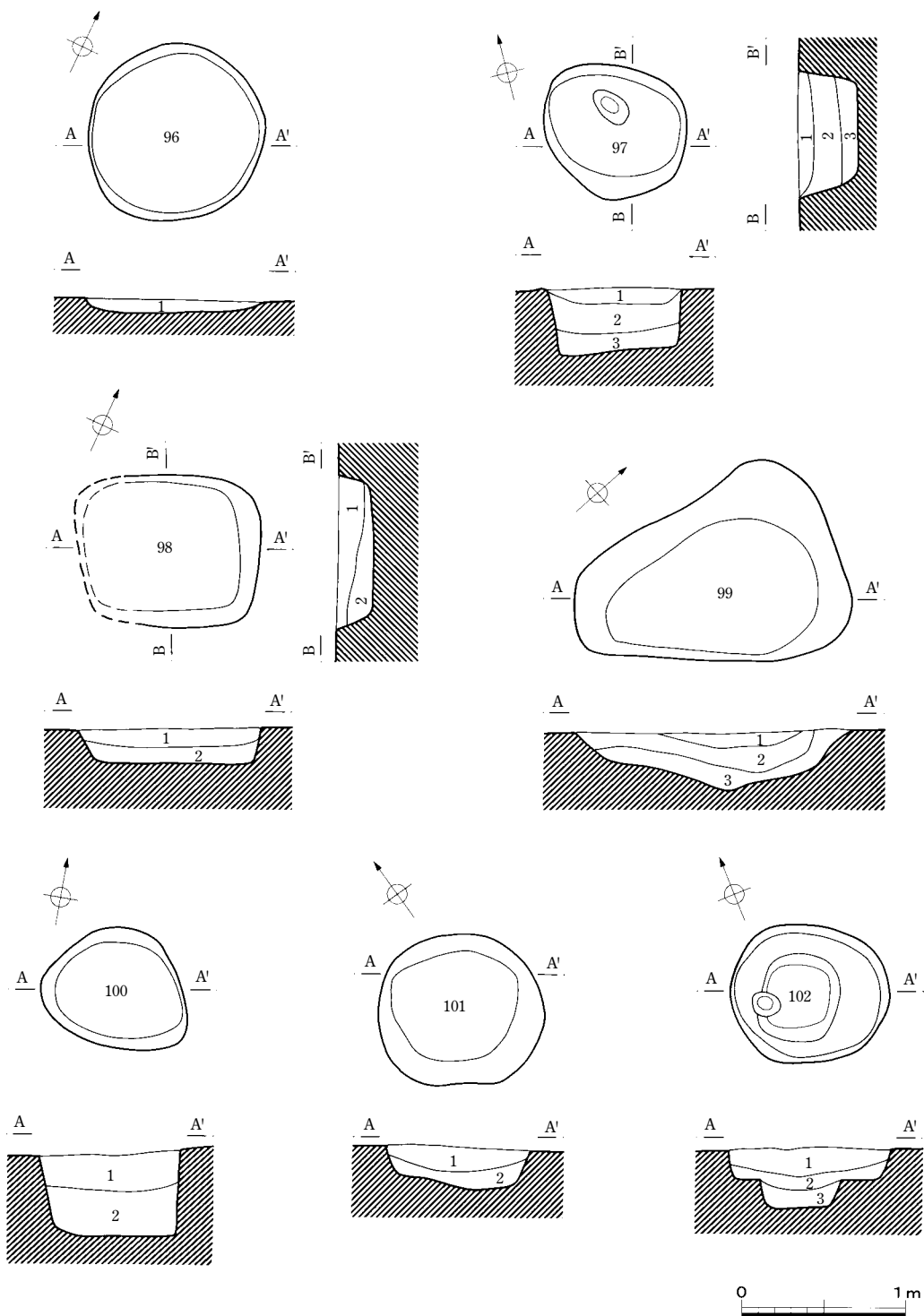
- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒(φ2mm)を均一に含む。ローム粒・ローム小ブロック(φ3mm)を少量、橙色粒子・赤色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 第1層に類似するが、色調が第1層よりやや暗い。
- 第3層 暗茶褐色土層 YP粒子を少量含む、ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第92号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒を均一に含む。炭化物小ブロック(φ3mm)を少量、ローム小ブロック(φ3mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒(φ2mm)・YP粒子を多量に、炭化物小ブロック(φ3mm)・橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 灰褐色土層 YP粒子を少量、ローム粒・炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第93号土壌土層説明

- 第1層 褐色土層 橙色粒子を均一に、YP粒子・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、炭化物粒・ローム小ブロック(φ3mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第110図 土坑 (7)

第94号土壌土層説明

- 第1層 灰褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。ローム小ブロック（φ 5mm）・褐色粒子・赤色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に、灰色小ブロック（φ 3mm）・炭化物粒・ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 灰褐色土層 ローム粒・ローム小ブロック（φ 3mm）を多量に含む。橙色粒子・赤色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第95号土壌土層説明

- 第1層 褐色土層 ローム粒を均一に、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 茶褐色土層 ローム粒・ローム小ブロック（φ 3mm）を多量に、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 褐色土層 ローム粒を多量に、ローム小ブロック（φ 3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第96号土壌土層説明

- 第1層 黒褐色土層 ローム粒を多量に、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第97号土壌土層説明

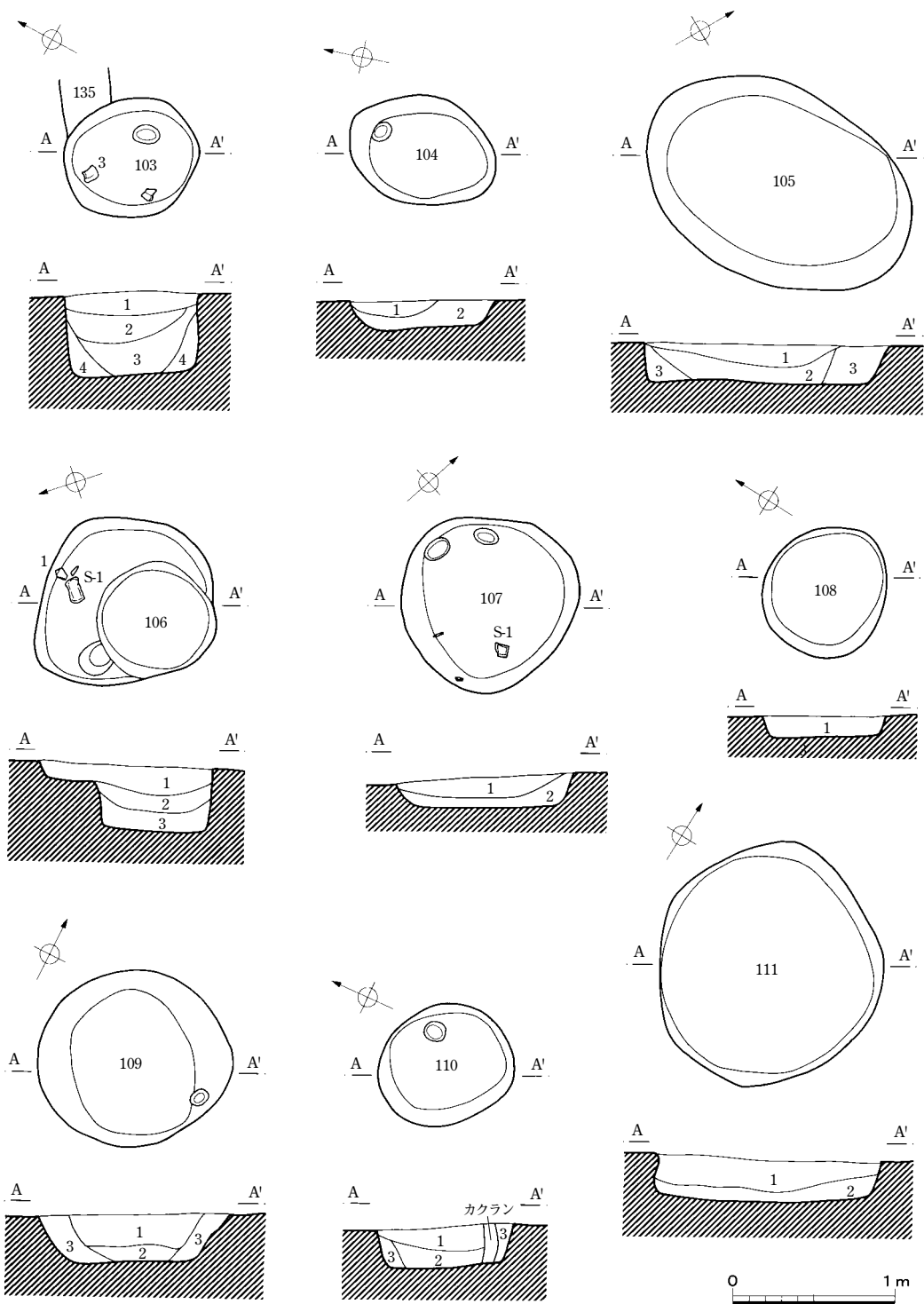
- 第1層 褐色土層 YP粒子を均一に含む。YP粒（φ 2mm）を少量、炭化物粒・ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 黒褐色土層 YP粒子を均一に含む。灰色粒子・灰色粘質土小ブロック（φ 3mm）を少量、ローム小ブロック（φ 3mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 褐色土層 灰褐色粒子を均一に、炭化物粒・ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第98号土壌土層説明

- 第1層 灰褐色土層 褐色粒子・ローム粒を少量、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を均一に、灰色粘質土小ブロック（φ 3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第99号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に、YP粒（φ 2mm）・橙色粒子・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒（φ 2mm）を均一に含む。赤色粒子・褐色粒子・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗黄褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒（φ 2mm）・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第111図 土坑 (8)

第100号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に、炭化物粒・ローム小ブロック（ ϕ 3 mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、ローム小ブロック（ ϕ 3 mm）・炭化物粒を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第101号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に含む。炭化物粒・ローム粒を少量、YP粒（ ϕ 2 mm）を微量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、橙色粒子・炭化物粒・YP粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。

第102号土壌土層説明

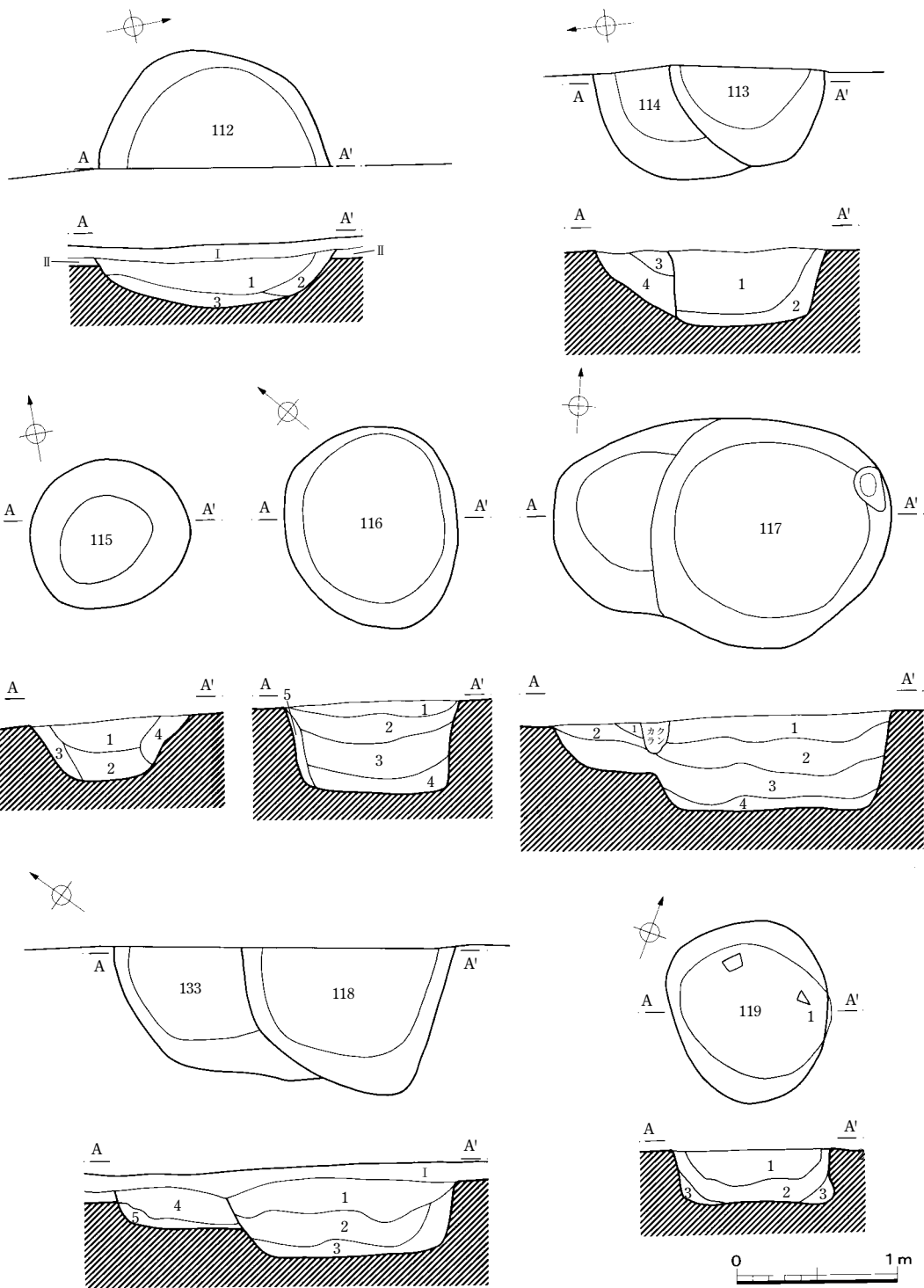
- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に含む。ロームブロック（ ϕ 1 cm）を均一に、ローム粒・赤色粒子を少量含む。炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 ロームブロック（ ϕ 1 cm）を多量に、YP粒子を均一に含む。炭化物粒・橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 橙色粒子を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第103号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒（ ϕ 2 mm）を均一に含む。褐色粒子を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に、YP粒（ ϕ 2 mm）・茶褐色粒子・炭化物粒・炭化物小ブロック（ ϕ 5 mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 YP粒（ ϕ 2 mm）を均一に、YP粒子を少量含む。ローム粒・炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗褐色土層 ローム粒・YP粒子を均一に含む。ロームブロック（ ϕ 1 cm）を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第104号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 ローム粒・橙色粒子を少量含む。しまりは強いが、粘性は弱い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム小ブロック（ ϕ 3 mm）を均一に、ロームブロック（ ϕ 3 cm）を少量含む。しまりは強いが、粘性は弱い。



第112図 土坑 (9)

第105号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒(φ2mm)を多量に、ローム粒・橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒を多量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 YP粒(φ2mm)を均一に、褐色粒子・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第106号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒を均一に含む。ロームブロック(φ1cm)を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒子・ローム小ブロック(φ3mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第107号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、ローム粒を少量、橙色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第108号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。しまり、粘性ともにやや弱い。

第109号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒(φ2mm)を均一に、ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒(φ2mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 ロームブロック(φ1cm)を多量に含む。YP粒(φ2mm)を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第110号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒(φ2mm)を均一に、ローム粒・橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒(φ2mm)を均一に、ローム粒を少量、灰褐色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 黄褐色土層 YP粒子を微量に含み、黒褐色土粒を少量混入する。しまり、粘性ともに強い。

第111号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 ローム小ブロック（φ 3～5mm）を均一に含む。しまり、粘性ともに弱い。
第2層 暗褐色土層 ロームブロック（φ 5mm～1cm）を多量に含む。しまり、粘性ともに弱い。

第112号土壌土層説明

- 第Ⅰ層 暗褐色土層 浅間山系A軽石を含む。マンガン粒子、ローム粒子を微量に含む。しまり、粘性とも弱い。〈現耕作土〉
第Ⅱ層 暗茶褐色土層 黒褐色土粒子を少量、ローム粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに弱い。
第1層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、ローム小ブロック（φ 3mm）を均一に含む。褐色ブロック（φ 5mm）を少量、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第2層 暗褐色土層 ロームブロック（φ 1.5cm）を多量に、YP粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第3層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第113・114号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 橙色粒子を少量、YP粒（φ 2mm）・ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒（φ 2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第3層 暗黒褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒子・ローム小ブロック（φ 3mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第4層 暗茶褐色土層 ロームブロック（φ 5mm）・褐色ブロック（φ 5mm）を少量、YP粒（φ 2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第115号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒（φ 2mm）を少量、褐色粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第2層 黒褐色土層 ローム粒・褐色粒子を少量、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第3層 茶褐色土層 ローム粒を多量に含む。黒褐色土（φ 1cm）を少量混入する。しまり、粘性ともに強い。
第4層 茶褐色土層 ローム粒を多量に、ロームブロック（φ 1cm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第116号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に含む。ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第2層 暗褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒（φ 2mm）を均一に含む。炭化物粒を少量、ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第3層 黒褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第4層 黒褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。
第5層 茶褐色土層 YP粒（φ 2mm）を均一に、ローム粒を微量含む。しまり、粘性ともに強い。

第117号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒（φ2mm）を均一に、赤橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒（φ2mm）・YP粒子を均一に、ローム粒・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 褐色土層 ローム粒を多量に含む。YP粒（φ2mm）・YP粒子を均一に、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗褐色土層 ローム粒を均一に含む。ローム小ブロック（φ3mm）・赤橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第118・133号土壌土層説明

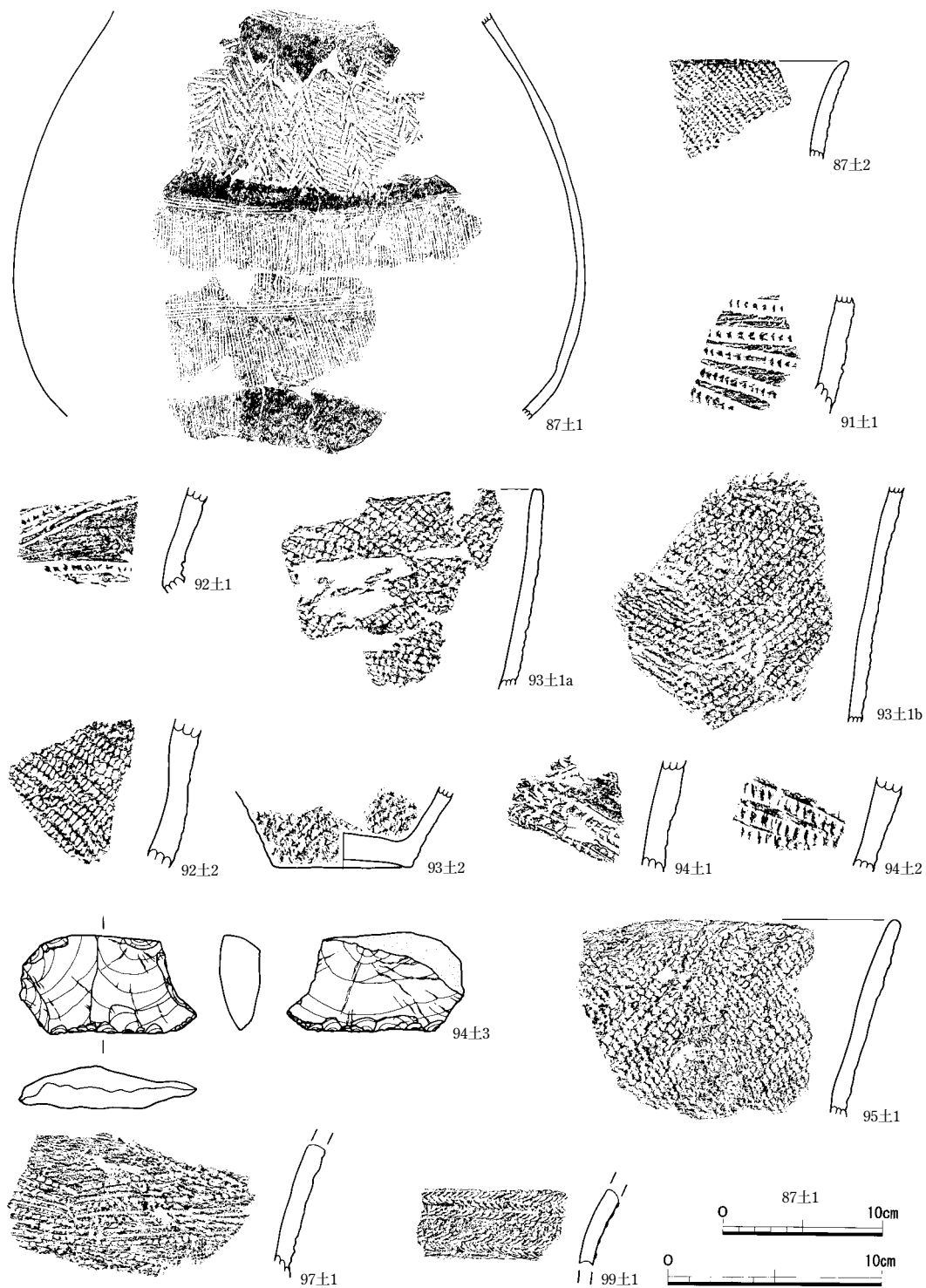
- 第1層 暗褐色土層 浅間山系A軽石を含む。マンガン粒子、ローム粒子を微量に含む。しまり、粘性とも弱い。〈現耕作土〉
- 第II層 暗茶褐色土層 黒褐色土粒子を少量、ローム粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 第1層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、ローム小ブロック（φ3mm）を均一に含む。褐色ブロック（φ5mm）を少量、YP粒子を微量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ロームブロック（φ1.5cm）を多量に、YP粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒子・ローム小ブロック（φ3mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第5層 暗茶褐色土層 ロームブロック（φ5mm）・褐色ブロック（φ5mm）を少量、YP粒（φ2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第119号土壌土層説明

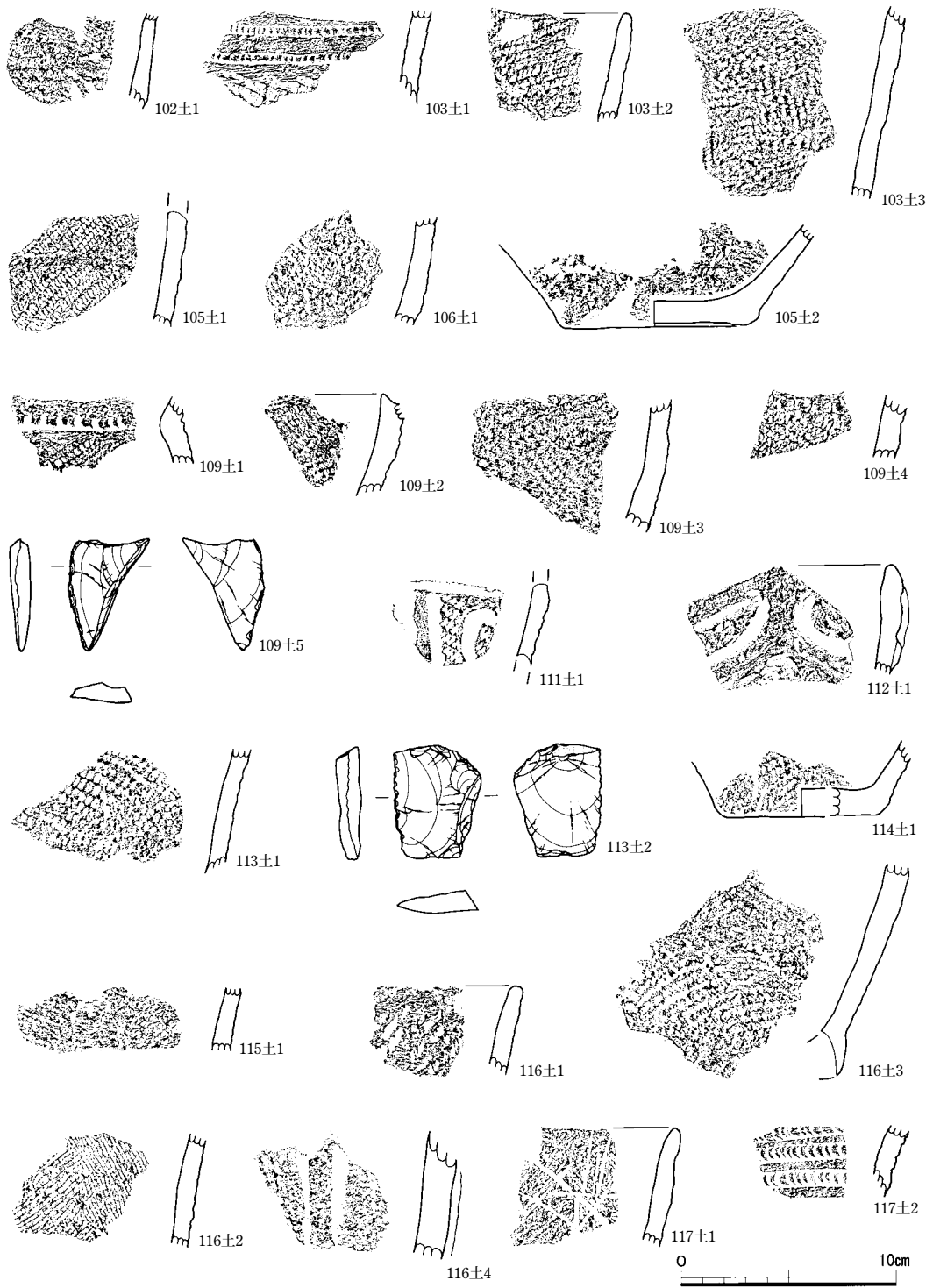
- 第1層 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む。YP粒子・褐色小ブロック（φ3mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に含む。YP粒（φ2mm）・ローム小ブロック（φ3mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 茶褐色土層 ローム粒を多量に、褐色粒子を多量に、YP粒（φ2mm）を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第87号土壌出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	弥生土器	胴部	矢羽状沈線・条線	黄褐色	覆土	壺
2	弥生土器	口縁部	R無節縄文	黄橙褐色	覆土	甗



第113图 土壙出土遺物（4）



第114图 土壤出土遺物 (5)

第88号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	Lの捺糸文	褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	縄文?→半截竹管状工具による集合沈線	橙褐色	覆土	

第89・90号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黄橙褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	LRL複節縄文	暗褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部	LR単節縄文	褐色	覆土	

第91号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	

第92号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	暗灰黄褐色	No. 1	
2	縄文土器	胴部	RL単節縄文(0段多条)	橙褐色	No. 1	

第93号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	RL・LR単節縄文(羽状)	褐色	No. 1	a・b 同一個体
2	縄文土器	底部	L無節縄文	褐色	No. 1	

第94号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	黄橙褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	灰黄褐色	覆土	
3	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー

第95号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	LRL複節縄文	暗褐色	覆土	

第97号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→列点状刺突文	黄橙褐色	覆土	

第99号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	RL単節縄文→浮線文→キザミ	黄橙褐色	覆土	

第102号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	L無節縄文	暗褐色	覆土	

第103号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	R無節縄文→半截竹管状工具による押引	褐色	No. 3	
2	縄文土器	口縁部	R・L無節縄文(羽状)	黄橙褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部	RL単節縄文	明赤褐色	No. 1	

第105号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	LR単節縄文(0段多条)	黄橙褐色	覆土	
2	縄文土器	底部	縄文	灰黄褐色	覆土	

第106号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	単節縄文	赤褐色	No. 1	

第109号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	付加条?→半截竹管状工具による押引	黒褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	L無節縄文	黄褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部	R・L無節縄文(羽状)	褐色	覆土	
4	縄文土器	胴部	RL単節縄文、ループ文	黄褐色	覆土	
5	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー

第111号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	LRL複節縄文→沈線→磨消	黄橙褐色	覆土	

第112号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	隆帯・沈線による区画→RL単節縄文	黄橙褐色	覆土	

第113号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	RL単節縄文	橙褐色	No. 3	
1	石器	—	—	—	S-2	スクレイパー

第114号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	底部	L無節縄文	橙褐色	覆土	

第115号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	縄文	褐色	覆土	

第116号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	L無節縄文、口唇部に及ぶ	黄橙褐色	覆土	
2	縄文土器	底部	R・L無節縄文(羽状)	黄褐色	覆土	

3	縄文土器	胴部～ 底部	L無節縄文	黄橙褐色	覆土	
4	縄文土器	胴部	Lの撚糸文→隆帯	黄褐色	覆土	

第133号土壙 (第112図・図版57-2)

B 1 区の東側に位置する。遺構の半分が調査区外にかかり、さらに重複する第118号土壙に切られているため、全容は不明である。

平面形は、楕円形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が70cm、南北方向が80cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは25cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第119号土壙 (第112・118図・図版58-1・115)

B 1 区の東側に位置する。東側に第118・133号土壙、西側には第143号土壙、北側には第130号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が100cm、南北方向が120cmである。西壁は、垂直気味に立ち上がるが、東壁はやや袋状にオーバーハングしている。確認面からの深さは32cm程である。底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第120号土壙 (第115・118図・図版58-2・115)

B 1 区の北側に位置する。北側に第36・37号住居跡、北東側には第149号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が130cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第121号土壙 (第115・118図・図版59-1・115)

B 1 区の北側に位置する。南東側に第36・37号住居跡、西側には第126号土壙がある。

平面形は、隅丸方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が142cm、南北方向が125cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さ20cm程である。底面は、若干起伏をもち、西壁の手前が窪んでいる。出土遺物は、縄文時代前

期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第122号土壙（第115・118図・図版59-2・119）

B 1 区の中央に位置する。東側に第98号土壙、北側には第75・101号土壙がある。重複する第10・11号住居跡を切っている。

平面形は、隅丸不整形を呈する。遺構の規模は、東西方向が92cm、南北方向が70cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは32cm程である。底面は、若干起伏をもち、中央から東壁手前が窪んでいる。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第123号土壙（第115・118図・図版60-1・115）

B 1 区の東側に位置する。東側に第113・114号土壙、西側には第109・110号土壙がある。重複する第117号土壙を切っている。

平面形は、隅丸長方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が286cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは15cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第124号土壙（第115・118図・図版60-2・115）

B 1 区の北側に位置する。東側に第132号土壙、西側には第125号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が148cm、南北方向が120cmである。西壁は、緩やかに立ち上がるが、東壁は、垂直気味に立ち上がる。確認面からの深さは16cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第125号土壙（第115・118図・図版61-1・115）

B 1 区の北側に位置する。東側に第124・132号土壙、西側に第121号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が127cm、南北方向が132cmである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第126号土壇（第116・118・119図・図版61-2・115・116）

B 1 区の北側に位置する。東側に第36・37号住居跡、第121号土壇がある。

平面形は、隅丸長方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が235cm、南北方向が105cmである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、混入したと思われる縄文時代前期前葉から中期に比定される土器片が出土している。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第127号土壇（第116図）

B 1 区の中央に位置する。東側に第136・137号土壇、北側には第80・92・93号土壇がある。重複する第136号土壇を切っている。

平面形は、隅丸長方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が282cm、南北方向が107cmである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土土器ない。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第128号土壇（第116図）

B 1 区の中央に位置する。東側に第127・136・137号土壇がある。重複する第12号住居跡を切っている。

平面形は、隅丸長方形を呈する。遺構規模は、東西方向が255cm、南北方向が122cmである。壁は、垂直気味に立ち上がり、確認面からの深さは27cm程である。底面は、平坦である。出土土器ない。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第129号土壇（第116・119図・図版62-1・116）

B 1 区の東側に位置する。重複する第86号土壇に切られている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が82cm、南北方向が90cmである。壁は、袋状の形態で、上半部は緩やかに傾斜しているが、下半部は丸みをもってオーバーハングしている。確認面からの深さは65cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が少量出土している。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第130号土壇（第116・119図・図版62-2・116）

B 1 区の北側に位置する。西側に第143号土壇が、南側に第118・119・133号

土壇、北側に第38号住居跡がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が100cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が少量出土している。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第131号土壇（第116・119図・図版63-1）

B1区の北東側に位置する。西側に第132号土壇がある。第38号住居跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

平面形は、楕円形である。遺構の規模は、東西方向が145cm、南北方向が135cmである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cm程である。底面は、ほぼ平坦であるが、東壁の手前が窪んでいる。出土遺物は、縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が出土している。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第132号土壇（第117・119図・図版117）

B1区の北東側に位置する。東側に第131号土壇、西側には第124・125号土壇がある。重複する第1号溝跡に切られているが、第32号住居跡を切っている。

平面形は、楕円形を呈している。遺構の規模は、東西方向が142cm、南北方向が138cmである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の黒浜式と前期後半の諸磯b式の土器片が少量出土している。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉から後半と考えられる。

第134号土壇（第117・120図・図版63-2・117）

B1区の西側に位置する。東側には第155号土壇、南側に第87・88号土壇がある。重複する第20号住居跡を切っている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が100cmである。南壁以外はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは50cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の有尾式の土器片と石匙が1点出土している。

本土壇の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第135号土壙 (第117・120図・図版64-1・117)

B 1 区の北西側に位置する。東側に第153号土壙、西側には第19号住居跡がある。重複する第17号住居跡、第103・154号土壙を切っている。

平面形は、隅丸長方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が280cm、南北方向が23cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、混入したと思われる縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第136号土壙 (第117・120図・図版64-2・117)

B 1 区の東側に位置する。南側に第89・90号土壙がある。重複する第127号土壙に切られ、また第137号土壙を切っている。

平面形は、ほぼ円形を呈する。遺構の規模は、東西方向は70cm、南北方向が60cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは50cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第137号土壙 (第117図・図版64-2)

B 1 区のに東側に位置する。北側に第92号土壙がある。重複する第136号土壙に切られているため、全容は不明である。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が36cm、南北方向が40cmである。壁は、やや傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは15m程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第138号土壙 (第117図・図版65-1)

B 1 区の中央より西側に位置する。西側に第153・154号土壙、北側には第102号土壙、第1号溝跡がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が170cm、南北方向が142cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm程で、中央から南側半分は20cm程である。底面は、平坦である。縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第139号土壙 (第117図・図版65-2)

B 1 区の中央付近に位置する。西側に第13号住居跡、南側に第68・158号土

壙がある。重複する第12・28号住居跡を切っている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が60cm、南北方向が45cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは32cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第140号土壙（第117図・図版66-1）

B1区の西側に位置する。東側に第156・157号土壙、北側には第88・134号土壙がある。重複する第26号住居跡を切っている。

平面形は、不整形を呈する。遺構の規模は、東西方向が67cm、南北方向が75cmである。西壁は、垂直気味に立ち上がるが、東壁は、やや袋状にオーバーハンクしている。確認面からの確認面からの深さは55cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土土器ない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第141号土壙（第117図）

B1区の中央よりやや西側に位置する。西側に第148号土壙、北側には第138号土壙がある。重複する第31号住居跡を切っている。

平面形は、隅丸方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が60cmである。壁は、傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さ10cm程である。底面は、平坦である。出土土器ない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第142号土壙（第117図）

B1区の中央より西側に位置する。北側には第138号土壙がある。重複する第31号住居跡を切っている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が60cm、南北方向が50cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは15cm程である。底面は、平坦である。出土土器ない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第143号土壙（第121図・図版66-2）

B1区の北東側に位置する。東側に第118・119・130・133号土壙、西側には第144号土壙がある。一部攪乱を受けている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が94cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土土器ない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第144号土壙（第120・121図・図版67-1・117）

B 1 区の北東側に位置する。東側に第143号土壙、西側には149号土壙、南側には第150・151号土壙がある。重複する第140・30号住居跡に切られている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が125cm、南北方向が115cmである。壁は袋状の形態で、上半部は緩やかに傾斜しているが、下半部は丸みをもってオーバーハングしている。確認面からの深さは30cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の有尾式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第145号土壙（第120・121図・図版117）

B 1 区の東側に位置する。東側に第111・112号土壙、西側には第80・94・95土壙がある。重複する第33号住居跡に切られている。

平面形は、方形を呈する。遺構の規模は、南北方向が100cm、東西方向が92cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは50cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

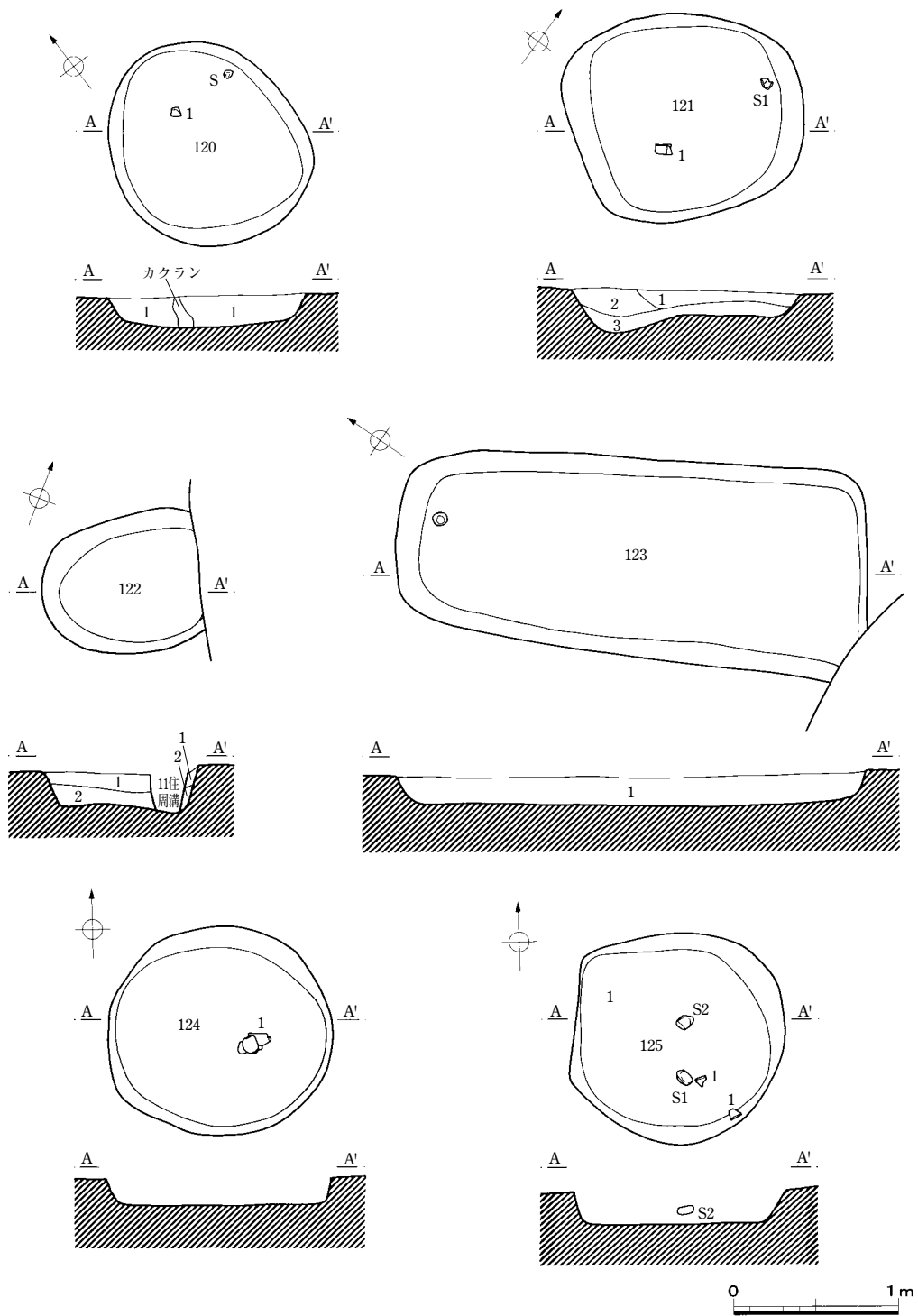
本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第146号土壙（第120・121図・図版67-2・68-1・117）

B 1 区の中央より東側に位置する。西側に第75号土壙、北側には第106号土壙、南側に第96号土壙がある。重複する第147号土壙を切っている。上部に集石が全面にあり、攪乱されていたため、全容は不明である。

平面形は、不整形を呈する。遺構の規模は、東西方向が130cm、南北方向が120cmである。壁は袋状の形態で、南壁の上半部はやや傾斜しているが、下半部は丸みをもってオーバーハングしている。確認面からの深さは40cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



第115図 土壇 (10)

第120号土壌土層説明

- 第1層 黒褐色土層 褐色ブロック (φ 2 cm) を多量に、ロームブロック (φ 2 cm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第121号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に、橙色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 褐色粒子を多量に、ローム粒を均一に含む。YP粒子・ローム小ブロック (φ 2 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒 (φ 2 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第122号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 ロームブロックをかなり多量に、YP粒子・赤橙色粒子を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒 (φ 2 mm) を均一に含む。ローム粒・YP粒子・ローム小ブロック (φ 3 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第123号土壌土層説明

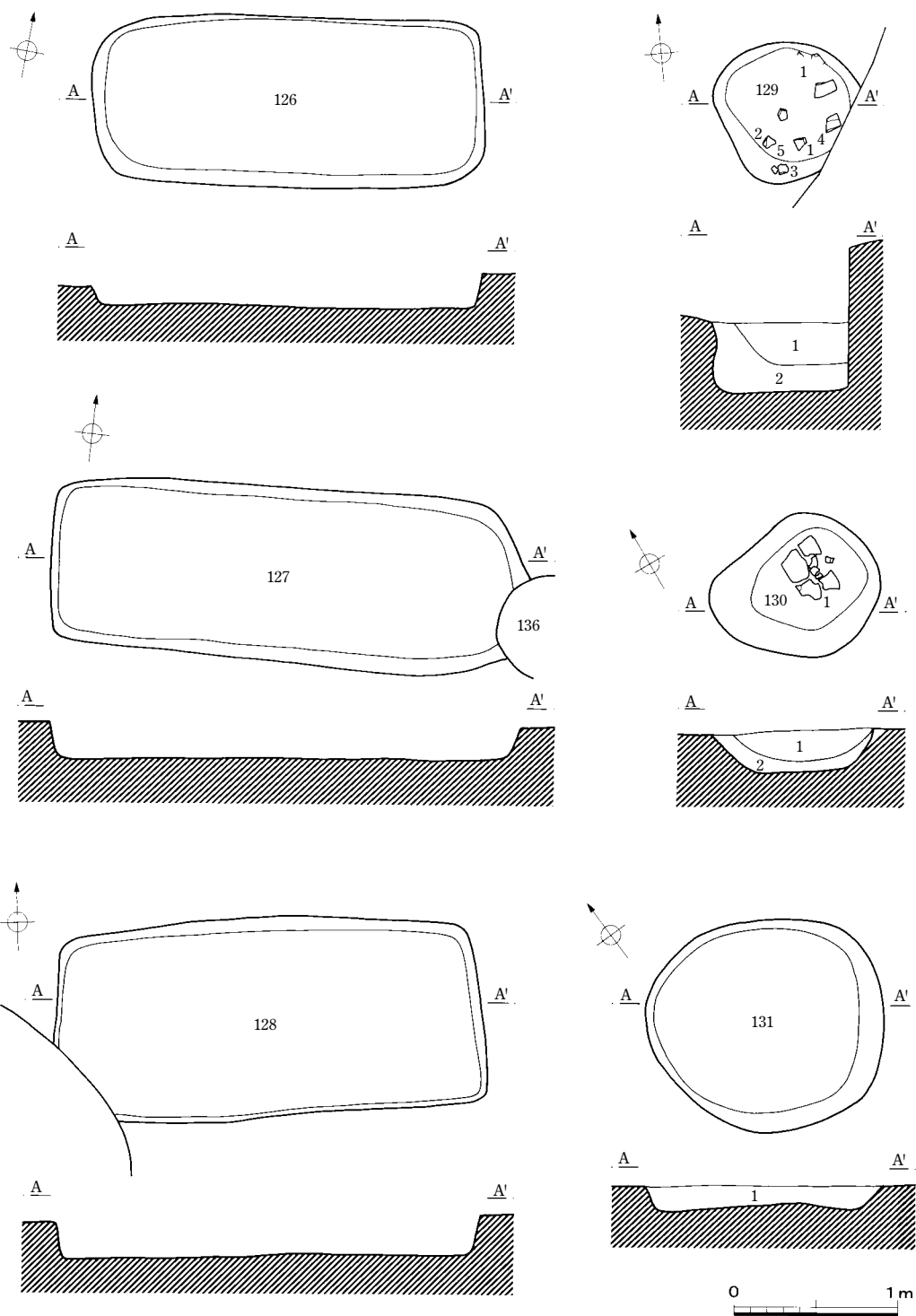
- 第1層 黒褐色土層 ローム粒を多量に、ローム小ブロック (φ 3 mm) を均一に含む。ロームブロック (φ 5 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。

第129号土壌土層説明

- 第1層 黒褐色土層 ローム粒を多量に、ローム小ブロック (φ 3 mm) を均一に含む。ロームブロック (φ 5 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子をやや多量に、YP粒 (φ 2 mm) を均一に、ローム粒を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒を均一に含む。YP粒 (φ 2 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第130号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、YP粒 (φ 2 mm) を少量含む。ローム粒・炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。ローム小ブロック (φ 5 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第116図 土坑 (11)

第131号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒(φ2mm)・ローム粒を少量、ローム小ブロック(φ3mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第132号土壌土層説明

- 第1層 茶褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒(φ2mm)・ローム粒を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒子を均一に含む。ローム粒・ロームブロック(φ1.5cm)を少量、YP粒(φ2mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第134号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 浅間山系A軽石を多量に、ローム粒・炭化物粒を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子をやや多量に含む。YP粒(φ2mm)を均一に、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒子を均一に含む。YP粒(φ2mm)・ローム粒を少量、ローム小ブロック(φ3mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 茶褐色土層 ローム粒を多量に含む。YP粒子を均一に、YP粒(φ2mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第135号土壌土層説明

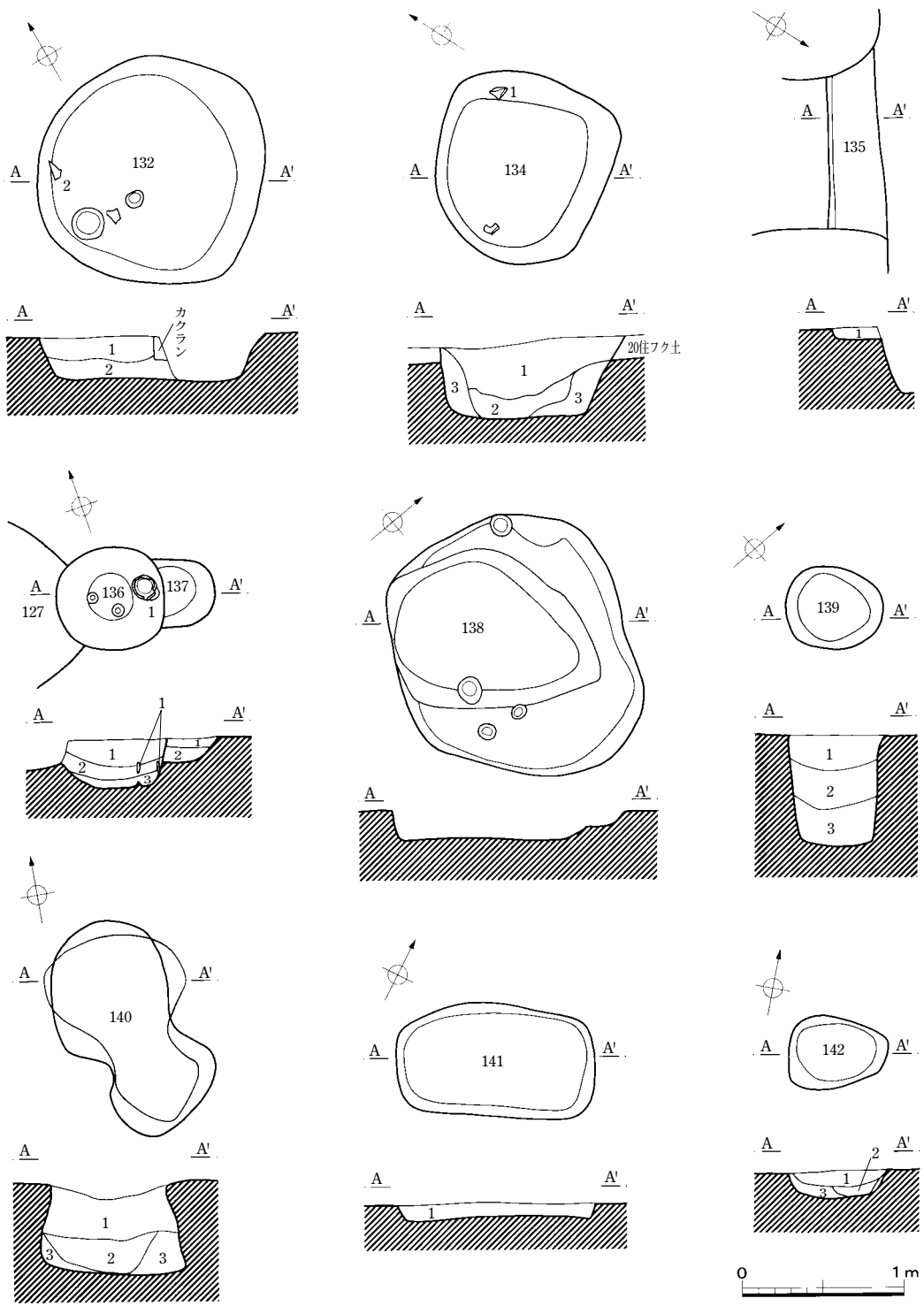
- 第1層 黒褐色土層 褐色ブロック(φ5mm)を均一に、ローム粒・ローム小ブロック(φ3mm)を少量含む。しまりは強いが、粘性は弱い。

第136号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒(φ2mm)・ローム粒を均一に、ロームブロック(φ1.5cm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 茶褐色土層 ローム粒を多量に含む。YP粒(φ2mm)を均一に、YP粒子・ロームブロック(φ1.5cm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む。ロームブロック(φ1.5cm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第137号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒を多量に含む。YP粒(φ2mm)を均一に、ロームブロック(φ1.8cm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を非常に多量に、褐色粒子を多量に、YP粒(φ2mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第117図 土壙 (12)

第138号土壙土層説明

- 第1層 淡褐色土層 YP粒子を多量に含む。ロームブロック（φ1～3cm）を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに弱い。

第139号土壙土層説明

- 第1層 黒褐色土層 YP粒（φ2mm）を多量に、ローム粒・ロームブロック（φ1cm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 黒褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒（φ2mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 黒褐色土層 ロームブロック（φ1～2cm）を多量に、YP粒（φ2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第140号土壙土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 ローム粒をやや多量に、YP粒子を均一に含む。YP粒（φ2mm）・炭化物ブロック（φ1cm）・焼土ブロック（φ1cm）を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒をやや多量に、YP粒子を均一に含む。ローム小ブロック（φ5mm）・焼土小ブロック（φ5mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に含む。ローム小ブロック（φ3mm）を少量、炭化物粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第141号土壙土層説明

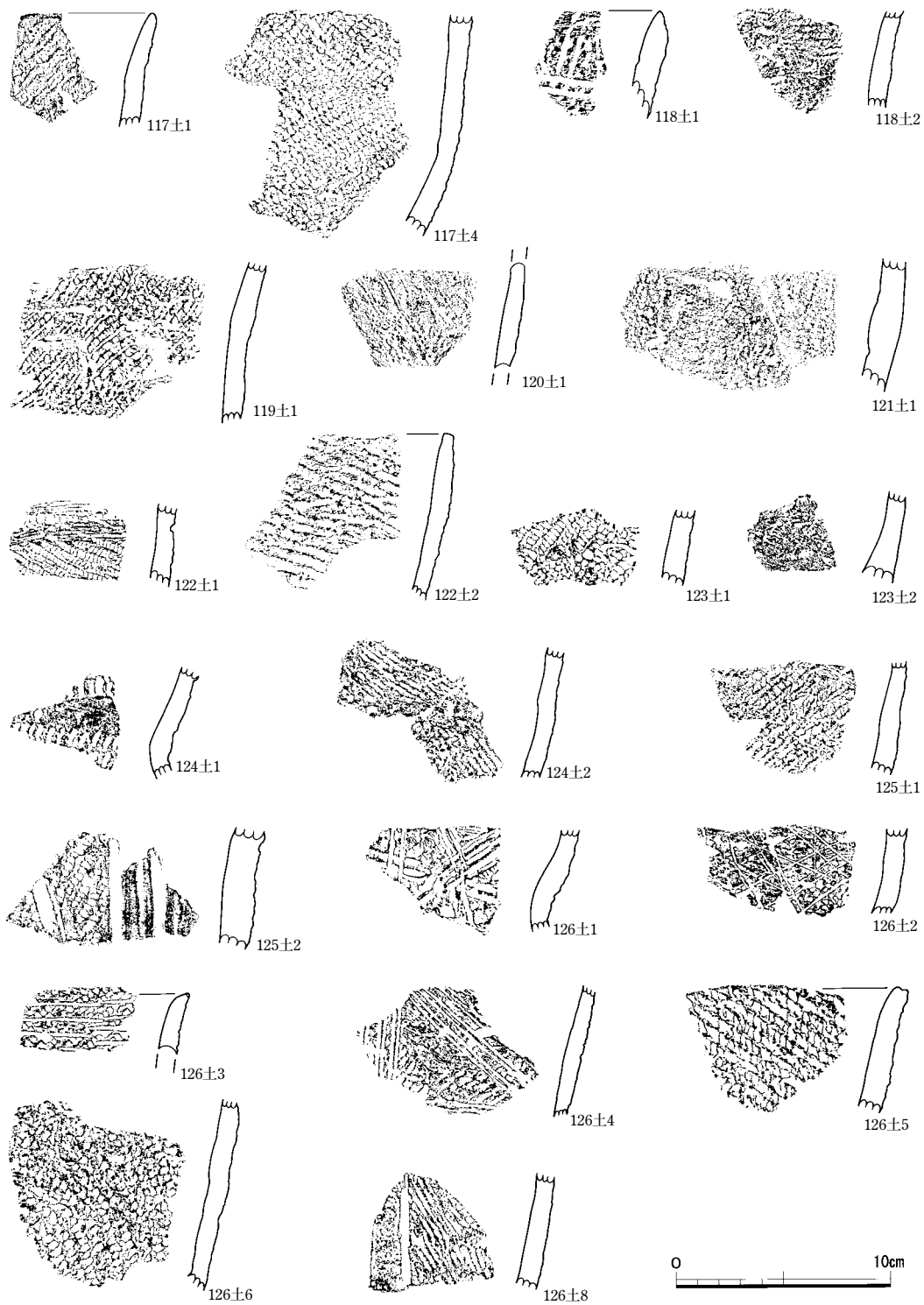
- 第1層 暗茶褐色土層 マンガン粒・マンガンブロック（φ1cm）を多量に、YP粒子を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第142号土壙土層説明

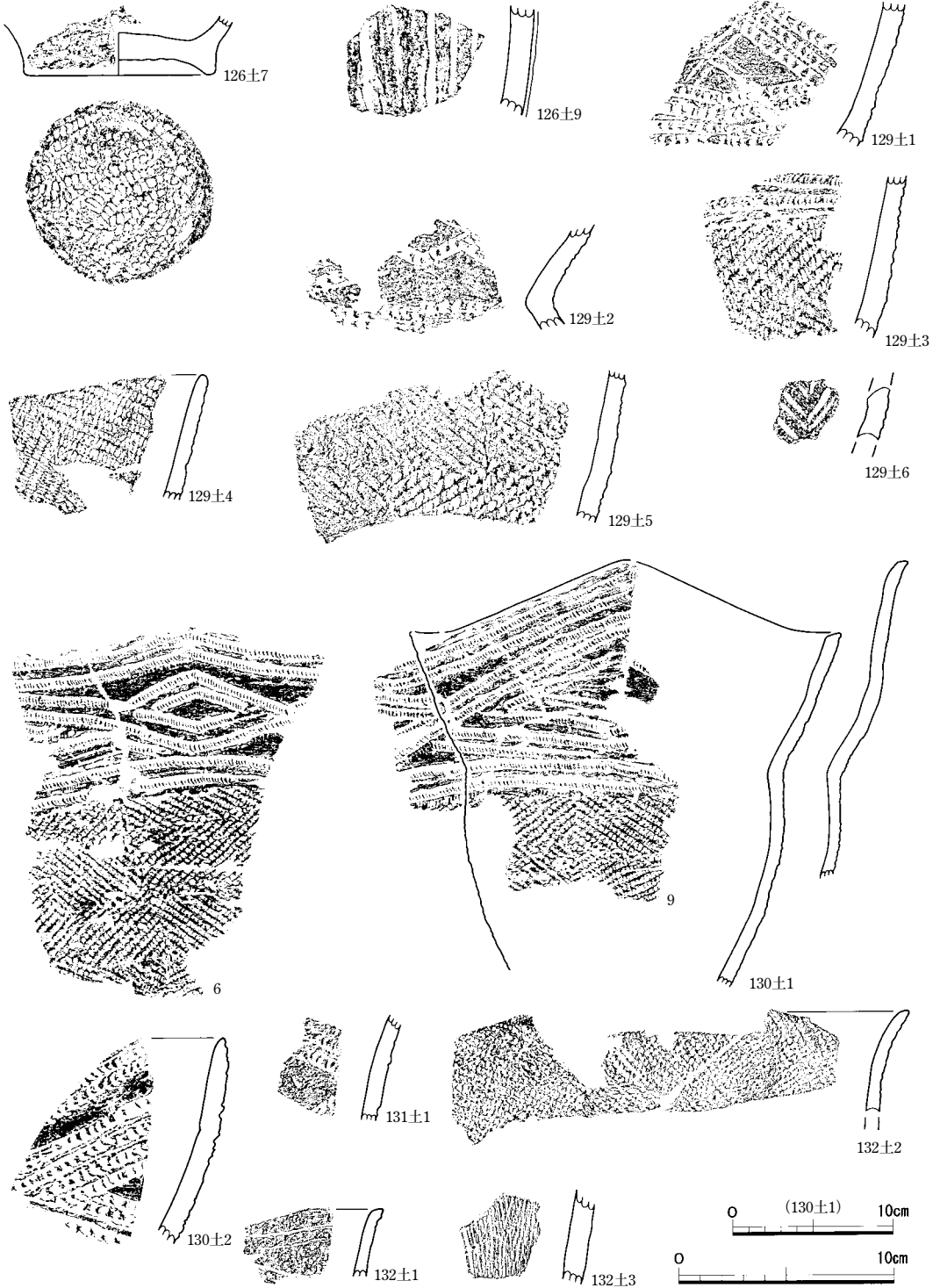
- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒をやや多量に含む。ローム小ブロック（φ3mm）を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 黒褐色粒子をやや多量に、YP粒子を均一に、YP粒（φ2mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第117号土壙出土遺物観察表

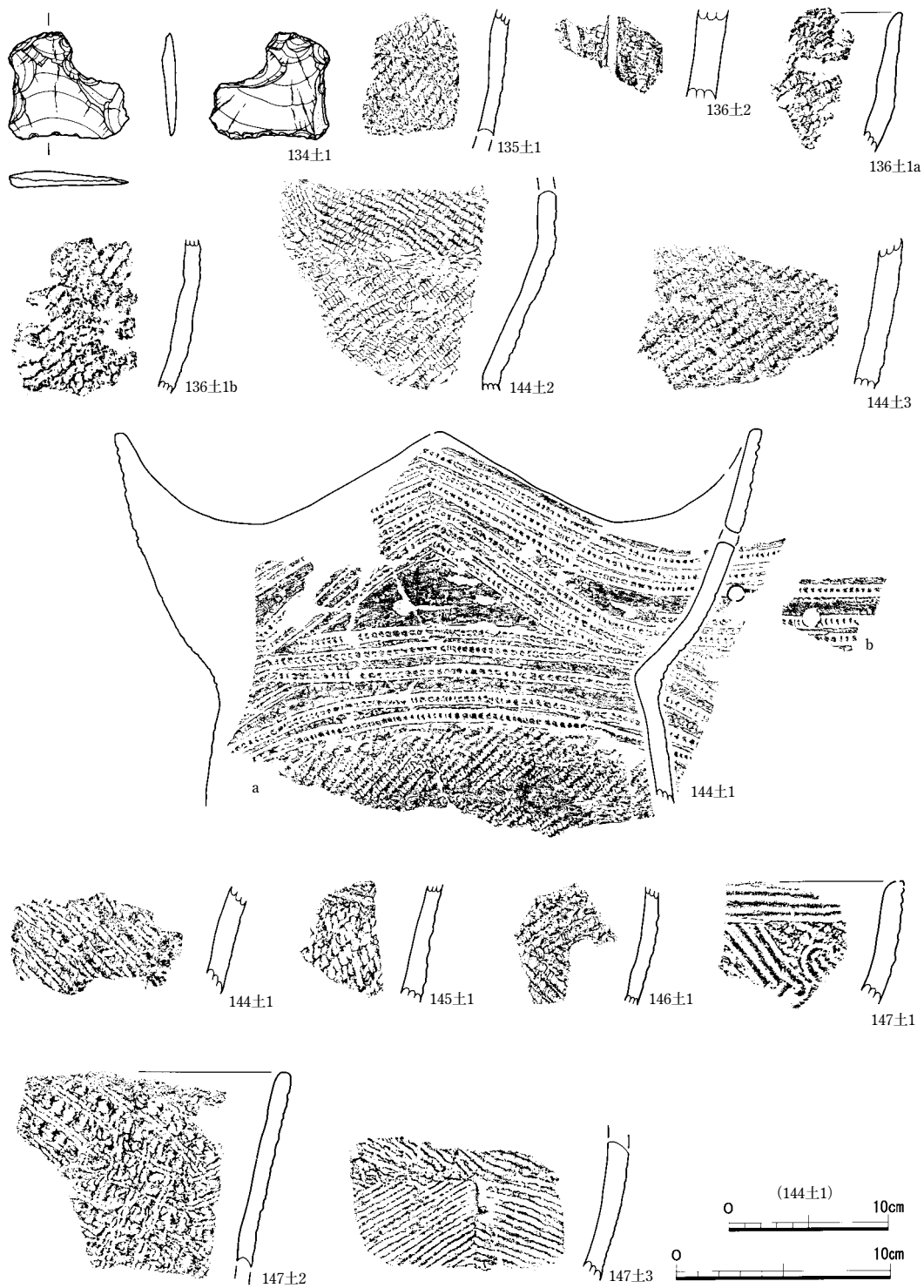
No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	縄文?→半截竹管状工具による沈線	灰黄褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	赤褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	L無節縄文	暗褐色	覆土	



第118图 土壤出土遺物 (6)



第119图 土壤出土遺物 (7)



第120図 土壙出土遺物（8）

4	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状)	黄褐色	覆土	
---	------	----	---------------	-----	----	--

第118号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	縄文→沈線	灰黄褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄褐色	覆土	

第119号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	L無節縄文	暗褐色	No. 1	

第120号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	擦痕	黄橙褐色	No. 1	

第121号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	RL?単節縄文	橙褐色	No. 1	

第122号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線→列点状 刺突文・RL単節縄文	褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	縄文	褐色	覆土	

第123号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状)	黄褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	無文	褐色	覆土	

第124号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	灰黄褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	R無節縄文	黄褐色	覆土	

第125号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	L無節縄文	褐色	No. 2	
2	縄文土器	胴部	RL単節縄文→沈線→磨消	黄橙褐色	覆土	

第126号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	単節縄文→沈線	褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	LR単節縄文→半截竹管状工具による沈線、口唇部：キザミ	褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	L無節縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	R無節縄文	褐色	覆土	
6	縄文土器	胴部	RL単節縄文	橙褐色	覆土	
7	縄文土器	底部	RL単節縄文、底部：LR単節縄文	黄褐色	覆土	
8	縄文土器	胴部	L無節縄文→沈線→磨消	黄橙褐色	覆土	
9	縄文土器	胴部	隆帯→条線	褐色	覆土	

第129号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	暗褐色	No. 1・6	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	暗褐色	No. 5	
3	縄文土器	口縁～胴部	L・R無節縄文（羽状）→半截竹管状工具による沈線→半截竹管状工具による押引	褐色	No. 8	
4	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文（羽状）（0段多条）	橙褐色	No. 7	
5	縄文土器	胴部	L・R無節縄文（羽状）	黒褐色	No. 3	
6	縄文土器	胴部	沈線	橙褐色	覆土	

第130号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～胴部	RL・LR単節縄文（羽状、0段多条）→半截竹管状工具による押引	明褐色	No. 1	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線・押引	褐色	覆土	

第131号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黄褐色	覆土	

第132号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	暗褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	RL単節縄文（結節）	褐色	No. 1	
3	縄文土器	胴部	条線	黄褐色	覆土	

第134号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	石器	—	—	—	No. 2	石匙

第135号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	L無節縄文	褐色	覆土	

第136号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	L無節縄文	暗褐色	No. 1	a・b 同一個体
2	縄文土器	胴部	RL単節縄文→沈線	褐色	覆土	

第147号土壙（第120・121図・図版67-2・68-1・118）

B 1 区の中央より東側に位置する。重複する第146号土壙に切られている。第146号土壙と同様、上部に集石が全面にあり、攪乱されていたため、全容は不明である。

平面形は、楕円形を呈すると思われる。遺構の規模は、東西方向が100cm、南北方向が60cmである。壁は、袋状の形態で北壁の上半部はやや傾斜しているが、下半部は丸みをもってオーバーハングしている。確認面からの深さは30cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第148号土壙（第121図・図版68-2）

B 1 区の西側に位置する。東側に第141・142号土壙、南側には第155号土壙、北側には第153・154号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が65cm、南北方向が58cmである。壁は、傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cm程である。底面は、東壁の手前が窪んでいる。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第149号土壙（第121・124図・図版118・119）

B 1 区の北東側に位置する。西側に第120号土壙、南側に第105・116号土壙がある。重複する第30号住居跡に切られている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が170cm、南北方向が120cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、中央から西壁に向かって下がっている。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量と磨石の破片が出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第150号土壙（第121・125図・図版69-1・119）

B 1 区の北側に位置する。東側に第151号土壙、南側には第105・108・116号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が86cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは30cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の黒浜式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第151号土壙（第121・125図・図版69-2・119）

B 1 区の北側に位置する。西側に第150号土壙、南側には第110号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が100cm、南北方向が96cmである。壁は、西壁は緩やかに立ち上がり、東壁はやや垂直に立ち上がる。確認面からの深さは30cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉に比定される土器片が少量と石皿の破片が出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第152号土壙（第121図・図版70-1）

B 1 区の中央に位置する。西側には第28号住居跡、南側には第68・77・158

土壙、北側には第139号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、北東方向が135cm、南北方向が110cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土土器はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第153号土壙（第122・125図・図版70-2・119）

B 1 区の西側に位置する。東側に第138号土壙、西側には第154号土壙、北側には第1号溝跡がある。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が120cm、南北方向が110cmである。南壁は、緩やかに立ち上がるが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは21cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中後半の諸磯b式の土器片が少量出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期後半の諸磯b式期と考えられる。

第154号土壙（第122図）

B 1 区の西側に位置する。東側に第138・153号土壙、西側には第103号土壙がある。重複する第135号土壙にきられているが、第16号住居跡を切っている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が130cm、南北方向が160cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは15cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土土器はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第155号土壙（第122図）

B 1 区の西側に位置する。西側には第134号土壙、南側には第79・156・157号土壙などがある。重複する第24住居跡を切っている。

平面形は、楕円形である。遺構の規模は、東西方向が122cm、南北方向が110cmである。壁は、やや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土土器はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第156号土壙（第122図）

B 1 区の西側に位置する。東側に第79号土壙、南側に第157号土壙がある。重複する第26号住居跡を切っている。

平面形は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が82cm、南北方向が80cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土土器はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第157号土壙（第122図）

B 1 区の西側に位置する。西側には第140号土壙、北側には第79・156号土壙がある。

平面形は、楕円形を呈している。遺構の規模は、東西方向が60cm、南北方向が80cmである。南壁は、傾斜しつつ立ち上がるが、北壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程で、最深部は35cm程である。底面は、平坦であるが、中央から南側は一段下がっている。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第158号土壙（第122図）

B 1 区の中央付近に位置している。東側に第84号土壙、西側には第69号土壙、北側に第139・152号土壙がある。重複する第28号住居跡、第68号土壙を切っている。

平面形は、楕円形を呈している。遺構の規模は、東西方向が130cm、南北方向が68cmである。西壁は、傾斜しつつ立ち上がるが、東壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは53cmである。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代前期中葉期と考えられる。

第159号土壙（第122・125図・図版74-1・119）

B 2 区の北側に位置している。西側に第1号埋没谷、南側に第160号土壙がある。東側には、第2号埋没谷がある。

平面形態は、隅丸方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が45cm、南北方向が100cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物は、須恵器の坏が1点の壁際から出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から平安時代と考えられる。

第160号土壙（第122図・図版74-2）

B 2 区の北側に位置する。西側に第1号埋没谷、北側に第159号土壙がある。

平面形態は、ほぼ円形を呈する。遺構の規模は、直径が50cm程である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から平安時代と考えられる。

第161号土壙（第123図・図版75-1）

B 2 区の北側に位置する。西側に第1号埋没谷、第159・160号土壙、東側には第162号土壙がある。

平面形態は、円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が70cm、南北方向が80cmである。確認面からの深さは30m程である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第162号土壙（第123図・図版75-2）

B 2 区の北側に位置する。西側に第161号土壙、東側には第2号埋没谷がある。

平面形態は、隅丸方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が90cm、南北方向が130cmである。壁は、傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは52cm程である。底面は、若干起伏をもっている。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第163号土壙（第123図）

B 2 区やや南側に位置する。西側に第1号埋没谷、南側には第164号土壙がある。

平面形態は、楕円形を呈する。遺構の規模は、東西方向が65cm、南北方向が65cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土遺物はない。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第164号土壙（第123図・図版76-1）

B 2 区の南側に位置する。西側に第1号埋没谷、北側には第163号土壙がある。

平面形は、隅丸方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が80cm、南北方向が142cmである。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは32cm程である。底面は、若干起伏をもち中央から南壁付近は若干窪んでいる。出土遺物はない。

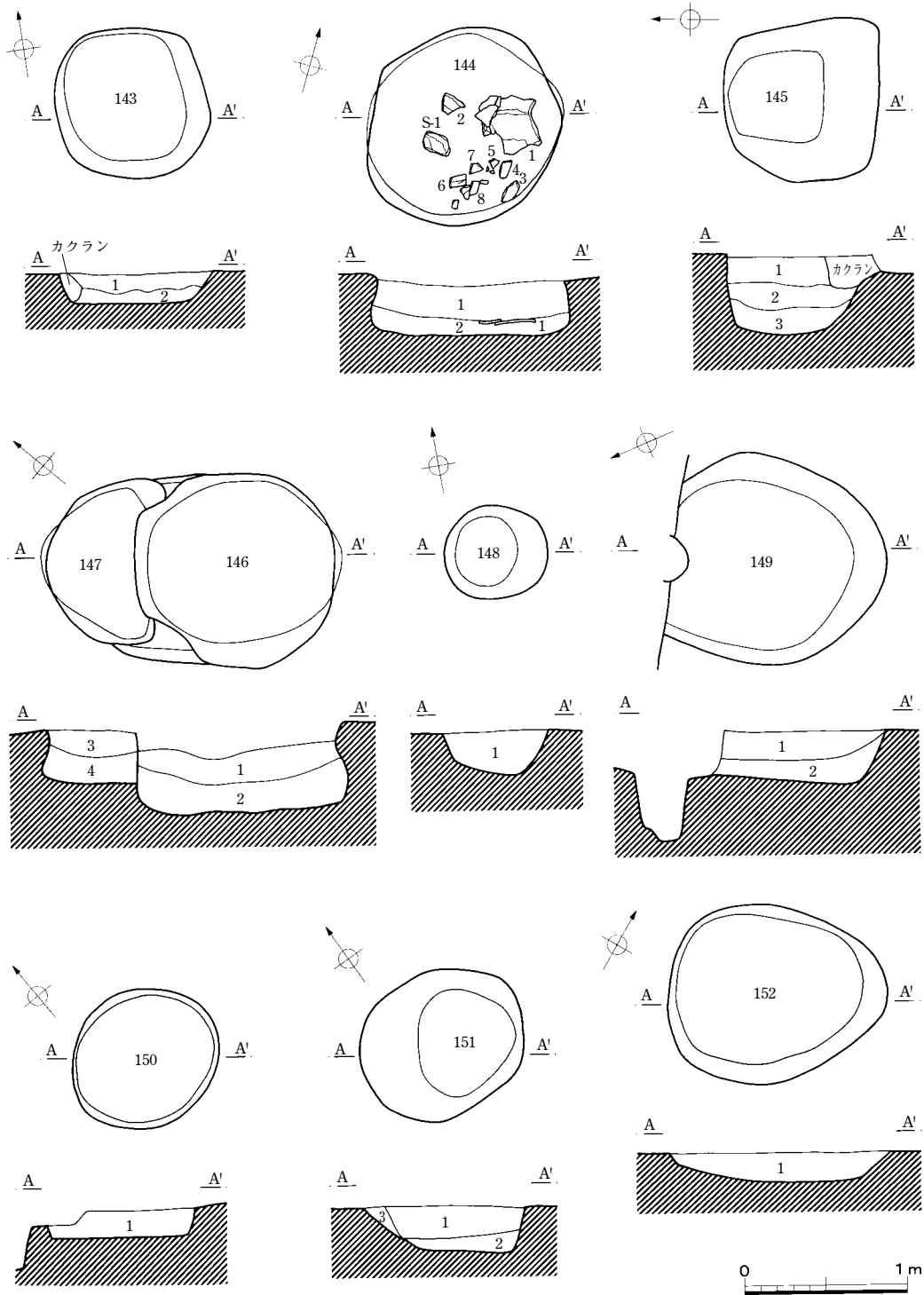
本土壙の帰属時期は、覆土の状態から浅間山系A軽石降下以前と考えられる。

第165号土壙（第123・125図・図版76-2・119・120）

B 1 区の西側に位置している。東側に第153・154号土壙が、南側には第19号住居跡・第105号土壙がある。重複する第17号住居跡を切っている。

平面形は、隅丸方形を呈する。遺構の規模は、東西方向が122cm、南北方向が138cmである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。出土遺物は、縄文時代前期中葉の有尾式や黒浜式の土器片が出土している。

本土壙の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から縄文時代前期中葉期と考えられる。



第121図 土壙 (13)

第143号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP細粒を多量に、ローム小ブロック（φ3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第144号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に含む。YP粒（φ2mm）を少量、ローム粒をやや少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒をやや多量に含む。YP粒子を均一に、YP粒（φ2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第145号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒を均一に含む。YP粒（φ2mm）・ローム小ブロック（φ3mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒（φ2mm）を均一に含む。ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 ローム粒をやや多量に含む。YP粒子を均一に、ローム小ブロック（φ3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第146号土壌土層説明

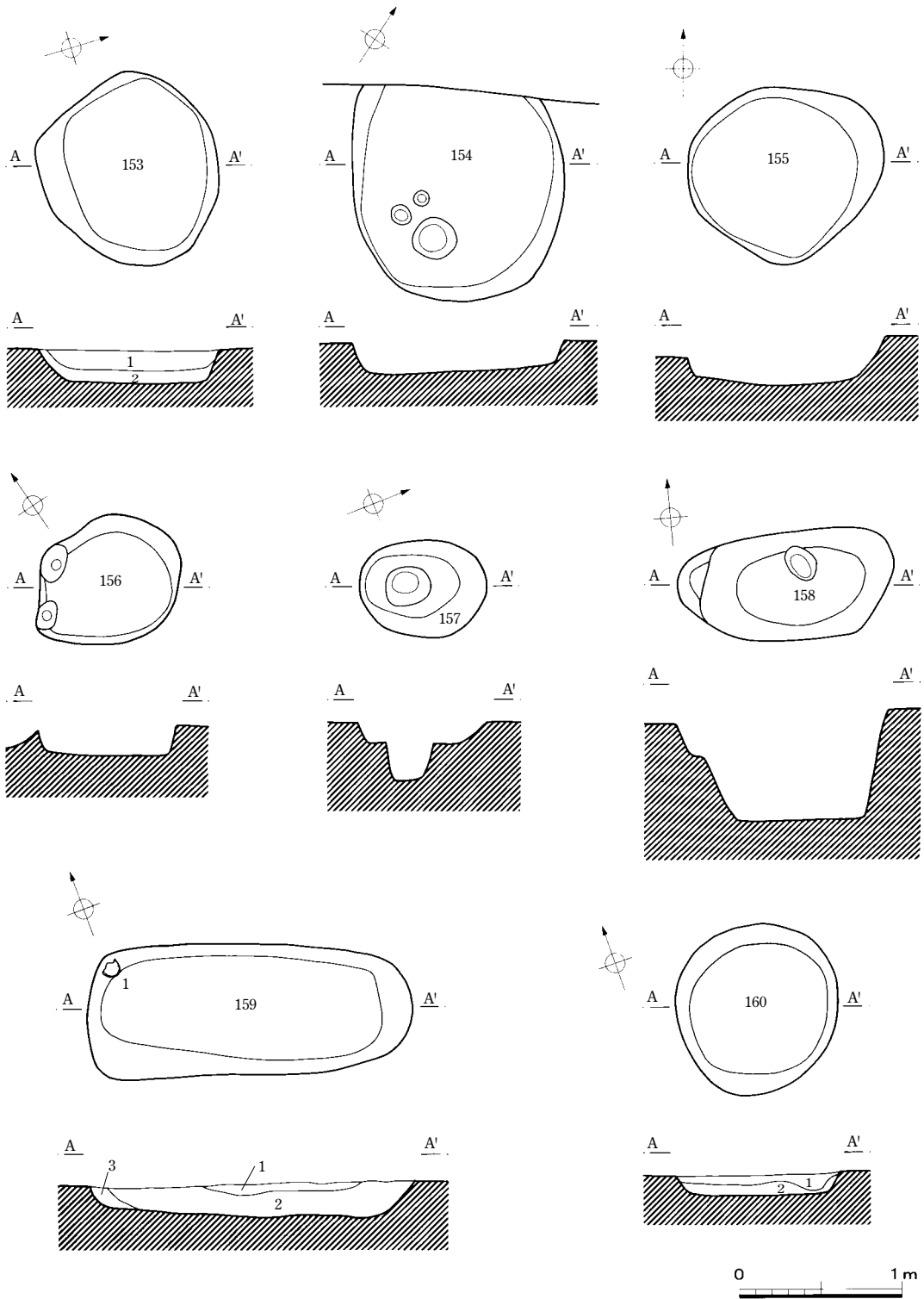
- 第1層 黒褐色土層 ローム粒を多量に、褐色ブロック（φ5mm）をやや多量に含む。YP粒（φ2mm）を均一に、ローム小ブロック（φ3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 茶褐色土層 ローム粒をやや多量に含む。YP粒子を均一に、ロームブロック（φ1cm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第147号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒（φ2mm）をやや多量に含む。YP粒子を均一に、マンガン粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に含む。YP粒（φ2mm）・ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第148号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒（φ2mm）を均一に含む。YP粒子・ロームブロック（φ1.5cm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第122図 土坑 (14)

第149号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に、YP粒（φ2mm）を少量、ローム粒を微量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に、YP粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第150号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒をやや多量に含む。YP粒（φ2mm）を均一に、ローム小ブロック（φ3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第151号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒（φ2mm）を均一に、ローム粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗褐色土層 YP粒子・ローム粒を多量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第152号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒（φ2mm）を均一に含む。ローム粒・ローム小ブロック（φ3mm）・YP粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第153号土壌土層説明

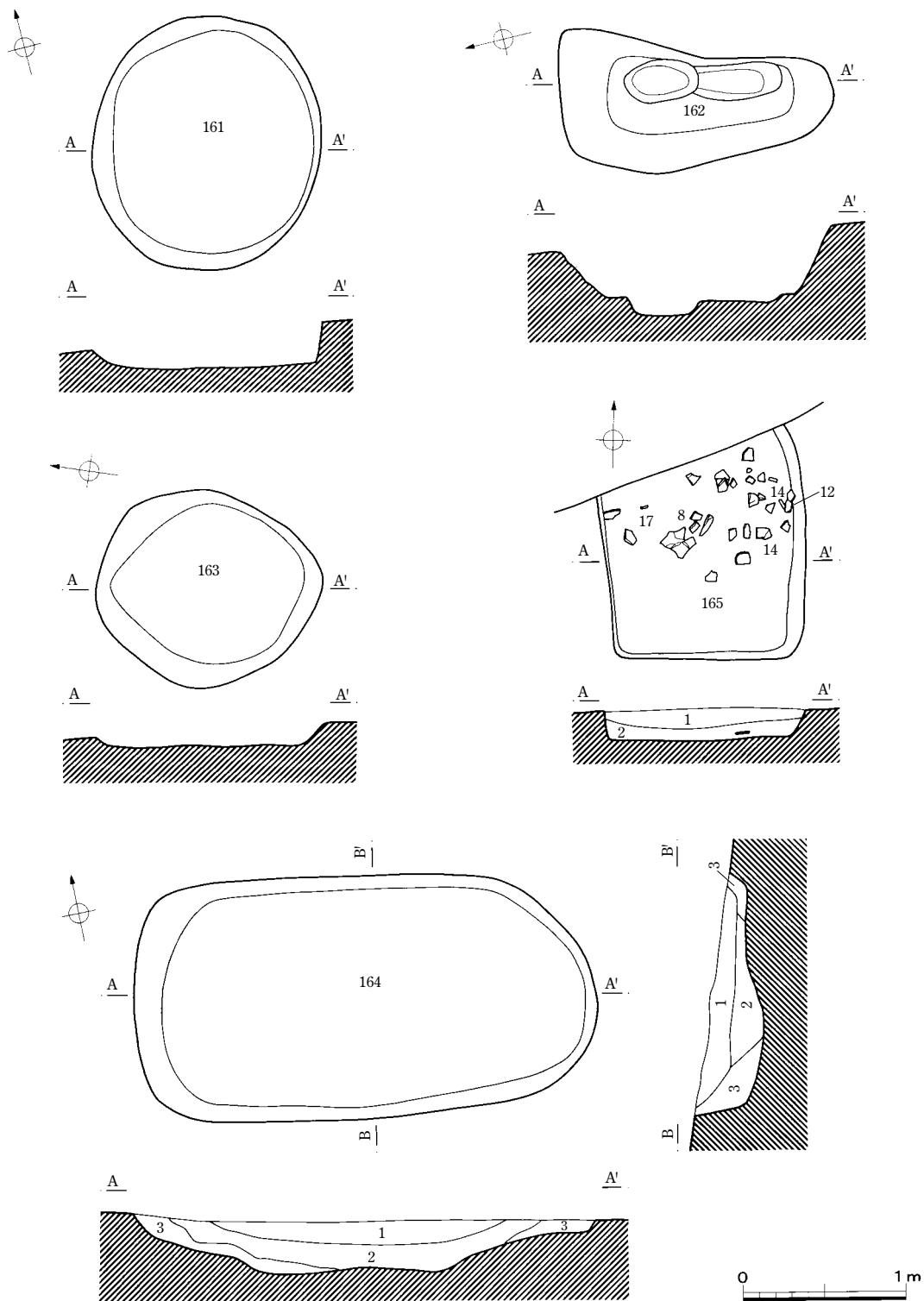
- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、ローム粒をやや多量に含む。ローム小ブロック（φ5mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 褐色土層 黒褐色土粒子を少量、YP粒子を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

第159号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土層 YP粒（φ2mm）を均一に、YP粒子・マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗茶褐色土層 YP粒子を均一に含む。YP粒（φ2mm）・ローム小ブロック（φ3mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 ローム粒を多量に、YP粒子を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第160号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土層 ロームブロック（φ1cm）を多量に、YP粒子を均一に、YP粒（φ2mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 黒褐色土層 P粒子を多量に含む。ロームブロック（φ1cm）・ローム小ブロック（φ3mm）をやや多量に、YP粒（φ2mm）を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。



第123図 土坑 (15)

第161号土壌土層説明

第1層 暗茶褐色土 片岩片・泥岩片を多量に、YP粒子を若干含む。しまりは非常に強く、粘性は弱い。

第162号土壌土層説明

第1層 黒褐色土層 ローム粒・ロームブロック (φ 1 cm) を均一に、YP粒子を極微量に含む。色調は下に行くに従って暗褐色に近くなるが明確なラインはない。しまり、粘性とも強い。

第163号土壌土層説明

第1層 黒褐色土層 第162号土壌の覆土と類似するが、茶色味が強い。しまり、粘性とも強い。

第164号土壌土層説明

第1層 暗褐色土層 YP粒子を多量に含む。ローム粒・ローム小ブロック (φ 3 mm) をやや多量に、YP粒 (φ 2 mm) を均一に含む。しまり、粘性ともに強い。

第2層 黒褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒 (φ 2 mm) を均一に含む。ローム粒・ローム小ブロック (φ 3 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第3層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、黒褐色粒子をやや多量に含む。YP粒 (φ 2 mm) を均一に、黒褐色小ブロック (φ 5 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第165号土壌土層説明

第1層 暗茶褐色土層 YP粒子を多量に、ローム小ブロック (φ 5 mm) をやや多量に含む。ローム粒・ロームブロック (2 cm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第2層 茶褐色土層 YP粒子を均一に含む。YP粒 (φ 2 mm) ・ロームブロック (φ 1.5cm) ・ローム小ブロック (φ 5 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

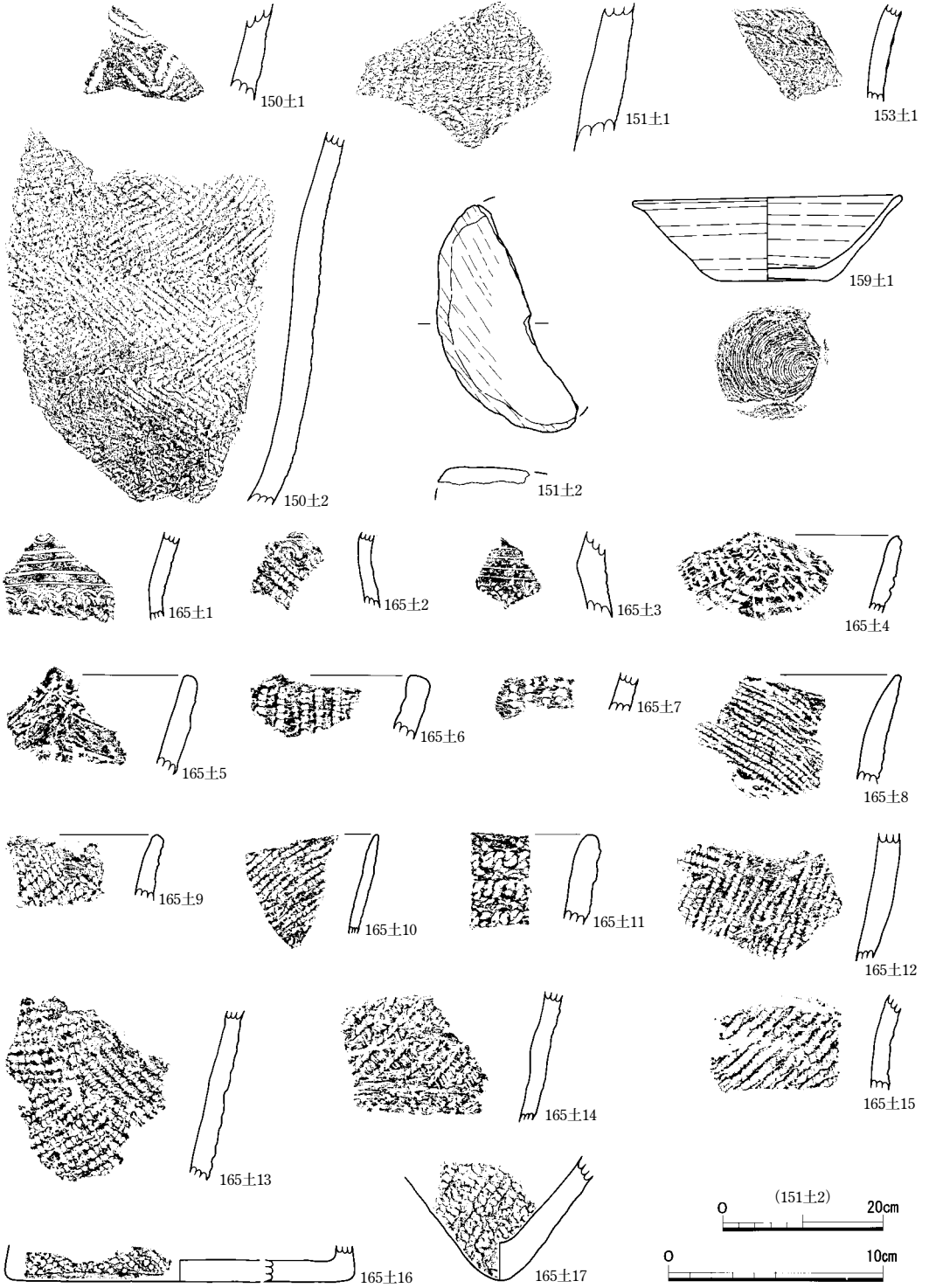
第3層 茶褐色土層 ローム粒を多量に含む。YP粒子・ローム小ブロック (φ 5 mm) を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第144号土壌出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	LR単節縄文→半截竹管状工具による押引	明褐色	No. 1・8	穿孔
2	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文 (羽状、0段多条)	暗赤褐色	No. 2	
3	縄文土器	胴部	LR単節縄文	橙褐色	No. 6	
4	縄文土器	胴部	R無節縄文	橙褐色	No. 3	



第124図 土壙出土遺物 (9)



第125図 土壙出土遺物 (10)

第145号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	LR単節縄文	黄褐色	覆土	

第146号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	R・L無節縄文(羽状)	褐色	覆土	

第147号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁～ 胴部	合擦	暗褐色	覆土	
3	縄文土器	胴部	R・L無節縄文(羽状)	黄褐色	覆土	

第149号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁～ 胴部	L無節縄文	赤褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	暗褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文(羽状、0段多条)	黄褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	R・L無節縄文(羽状)	暗褐色	覆土	
6	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文(羽状)	褐色	覆土	
7	縄文土器	胴部	組紐	褐色	覆土	
8	石器	—	—	—	覆土	凹石・磨石

第150号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	R無節縄文→半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
2	縄文土器	胴部	R・L無節縄文(羽状)	黄褐色	覆土	

第151号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	RL単節縄文（0段多条）	黄褐色	覆土	
2	石器	—	—	—	覆土	石皿

第153号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	浮線文→キザミ	黄橙褐色	覆土	

第159号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	口縁～ 底部	ロクロ整形、底部回転糸切圧痕	褐色	2区No.1	坏

第165号土壙出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線→コンパス文	黄橙褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線→コンパス文	黄橙褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による沈線	橙褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	暗褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黒褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部	列点状刺突列	明褐色	覆土	
7	縄文土器	口縁部	列点状刺突列	黄褐色	覆土	
8	縄文土器	口縁部	RL単節縄文	褐色	No.19	
9	縄文土器	口縁部	LR単節縄文	褐色	覆土	
10	縄文土器	口縁部	R無節縄文	褐色	覆土	
11	縄文土器	口縁部	ループ文	黒褐色	覆土	
12	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	褐色	No.24	
13	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	橙褐色	覆土	
14	縄文土器	胴部	L無節縄文	暗褐色	No.10・11	
15	縄文土器	胴部	L無節縄文	赤褐色	覆土	
16	縄文土器	底部	RL単節縄文	黄褐色	覆土	
17	縄文土器	底部	LR単節縄文	暗赤褐色	No.20	尖底

c. 溝跡

第1号溝跡 (第5・124図・図版120-2)

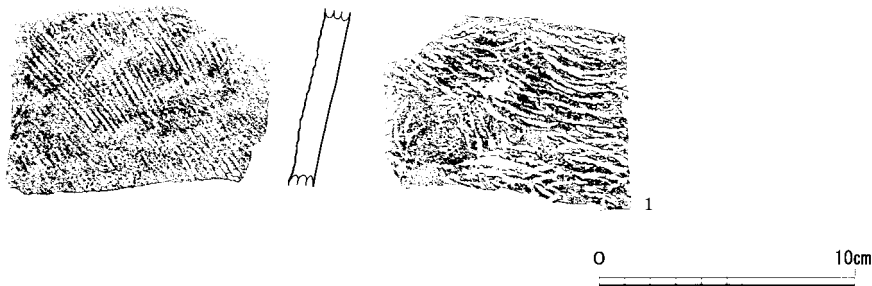
B1区の北側よりに位置する。北東側では、重複する第14・30・32・34～37号住居跡や第132号土壇などを切っている。さらに西側では、第16・17・19号住居跡などと重複し切っている。調査区内では、ほぼ北東から南西に向いて、等高線に近い流路をとっているが、一部耕作などにより削平されて途切れながらも横断している。

遺構の規模は、確認できた長さは東側では13m、西側では19.5mである。溝跡の上幅は80cm前後のほぼ均一な幅である。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cm程である。底面は、平坦である。調査区内における高低差はほとんどない。覆土中に恒常的な流水や滞水状態の痕跡が見られない。出土遺物は、覆土中から須恵器片が数点出土しただけである。

本溝跡の帰属時期は、覆土の状態と出土遺物から平安時代と考えられる。

第1号溝土層説明

- 第1層 黒褐色土層 ローム粒を均一に、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性ともに強い。
 第2層 暗茶褐色土層 ローム粒を均一に、ロームブロック(φ1.5cm)・ローム小ブロック(φ3mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。



第124図 第1号溝跡出土遺物

第1号溝出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	胴部	平行タタキ、内面：同心円状の当具痕が残る	暗青灰色	覆土	須恵器甕

d. 埋没谷

第1号埋没谷（第6・125・128・129図・図版73上・121-2～123-1）

B2区の中央からやや西側寄りに位置している。斜面上に南側から北側にかけて地形の等高線に直交するように掘削されている。南西側に高く、北東側に低いという緩い高低差をもっている。

埋没谷の規模は、南北方向が42mで、東壁は、ほぼ直線的であるが、西側は、やや蛇行している。埋没谷の上幅は、確認面で概ね12m～15mの幅である。西壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14m程である。下幅は、概ね2.5～5mの幅である。底面は、広く平坦である。底面の高低差は、ほとんどなく南西から北東に向かって徐々に緩やかに低くなっているようである。覆土中には、恒常的な流水や滞水状態の痕跡が見られないことから、敷地の区画を目的として掘削された可能性なども考えられる。

出土遺物は、多量の土器片と自然石が多く出土している。これらの多量の土器片は、原形を留めているものはなく、傾斜に沿って南西側の斜面の上方から流れ込んだものと考えられる。土器片は、上層の第1層から第3層の暗灰褐色土層を主体とする層からは、多量の縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式が主体に出土している。また勝坂式、曾利系土器、加曾利EⅡ、EⅣ式等の縄文時代中期中葉から中期末葉に比定される土器片が少量出土している。これに対して、下層にあたる第4層から第6層の褐色土を主体とする層からは、縄文時代前期中葉の有尾式の土器片を主体に出土しているが、また前期中葉黒浜式、前期後半諸磯b・c式、前期末葉十三菩提式等の前期中葉から後葉に比定される土器片が少量出土している。土器片以外には、スクレイパー1点、凹石1点、磨製石斧1点、剥片などが出土している。凹石や剥片など覆土から出土した多量の自然石は、被熱により赤色化したものも多量に見られる。

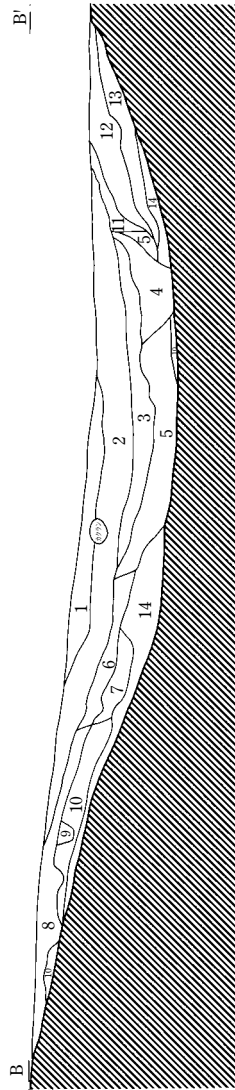
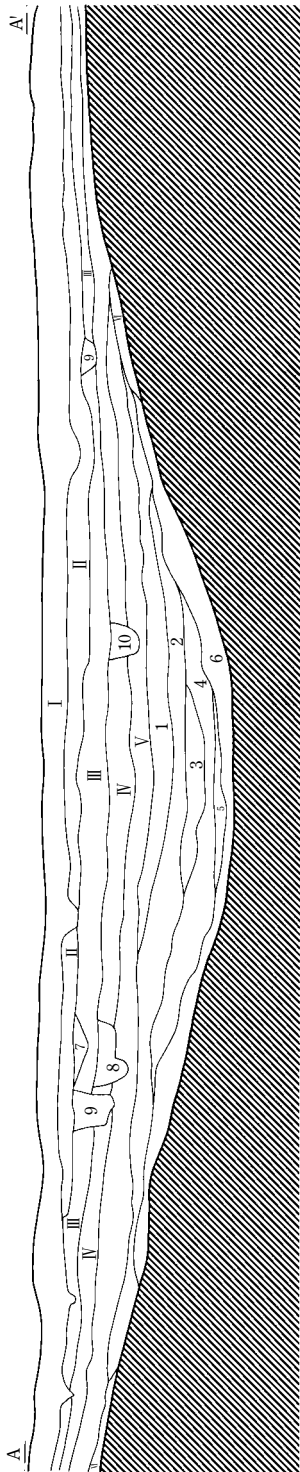
本埋没谷の帰属時期は、覆土の状態や出土遺物から縄文時代前期中葉から中期後半と考えられる。

第2号埋没谷（第6・125図・図版73-2）

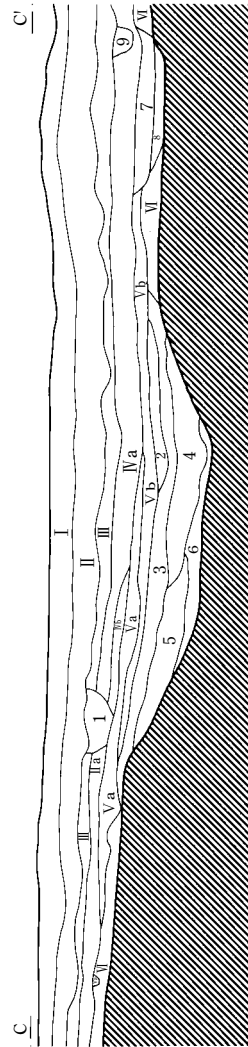
B2区の北側に位置して、地形の等高線に直交するように掘削されている。検出されたのは既存道路の拡幅部分に、埋没谷の一部だけであるため、全容は不明である。南西に高く、北東に低いという緩い高低差をもっている。

埋没谷の規模は、南北方向は概ね4m程である。上幅が、確認面で概ね6mの幅である。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは1m程である。底面は、ほぼ平坦である。下幅は、概ね1.5m～2mのほぼ均一な幅である。埋没谷底面の高低差は、徐々に低くなっているようである。覆土中に恒常的な流水や滞水状態の痕跡が見られないことから、敷地の区画を目的として掘削された可能性が考えられる。出土遺物はない。

本埋没谷の帰属時期は、覆土の状態から縄文時代と考えられる。



第1号埋没谷



第2号埋没谷



第125图 第1号・2号埋没谷土層堆積図

第1号埋没谷Aベルト土層説明

- 第Ⅰ層 暗灰褐色土層 現耕作土。浅間山系A軽石を多量に、褐色粒子・小石を少量含む。しまり、粘性とも弱い。
- 第Ⅱ層 暗褐色土層 旧耕作土。浅間山系A軽石・小石・マンガンブロック（φ1.5cm）を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 第Ⅲ層 暗黒灰褐色土層 褐色土粒子を均一に、マンガン粒・小石を微量に含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 第Ⅳ層 暗灰褐色土層 白色粒子を斑状に、マンガン粒・小石を少量含む。しまり、粘性ともにあまり強くない。
- 第Ⅴ層 暗褐色土層 白色粒子を均一に、褐色粒子・小石・褐色ブロック（φ2cm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第Ⅵ層 暗茶褐色土層 褐色粒子・褐色ブロック（φ2cm）をやや多量に、マンガン粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第1層 暗灰褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒（φ2mm）を均一に含む。ロームブロック（φ1.5cm）を少量、ローム粒・マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗黒灰色土層 YP粒子を多量に含む。YP粒（φ2mm）・ローム小ブロック（φ3mm）を少量、マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第3層 暗灰茶褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒（φ2mm）を均一に含む。ローム粒・ロームブロック（φ2cm）を少量、マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第4層 暗褐色土層 YP粒子を多量に、YP粒（φ2mm）を均一に含む。黒褐色土ブロック（φ1cm）をやや少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第5層 暗褐色土層 黒褐色土粒をやや多量に、YP粒子を均一に含む。茶褐色土ブロック（φ2cm）を少量、マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第6層 暗茶褐色土層 黒褐色土ブロック（φ2cm）をやや多量に、YP粒子を均一に含む。ロームブロック（φ1.5cm）を少量、ローム粒・マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第7層 暗黒灰褐色土層 白色粒子を均一に、マンガン粒を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 第8層 暗褐色土層 褐色粒子をやや多量に、白色粒子を均一に、マンガン粒を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
- 第9層 暗灰褐色土層 褐色粒子を多量に、ローム粒・マンガン粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第10層 暗灰褐色土層 白色粒子を均一に、マンガン粒・褐色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第1号埋没谷Bベルト層説明

- 第1層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、YP粒（φ2mm）を少量含む。ローム粒をやや少量、ローム小ブロック（φ4mm）を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第2層 暗褐色土層 YP粒子を均一に、ローム小ブロック（φ4mm）を少量、YP粒（φ2mm）を微量に含む。しまり、粘性共に強い。
- 第3層 暗茶褐色土層 YP粒（φ2mm）・ローム粒を均一に含む。灰色小ブロック（φ4mm）を斑に、ローム小ブロック（φ3mm）を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第4層	暗茶褐色土層	YP粒(φ2mm)を均一に、ローム粒・ローム小ブロック(φ5mm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第5層	暗茶褐色土層	マンガン粒をやや多量に、YP粒子を均一に、ローム粒・ローム小ブロック(φ5mm)をまばらに含む。しまり、粘性ともに強い。
第6層	黒茶褐色土層	茶褐色粒子をやや多量に、マンガン粒を少量含む。YP粒子をまばらに、ローム粒・ローム小ブロック(φ3mm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第7層	暗黒灰色土層	褐色粒子・褐色ブロック(φ1.5~2cm)を多量に、YP粒(φ2mm)をまばらに含む。しまり、粘性ともに強い。
第8層	暗茶褐色土層	灰色粒子を均一に、YP粒子をまばらに、マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第9層	灰褐色土層	褐色粒子を少量、YP粒子を極微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第10層	茶褐色土層	YP粒子・黒褐色粒子を多量に、褐色ブロック(φ1.5~2cm)をまばらに含む。しまり、粘性ともに強い。
第11層	暗褐色土層	YP粒子を均一に含む。褐色粒子・褐色ブロック(φ1~2cm)を少量、YP粒(φ2mm)をまばらに含む。しまり、粘性ともに強い。
第12層	暗茶褐色土層	YP粒子を均一に、褐色ブロック(φ1.5~2cm)をまばらに、YP粒(φ2mm)を極微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第13層	暗茶褐色土層	褐色ブロック(φ1.5~2cm)をやや多量に、YP粒子を均一に、ローム小ブロック(φ5mm)を少量、ローム粒をやや少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第14層	褐色土層	明褐色土粒を均一に、YP粒(φ2mm)・黒褐色土ブロック(φ1.5cm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第15層	灰白色シルト層	小石・礫(φ3cm)を多量に、褐色シルト粒を均一に含む。しまりはやや弱い、粘性は非常に強い。

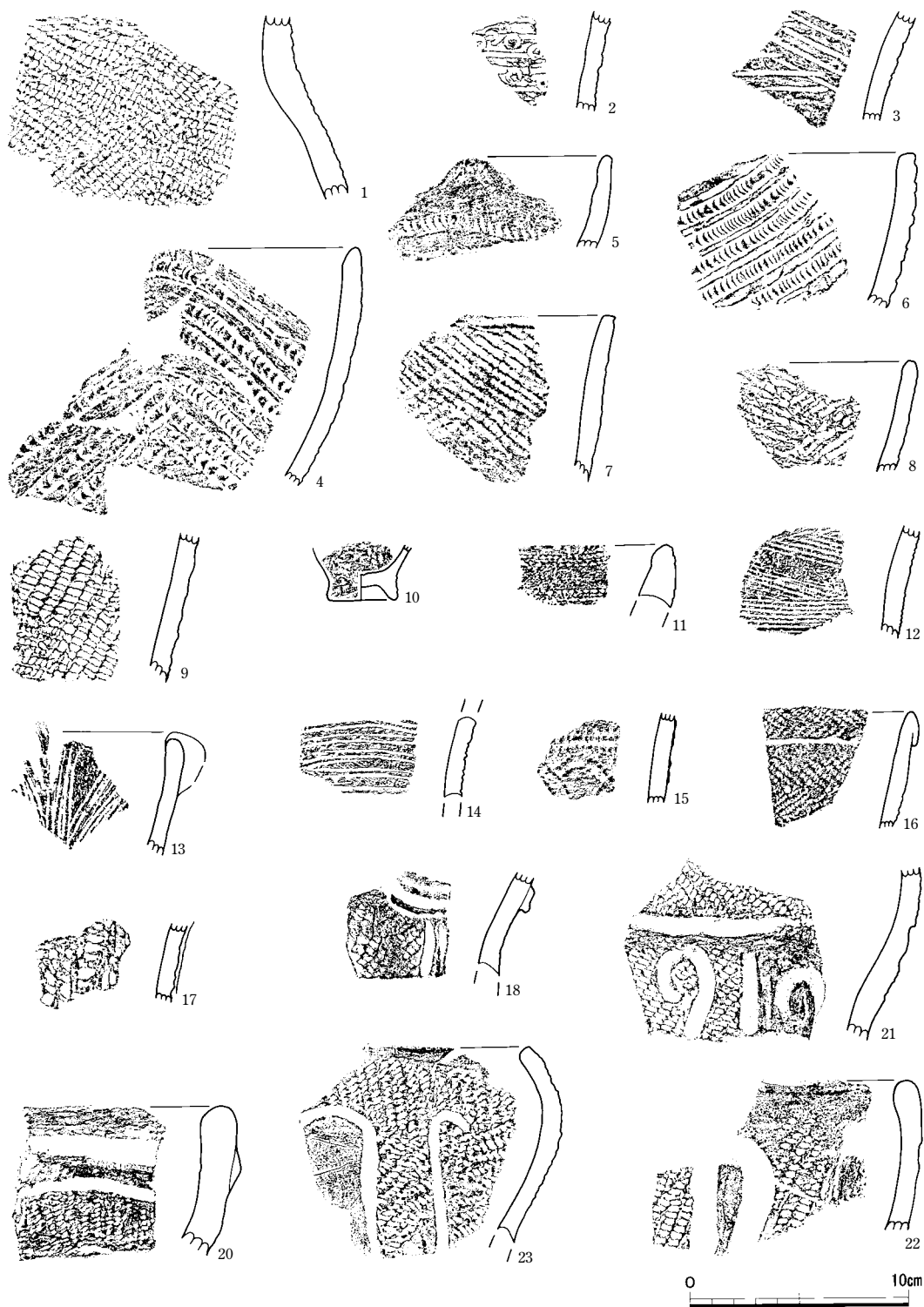
第2号埋没谷土層説明(Cベルト)

第I層	暗褐色土層	現耕作土。浅間山系A軽石を多量に、小石を少量含む。しまりは強いが、粘性は弱い。
第II層	暗褐色土層	旧耕作土。浅間山系A軽石を均一に、小石・ローム粒・マンガン粒を少量含む。しまり、粘性ともに弱い。
第III層	暗褐色土層	浅間山系A軽石・マンガン粒を少量含む。しまりはやや弱く、粘性はやや強い。
第IVa層	灰褐色土層	色粒子を多量に、マンガン粒を均一に含む。黒褐色土ブロック(φ2cm)・小石・褐色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第IVb層	灰褐色土層	黄色粒子を均一に含む。褐色粒子・小石を少量、褐色ブロック(φ1.5cm)を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第Va層	黒灰褐色土層	白色粒子をやや多量に含む。黄色粒子を均一に、マンガン粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第Vb層	黒灰褐色土層	YP粒子をまばらに含む。褐色粒子・褐色ブロック(φ2cm)を少量、マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。
第VI層	褐色土層	YP粒子・黒褐色土粒を均一に、黒褐色土ブロック(φ1.5cm)を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
第1層	褐色土層	黒褐色土粒を多量に、白色粒子を均一に含む。小石を少量、マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともにやや弱い。
第2層	暗灰茶褐色土層	褐色土ブロック(φ1.5cm)を均一に含む。白色粒子を斑に、マンガン粒を微量に含む。しまり、粘性ともに強い。

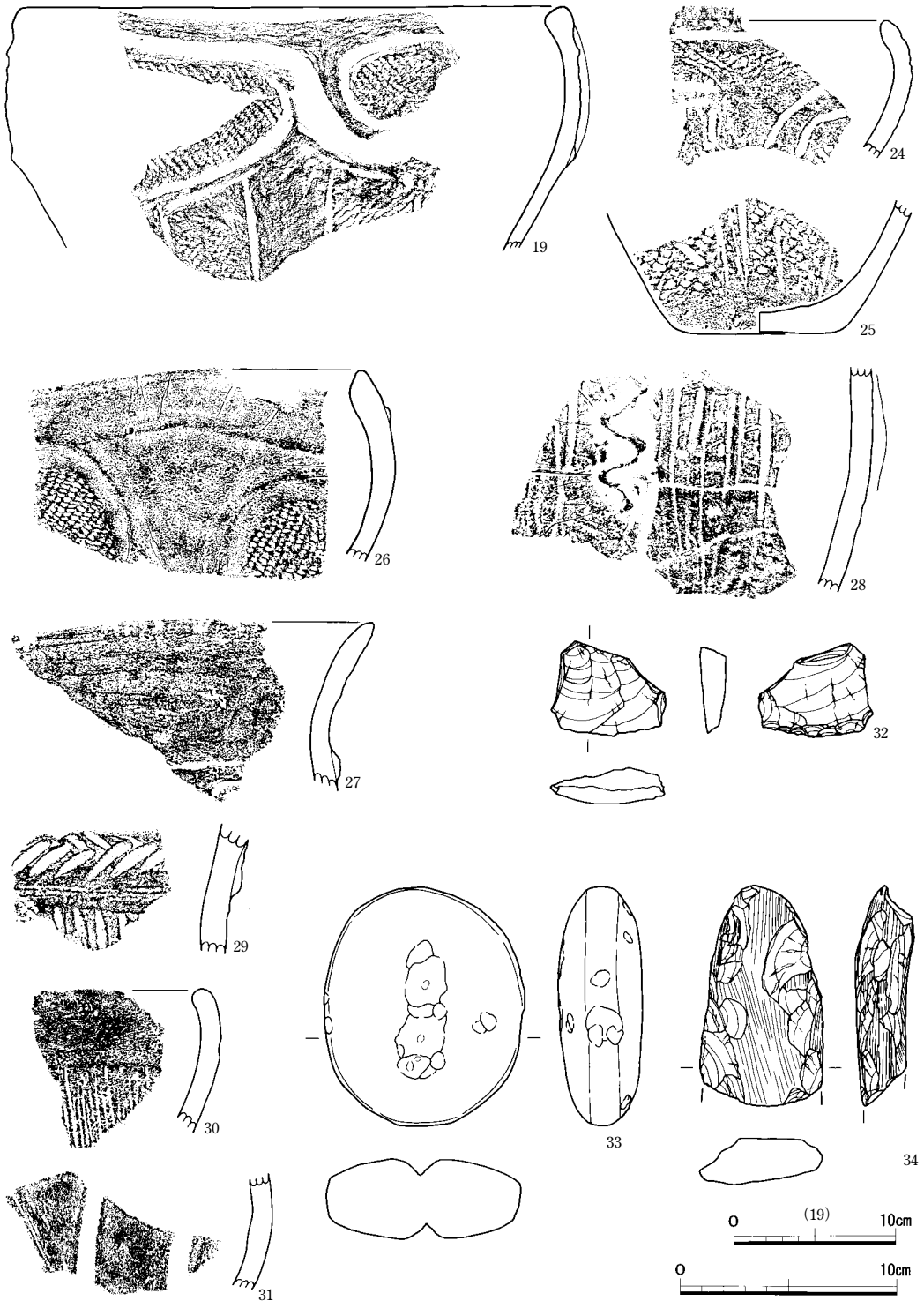
- 第3層 暗褐色土層 Y P粒子を均一に含む。茶褐色ブロック（φ 1 cm）を少量、マンガン粒を微量に含む。しまりは強いが、粘性はやや弱い。
- 第4層 黒灰褐色土層 Y P粒子をまばらに、褐色粒子を少量、マンガン粒を微量に含む。しまりはやや強いが、粘性はやや弱い。
- 第5層 暗褐色土層 Y P粒子を均一に、小石・褐色ブロック（φ 1 cm）を少量含み、マンガン粒子を微量に含む。しまりはやや強いが粘性はやや弱い。
- 第6層 暗褐色土層 マンガン粒をやや多量に含み、Y P粒子を均一に・小石・黄色粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第7層 暗茶褐色 マンガン粒を均一に含む。褐色土粒・褐色ブロック（φ 2 cm）を少量含み、黒灰色土を多量に含む。
- 第8層 暗茶褐色土層 炭水化物小ブロック（φ 5 cm）をやや多量に含み、黒灰色土を多量に含む。しまり、粘性ともに強い。
- 第9層 黒灰色土層 Y P粒子をまばらに、褐色土粒を少量、マンガン粒を微量に含む。しまりは強いが、粘性はやや弱い。

第1号埋没谷出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）→半截竹管状工具による沈線	橙褐色	覆土	
2	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→竹管による刺突	褐色	覆土	
3	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線	黄褐色	覆土	
4	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	橙褐色	覆土	
5	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	黒褐色	覆土	
6	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
7	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文（羽状）	灰黄褐色	覆土	
8	縄文土器	口縁部	R・L無節縄文（羽状）	褐色	覆土	
9	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	黄橙褐色	覆土	
10	縄文土器	底部	L無節縄文	黄橙褐色	覆土	
11	縄文土器	口縁部	RL単節縄文→半截竹管状工具による押引	赤褐色	覆土	
12	縄文土器	胴部	RL単節縄文→半截竹管状工具による集合沈線	黄橙褐色	覆土	
13	縄文土器	口縁部	貼付文→半截竹管状工具による集合沈線	灰黄褐色	覆土	
14	縄文土器	胴部	条線→半截竹管状工具による集合沈線	黄橙褐色	覆土	



第128图 第1号埋没谷出土遗物(1)

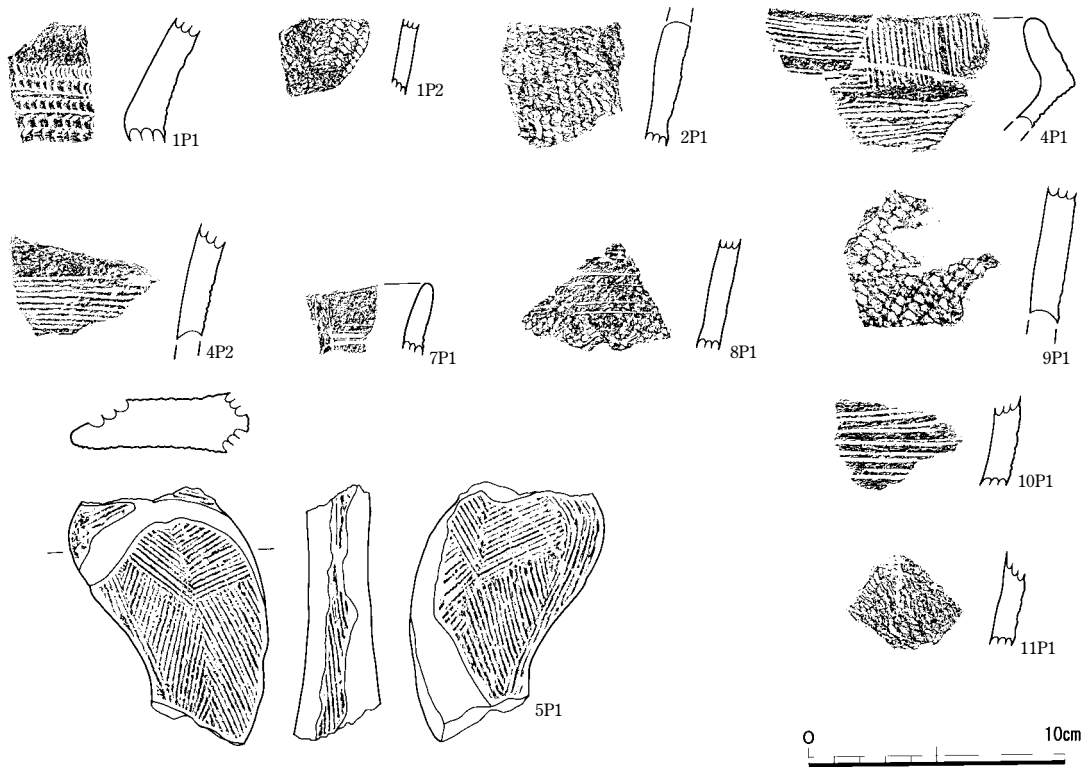


第129图 第1号埋没谷出土遺物(2)

15	縄文土器	口縁部？	結節浮線文	黄褐色	覆土	
16	縄文土器	口縁部	RL・LR単節縄文（羽状）、口唇下が肥厚する	黄橙褐色	覆土	
17	縄文土器	口縁部	隆帯→角押文	赤褐色	覆土	
18	縄文土器	口縁部	口縁部を隆帯により区画→RL単節縄文→沈線	赤褐色	覆土	
19	縄文土器	口縁～ 胴部	口縁部を隆帯・沈線により区画→RL単節縄文（0 段多条）→沈線→磨消	黄橙褐色	覆土	
20	縄文土器	口縁部	口縁部を隆帯により区画→RL単節縄文	黄褐色	覆土	
21	縄文土器	口縁～ 胴部	口縁部を沈線により区画→RL単節縄文→沈線→磨 消	赤褐色	覆土	
22	縄文土器	口縁～ 胴部	RL単節縄文→沈線→磨消	赤褐色	覆土	
23	縄文土器	口縁～ 胴部	RL単節縄文→沈線→磨消	暗赤褐色	覆土	
24	縄文土器	口縁～ 胴部	沈線、L無節縄文	褐色	覆土	
25	縄文土器	底部	RL単節縄文→単沈線→磨消	橙褐色	覆土	
26	縄文土器	口縁～ 胴部	微隆起線、RL単節縄文	黄褐色	覆土	
27	縄文土器	口縁部	隆帯	褐色	覆土	
28	縄文土器	胴部	波状隆帯→半截竹管状工具による条線	橙褐色	覆土	
29	縄文土器	口縁～ 胴部	矢羽状沈線	黄褐色	覆土	
30	縄文土器	口縁～ 胴部	沈線→条線	黄褐色	覆土	鉢
31	縄文土器	胴部	沈線	黄褐色	覆土	瓢型土器？
32	石器	—	—	—	覆土	スクレイパー
33	石器	—	—	—	覆土	凹石・磨石
34	石器	—	—	—	覆土	磨製石斧

e. ピット内出土遺物 (第130図・図版120-3・121-1)

ピットから出土した遺物は少ない。小破片が殆どである。1は、有尾式の土器片である。2は、前期後葉に比定される土器片である。3・9・11は、前期中葉に比定される土器片である。7は、黒浜式の土器片である。4～6・8は、諸磯b式の土器片である。10は、諸磯c式に比定されるとと思われる土器片である。



第130図 ピット内出土遺物

ピット内出土遺物観察表

遺構名	No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
P1	1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による押引	褐色	覆土	
	2	縄文土器	胴部	LR単節縄文	褐色	覆土	
P2	1	縄文土器	胴部	L無節縄文	黄橙褐色	覆土	
P4	1	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による集合沈線	橙褐色	覆土	
	2	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	橙褐色	覆土	

P5	1	縄文土器	把手	半截竹管状工具による集合沈線	明黄褐色	覆土	
P7	1	縄文土器	口縁部	縄文→半截竹管状工具による沈線	黄橙褐色	覆土	
P8	1	縄文土器	口縁～ 胴部	縄文→半截竹管状工具による沈線	褐色	覆土	
P9	1	縄文土器	胴部	RL・LR単節縄文（羽状）	赤褐色	覆土	
P10	1	縄文土器	胴部	半截竹管状工具による集合沈線	黄橙褐色	覆土	
P11	1	縄文土器	胴部	L無節縄文	褐色	覆土	

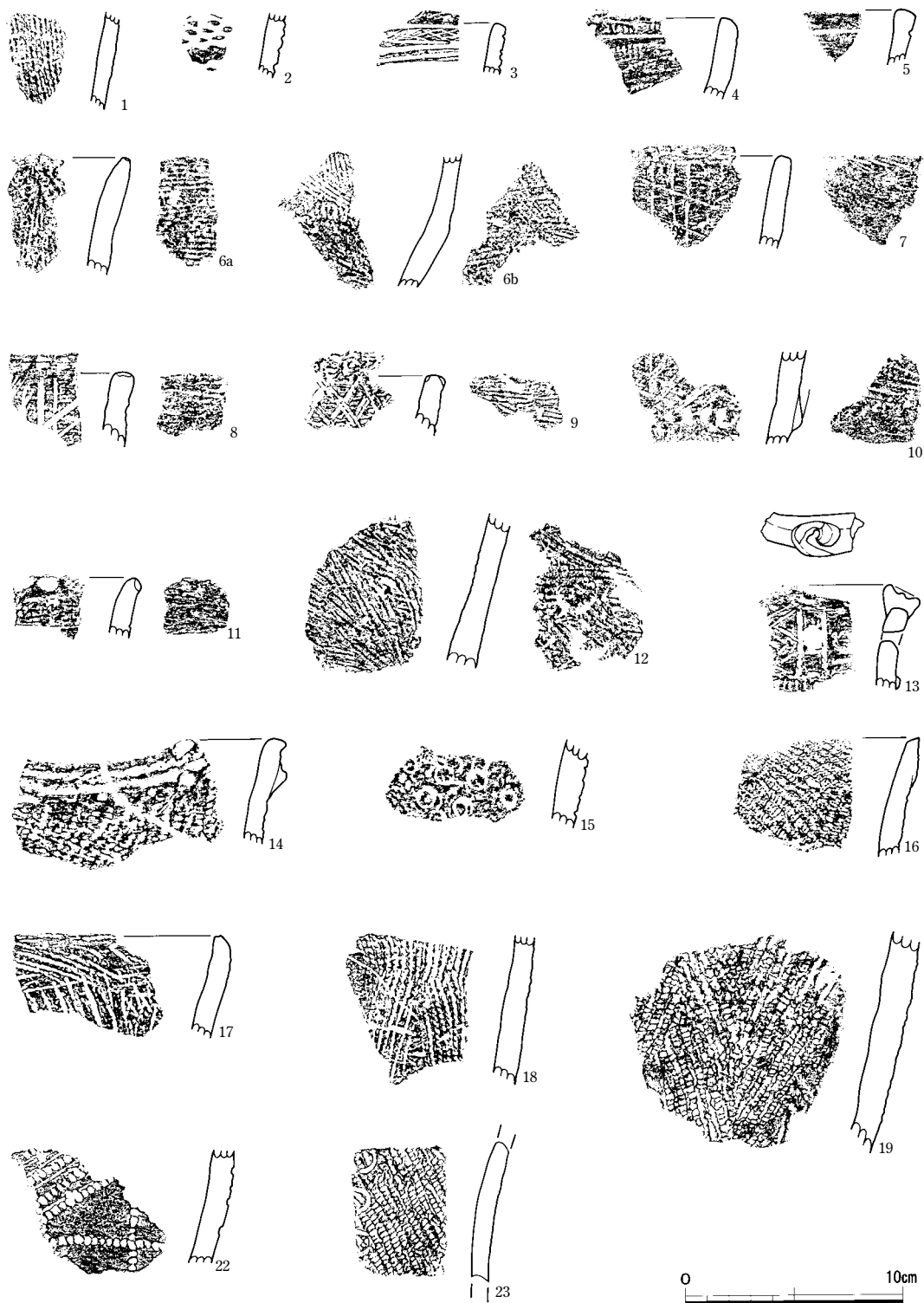
f. 遺構外出土遺物（第131・132図・図版123-2・124）

1は撚糸文系土器で、稲荷台式と思われる。2は楕円状押型文が施された押型文系土器である。3は三戸式、4は沈線文と貝殻腹縁文、口唇部に貝殻腹縁文が施されている。4・5は沈線文系土器と思われる。6は条痕文の施文後に絡条体圧痕文が施された土器である。7～10は茅山下層式、11・12は条痕文系土器である。7～9は内外共に条痕文が施されている。13・14・16～20は花積下層式である。13は半截竹管による沈線と撚糸側面圧痕が施され、穿孔をもつ。15は竹管による刺突をもち、有尾式とも考えられる。19・20は単節縄文RLが施文されている。21は黒浜式、22は半截竹管による沈線を施文後、列点状刺突文を施した有尾式である。23は諸磯a式である。24は加曽利E2式と思われる。25は把手。25・26は口縁部を隆帯・沈線による区画後にRLの単節縄文が施された加曽利EⅢ式である。

28・29は弥生土器である。30は、須恵器の坏で10世紀のものと考えられる。

遺構外出土遺物観察表

No	種別	部位	文様・器面調整	色調	出土位置	備考
1	縄文土器	胴部	Rの撚糸文	褐色	14住一括	
2	縄文土器	胴部	楕円状押型文	黄橙褐色	1溝覆土	
3	縄文土器	口縁部	沈線、口唇部：キザミ	赤褐色	15住覆土	
4	縄文土器	口縁部	沈線・貝殻腹縁文、口唇部：貝殻腹縁文	黄橙褐色	13住覆土	
5	縄文土器	口縁部	沈線	赤褐色	16住覆土	
6	縄文土器	口縁～ 胴部	条痕文→絡条体圧痕文、口唇部：絡条体圧痕文、 内面：条痕文	黄褐色	17住覆土・ SK69	



第131图 遺構外出土遺物(1)



第132図 遺構外出土遺物 (2)

7	縄文土器	口縁部	条痕文→沈線、口唇部・内面：条痕文	褐色	16住覆土	
8	縄文土器	口縁部	条痕文→沈線、口唇部：刺突、内面：条痕文	褐色	16住覆土	
9	縄文土器	口縁部	条痕文→沈線、口唇部：刺突、内面：条痕文	赤褐色	13住覆土	
10	縄文土器	口縁部	逆[T]字状隆帯→条痕文→沈線・キザミ、内面：条痕文	褐色	12住覆土	
11	縄文土器	口縁部	条痕文→沈線?、口唇部：押捺	褐色	9住覆土	
12	縄文土器	胴部	条痕文、内面：条痕文	赤褐色	15住 No.17	
13	縄文土器	口縁部	隆帯（キザミ）・半截竹管状工具による沈線・捺糸側面圧痕、口唇部：渦巻状隆帯	黒褐色	19住覆土	穿孔
14	縄文土器	口縁～ 胴部	隆帯、縄圧痕、RL単節縄文（0段多条）	橙褐色	33住覆土	
15	縄文土器	口縁部	竹管による刺突	褐色	14住覆土	
16	縄文土器	口縁部	肥厚口縁、RL・LR単節縄文（0段多条）	黄橙褐色	13住覆土	
17	縄文土器	口縁部	Lの捺糸文、口唇部に及ぶ	赤褐色	13住覆土	
18	縄文土器	胴部	Rの捺糸文	褐色	14住 No.69	
19	縄文土器	胴部	RL単節縄文（異方向）	褐色	16住覆土	
20	縄文土器	胴部	RL単節縄文（異方向・0段多条）、内面縄文	橙褐色	13住覆土	
21	縄文土器	口縁～ 胴部	隆帯→付加条縄文・刺突	褐色	H—5 G	
22	縄文土器	口縁部	半截竹管状工具による沈線→列点状刺突文	橙褐色	G—3 G	
23	縄文土器	胴部	RL単節縄文→沈線による円文	橙褐色	9住覆土	
24	縄文土器	口縁部	口縁部を隆帯・沈線により区画→沈線、Rの捺糸文?→沈線	褐色	32住覆土	
25	縄文土器	口縁部	取手（孔・渦巻隆帯・沈線）、口縁部を隆帯・沈線により区画→RL単節縄文	黄橙褐色	22住覆土	
26	縄文土器	口縁部	口縁部を隆帯・沈線により区画→RL単節縄文	黄橙褐色	B 1区表採	
27	縄文土器	胴部?	口縁部を隆帯により区画→沈線	赤褐色	13住覆土	
28	弥生土器	胴部	条線→沈線	褐色	13住覆土	
29	弥生土器	胴部	条線	褐色	17住 No.32	
30	須恵器	体部～ 底部	ロクロ整形、底部：回転糸切圧痕、高台	黄褐色	B 1一括	坏

第IV章 まとめ

宮内上ノ原遺跡B地点の発掘調査においては、縄文時代前期中葉期を中心とした住居跡や土壙、埋没谷、また弥生時代の土壙、弥生時代から古墳時代初頭の住居跡、そして平安時代の溝跡や土壙などが検出されている。B地点の南側に近接するA地点、C地点の様相からすると、本遺跡は丘陵平坦部に比較的広範囲に広がる集落跡の様相を呈している。

しかしながら、本集落の全体的な様相や動態については、未だに本遺跡全体に対する調査面積が充分ではないために、今後の調査をまって検討することにした。今回は、出土土器と住居跡の形態についてのみ触れたい。

1. 出土土器

縄文時代前期中葉の土器群がまとめて出土したのは、第13・16・17号住居跡と第54・130・144号土壙である。これらの住居跡から検出された遺物の層位は、以下のような状態であった。第13号住居跡では覆土の中位から上位にかけて、第16・17号住居跡では床面付近から覆土にかけて、第54・130・144号土壙では覆土の中位から上位にかけて出土した。このような出土状況から、厳密な相伴関係は把握できないものの、一定の時間幅として限定された土器群として考えてよいと思われる。

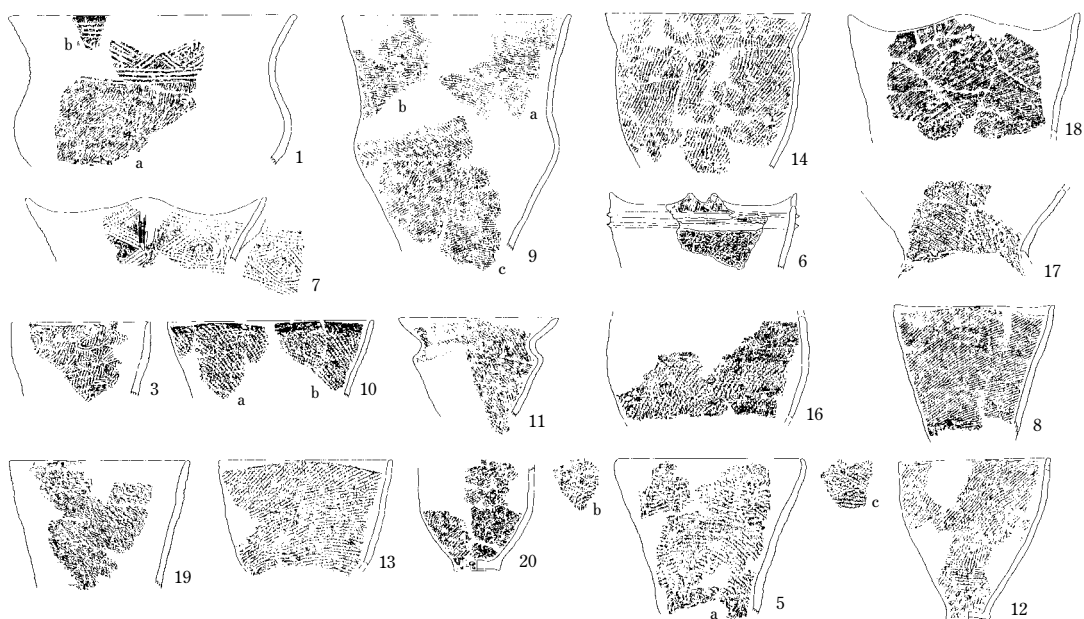
第13号住居跡から出土した土器は、黒浜式土器を主体に出土している。文様構成要素としては、縄文施文のみのもの、縄文施文後に半截竹管による沈線や半截竹管による押引が施されたものなどが多数みられる。これ以外にも、単沈線による幾何学文が施されているものがある。

器形的には、関山式から繋がる横位区画の文様帯を持つ土器とみることができ、平縁の深鉢が多く存在し、小波状を呈するものは少数であった。また頸部で括れ、胴上半に最大径をもつ深鉢形土器が見られる。

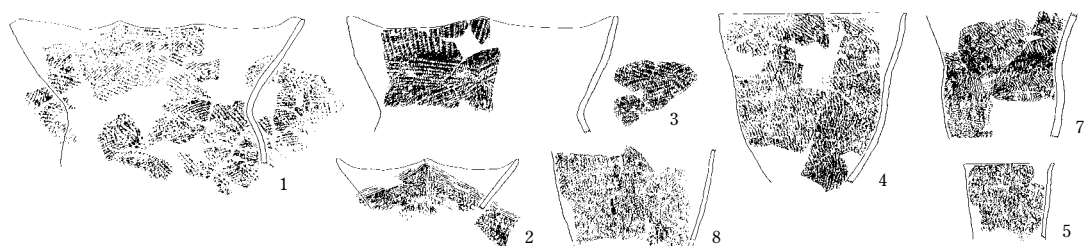
このような特徴から、これらの土器群は、黒浜式古段階の範疇として考えられるものであるが、本遺跡の出土遺物の中では、やや先行する可能性があることを指摘しておきたい。

一方、第16・17号住居跡と第54・130・144号土壙などから、連続爪形文による菱形文が施されている有尾式土器が主体に出土している。いずれの遺構においても、全形を窺える資料は少数であり、本遺跡における一般性も捉えるには到らない。しかし、各遺構から出土した土器を検討すると、口縁部形態は、波状口縁を有するものが多数をしめるものの、胴部の括れの有無、波底部における突起の有無、菱形内の充填の有無、連続爪形文の胴部への施文の有無などの違いが認められる。

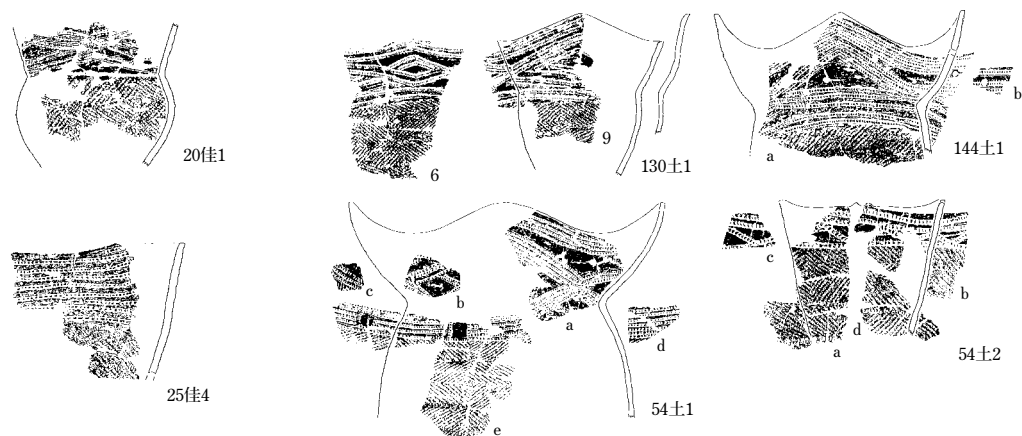
なお、黒浜式の古い部分に相当する土器を出土する第13号住居跡からは、小破片ではあるが所謂「上ノ坊式」に類似する土器が検出されている。また、第14号住居跡および第30号住居跡においては、有尾式に伴って無繊維で金雲母を



第131图 第13号住居跡出土土器



第132图 第16・17号住居跡出土土器



第133图 第20・25号住居跡、第54・130・144号土壇出土土器

多量に含み、内面調整も有尾式とは異なった所謂「釈迦堂Z3式」が検出されていることに注意しておきたい。今後は、遺跡のもつ個性を考慮しつつ、より広汎な地域との比較から再び当地域の土器群を検討して行く必要がある。

2. 竪穴住居跡

1. 前期中葉期

今回の調査で確認された縄文時代前期中葉期の竪穴住居跡は、平面形態から次のように分類が可能である。

A類—方形を呈するもの

B類—長台形、台形を呈するもの

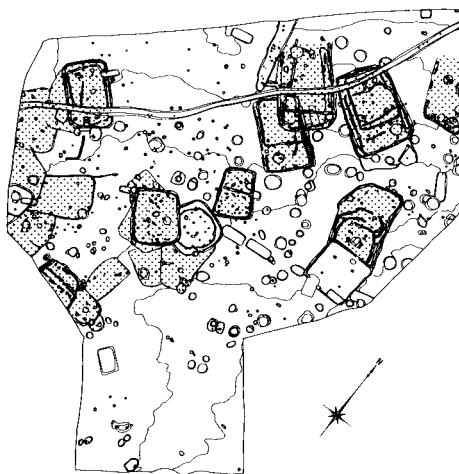
a種—長台形を呈するもの、長方形に方形に近い。

b種—台形を呈するもの、短壁が若干短い。

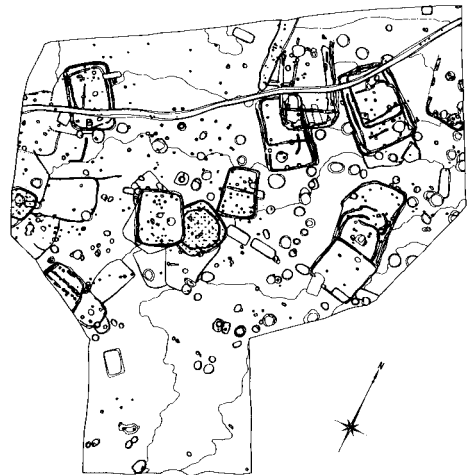
c種—不整台形を呈するもの

本遺跡において、住居跡が造営され始めた前期中葉期のA類は第13号住居跡1軒のみである。本住居跡からは、黒浜式土器を主体に出土している。平面形態は方形で、前段階の関山式期の影響を強く受けているような様相を呈している。しかしながら、支柱穴が判然としなかった。炉跡は検出されていないが、土壌状の掘り込みが認められ、Cピットの可能性が考えられる。また、本遺構内から大型の自然石が検出されたあたりが入り口付近とも推測される。壁際には複数の小ピットを伴う壁溝が全周している。

このような、炉跡が検出されていない住居跡は、櫛引台地周辺ではすでに認められていたが、児玉地域周辺では報告例が少なく確認されていない。いずれにせよ、1軒から全容を推測することは困難であり、該期の住居跡に関しては



縄文前期中葉期



縄文前期後半期

第134図 時期別遺構配置図

今後の資料の増加を待たなければならない。B類は有尾式土器を主体に出土している住居跡である。今回の発掘調査で検出された住居跡のほとんどが該期にあたり数は28軒にのぼる。a種からc種の3系統が存在している。本遺跡ではa・b種の長台形または台形タイプの住居跡が主体である。a種は、第14、16、17号住居跡のように長台形を呈するもので、主に調査区の中央からやや北側に南東から北西方向に軸をとり、等高線に沿って分布している。規模は、比較的大型な住居である。b種は、第10・11、15、21、25号住居跡のような台形を呈し、c種は、第20、26、33号住居跡のように不整形台形を呈するもので、中央部に南北方向から軸をとり、等高線に直交するように分布している。第10・11号住居はやや小型であるが、他の住居はほぼ同じ規模である。a・b種においては、壁際には小ピットを伴う壁溝が全周している「方形壁溝全周型」（大工原1998）が標準的であるが、c種では壁溝が全周するものは認められず、また支柱穴も判然としない。炉跡は、第11、20、32、33号住居跡などで検出されているが、本遺跡では炉跡を持たない住居跡が多数認められた。先に述べたように、第11号住居跡は直接床面で火を燃やした「地床炉」と思われる。これに対して、他の住居跡の炉跡は明確な掘り込みが認められず、床面構築時に土器の底を割って埋め込んだ「埋甕炉」である。

このほかに、第30・32号住居跡からは、凹部が裏面に達し穴になった石皿が出土した。これらの石皿はそれぞれの住居跡で恒常的に使用されていたと考えられるが、a類の第16号住居跡と、b類では第15号住居跡の2軒のみ拡張または建て替えが認められた。

2. 前期後半期について

諸磯b～c式期で良好な土器が検出された。第9・12号住居跡の2軒が調査区の中央からやや西側で検出されている。それまでの、前期中葉期の住居形態とは異なり、形態は隅丸方形を呈している。第12号住居跡は、第9号住居跡より丸みが強い。規模は、第9号住居跡は、小形の住居である。第12号住居跡は、第13号住居跡よりやや小型である。第9号住居跡では炉跡が検出されていないが、土壇状の掘り込みが認められる。壁際には、小ピットを伴わない溝が巡らされている。これに対して、第12号住居跡では炉跡が検出されて、壁際には、複数の小ピットを伴う溝と、内側に2回壁溝が巡らされている。支柱穴の位置関係が判然としない。いずれにせよ、2軒から全容を推測することは困難であり、該期の住居跡に関しては今後の検出増加を待たなければならない。

住居跡の形態の変遷から方形から不整形に、不整形から円形にと時期が下るにつれて変化している。このことは、中期の住居跡がほぼ円形であることから、中期的に変化していく段階の可能性が考えられるが、何分にも遺構の遺存状態も悪く、該期の報告例も少ないため、推測の領域を出るものではなく、今後の調査の進展をまって考えていかなければならないであろう。

(松澤浩一)

引用・参考文献

- 秋池 武 (1965) 「群馬県における有尾式土器」『栃木県考古学研究』10
- 秋池 武・新井順三 (1983) 「群馬県における神之木・有尾式土器について」『信濃』35-4
- 新井和之 (1979) 「黒浜式土器研究の問題点」『土曜考古』創刊号
- 新井和之 (1979) 「黒浜式土器小考」『日本考古学研究所集報』Ⅱ
日本考古学研究所
- 新井和之 (1981) 「黒浜式土器小考追録(その1)」『奈和』19
- 新井和之 (1982) 「黒浜式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 新井和之 (1983) 「黒浜式土器小考追録(その2)」『土曜考古』第7号
- 新井和之 (1985) 「黒浜式土器研究の現状と今後の課題」『土曜考古』10
- 新井和之 (1986) 「関山・黒浜式土器認識に関する一考察」『竹篋』創刊号
- 新井和之 (1988) 「黒浜式土器段階分け発想法」『奈和』第26号
- 新井 仁 (1993) 『内匠上之宿遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 荒井幹夫 (1978) 『打越遺跡』文化財報告第14集 富士見市教育委員会
- (1983) 『打越遺跡』文化財報告第28集 富士見市教育委員会
- 安孫子昭二 (1983) 「小山田No.23遺跡」『小山田遺跡群Ⅱ』小山田遺跡調査会
- 飯島義雄 (1990) 『下箱田向山遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂 (1986) 『勝沢中ノ山遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石塚和則 (1986) 『将監塚—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 市川 修 (1982) 『上南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集
- (1983) 『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集
- 伊藤 肇 (1992) 『南蛇井増光寺遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 今村啓爾 (1982) 「諸磯式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 奥野麦生他 (1987) 『黒浜貝塚群宿上貝塚・御林遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第16集
- 奥野麦生 (1989) 「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』第13号
- 奥野麦生 (1992) 「黒浜式における格子目文土器の成立についての覚書」『埼玉考古』第25号
- 柿沼恵介 (1986) 『分郷八崎遺跡』北橘村教育委員会
- 柿沼幹夫 (1979) 「埼玉県北部における縄文遺跡の立地について」『埼玉考古』第18号
- 金井正三 (1982) 「縄文前期有尾式土器の再検討」『信濃』34-4
- 金子直行 (1989) 「縄文前期中葉における大型菱形文系土器群の成立と展開」『埼玉考古』第25号
- 金子直行・細田勝・黒坂禎二・奥野麦生 (1990) 「シンポジウム 大木、有尾、そして黒浜—縄文前期中葉土器群にみる系統と交流の実態—」
埼玉考古別冊3 埼玉考古学会
- 金子直行 (1996) 『八木上／八木／八木前／上広瀬北／森坂北／森坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集

- 川田 強 (1998)『七社神社前遺跡Ⅱ』東京都北区教育委員会
- 菊池 実 (1986)「三後沢遺跡」『三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡』群馬県教育委員会
- 木村 収 (1994)『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂 禎二 (1984)『深作東部遺跡群』大宮市遺跡調査会報告第10集 大宮市遺跡調査会
- 黒坂 禎二 (1989)「羽状縄文系土器の文様構成(点描)―1」『研究紀要』6 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂 禎二 (1990)「羽状縄文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- 黒坂 禎二 (1993)「羽状縄文系土器の文様構成(点描)―2」『研究紀要』10 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 桑山 龍進 (1981)「菊名貝塚の研究」
- 恋河内昭彦 (1990)『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集
- 恋河内昭彦 (1991)『真鏡寺後遺跡―C・F・D地点の調査―』児玉町文化財調査報告書第11集
- 恋河内昭彦 (1995b)『南共和・新宮遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第6・7集
- 恋河内昭彦 (2000)『天田遺跡―B地点の調査―』児玉町遺跡調査会報告書第11集
- 恋河内昭彦 (2001)『女池遺跡―B・D地点の調査―』児玉町文化財調査報告書第35集
- 恋河内昭彦 (2004)『女池遺跡Ⅱ―A地点の調査―』児玉町遺跡調査会報告書第16集
- 小出輝雄 (1982)「花積下層式土器の成立と展開」『富士見市遺跡調査会研究紀要』2
- 小林達雄 (1965)『米島貝塚』庄和町文化財報告1 庄和町教育委員会
- 五味一郎 (1973)「石匙」『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 小宮雪晴 (1996)「黒浜式土器の構成と展開に関する一考察」『埼玉地域文化の研究』下津弘君・塚越哲也君追悼論文集刊行委員会
- 児玉都市文化財担当者会編 (1992)『児玉都市における埋蔵文化財の成果と概要』
- 埼玉地区文化財担当者会 (1999)『埼玉の縄文前期―埼玉地区縄文時代前期調査報告書―』 埼玉地区文化財担当者会報告書第3集
- 笹森健一 (1977)「縄文時代住居址の一考察」『情報』2, 3 埼玉考古学会
- 笹森健一 (1981)「縄文時代前期の住居と集落(Ⅰ)」『土曜考古』第3号
- 笹森健一 (1981)「縄文時代前期の住居と集落(Ⅱ)」『土曜考古』第4号
- 笹森健一 (1982)「縄文時代前期の住居と集落(Ⅲ)」『土曜考古』第5号
- 笹森健一 (1987)『鷲森遺跡』上福岡市教育委員会
- 佐藤典邦 (1987)「関山式土器終末から黒浜式土器初頭の諸問題(1)」『史峰』第12号
- 佐藤典邦 (1988)「関山式土器終末から黒浜式土器初頭の諸問題(2)」『史峰』第13号
- 下村克彦 (1970)『花積貝塚発掘調査報告』埼玉県遺跡調査会報告書第15集
- 庄野靖寿 (1974)『関山貝塚』埼玉県教育委員会
- 陣内康光 (1988)『御殿前遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第4集 北区教育委員会
- 鈴木徳雄他 (1979)『白石城』埼玉県遺跡調査会報告第36集
- 鈴木徳雄 (1986)『橋の入遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第6集
- 鈴木徳雄 (1989)「諸磯a式土器研究史(1)」『土曜考古』第13号

- 鈴木徳雄他 (1997) 『将監塚東・平塚・藤塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第26集
 鈴木徳雄 (1997) 「縄紋前期の石製研磨具―側面に擦痕のある扁平礫を巡って―」
 『群馬考古学手帳』7 群馬土器観会
- 清藤一順 (1975) 『飯山満東遺跡』(財)千葉県都市公社
 関根慎二 (1986) 『糸井宮前Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 関根慎二 (1993) 『大下原遺跡・吉田原遺跡』安中市教育委員会
 大工原 豊・関根慎二他 (1998) 『中野谷松原遺跡』安中市教育委員会
 大工原 豊・関根慎二他 (2002) 『安中市史第四卷―原始古代中世資料編一』安中市教育委員会
- 田中和之 (1991) 「黒浜貝塚群天神前遺跡」蓮田市文化財調査報告書第17集
 谷口康浩 (1990) 「諸磯式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
 谷藤保彦 (1988) 「北関東における有尾式土器の変遷」『考古学叢考』
 谷藤保彦他 (1997) 『縄文前期中葉の諸様相』第10回 縄文セミナーの会
 戸田哲也・渋谷昌彦 (1977) 「神ノ木式・有尾式土器の研究(前)」長野県考古学会誌34
 富沢敏弘 (1996) 『北橋村村内遺跡Ⅳ』北橋村教育委員会
 鳥羽政之 (1985) 『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教育委員会
 鳥羽政之 (1987) 「黒浜式土器研究の問題点」『縄文前期の諸問題』
 鳥羽政之 (1991) 「縄文時代前期中葉土器群の編年と地域性」『埼玉考古』第28号
 鳥羽政之・今村直樹 (2003) 『四十坂遺跡』岡部町遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書
 第11集
- 長井正欣 (1996) 『清水Ⅰ遺跡』原第一県営住宅遺跡調査会
 中島 宏 (1980) 『伊勢塚・東光寺裏』埼玉県遺跡調査会報告書第26集
 長滝歳康 (1991) 『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町遺跡発掘調査報告書第7集
 並木 隆 (1978) 『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第35集
 羽生淳子他 (1981) 『稻荷丸北遺跡』ニュー・サイエンス社
 昼間孝志 (1984) 『三ヶ尻林(2)・台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第34集
 細田 勝 (1989) 「黒浜式土器成立の背景について」『古代』第87号
 細田 勝 (1996) 「縄文前期終末土器群の研究」『先史考古学研究』6
 細田 勝・木戸春夫 (1999) 『小沼耕地遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
 第247集
- 宮井英一 (1985) 『大林Ⅰ・Ⅱ・宮林・下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 報告書第50集
 宮井英一他 (1989) 『古井戸―縄文時代―』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
 第75集
- 武藤康弘 (1989) 「複合居住家屋の系譜」『考古学と民族誌 渡辺仁教授古希記念
 論文集』六興出版
 武藤康弘 (1995) 「民族誌からみた縄文時代の竪穴住居」『帝京大学山梨文化財
 研究所研究報告』6 帝京大学山梨文化財研究所
- 山内清男 (1939) 『日本先史土器図譜』
 吉田 格 (1956) 「関東」『日本考古学講座』3 河出書房

図 版



宮内上ノ原遺跡調査前遠景（北東より）

図版 1



1. 調査区遠景（南より）



2. 調査区遠景（南より）



1. B地点調査1区全景（北より）



2. B地点調査1区全景（北より）

図版 3



1. B地点調査1区 表土掘削



2. B地点調査1区 表土掘削



1. 作業風景



2. 作業風景

图版 5



1. 第9号住居跡遺物出土状態



2. 第9号住居跡

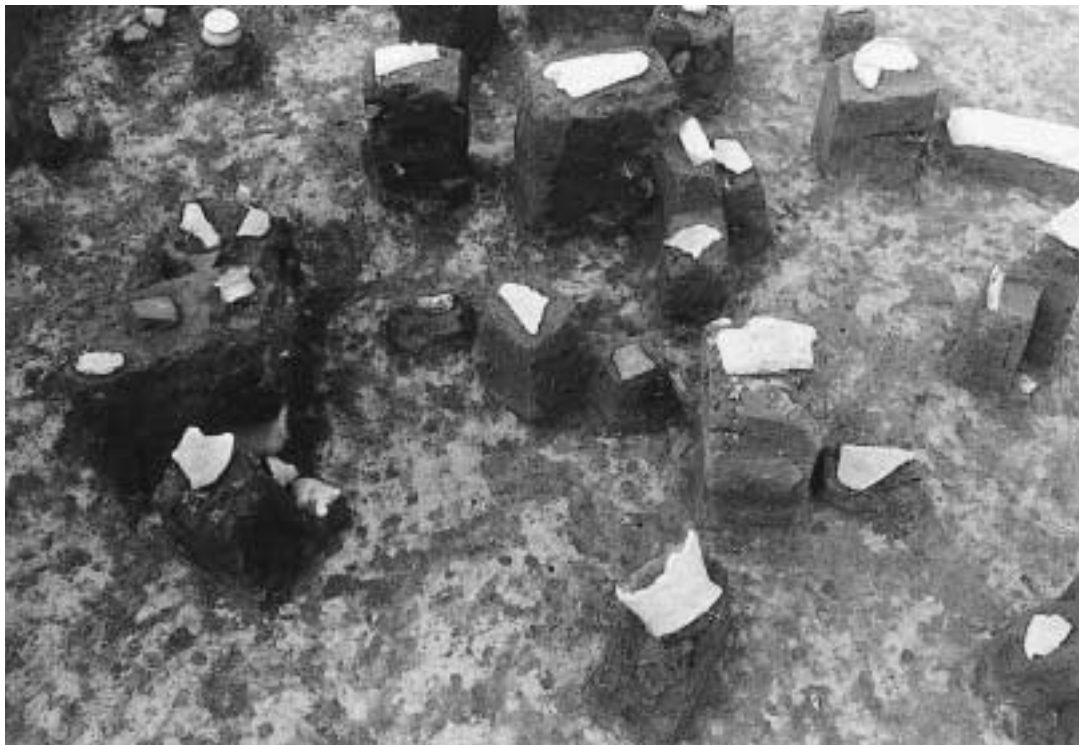


1. 第9号住居跡遺物出土状態近景(1)



2. 第9号住居跡遺物出土状態近景(2)

图版 7



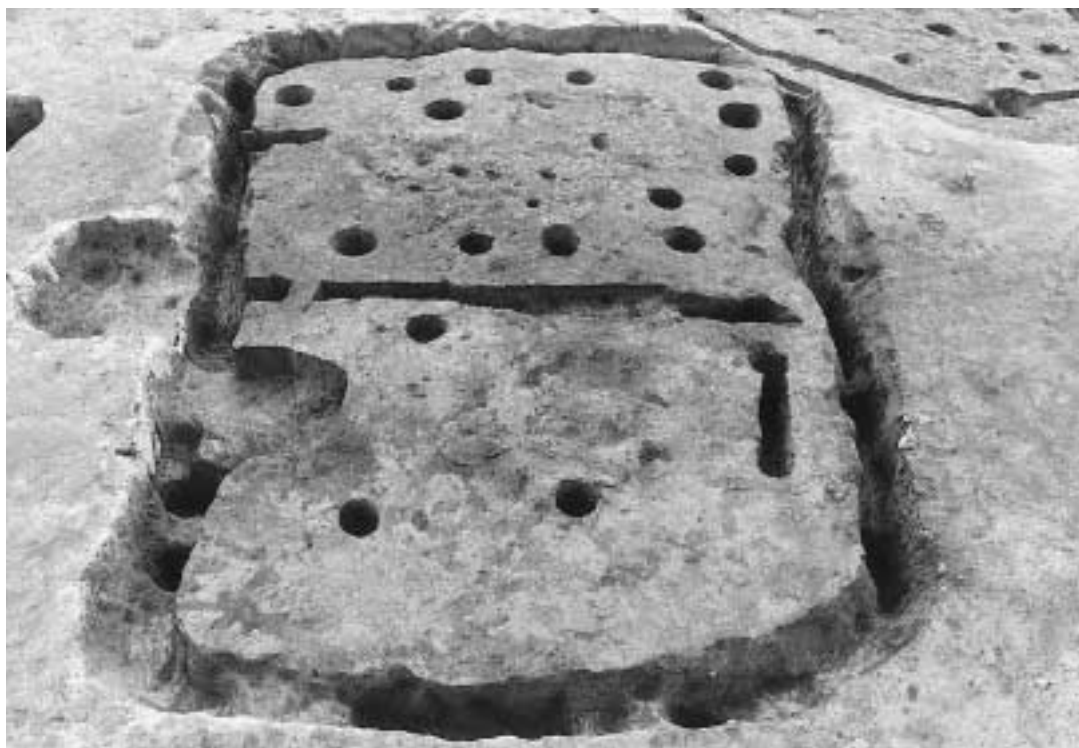
1. 第9号住居跡遺物出土状態近景（3）



2. 第9号住居跡遺物出土状態近景（4）



1. 第10·11号住居跡遺物出土状態



2. 第10·11号住居跡



1. 第12号住居跡遺物狀態



2. 第12号住居跡



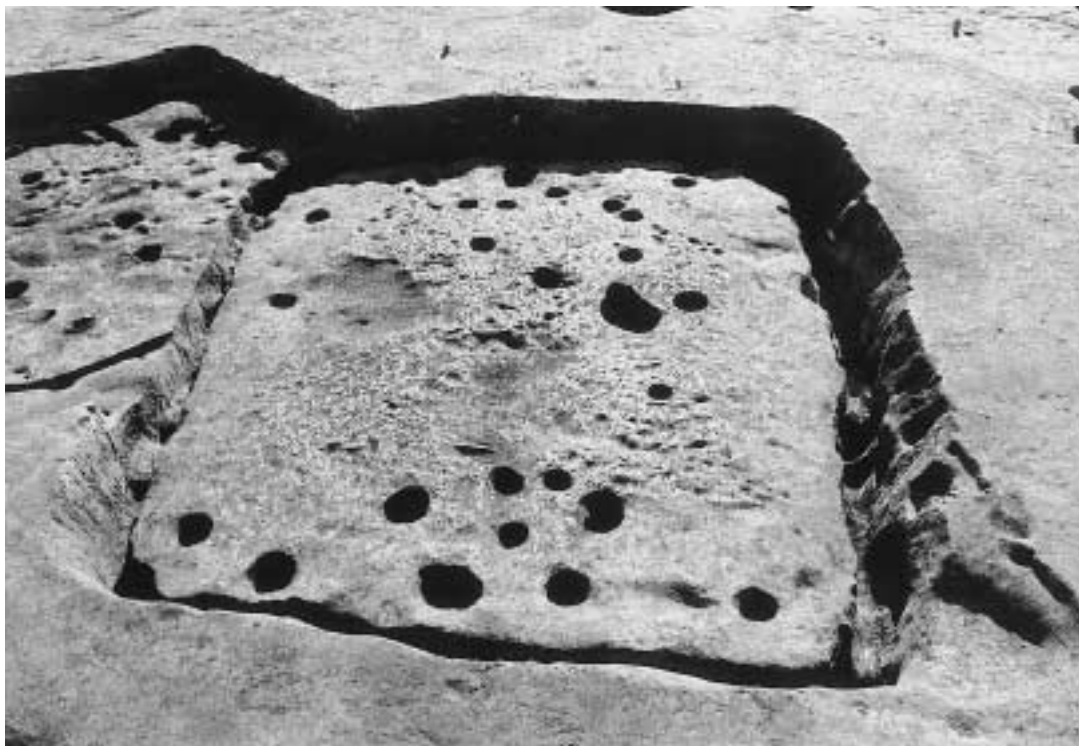
1. 第12号住居跡遺物出土状態近景



2. 第12号住居跡 炉跡



1. 第13号住居跡遺物出土狀態



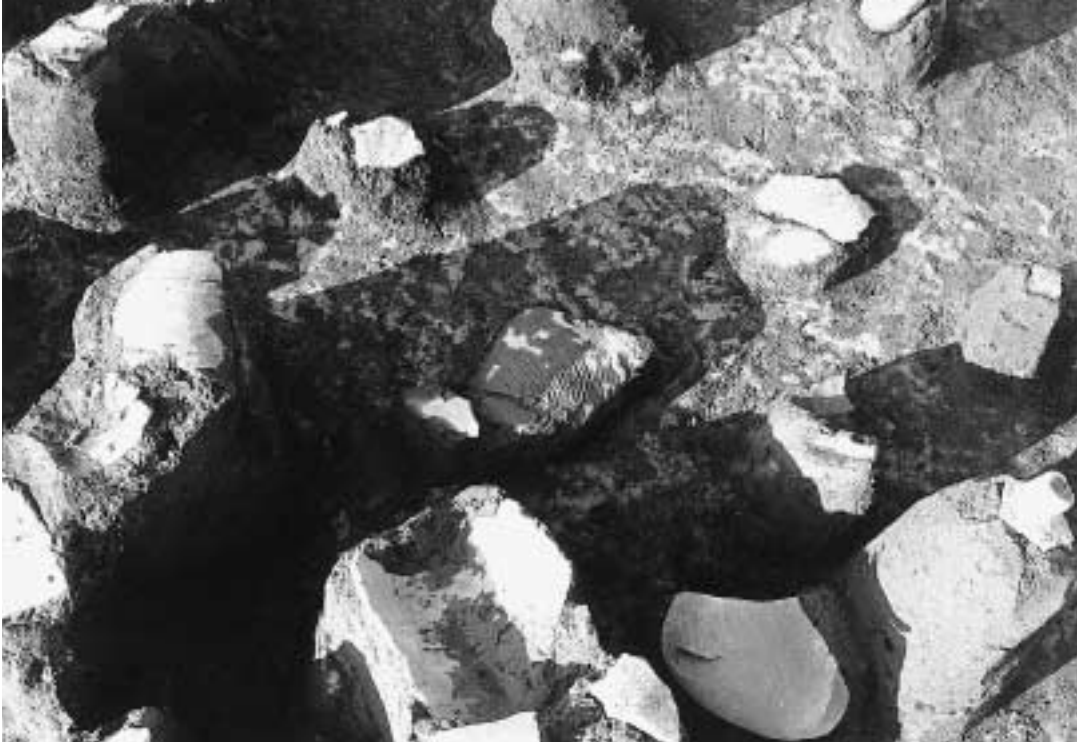
2. 第13号住居跡



1. 第13号住居跡遺物出土状態近景 (1)



2. 第13号住居跡遺物出土状態近景 (2)



1. 第13号住居跡遺物出土状態近景 (3)



2. 第13号住居跡遺物出土状態近景 (4)



1. 第14号住居跡遺物出土状態



2. 第14・30・32号住居跡



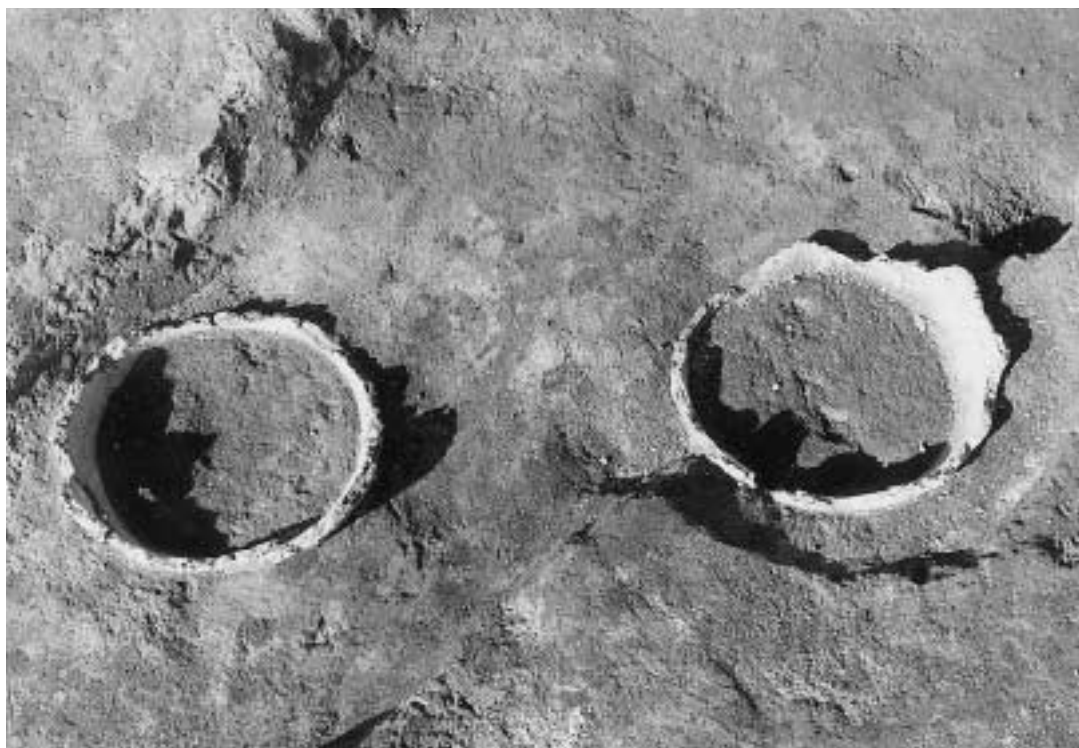
1. 第14号住居跡



2. 第30号住居跡遺物出土状態



1. 第30号住居跡遺物出土状態近景



2. 第32号住居跡 炉跡



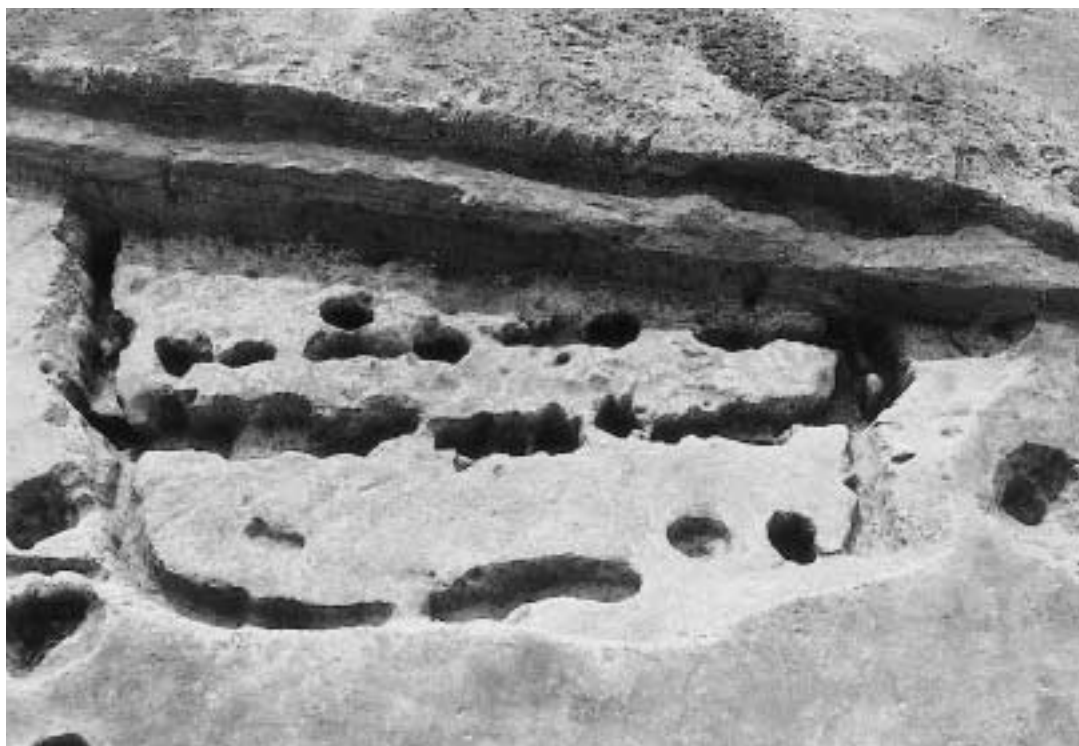
1. 第32号住居跡 炉体土器



2. 第32号住居跡遺物出土状態



1. 第15号住居跡遺物出土状態



2. 第15号住居跡



1. 第15号住居跡遺物出土状態近景（1）



2. 第15号住居跡遺物出土状態近景（2）



1. 第16·17号住居跡遺物出土状態



2. 第16号住居跡遺物出土状態



1. 第16号住居跡



2. 第16号住居跡遺物出土狀態近景（1）



1. 第16号住居跡遺物出土状態近景 (2)



2. 第16号住居跡遺物出土状態近景 (3)



1. 第16号住居跡遺物出土状態近景（4）



2. 第17号住居跡遺物出土状態近景（1）



1. 第17号住居跡遺物出土状態近景 (2)



2. 第19・20号住居跡遺物出土状態



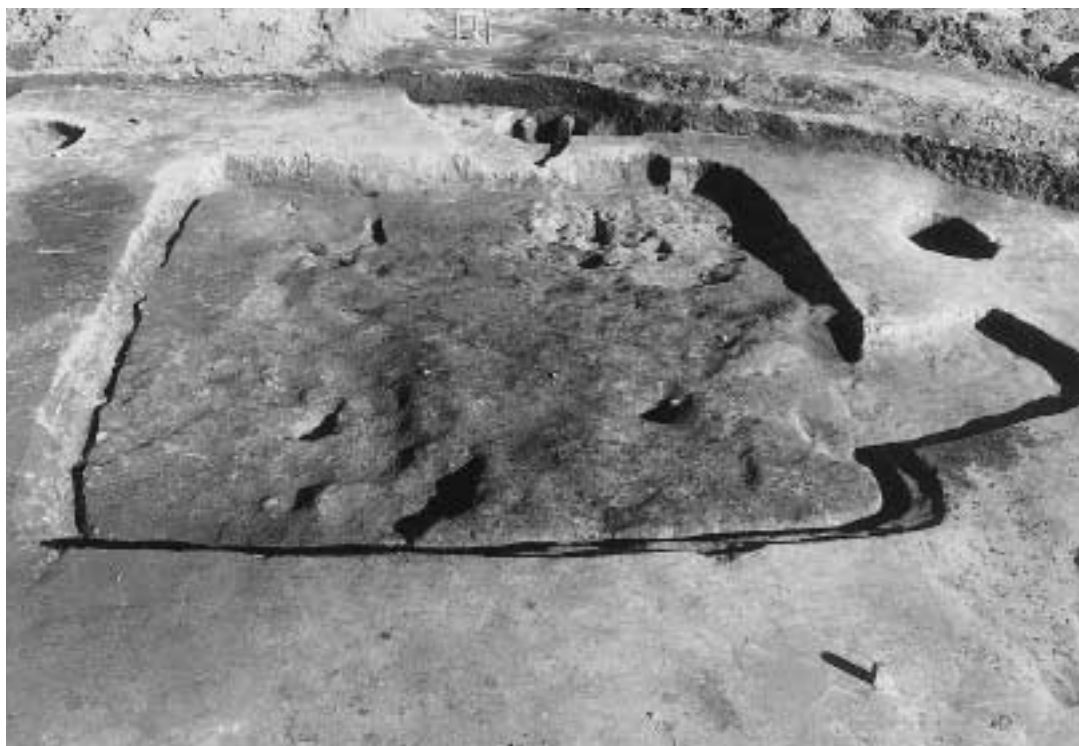
1. 第19号住居跡



2. 第20号住居跡



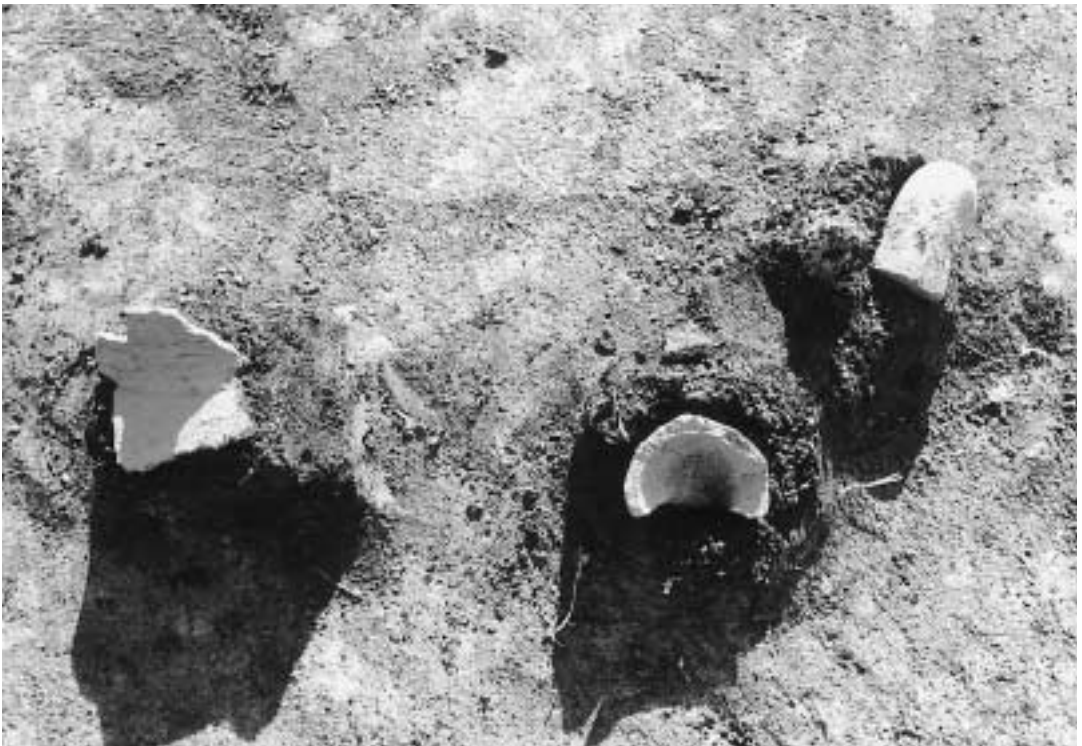
1. 第21号住居跡



2. 第22号住居跡



1. 第22号住居跡遺物出土状態近景（1）



2. 第22号住居跡遺物出土状態近景（2）



1. 第23号住居跡



2. 第24号住居跡



1. 第25号住居跡遺物出土状態



2. 第25号住居跡



1. 第25号住居跡遺物出土状態近景



2. 第26号住居跡



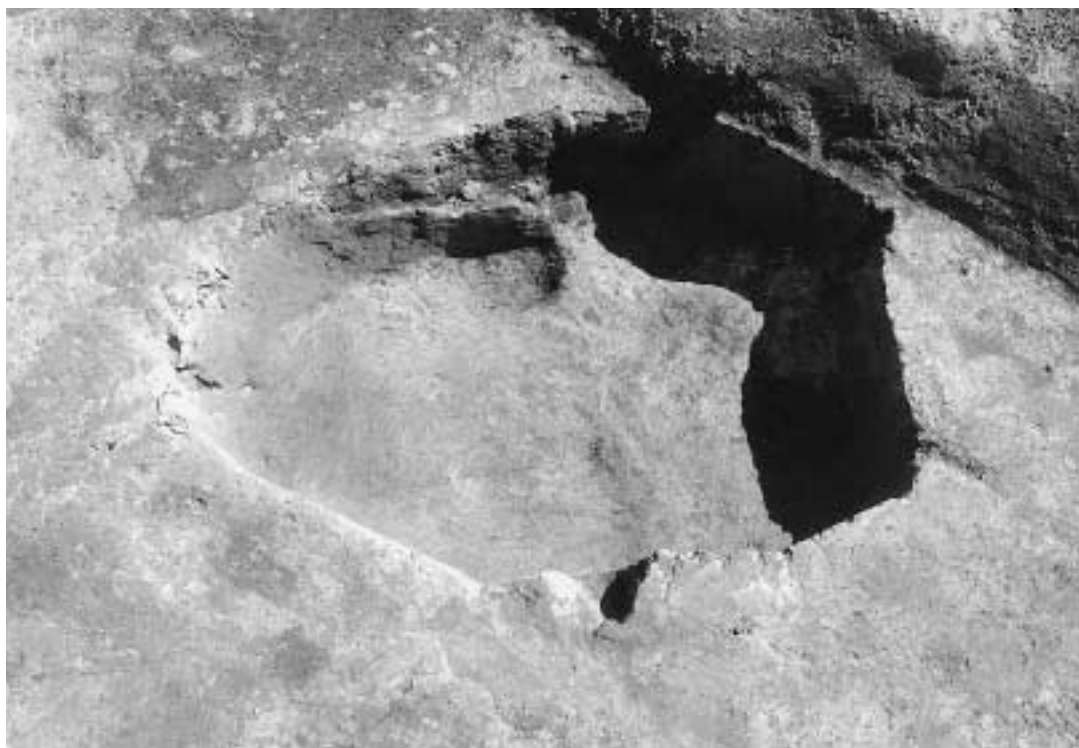
1. 第33号住居跡



2. 第33号住居跡 炉体土器



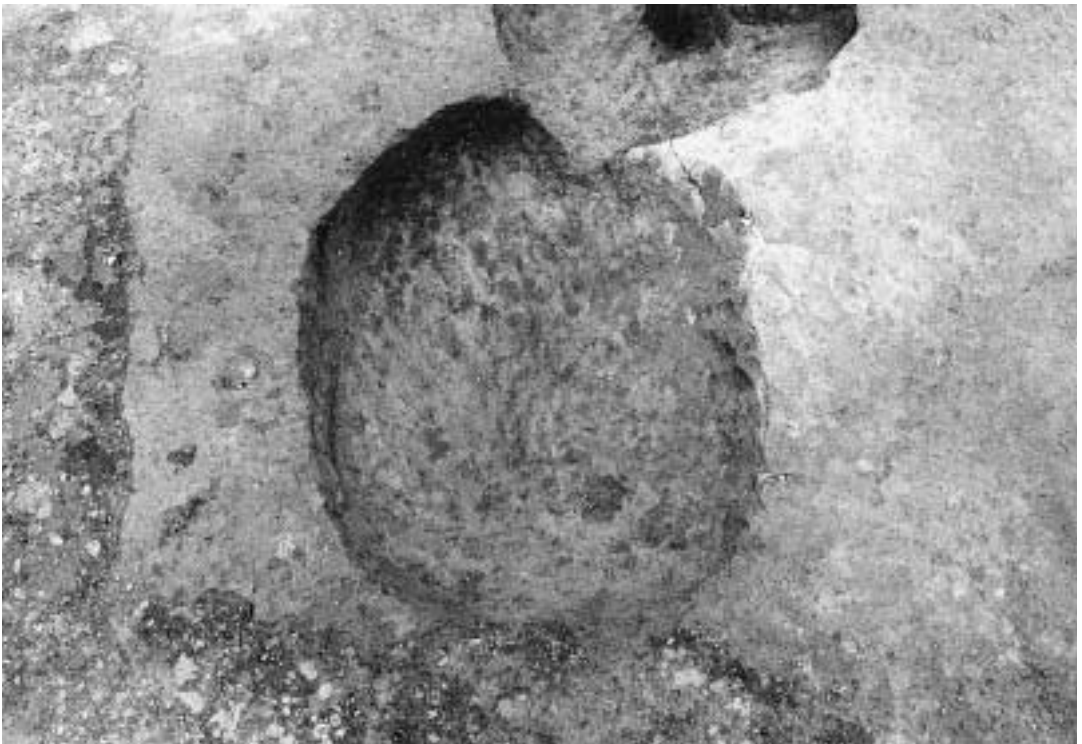
1. 第54号土坑器物出土状态



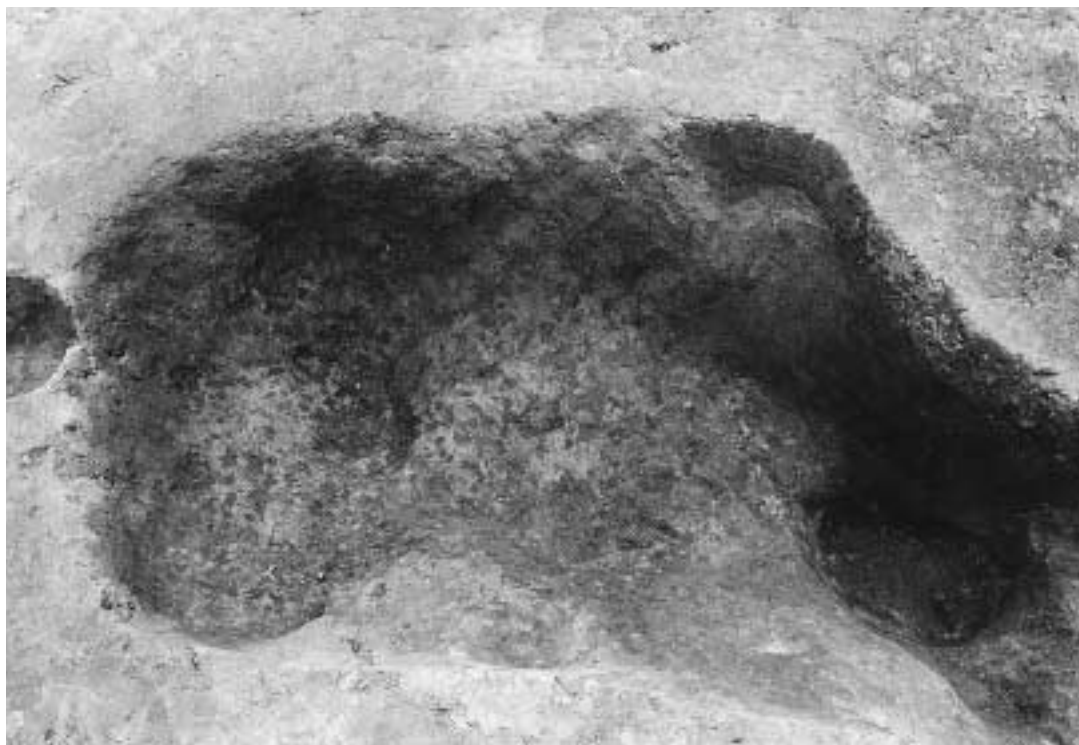
2. 第54号土坑



1. 第55号土壤



2. 第56号土壤



1. 第57号土壤



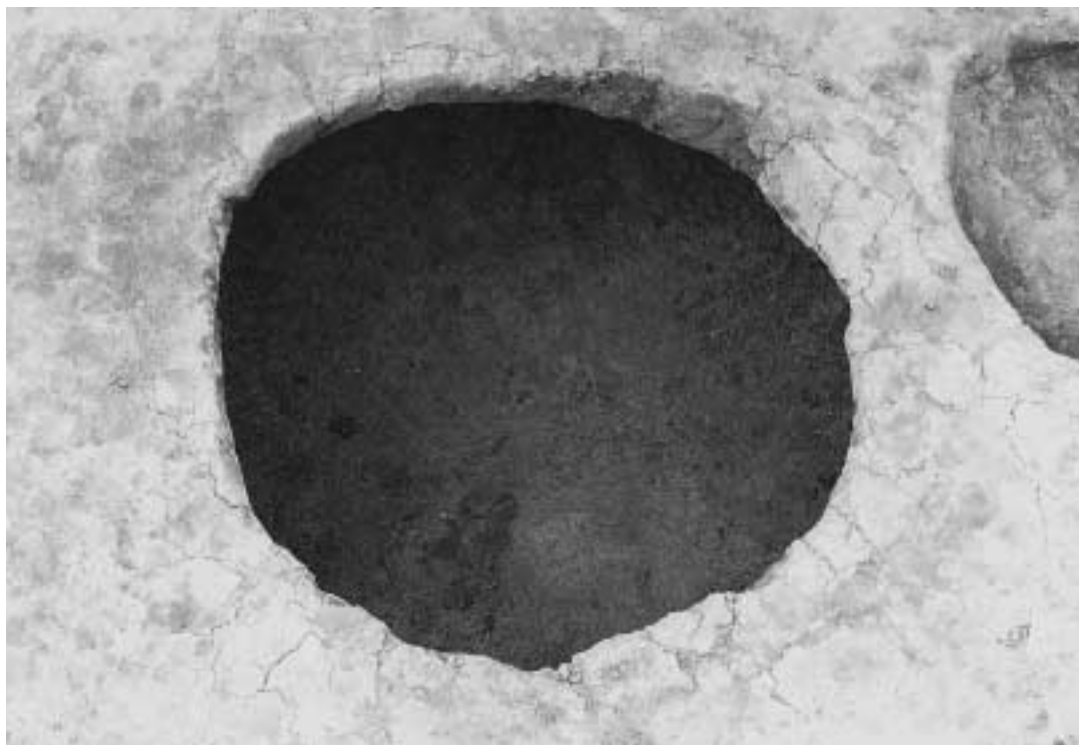
2. 第58号土壤



1. 第59号土坑



2. 第60号土坑



1. 第61号土坑



2. 第62号土坑



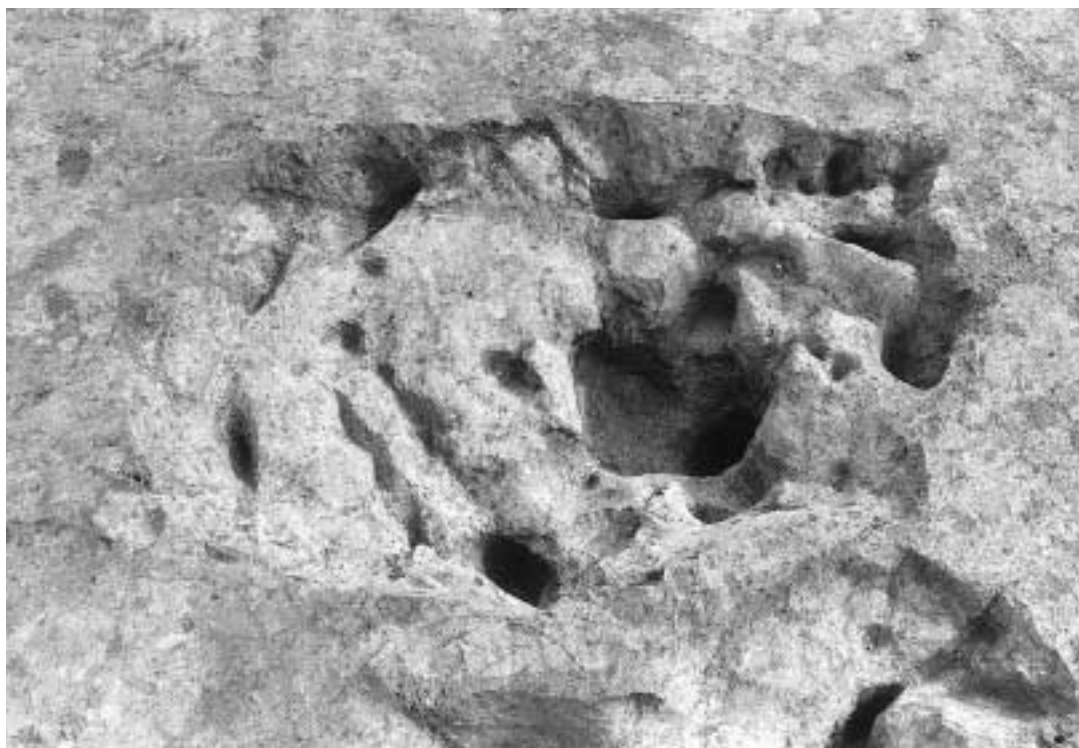
1. 第63号土壤



2. 第64号土壤



1. 第65号土壤



2. 第66号土壤



1. 第67号土壙



2. 第68号土壙



1. 第69号土坑



2. 第70号土坑



1. 第71号土壤



2. 第72号土壤



1. 第74号土壤



2. 第75号土壤



1. 第76号土坑



2. 第78号土坑



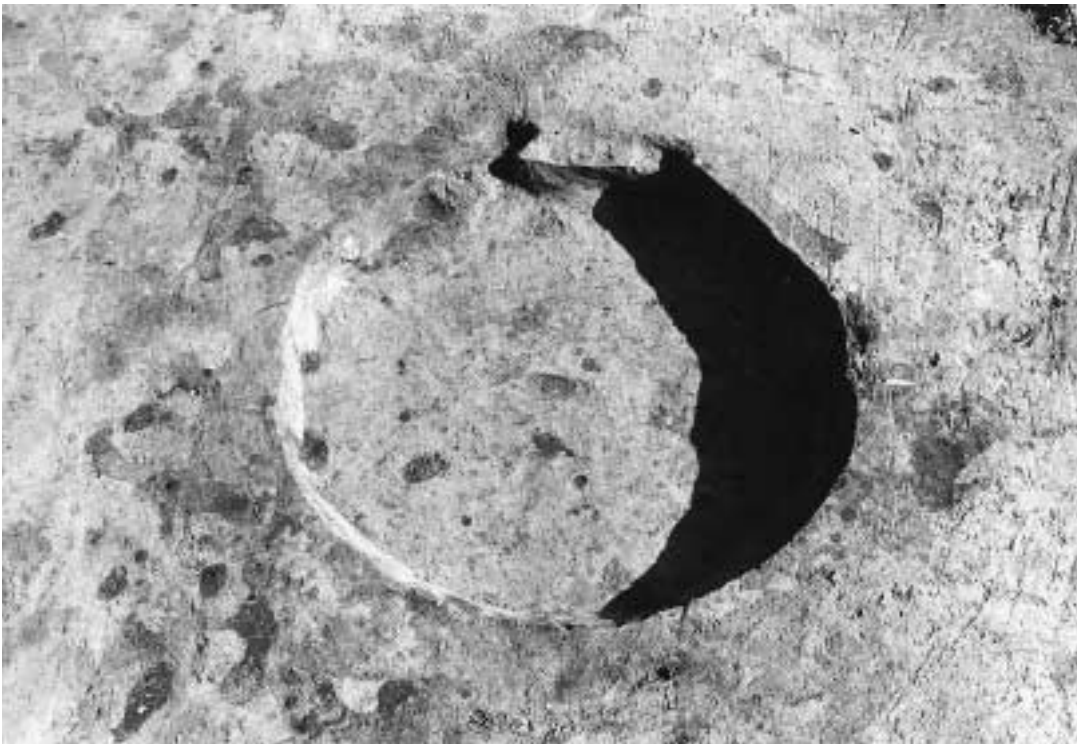
1. 第79号土坑



2. 第80号土坑



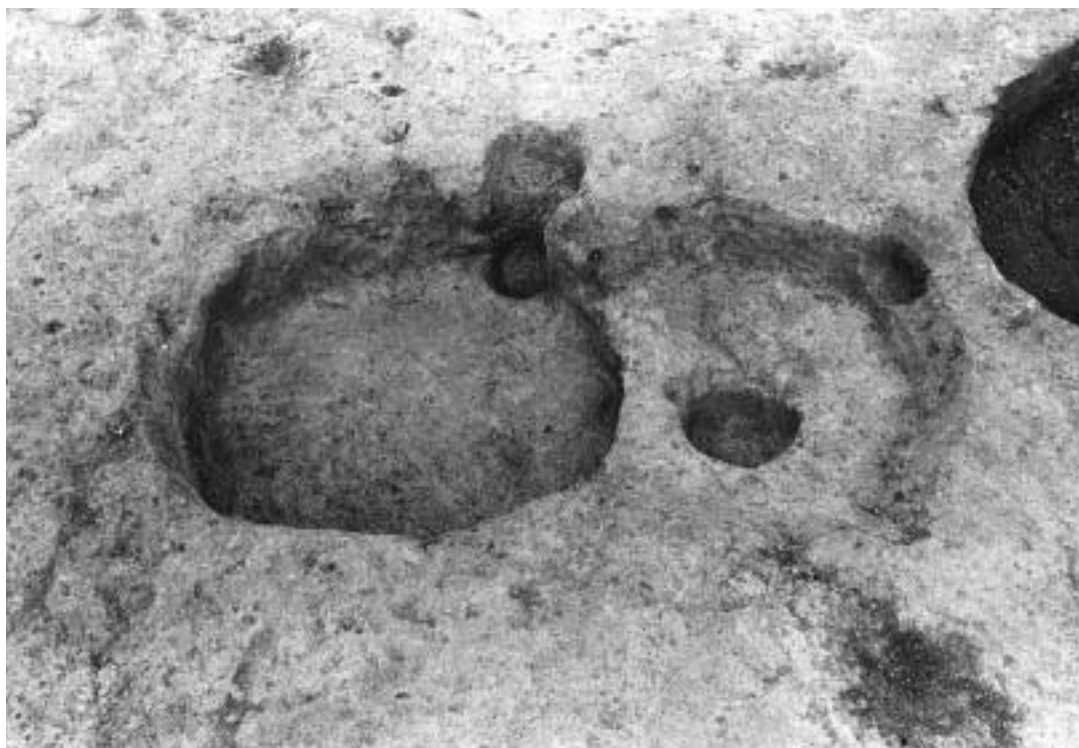
1. 第81号土壤



2. 第82号土壤



1. 第88号土壙



2. 第89·90号土壙



1. 第91号土坑



2. 第92号土坑



1. 第93号土坑



2. 第94号土坑



1. 第95号土壤



2. 第96号土壤



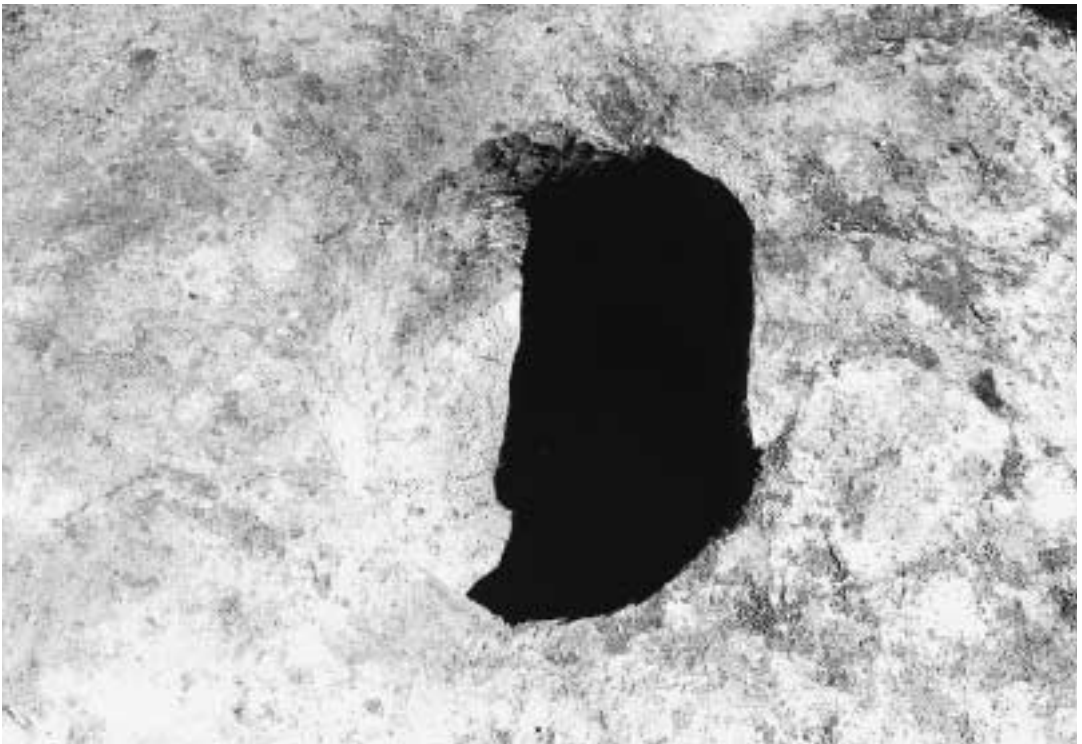
1. 第97号土壤



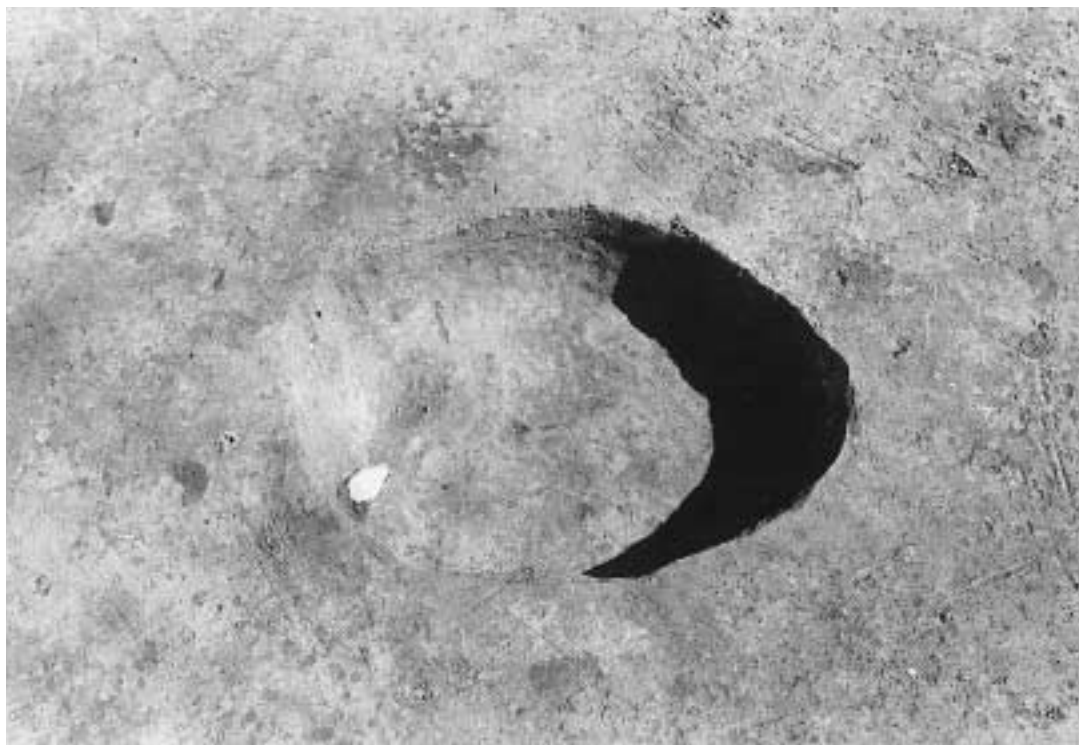
2. 第98号土壤



1. 第99号土壤



2. 第100号土壤



1. 第101号土坑



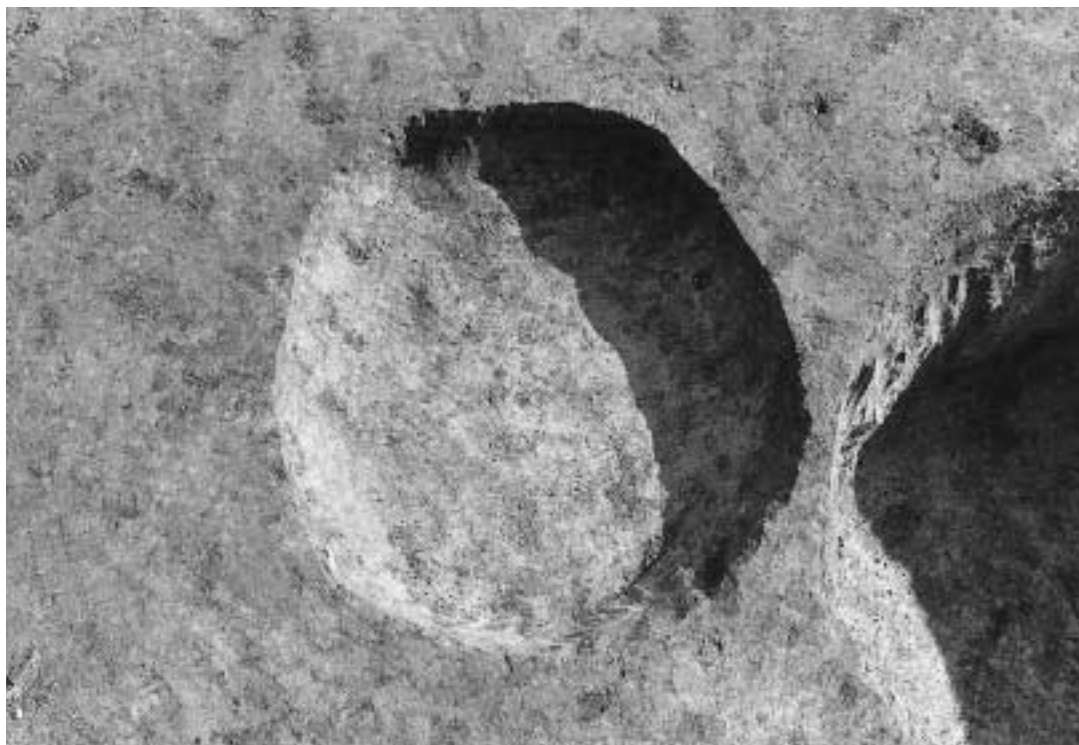
2. 第103号土坑



1. 第104号土坑



2. 第105号土坑



1. 第108号土壤



2. 第110号土壤



1. 第111号土坑



2. 第112号土坑



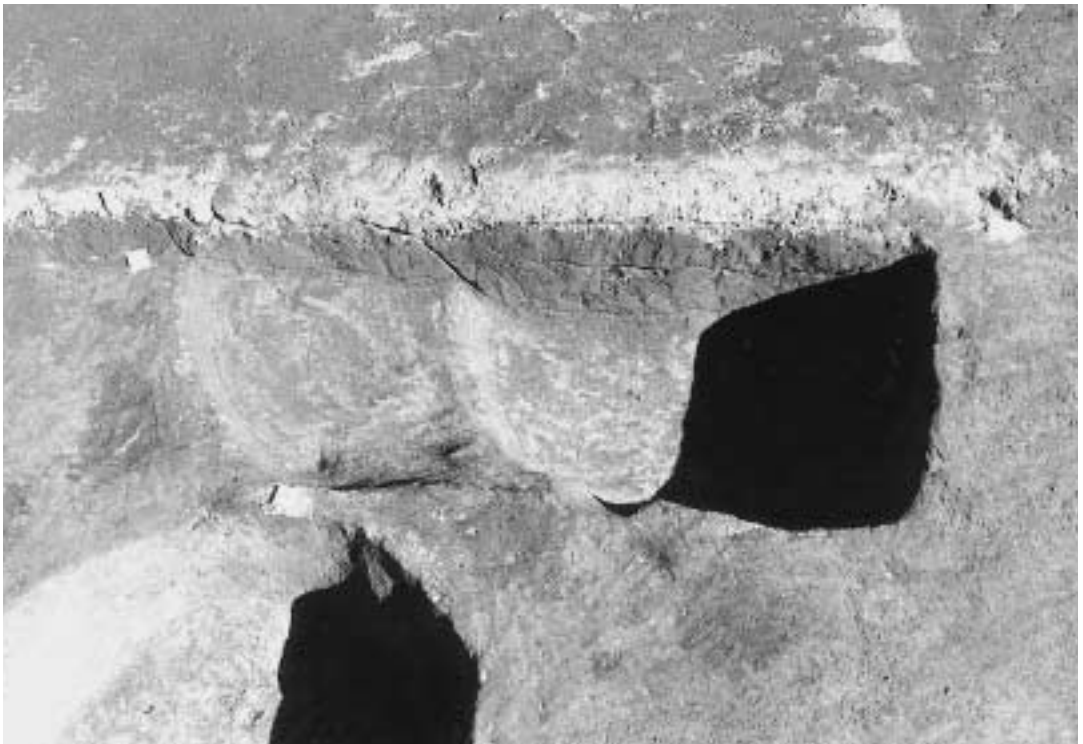
1. 第113·114号土坑



2. 第115号土坑



1. 第116号土坑



2. 第118 (右) · 133号土坑 (左)



1. 第119号土坑



2. 第120号土坑



1. 第121号土壤



2. 第122号土壤



1. 第123号土壙



2. 第124号土壙



1. 第125号土坑



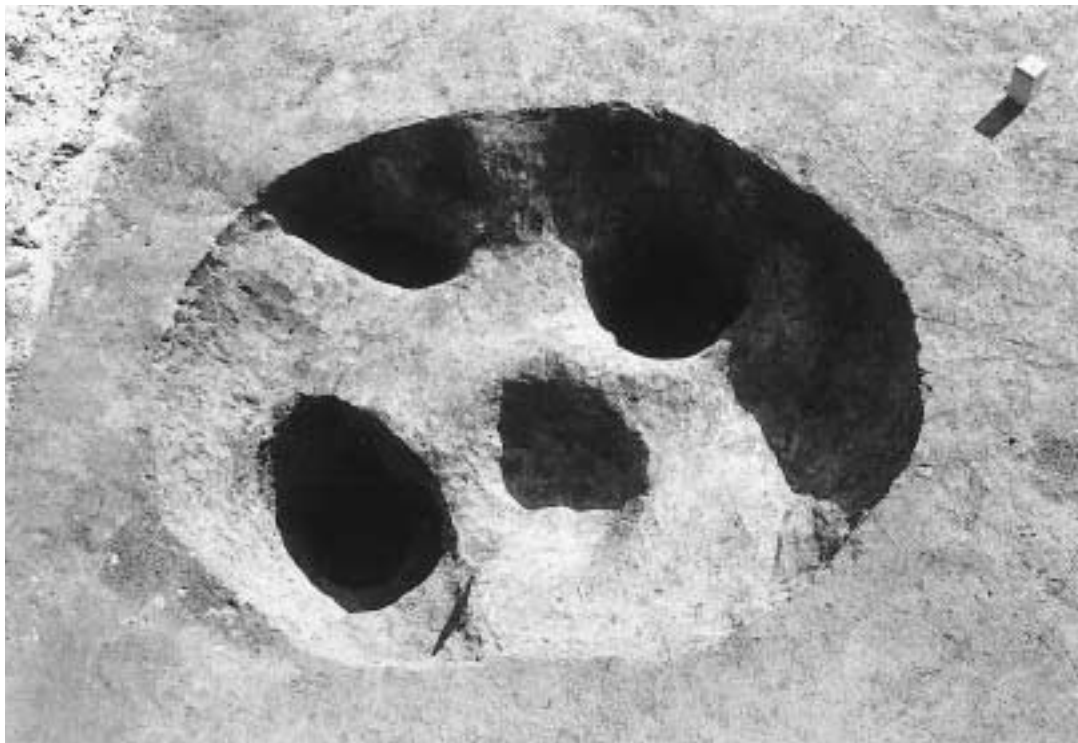
2. 第126号土坑



1. 第129号土坑



2. 第130号土坑



1. 第131号土坑



2. 第134号土坑



1. 第135号土坑



2. 第136·137号土坑



1. 第138号土坑



2. 第139号土坑



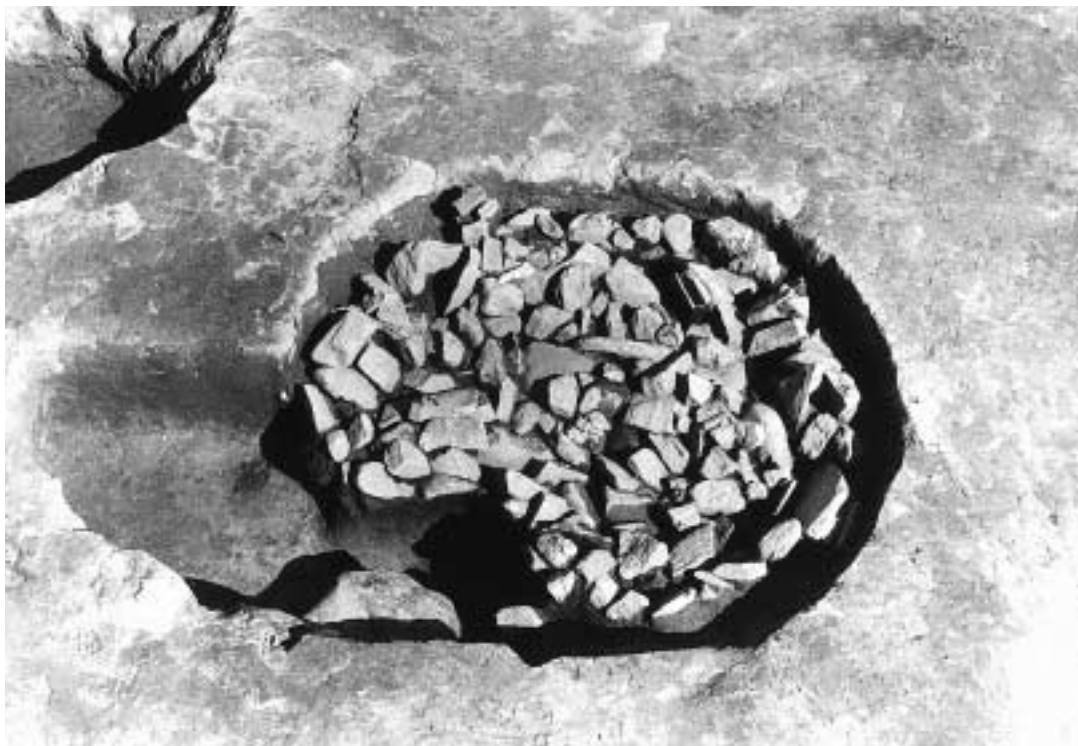
1. 第140号土窟



2. 第143号土窟



1. 第144号土坑



2. 第146·147号土坑



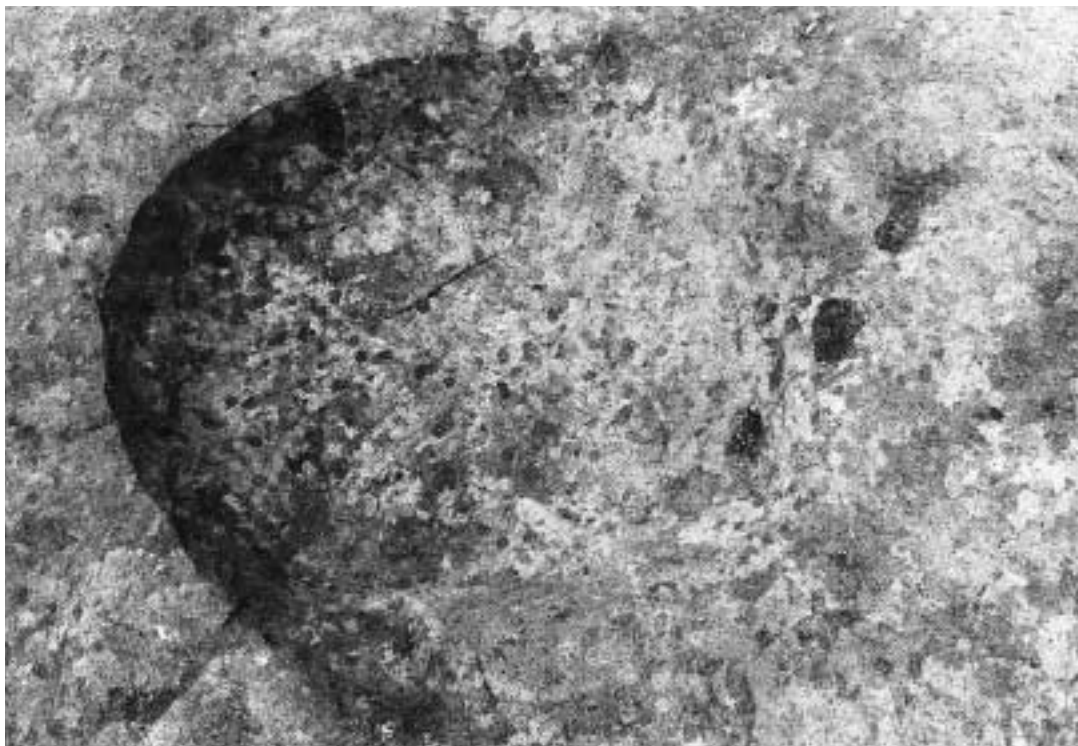
1. 第146·147号土坑



2. 第148号土坑



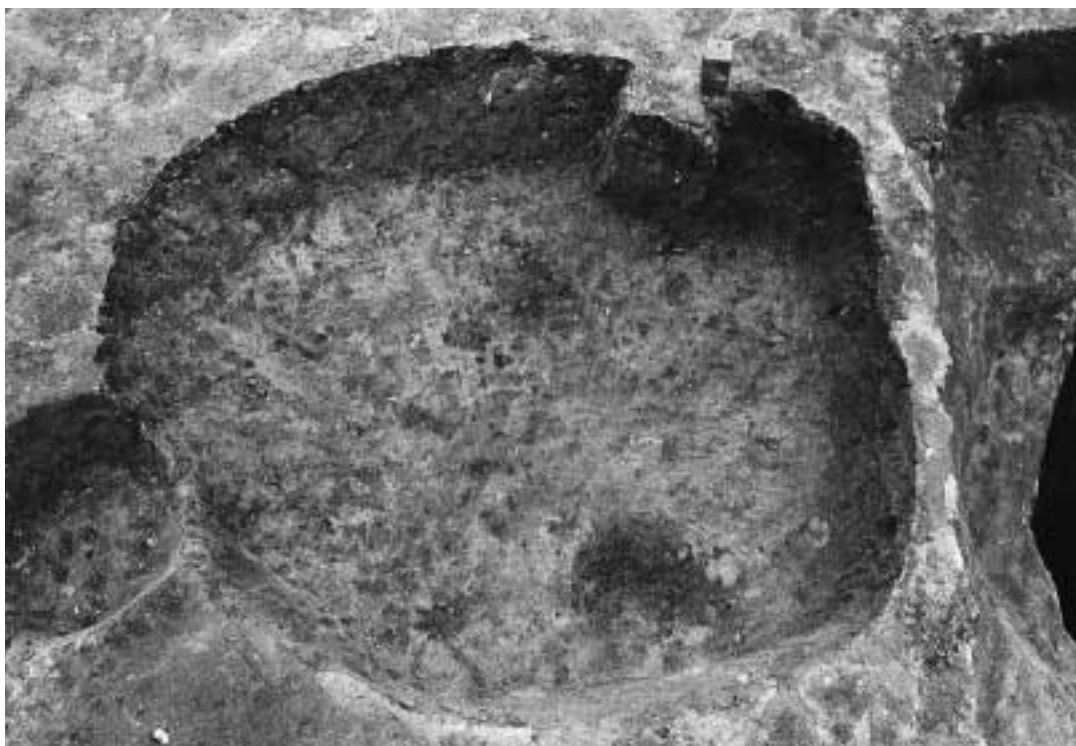
1. 第150号土块



2. 第151号土块



1. 第152号土壤



2. 第153号土壤



1. B地点調査2区全景（南より）



2. B地点調査2区全景（南西より）



1. B地点調査2区道路拡幅部（西より）



2. B地点調査2区 表土掘削



1. B地点調査2区 第1号埋没谷



2. B地点調査2区 第2号埋没谷



1. 第159号土壤



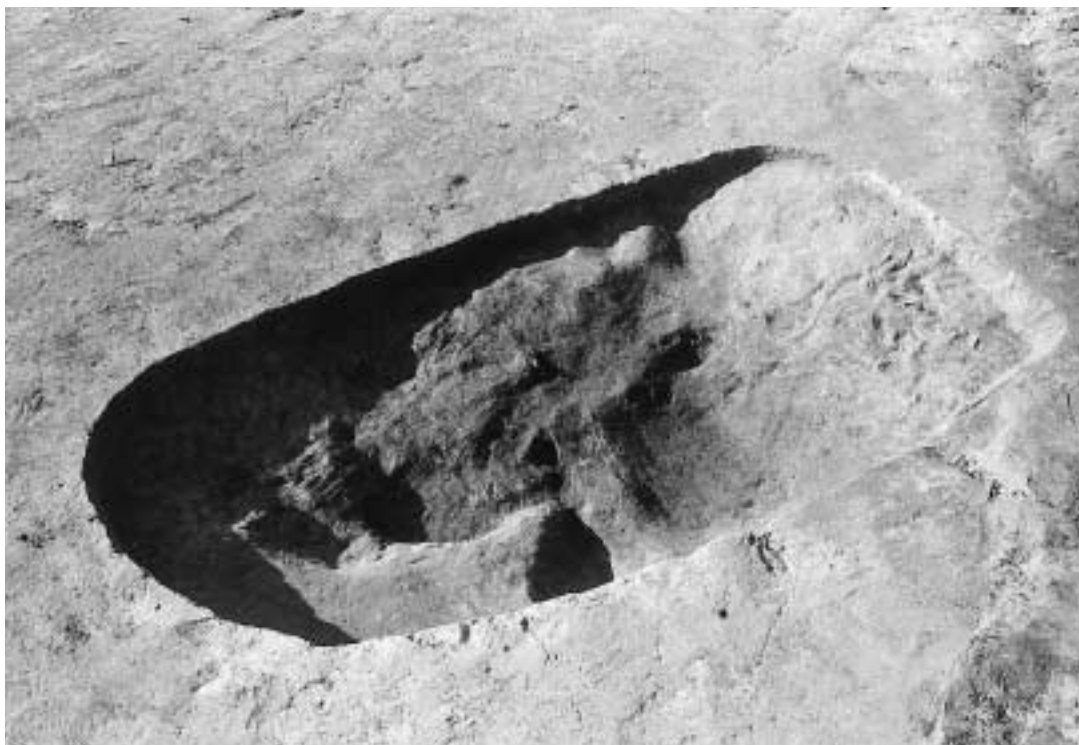
2. 第160号土壤



1. 第161号土坑



2. 第162号土坑

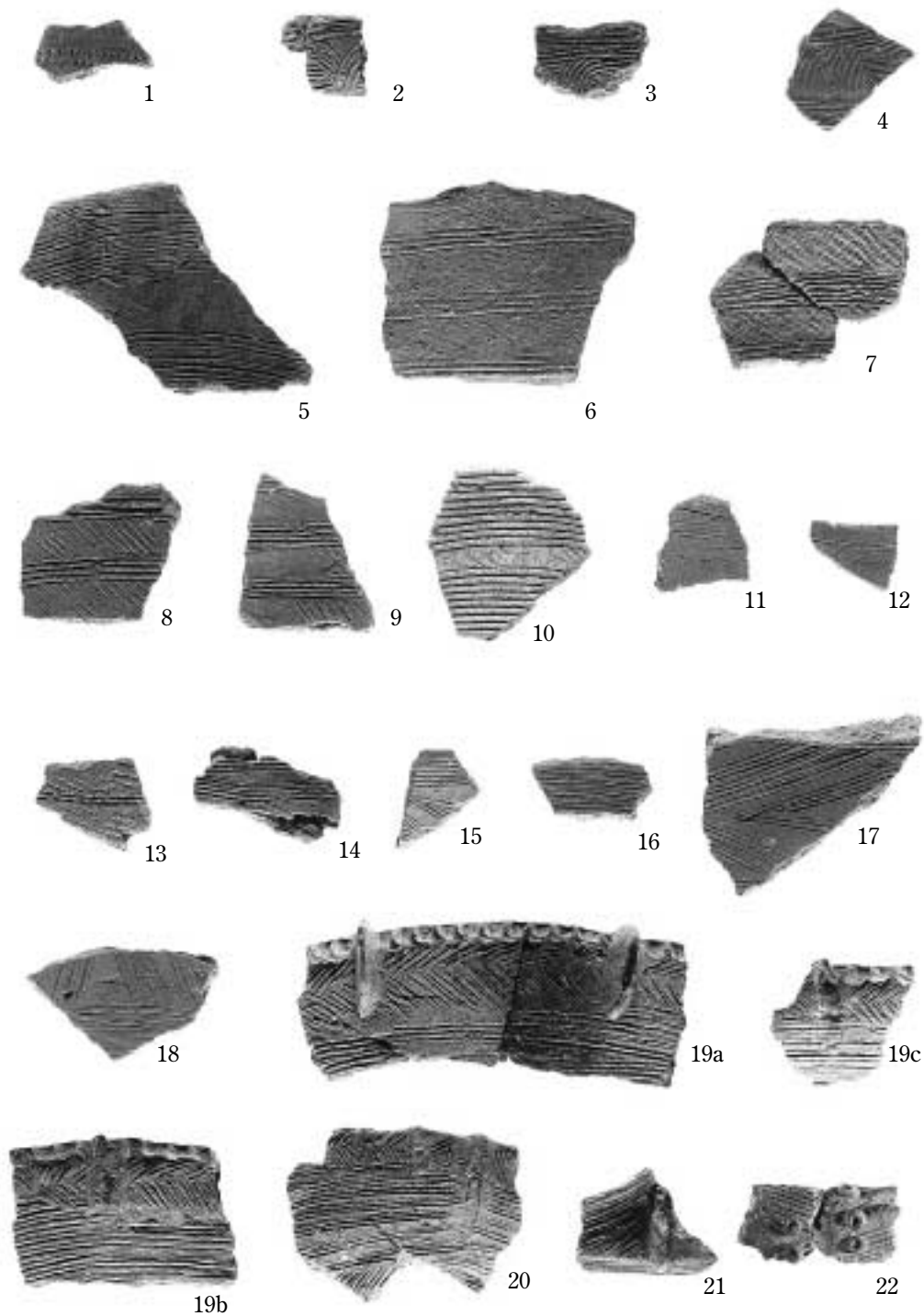


1. 第164号土坑

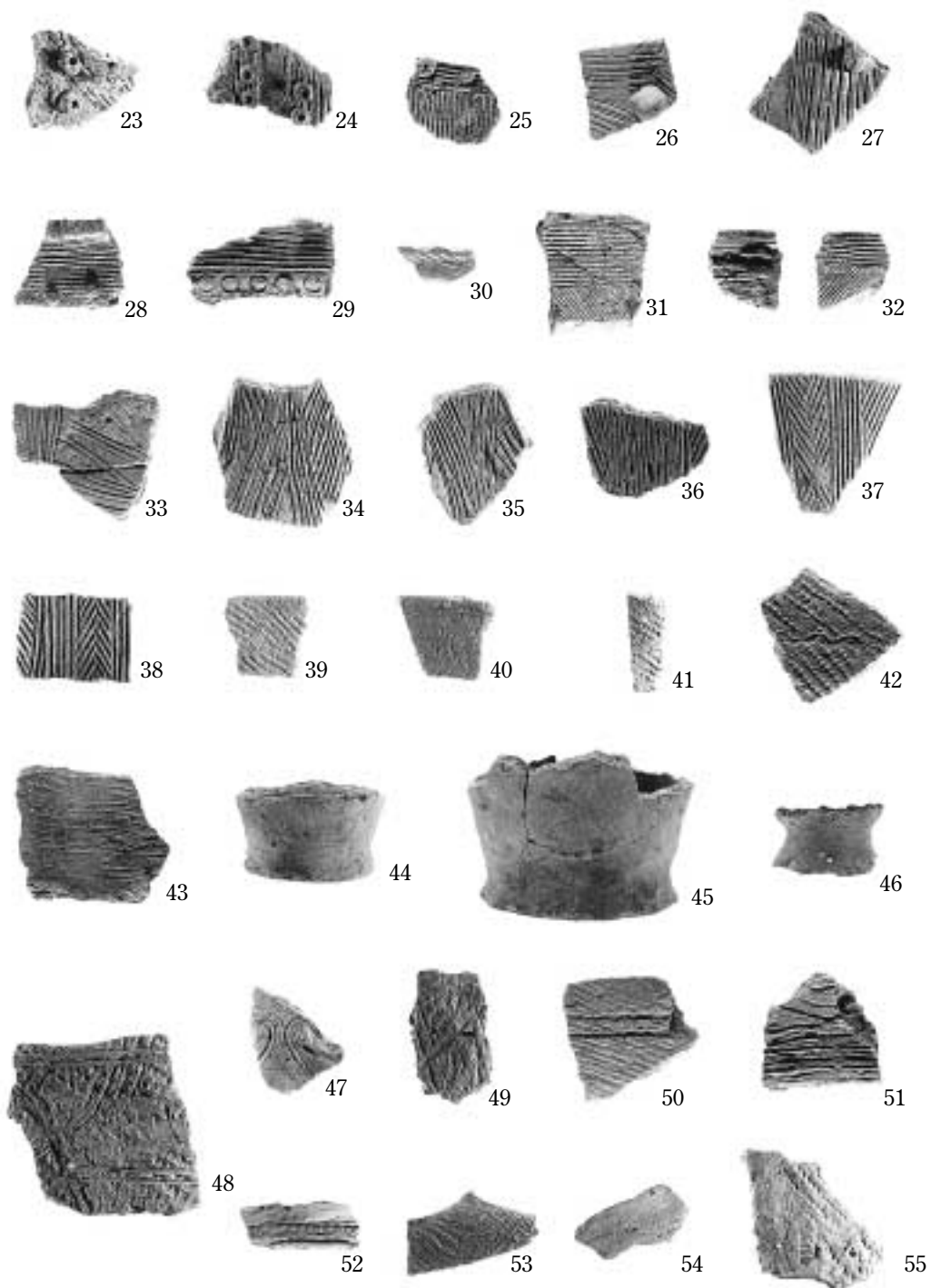


2. 第165号土坑

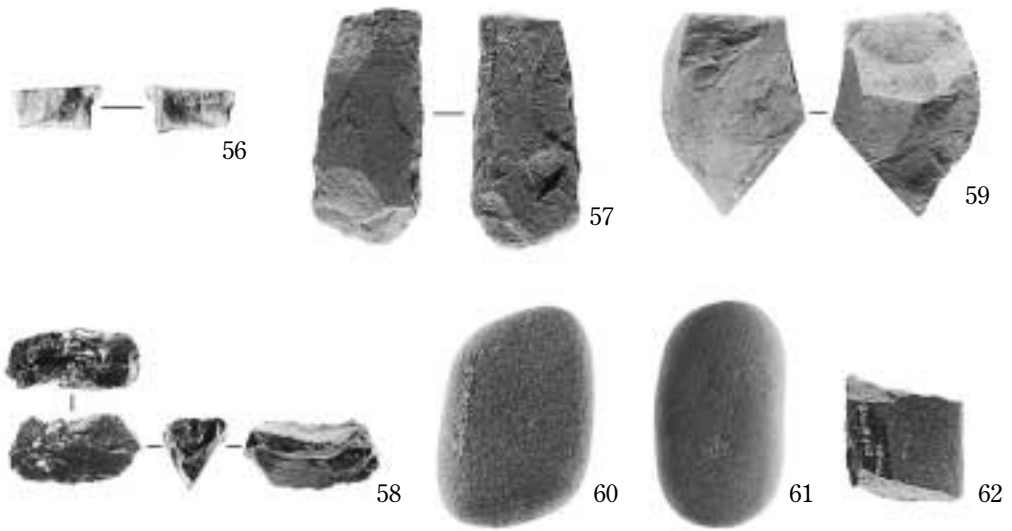
图版 77



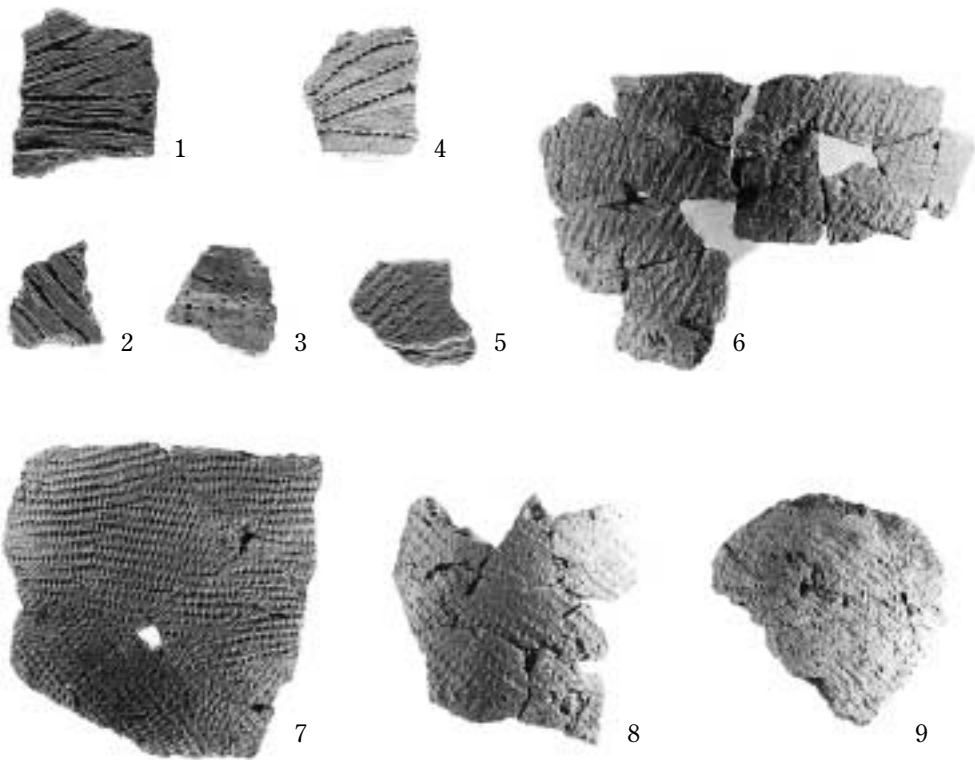
第 9 号住居迹出土遗物 (1)



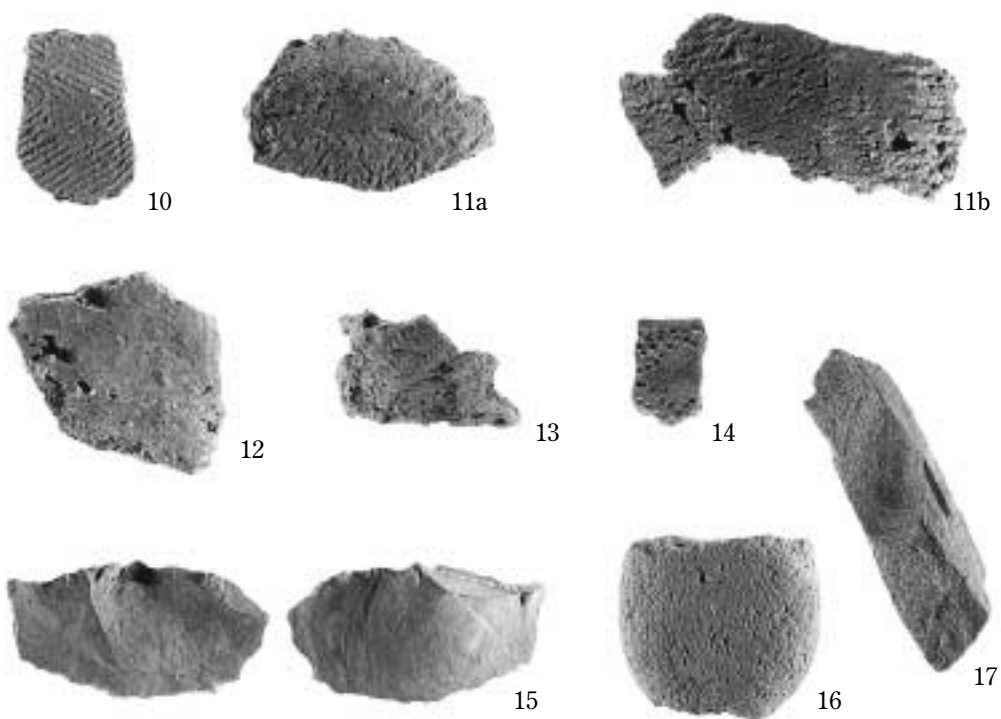
第 9 号住居迹出土遺物 (2)



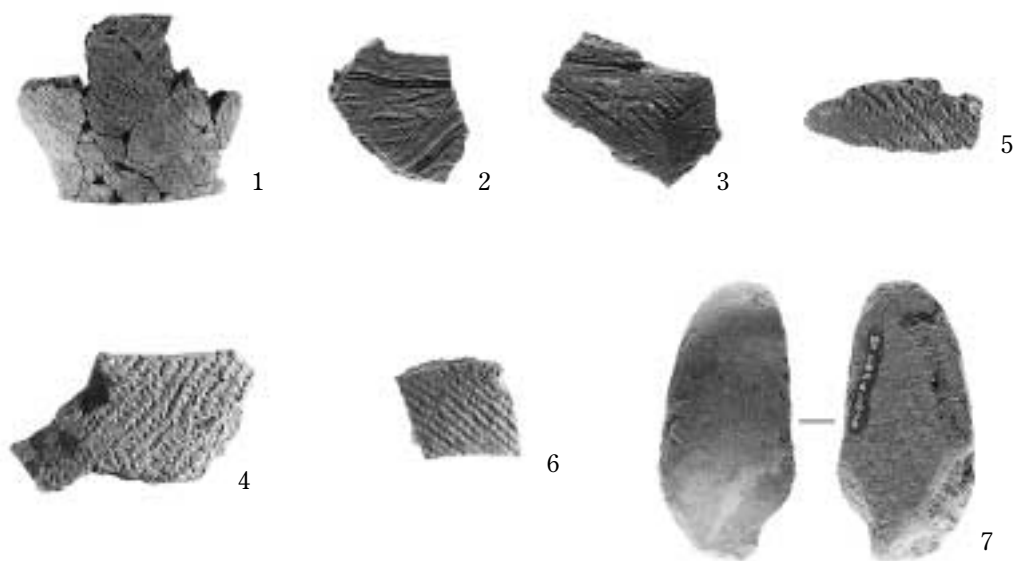
第9号住居迹出土遺物（3）



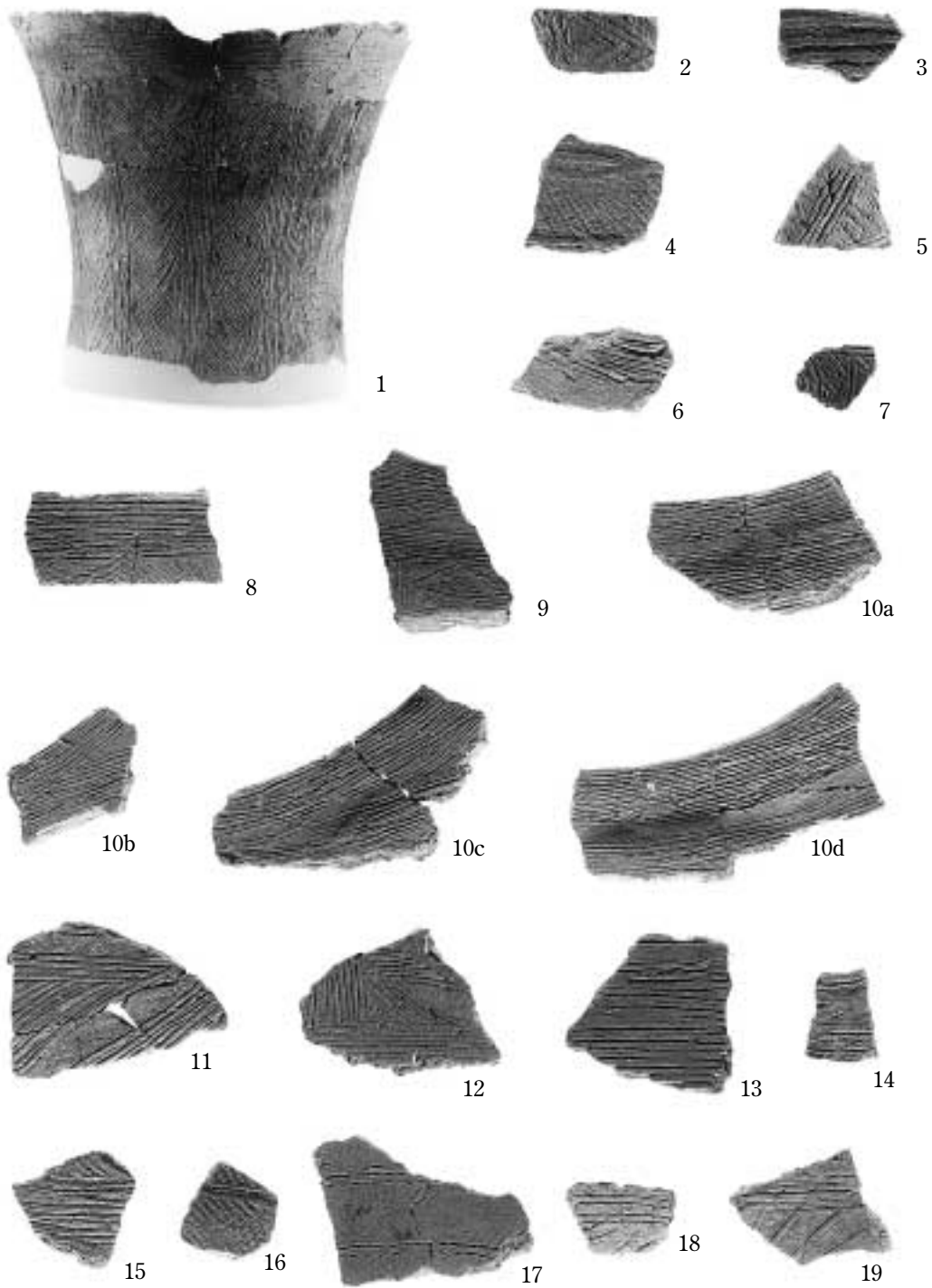
第10号住居迹出土遺物（1）



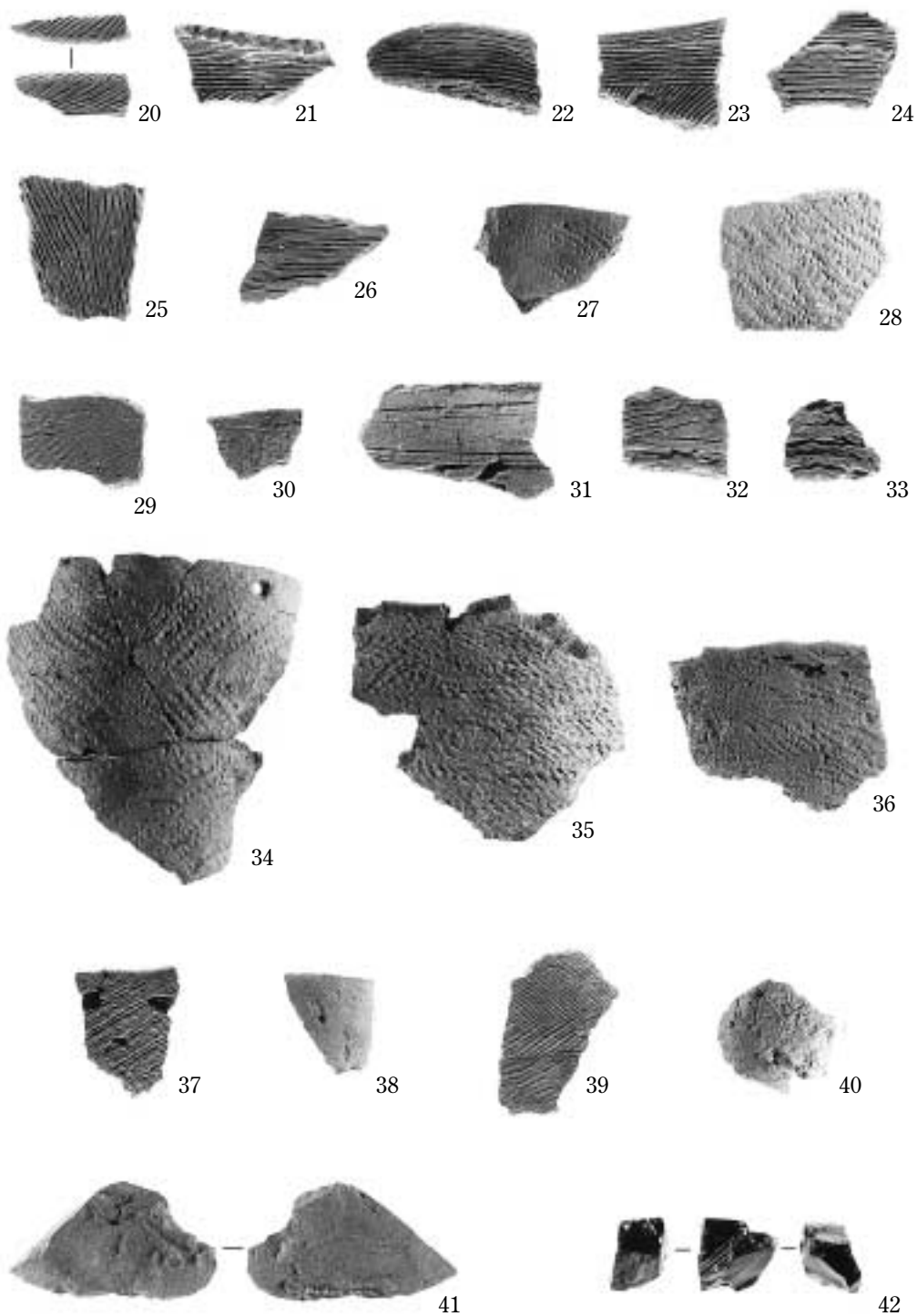
第10号住居跡出土遺物（2）



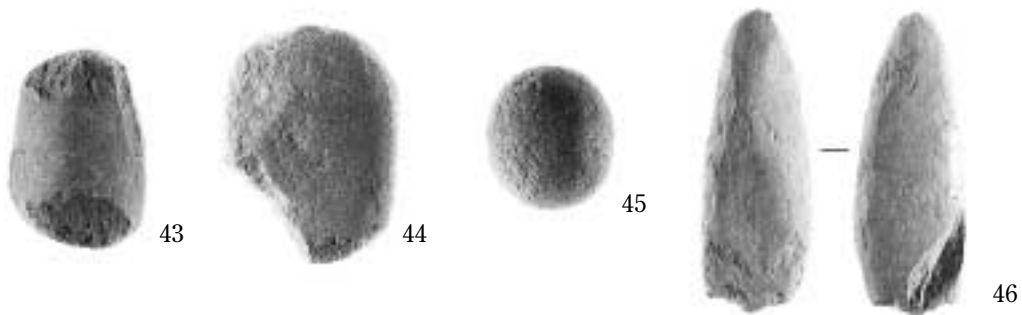
第11号住居跡出土遺物



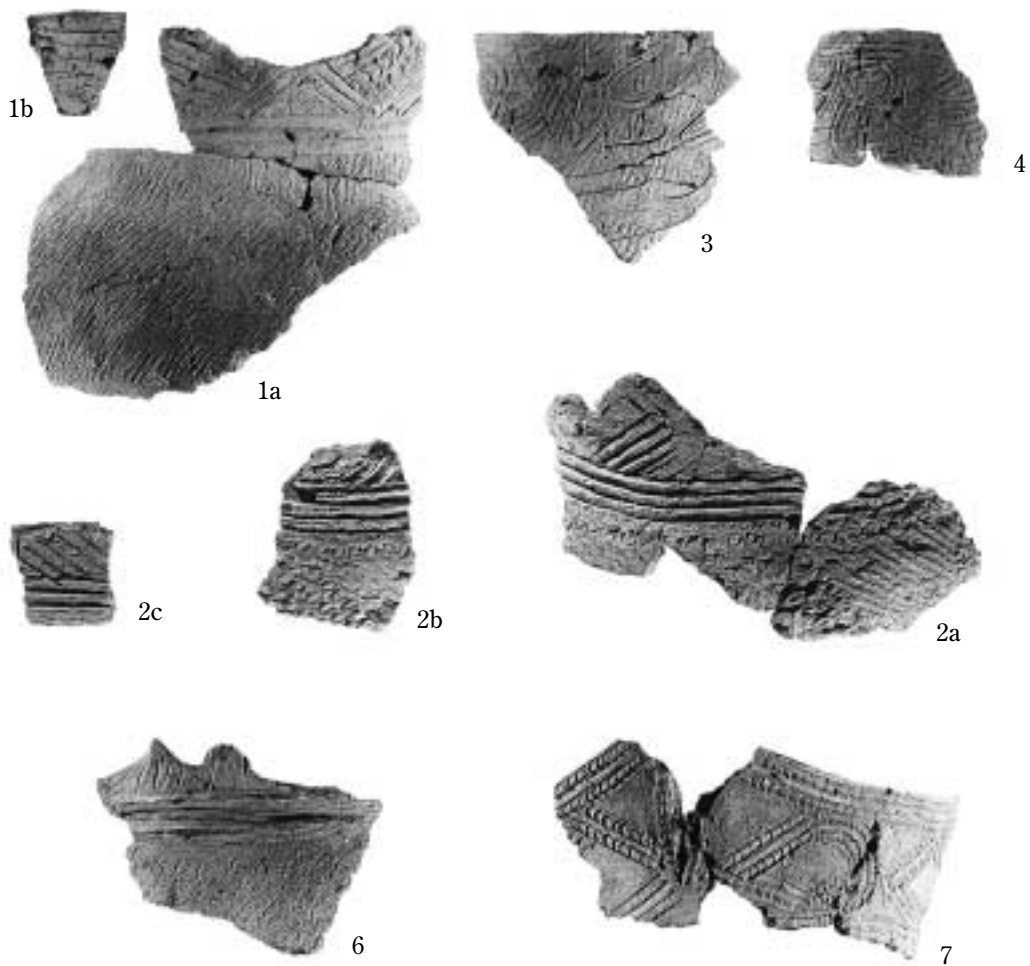
第12号住居跡出土遺物 (1)



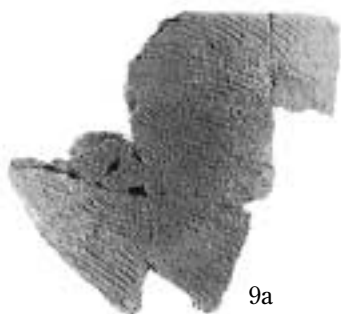
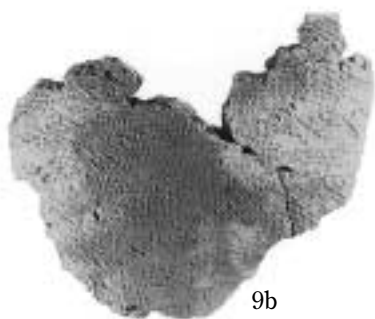
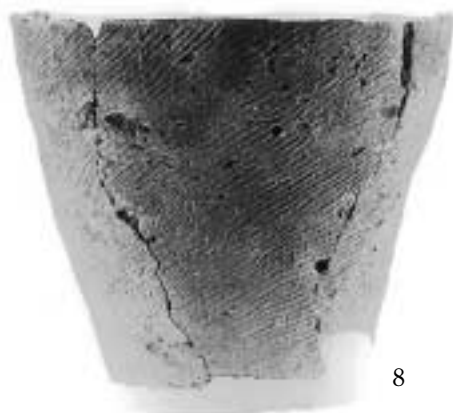
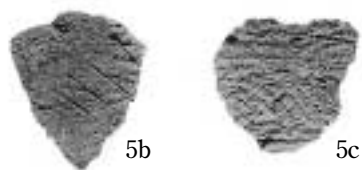
第12号住居跡出土遺物（2）

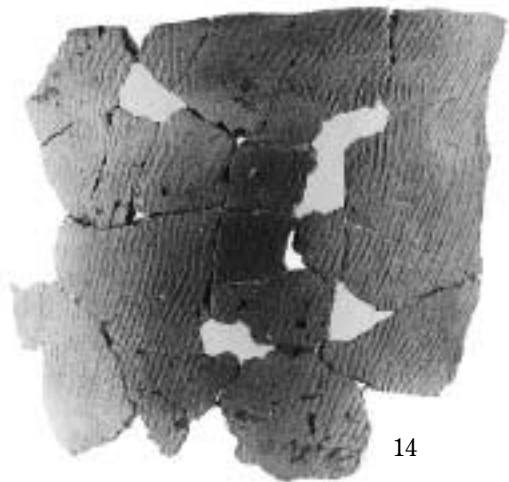
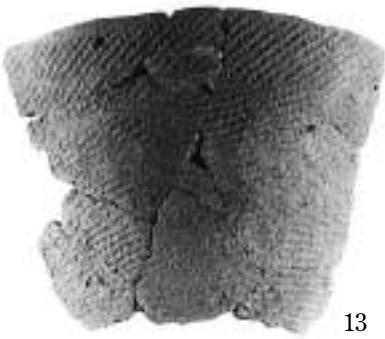
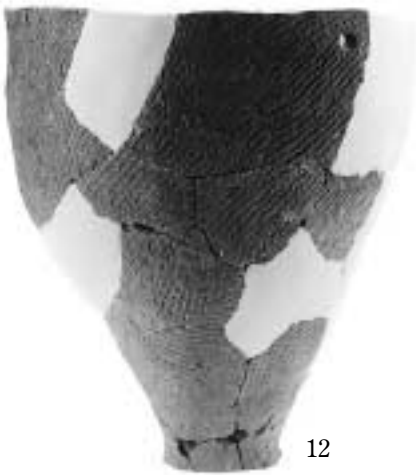
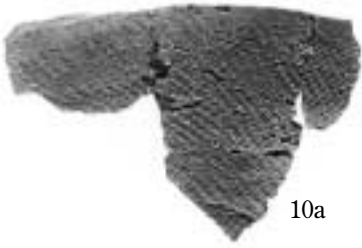


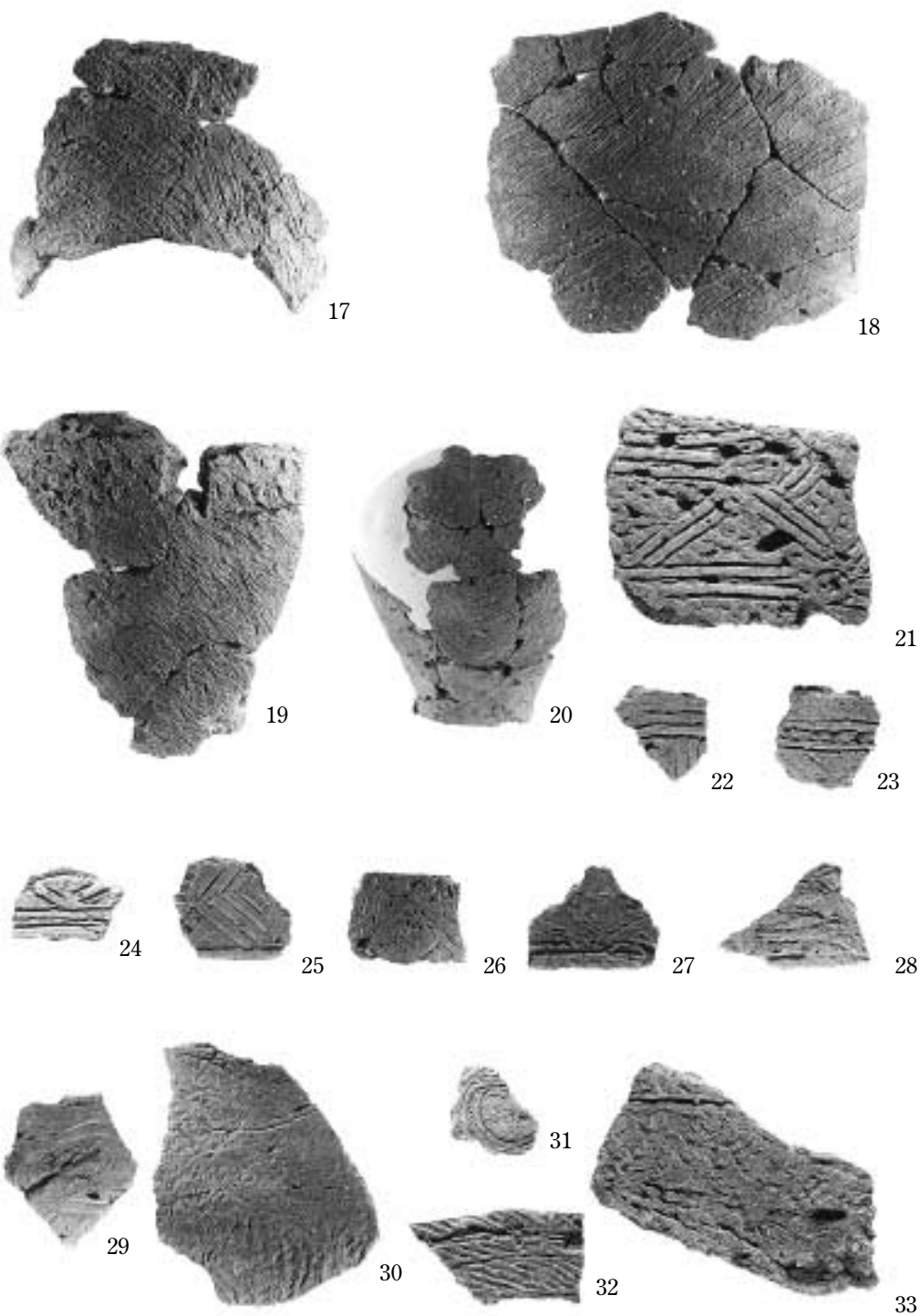
第12号住居跡出土遺物（3）



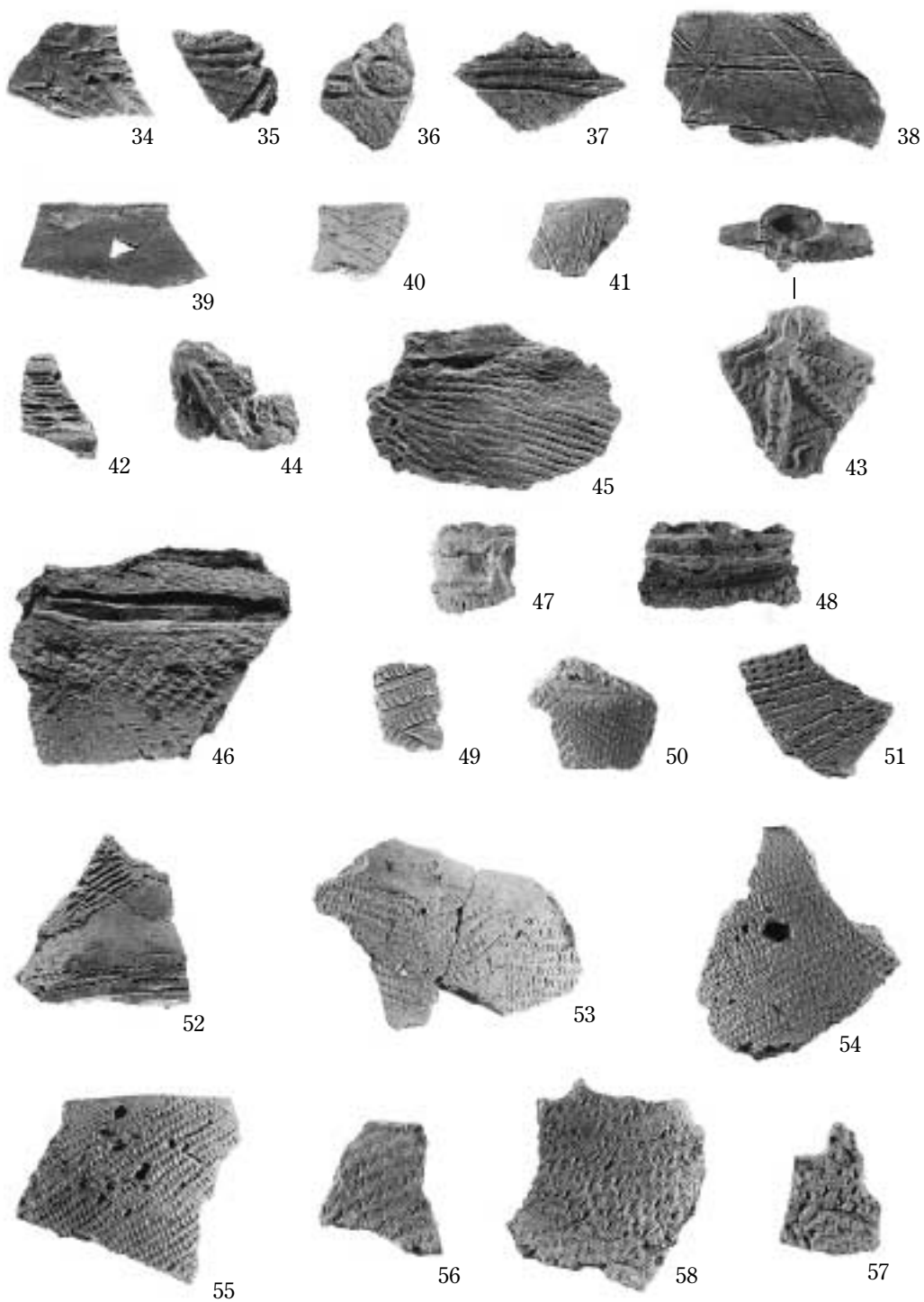
第13号住居跡出土遺物（1）



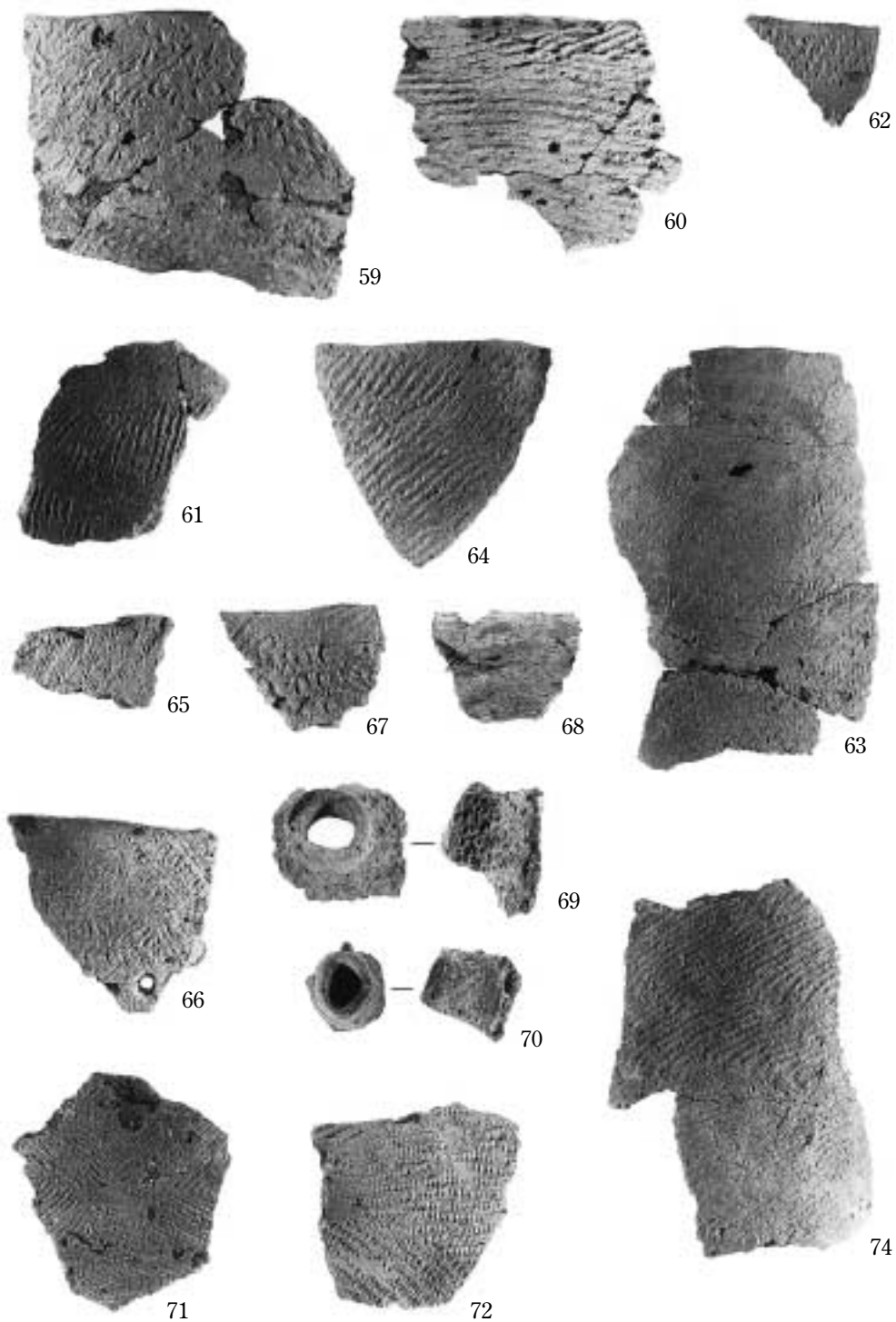




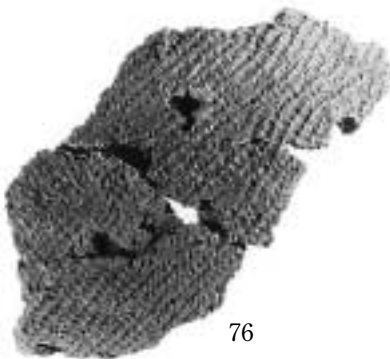
第13号住居迹出土遺物（4）

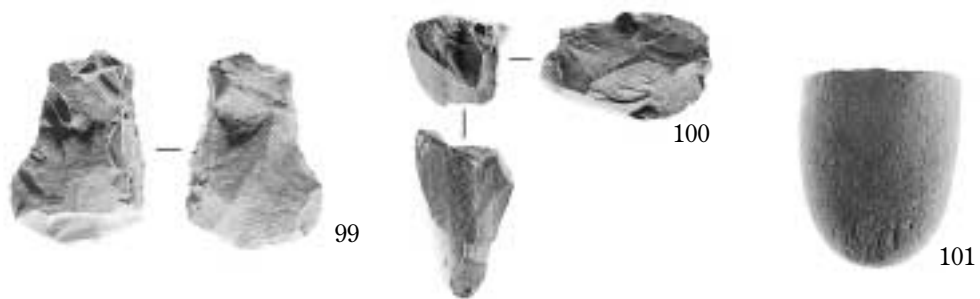
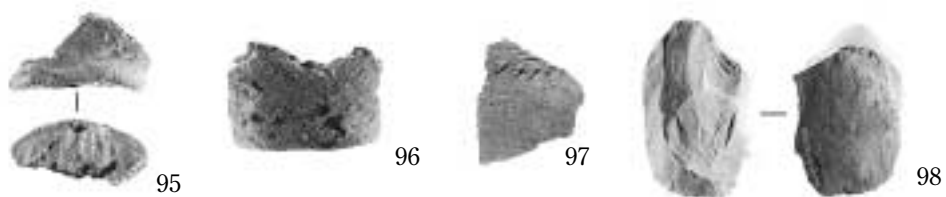


第13号住居迹出土遺物（5）

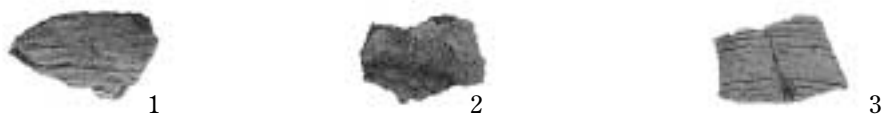


第13号住居迹出土遺物（6）

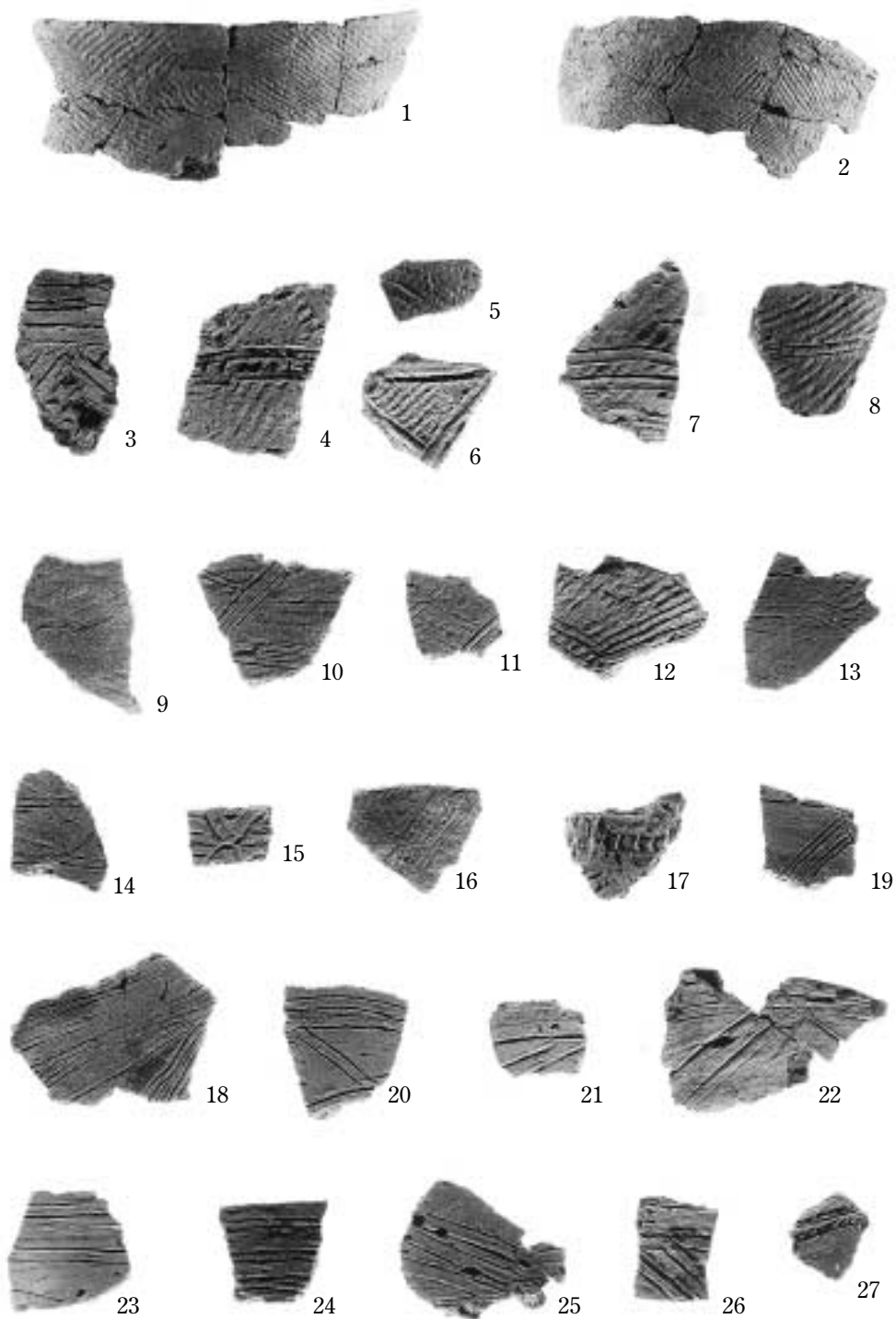




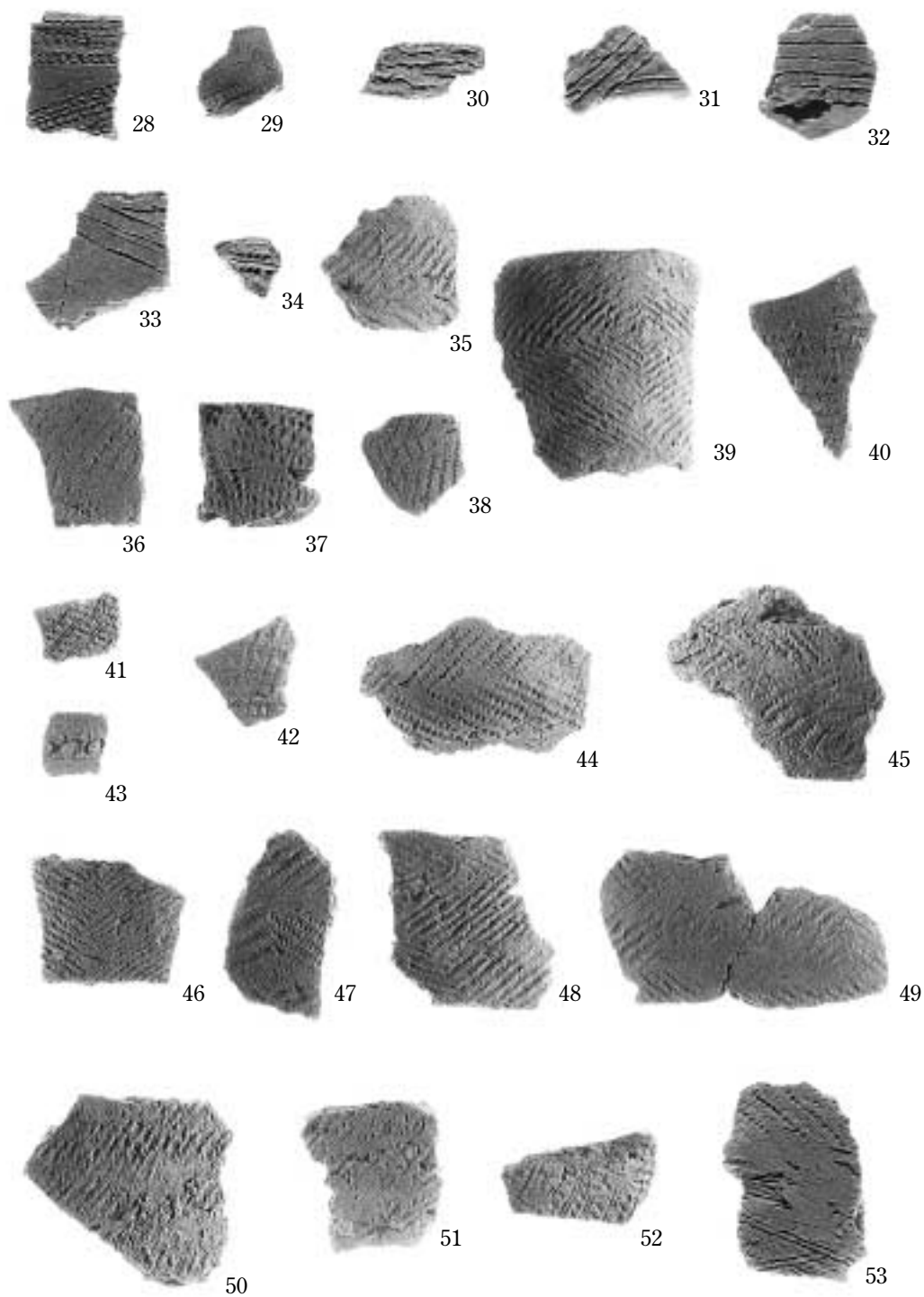
第13号住居迹出土遺物（8）



第31号住居迹出土遺物

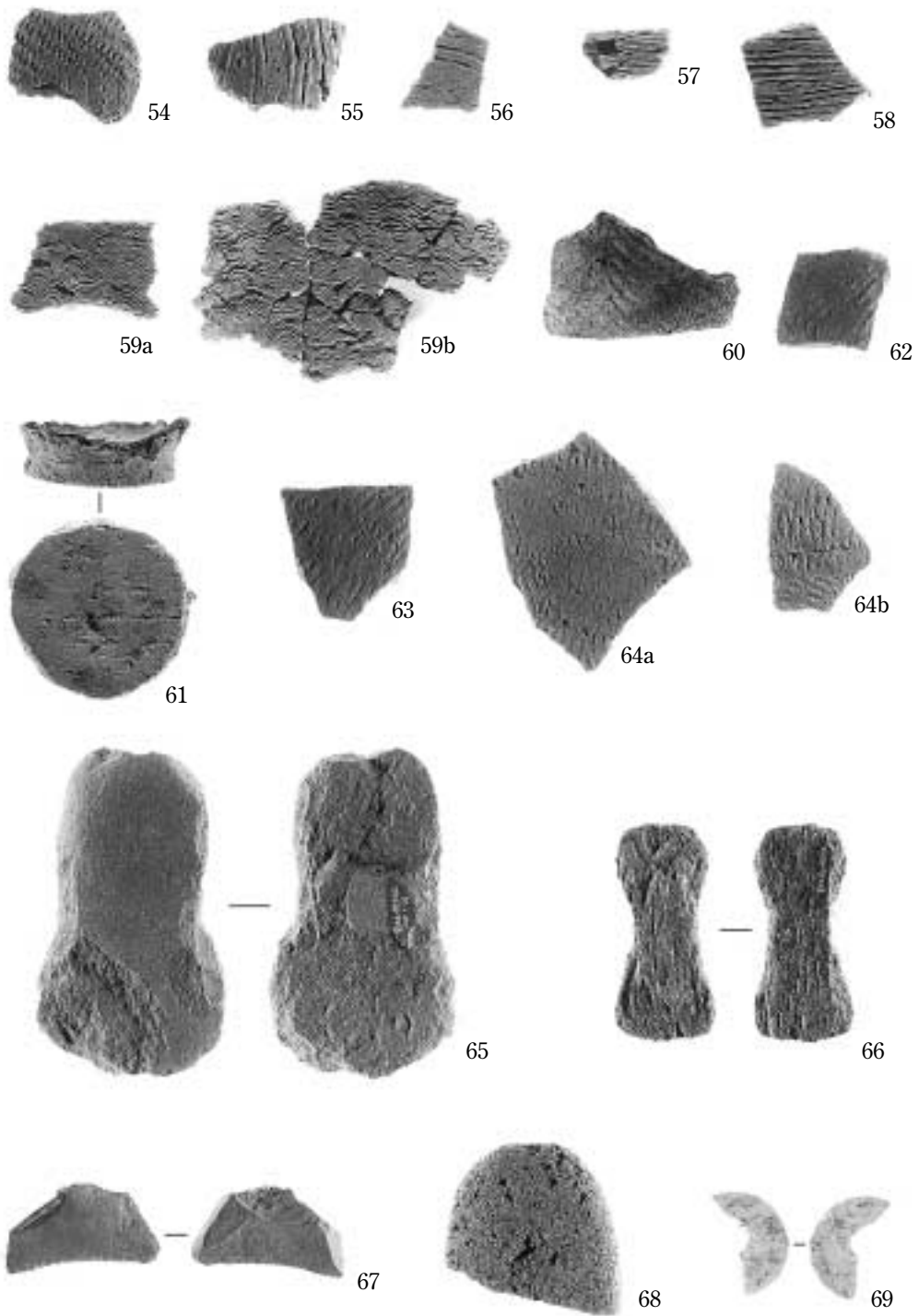


第14号住居跡出土遺物（1）

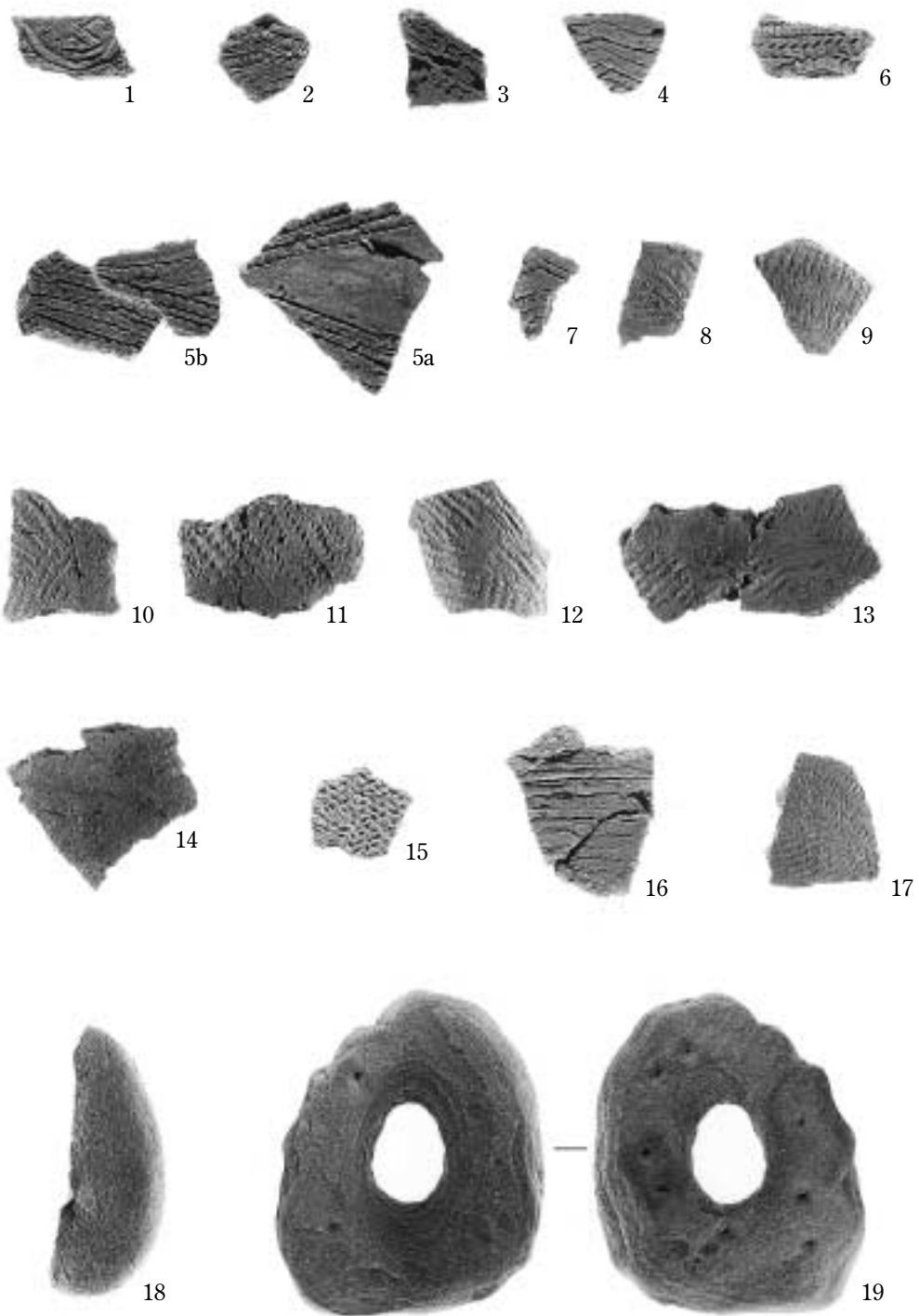


第14号住居迹出土遺物（2）

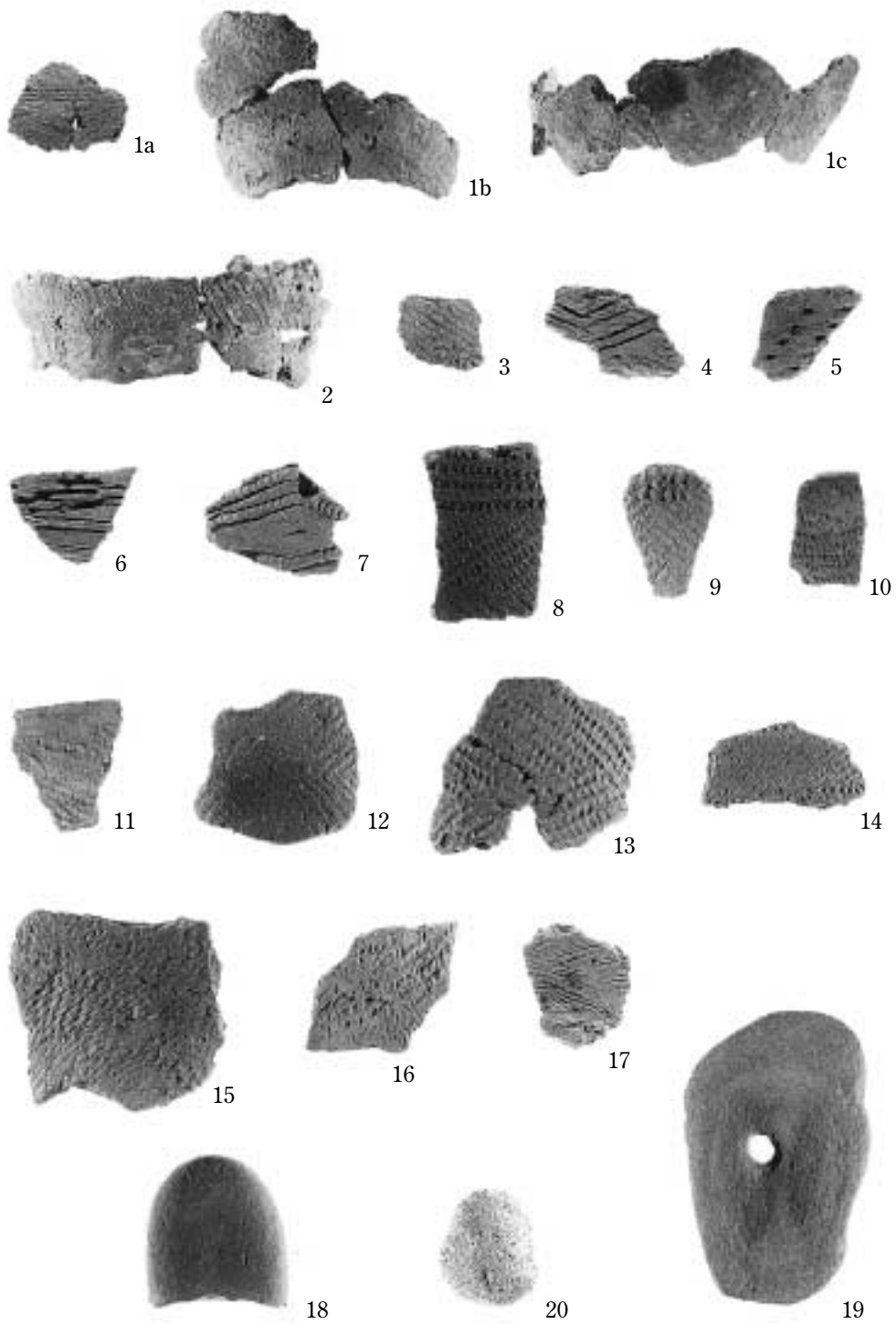
图版 93



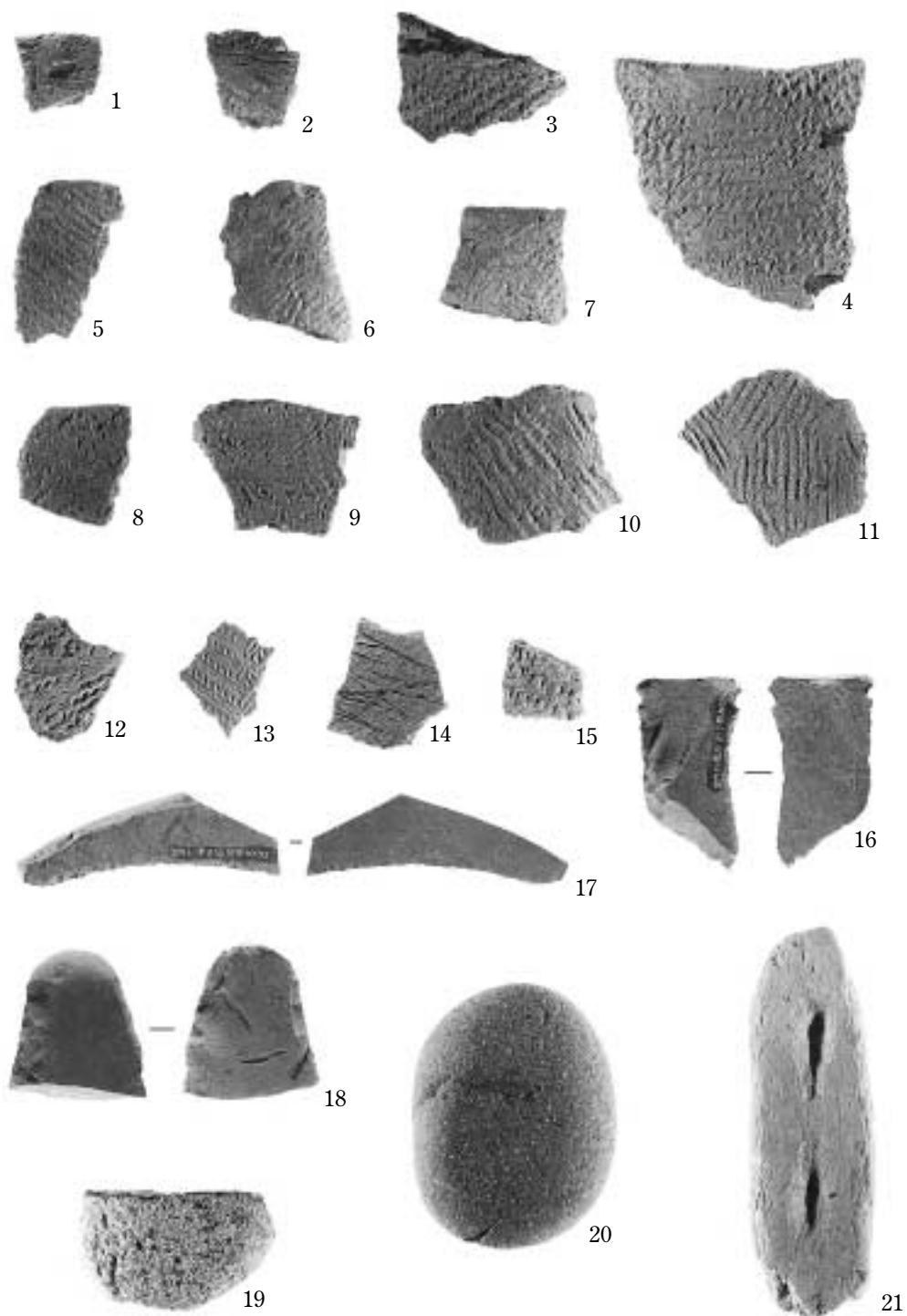
第14号住居迹出土遺物（3）



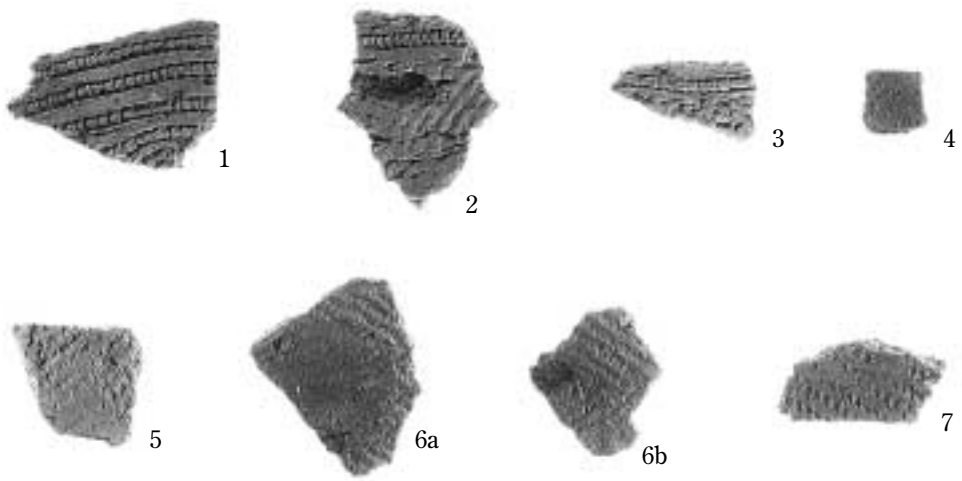
第30号住居跡出土遺物



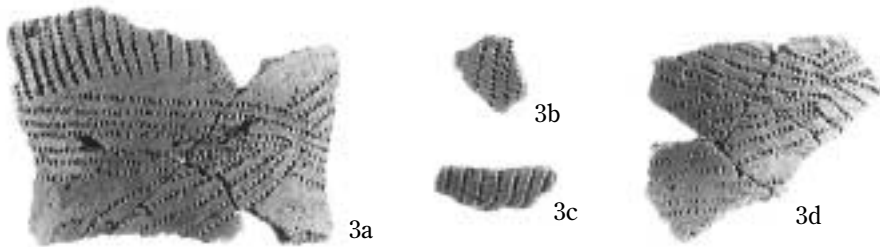
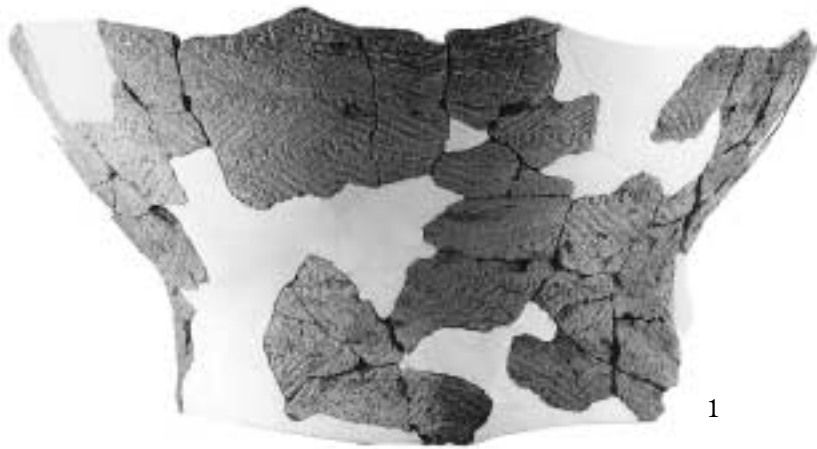
第32号住居跡出土遺物



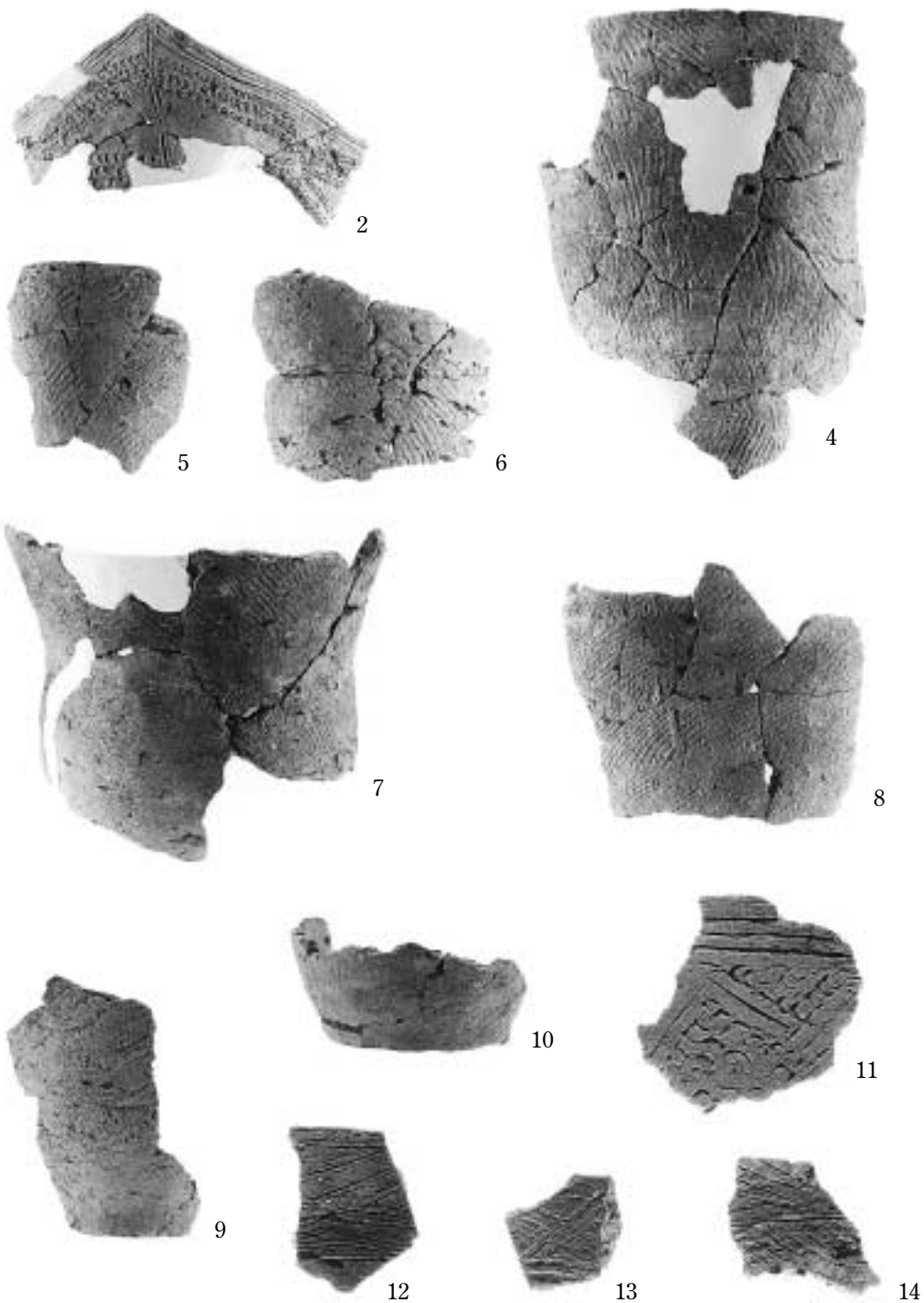
第15号住居跡出土遺物



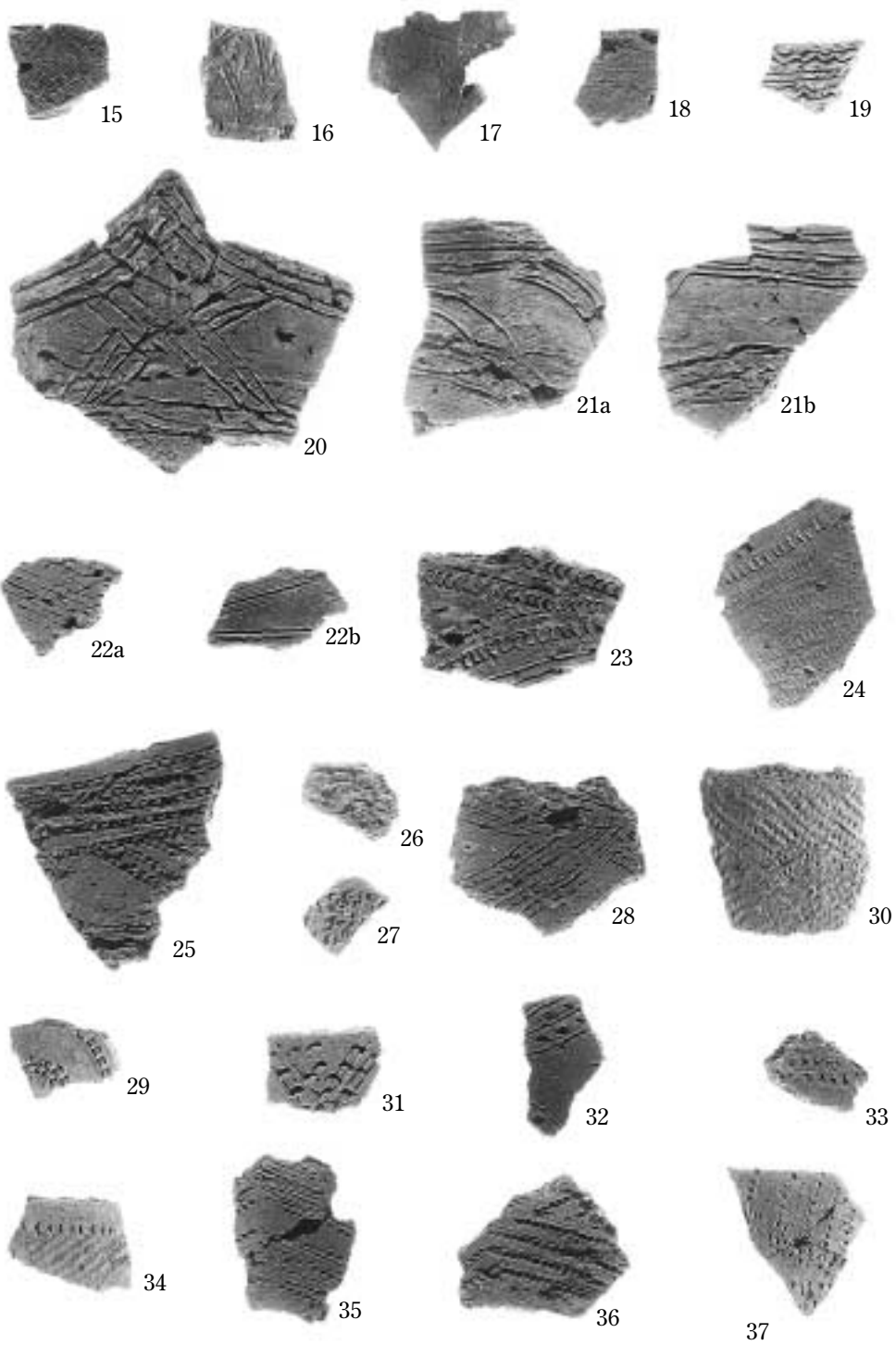
第21号住居跡出土遺物

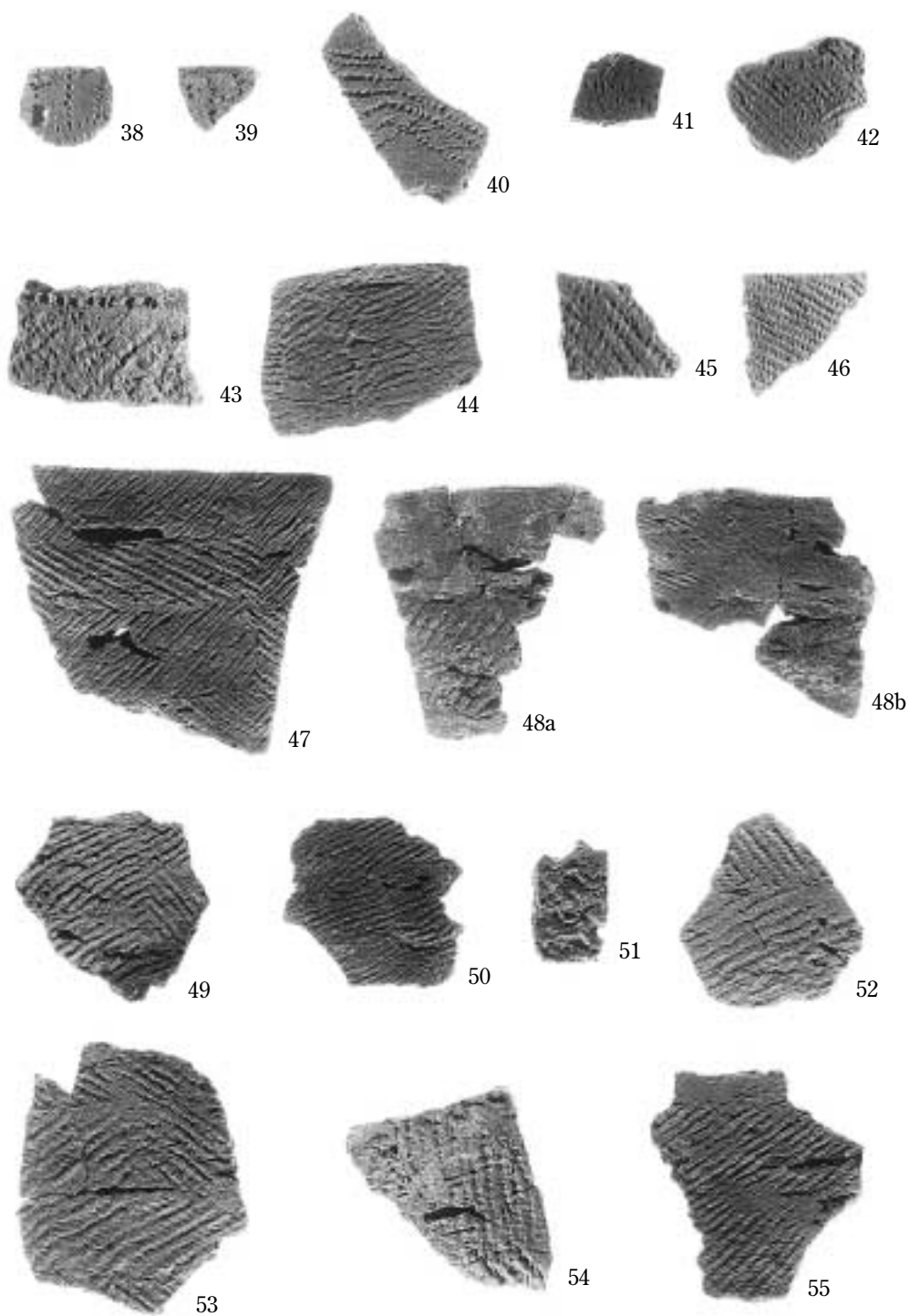


第16・17号住居跡出土遺物（1）

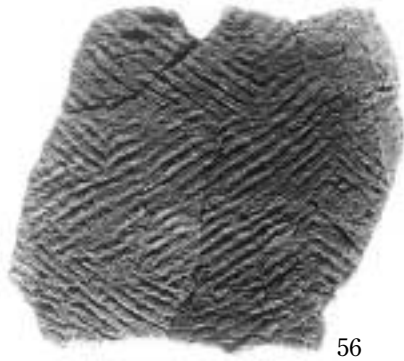


第16·17号住居跡出土遺物(2)





第16·17号住居跡出土遺物(4)



56



57



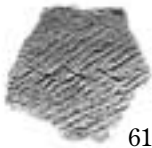
58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



70



69



71



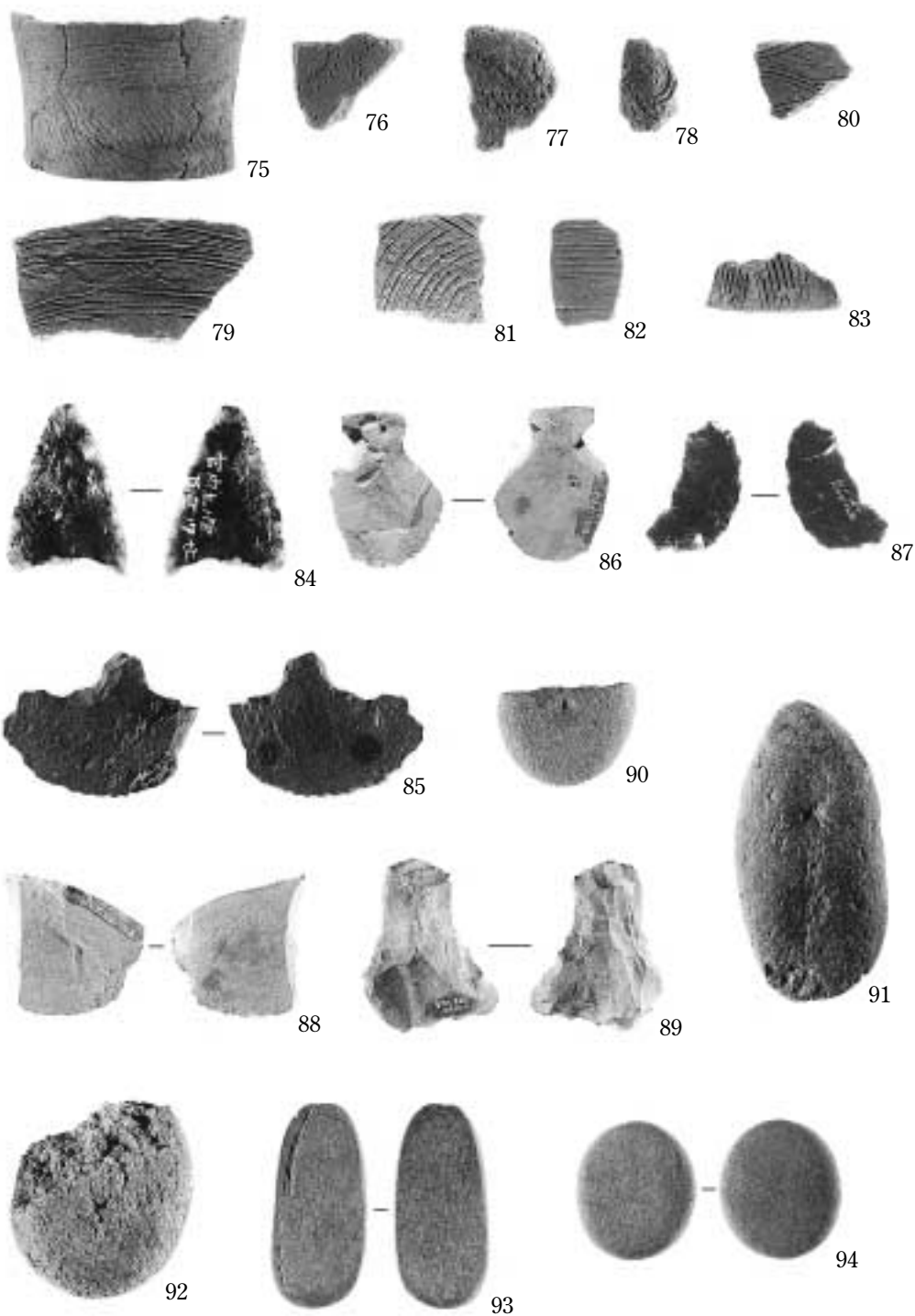
72



73

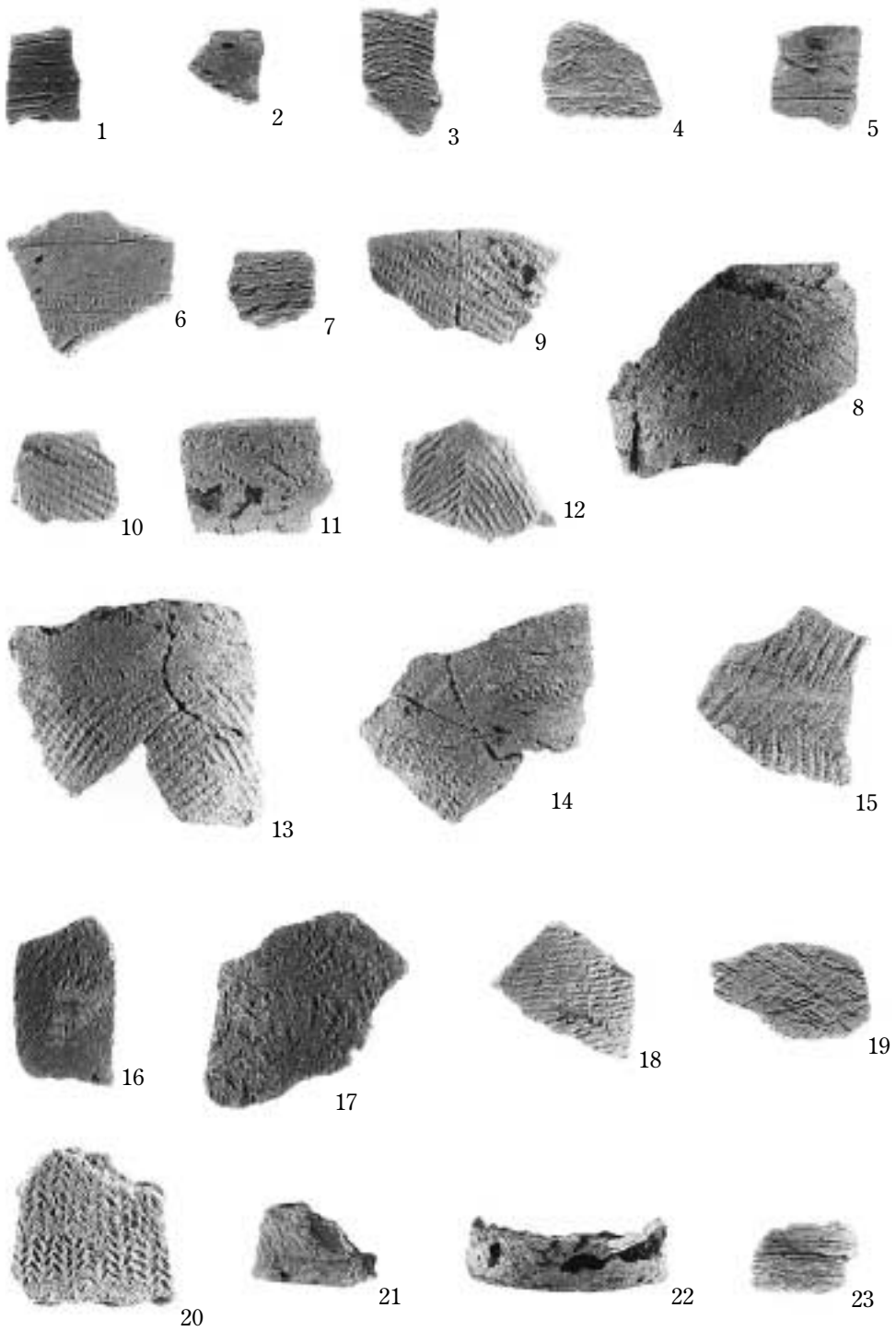


74

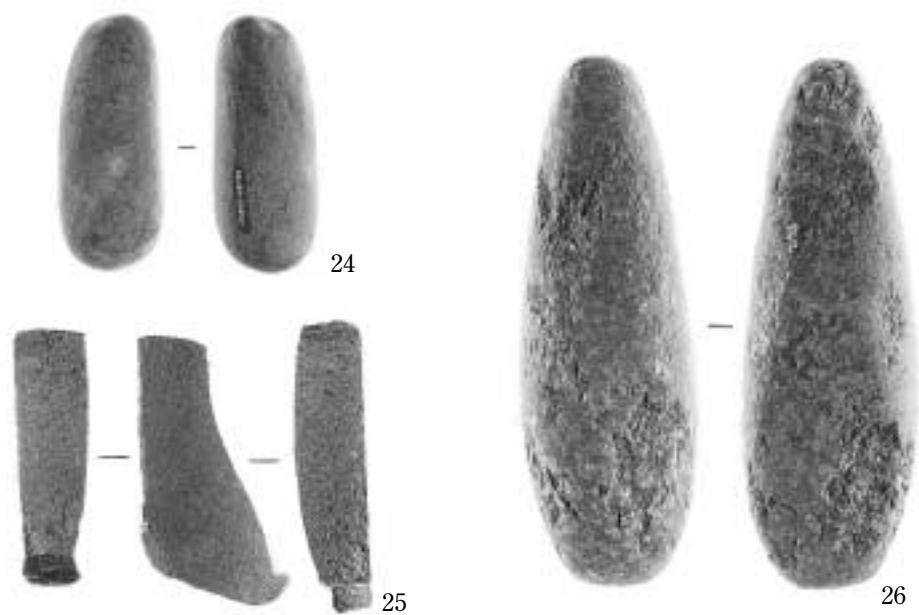


第16·17号住居跡出土遺物(6)

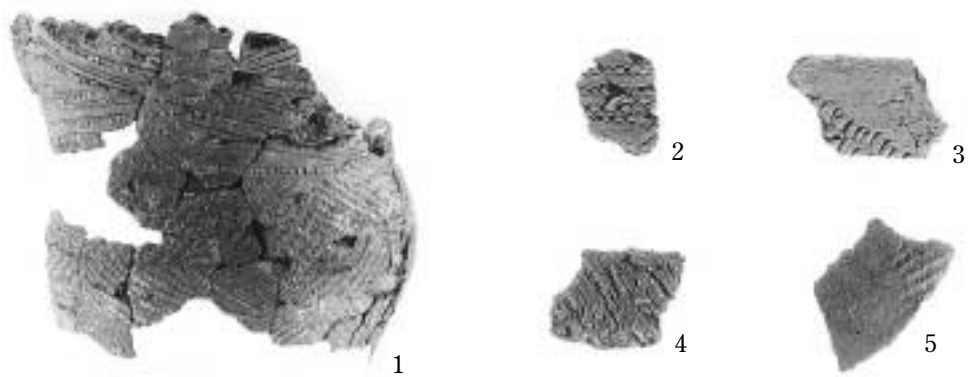
图版 103



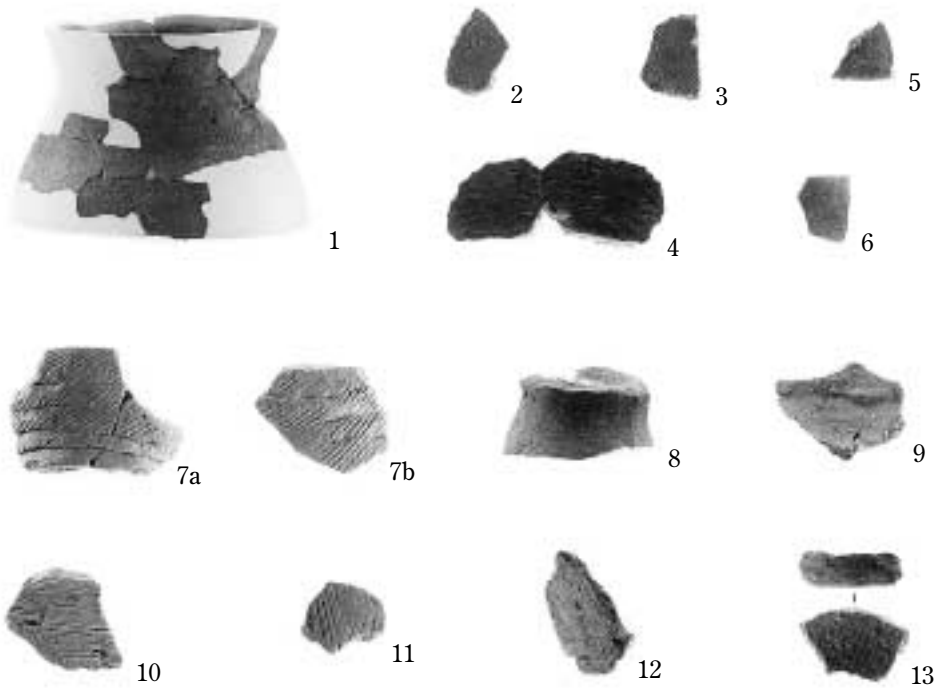
第19号住居迹出土遗物（1）



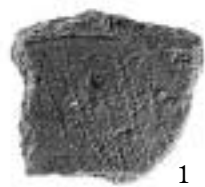
第19号住居跡出土遺物（2）



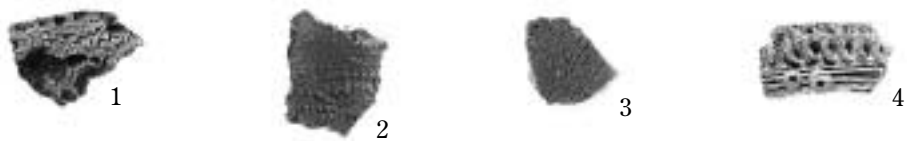
第20号住居跡出土遺物



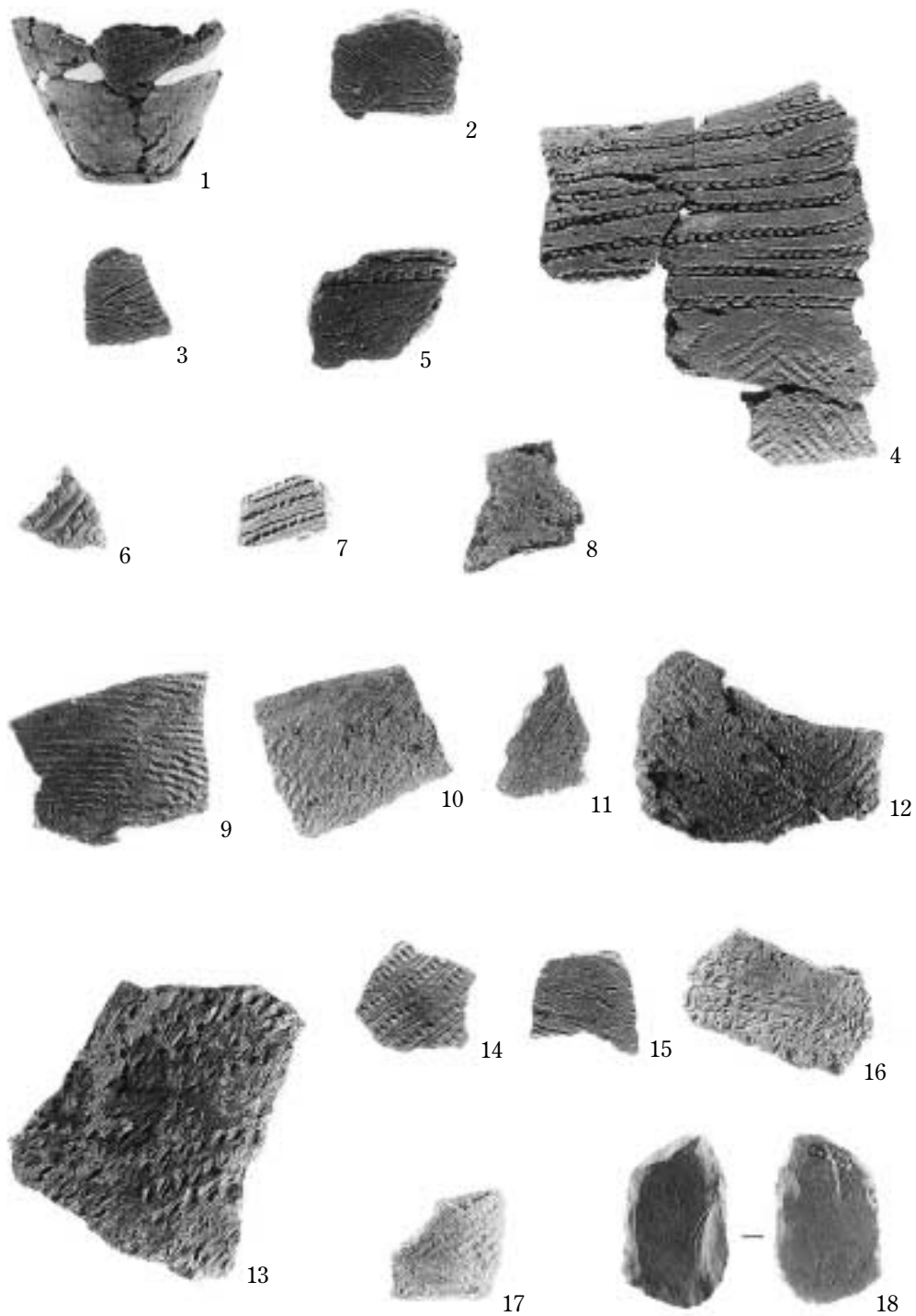
第22号住居跡出土遺物



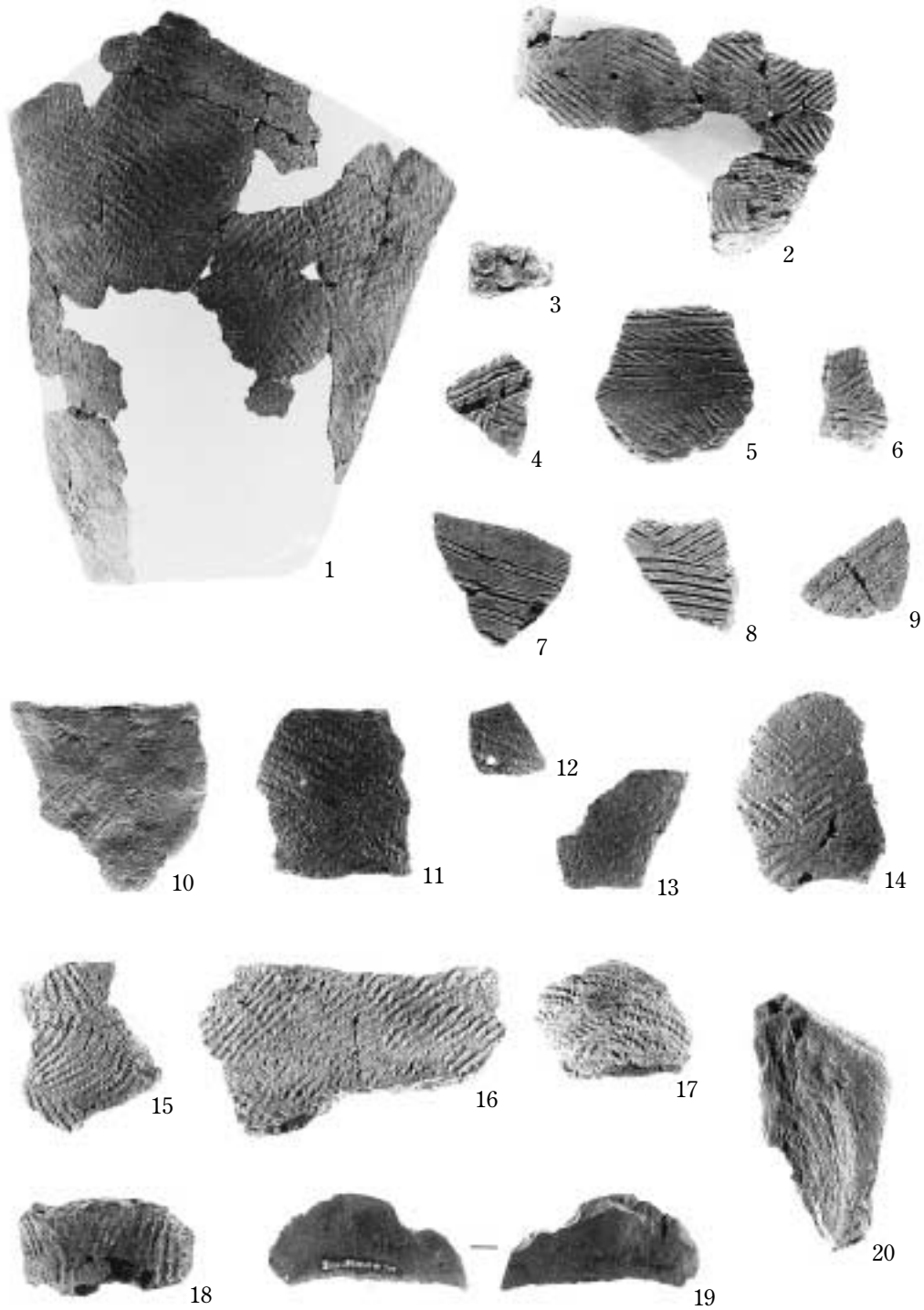
第23号住居跡出土遺物



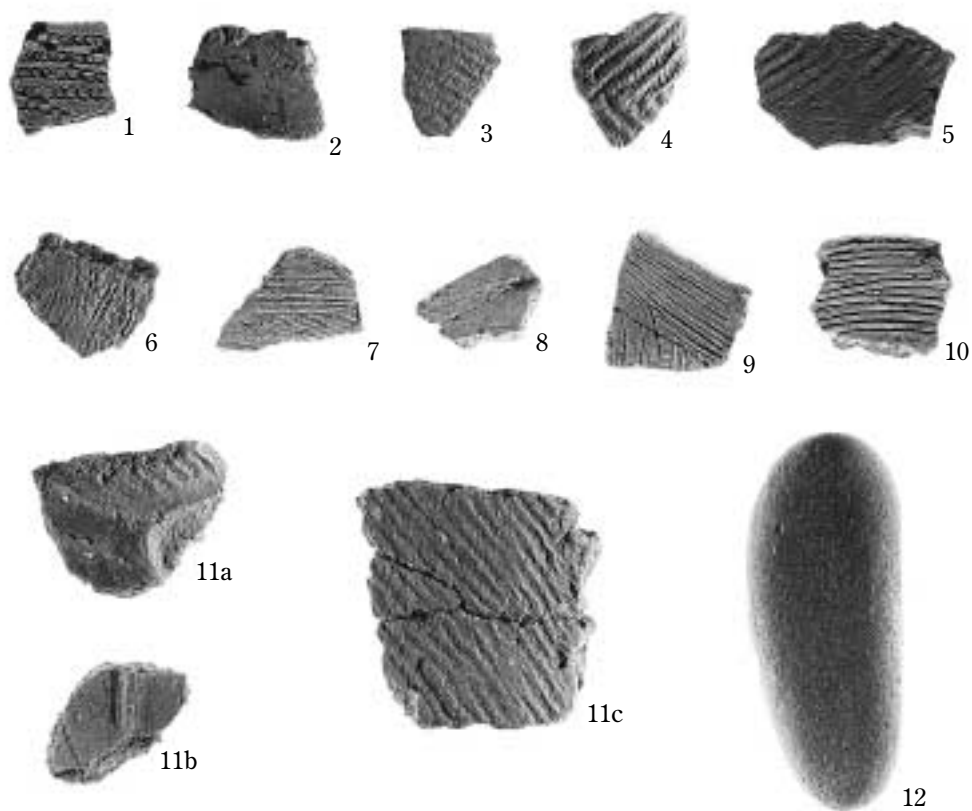
第24号住居跡出土遺物



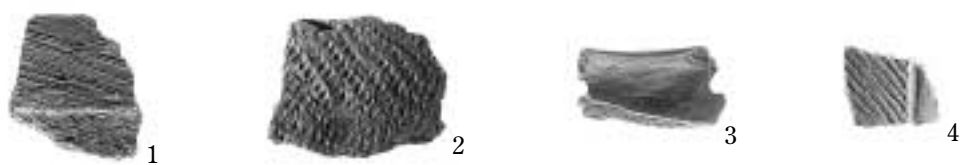
第25号住居跡出土遺物



第33号住居跡出土遺物



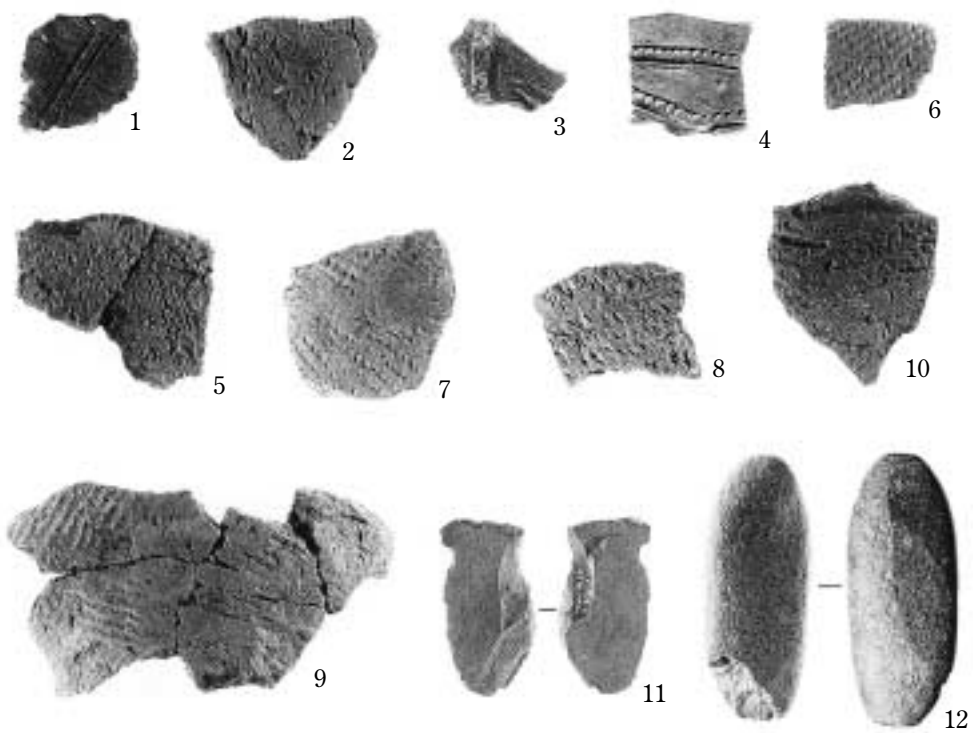
第26号住居迹出土遗物



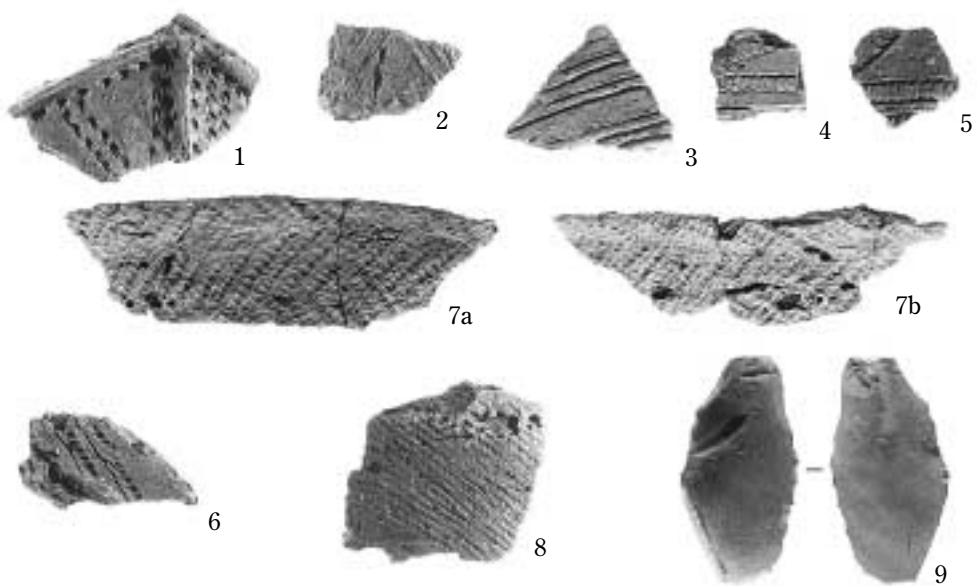
第27号住居迹出土遗物



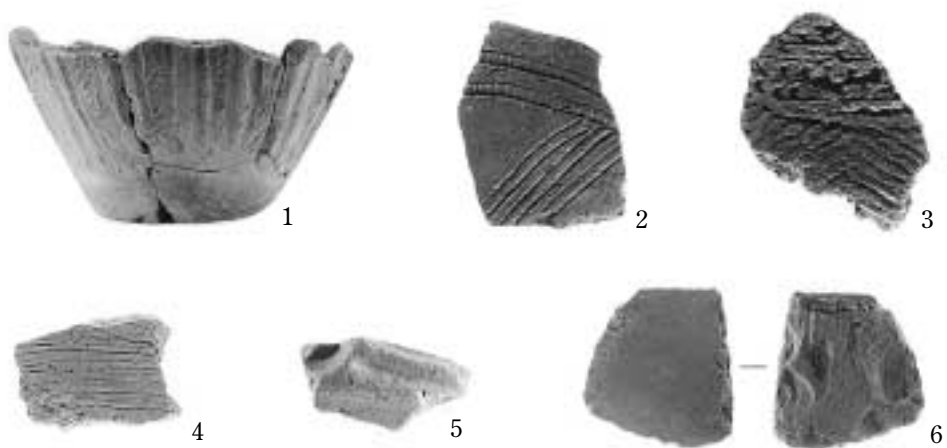
第34号住居迹出土遗物



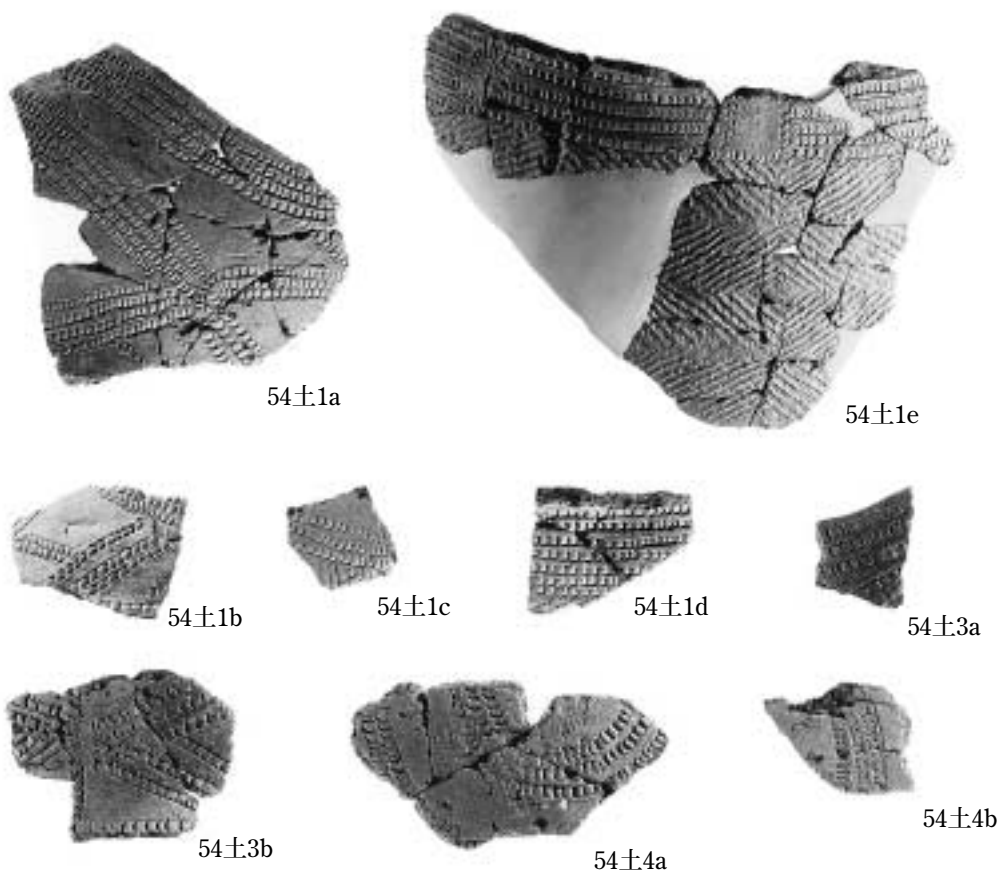
第35号住居迹出土遗物



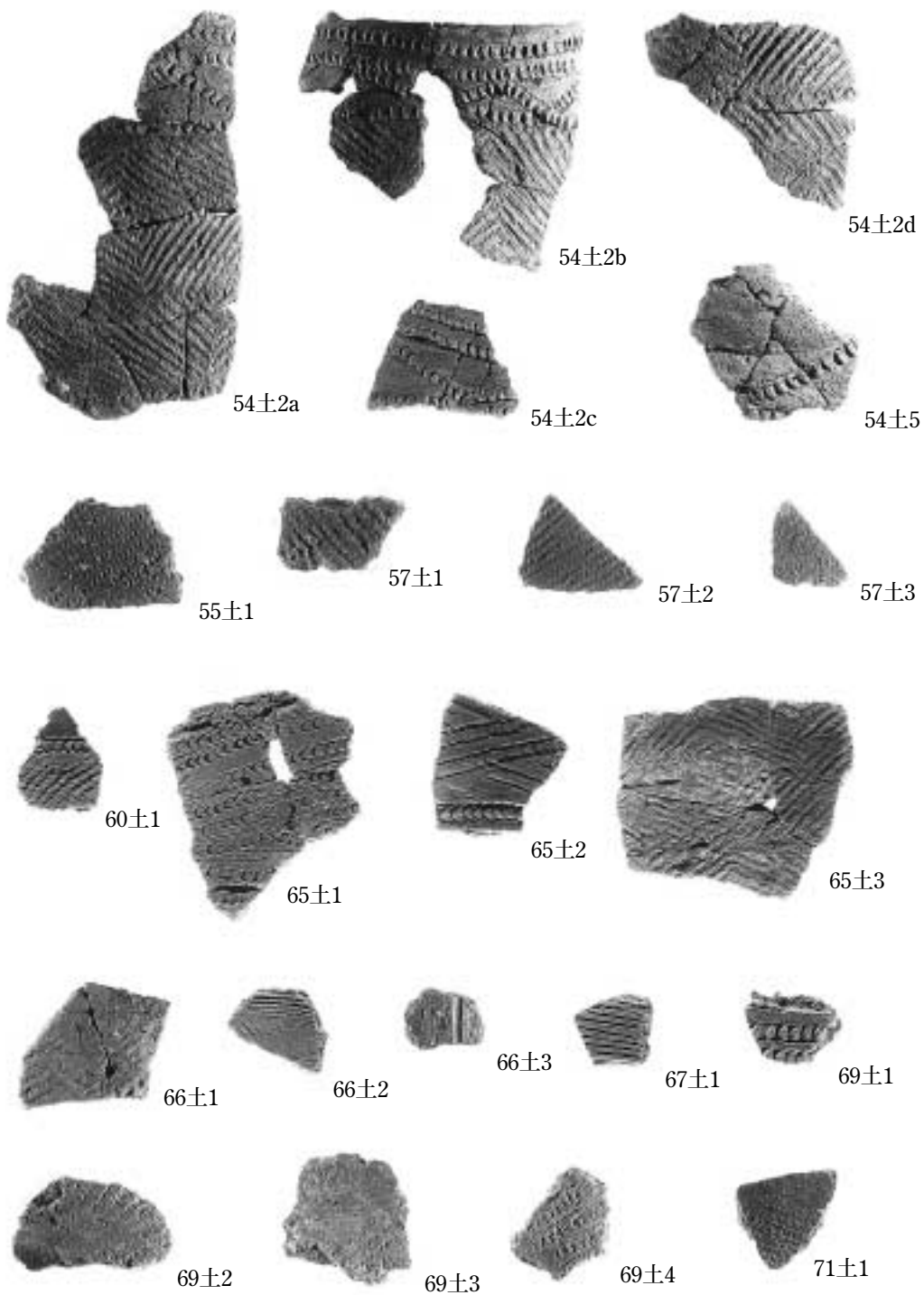
第36号住居迹出土遗物

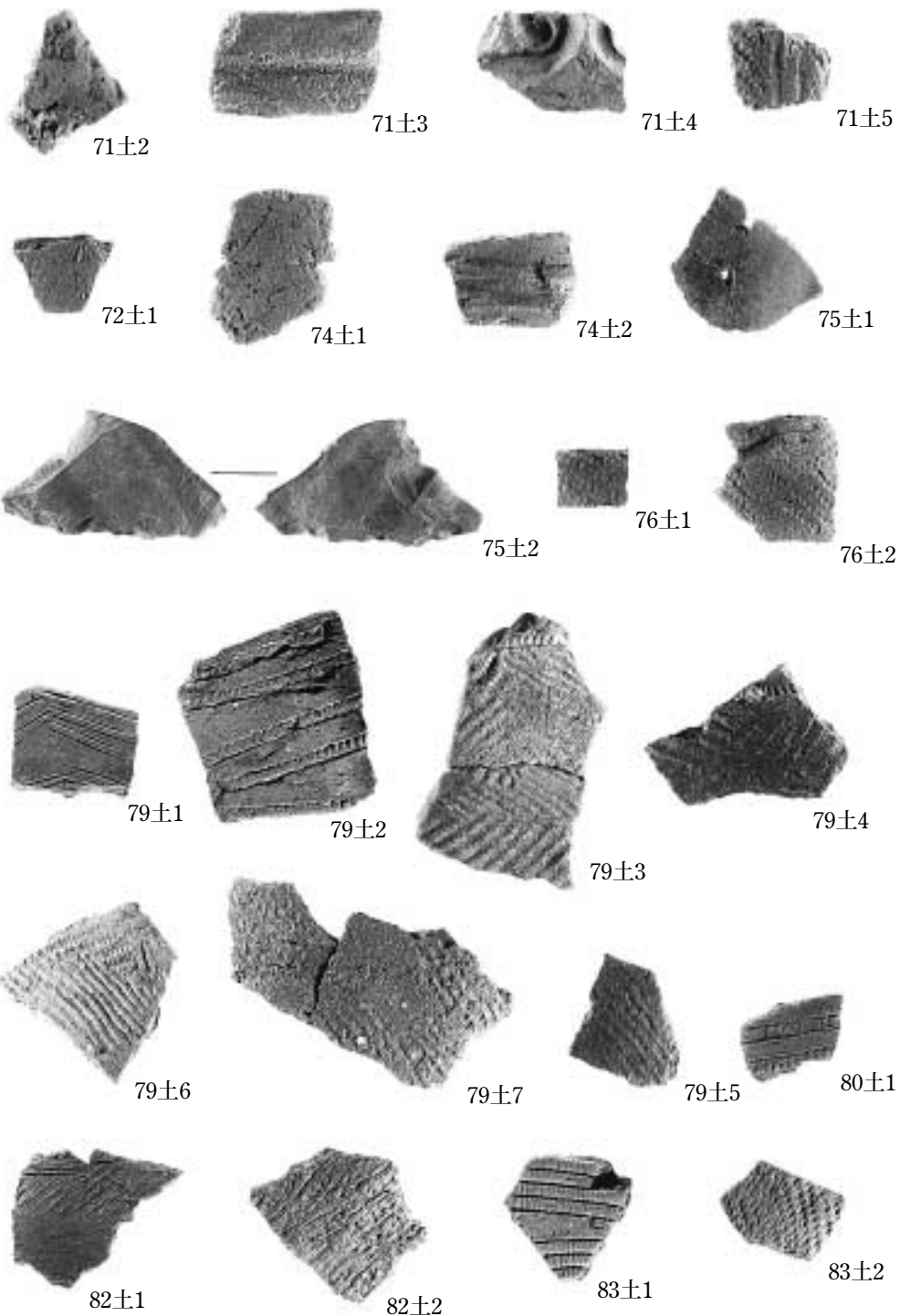


第37号住居跡出土遺物



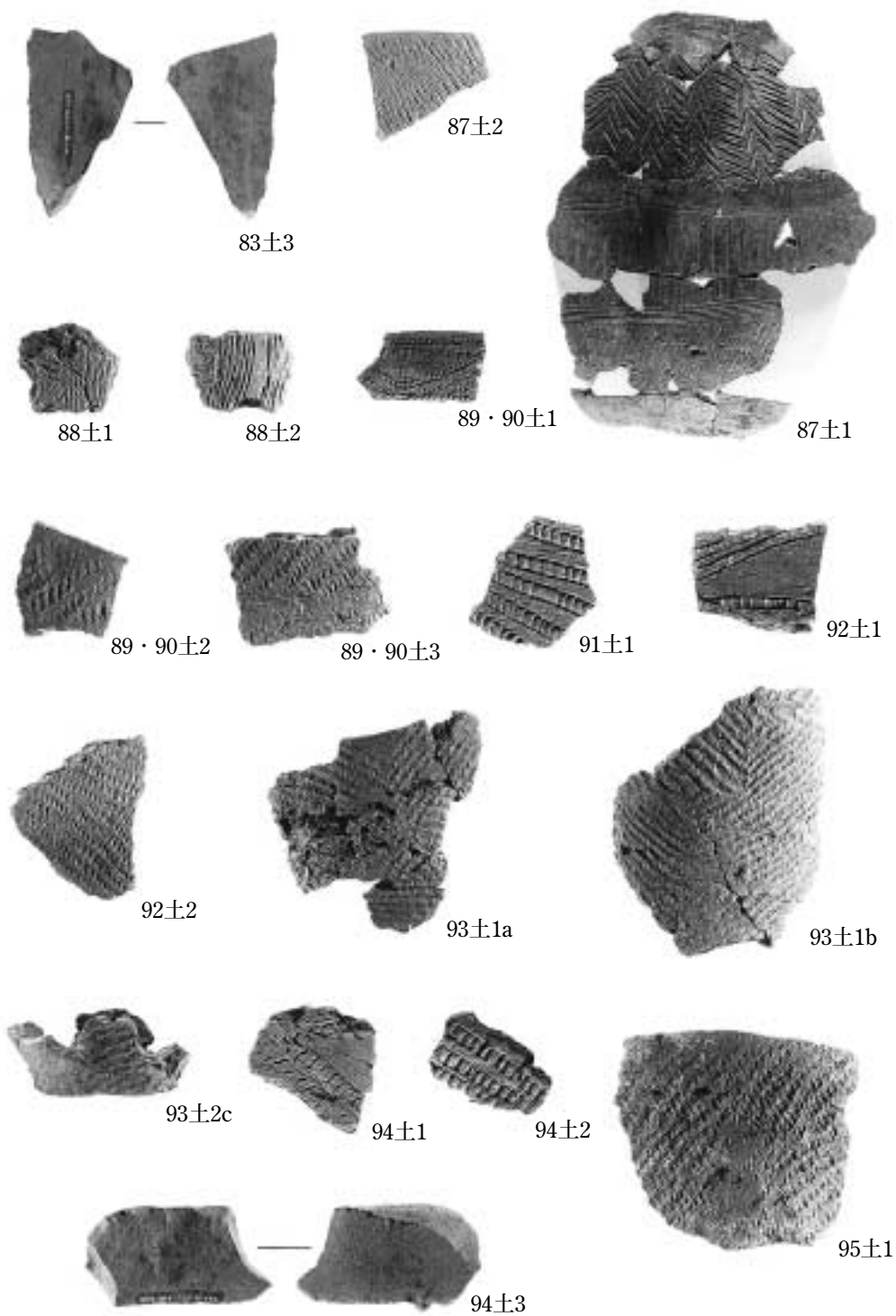
土壙出土遺物(1)



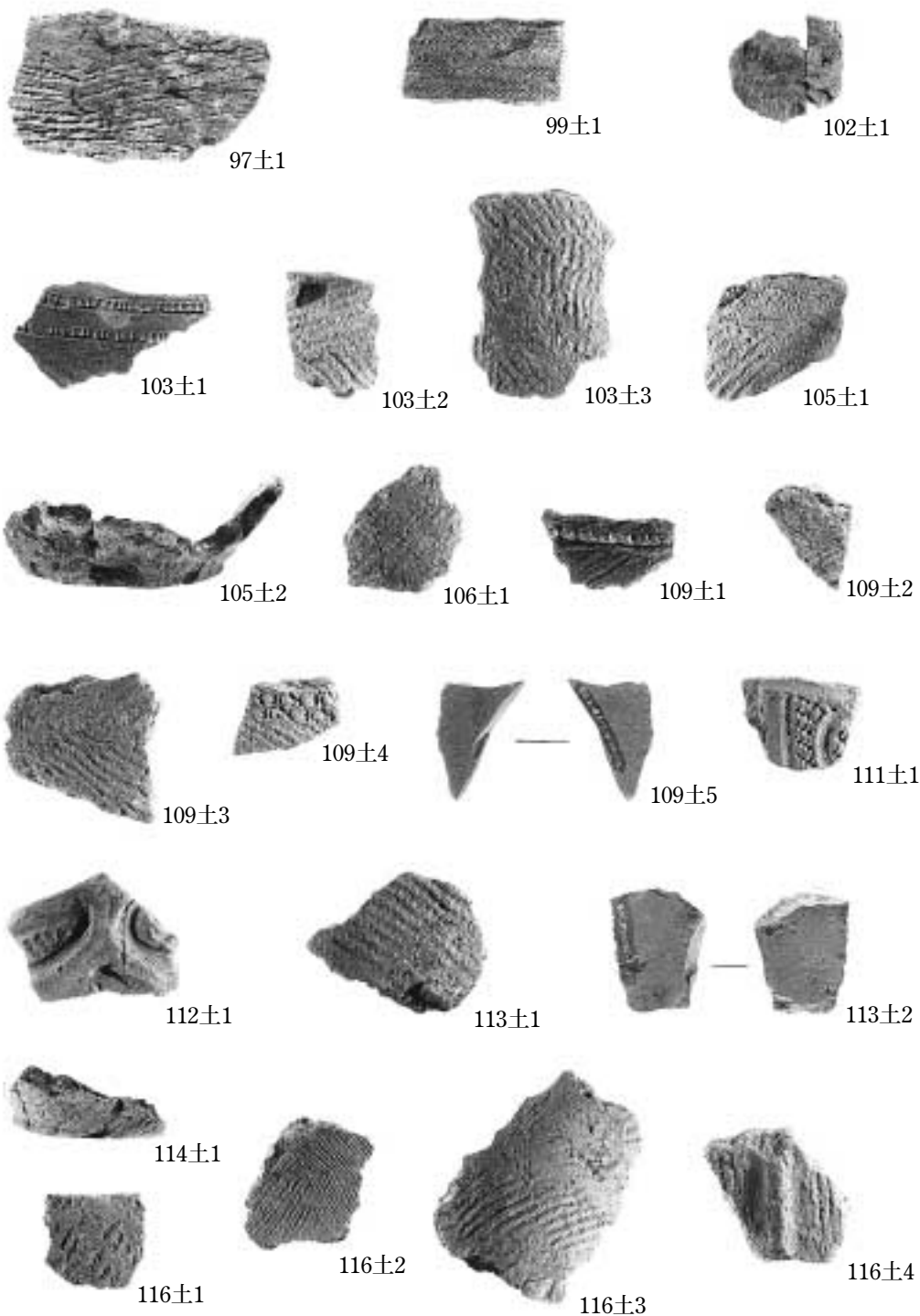


土壙出土遺物 (3)

图版 113



土壙出土遺物(4)



土壙出土遺物 (5)

图版 115



115±1



117±1



117±2



117±3



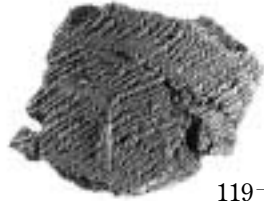
117±4



118±1



118±2



119±1



120±1



121±1



122±1



122±2



123±1



123±2



124±1



124±2



125±1



125±2



126±1



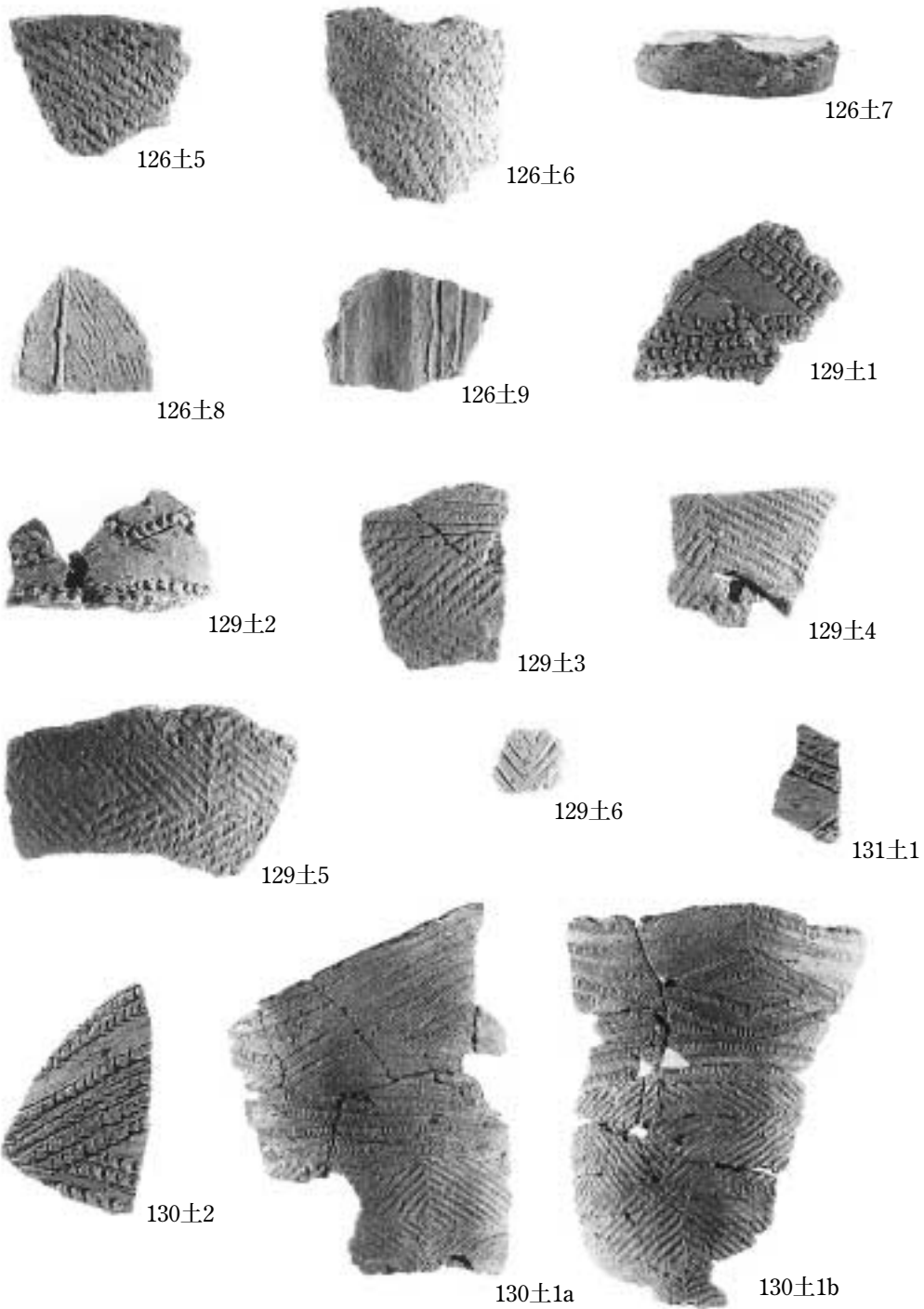
126±2



126±3

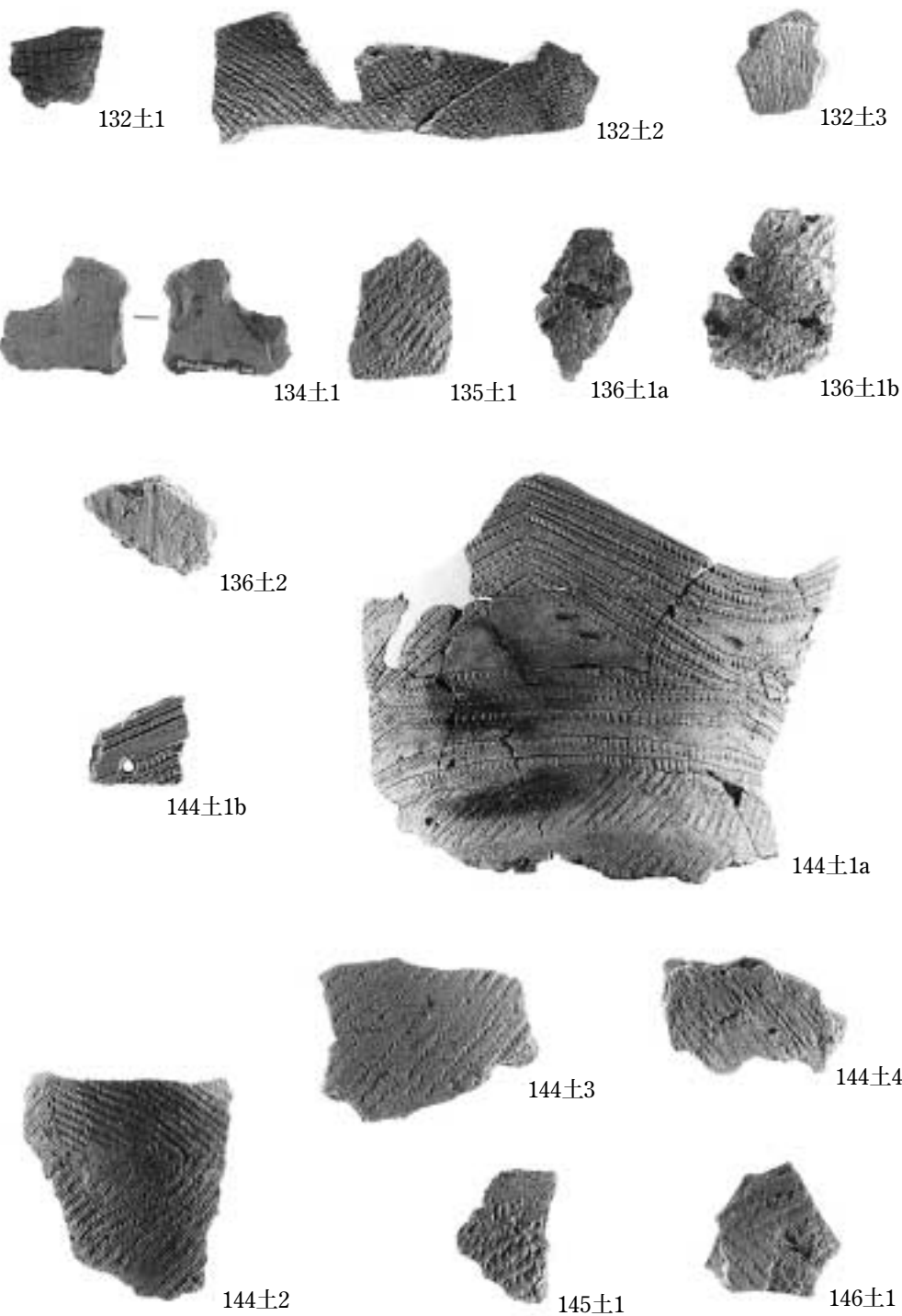


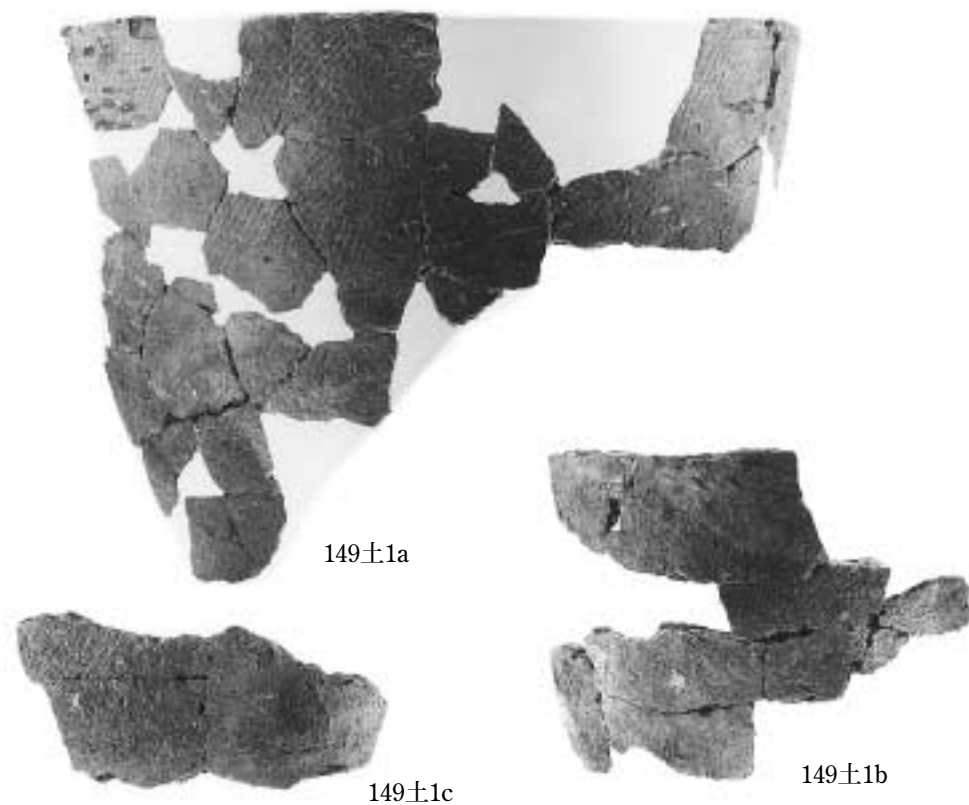
126±4



土壙出土遺物（7）

图版 117





图版 119



149±5



149±6



149±7



149±8



150±2



150±1



151±1



151±2



153±1



159±1



165±1



165±2



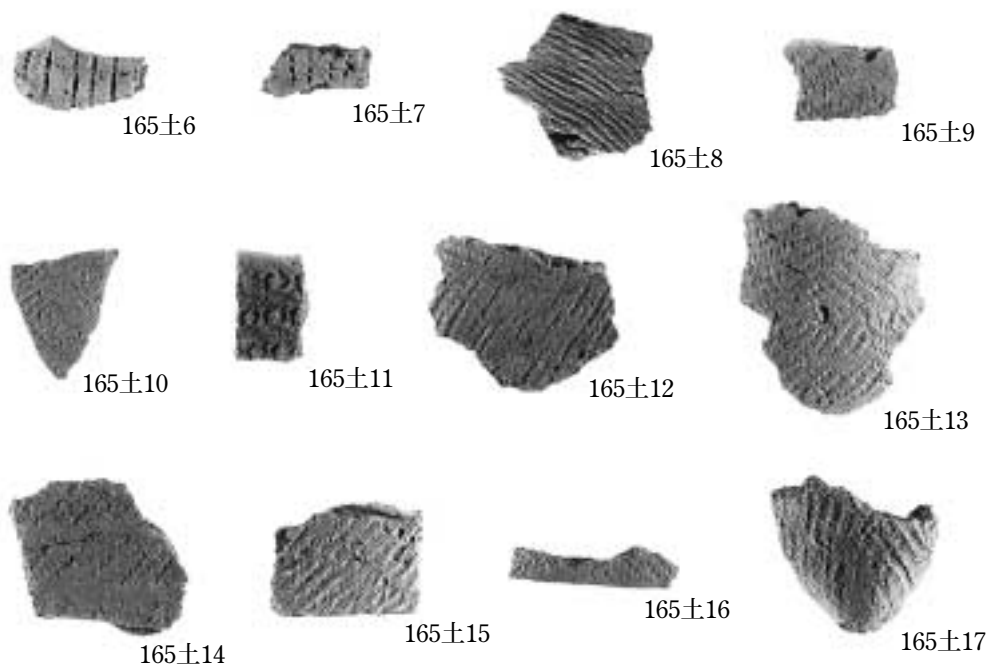
165±4



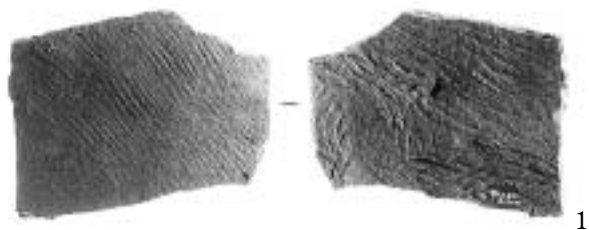
165±3



165±5



土壙出土遺物 (11)

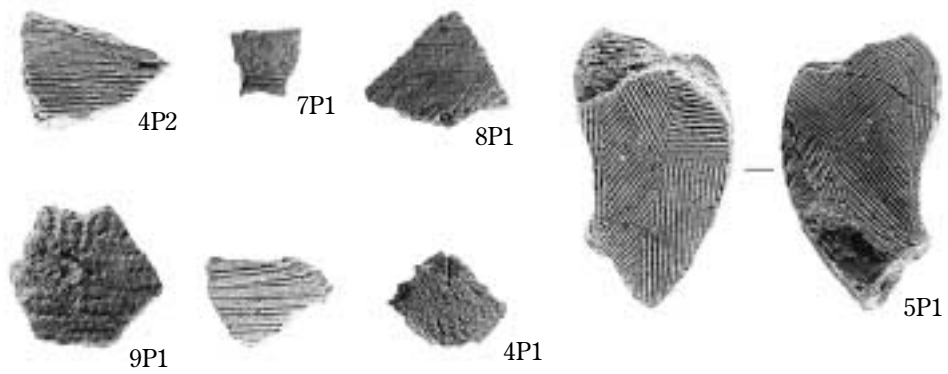


第 1 号溝跡出土遺物

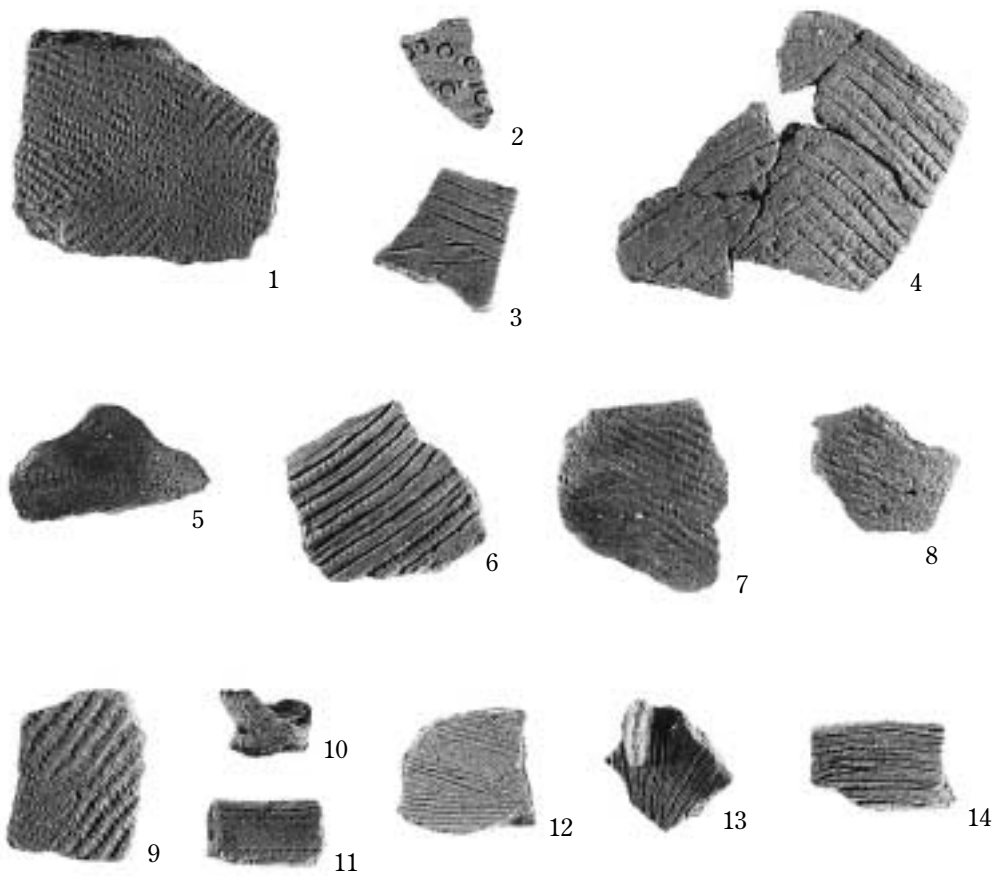


ピット内出土遺物 (1)

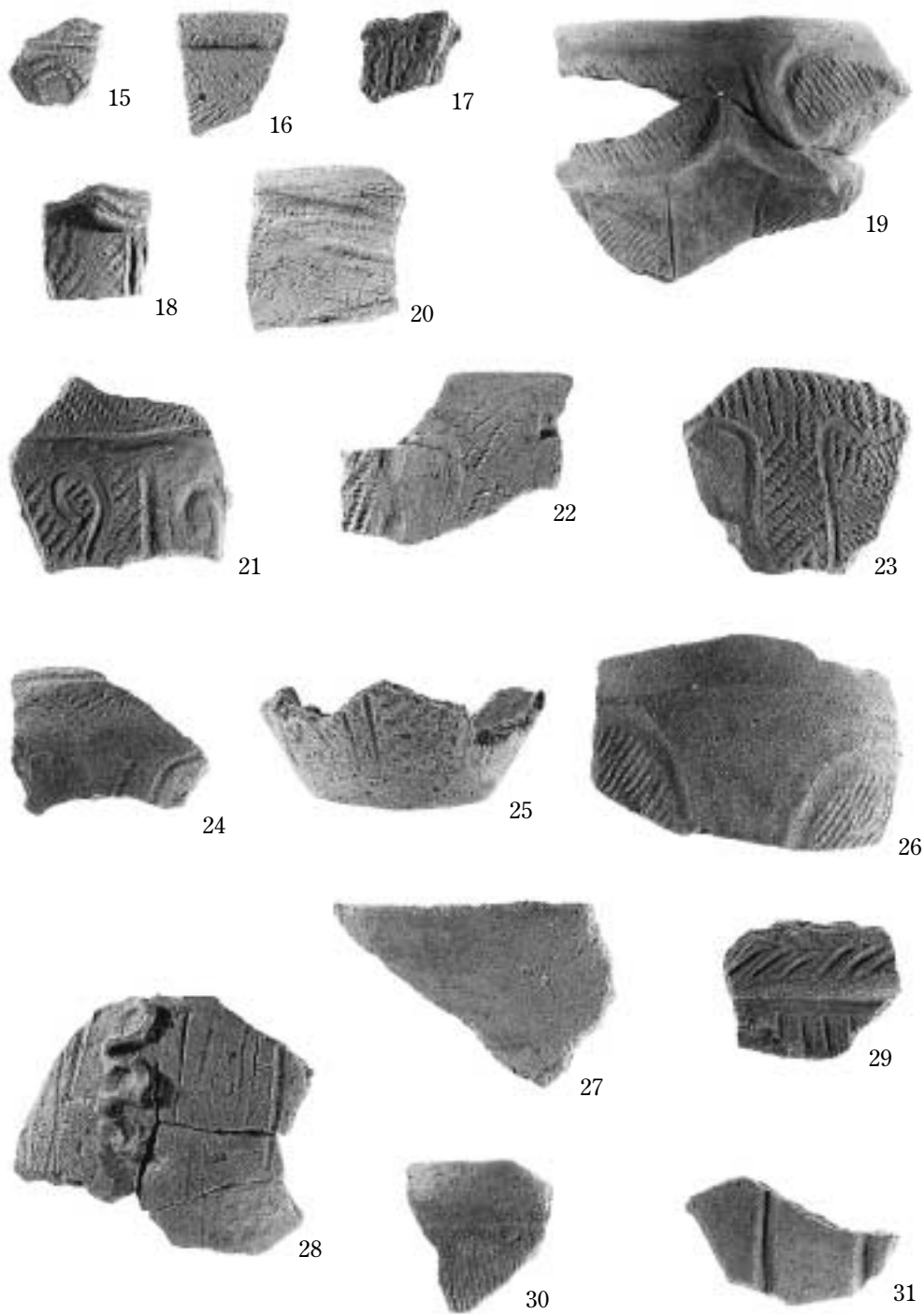
図版 121



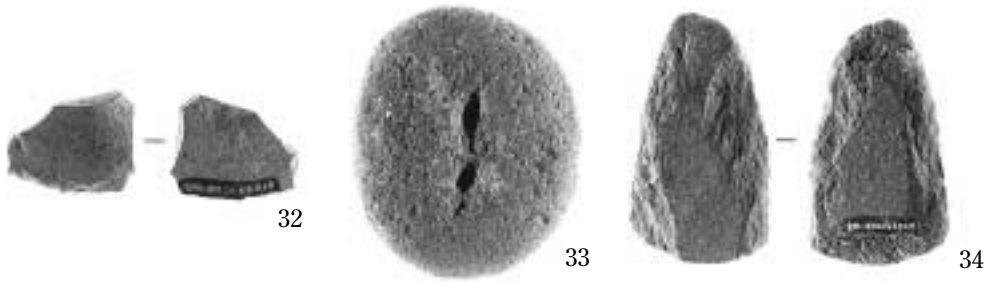
ピット内出土遺物 (2)



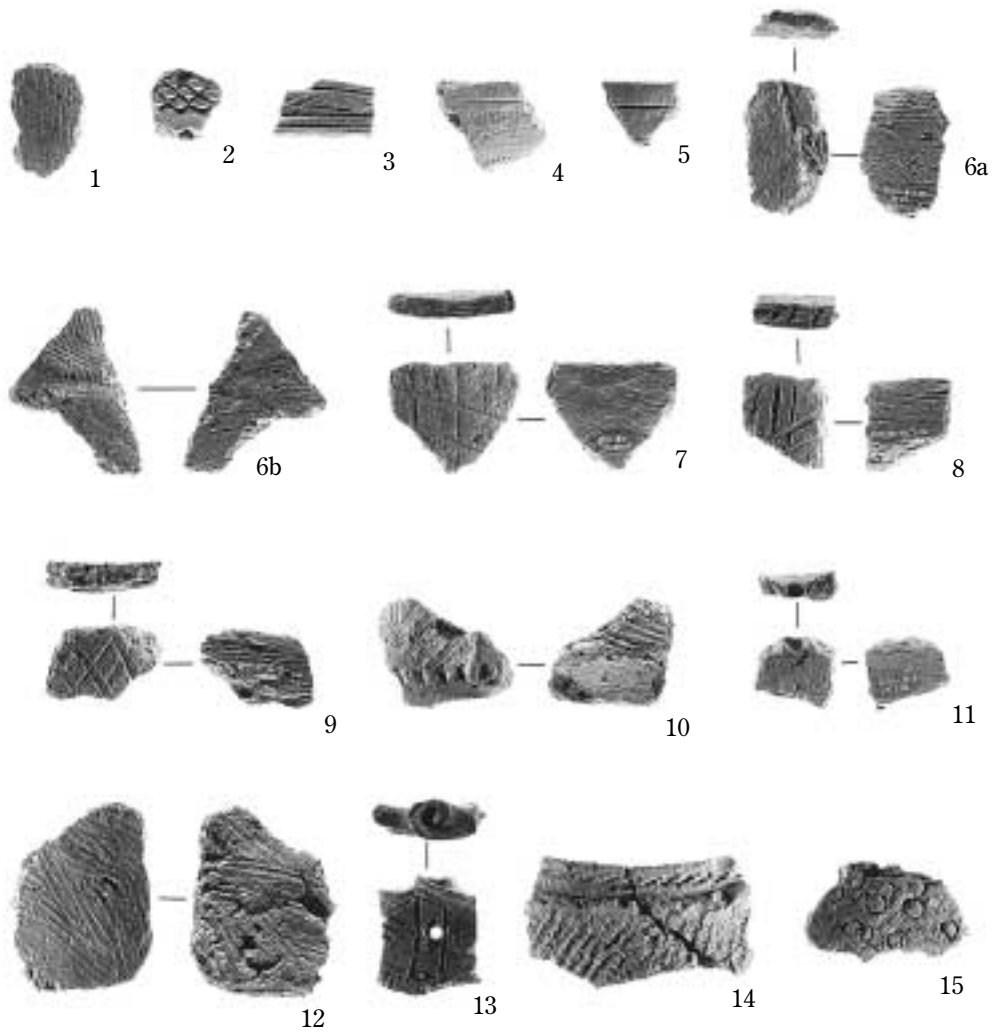
第1号埋没谷出土遺物 (1)



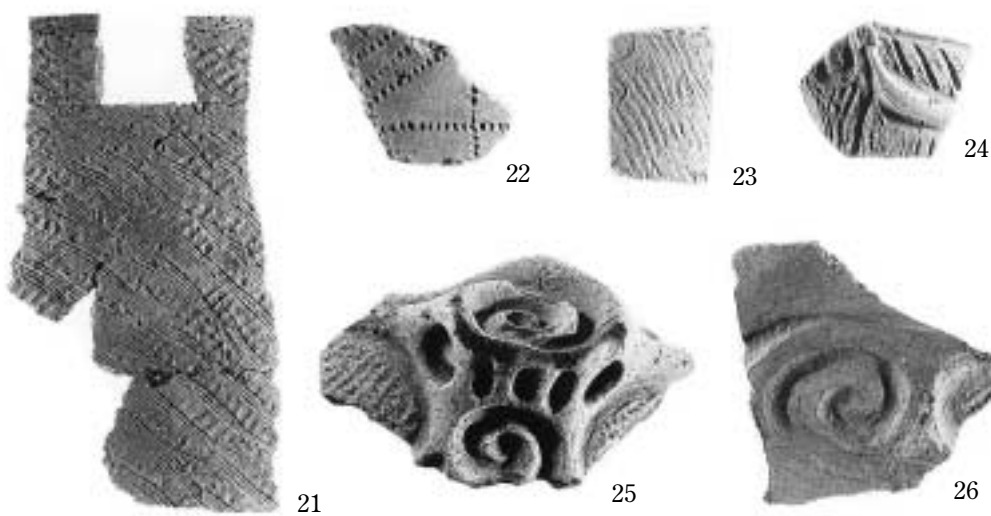
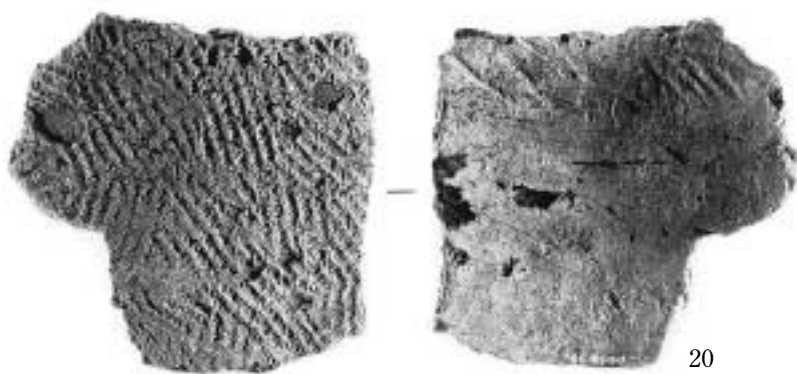
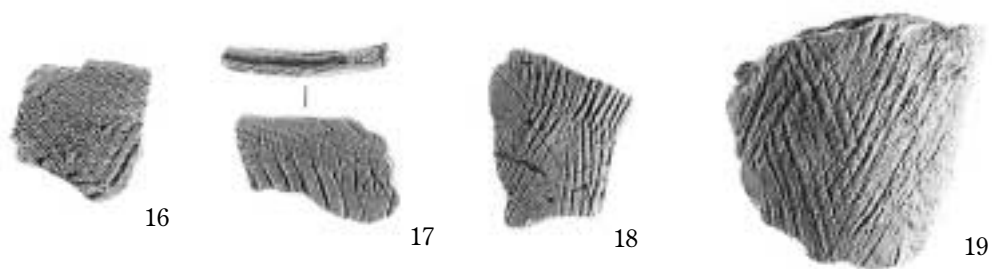
第1号埋没谷出土遺物(2)



第1号埋没谷出土遺物(3)



遺構外出土遺物(1)



報告書抄録

フリガナ	ミヤウチウエノハライセキ							
書名	宮内上ノ原遺跡							
副書名	B地点の調査							
シリーズ	児玉町遺跡調査会調査報告書					巻次	第18集	
編著者	松澤浩一							
編集機関	児玉町遺跡調査会							
所在地	〒367-0298 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山386 TEL 0495-72-1331							
発行日	2005（平成17年）5月13日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ミヤウチウエノハラ 宮内上ノ原 イセキチテン 遺跡B地点	コダマゲンコダママチ 児玉郡児玉町 オオアザミヤウチ 大字宮内 アザウエノハラ 字上ノ原	113824	105	36°11'16"	139°05'34"	20020821 } 20021129	3490㎡	中東京幹線 増強工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮内上ノ原 遺跡B地点	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土壇 埋没谷	縄文土器 塊状耳飾 磨石 敲石 スクレイパー 石核、紡錘状石器 石匙、剝片、石皿		縄文前期の集落が 検出された。		
		弥生時代 } 古墳時代	竪穴住居跡 土壇	弥生土器、土師器 スクレイパー				
		平安時代	溝 土壇	須恵器				

児玉町遺跡調査会報告書第18集

宮内上ノ原遺跡

— B地点の調査 —

平成17年5月10日 印刷

平成17年5月13日 発行

発行者 児玉町遺跡調査会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山386

印刷所 たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市東大沼356番地